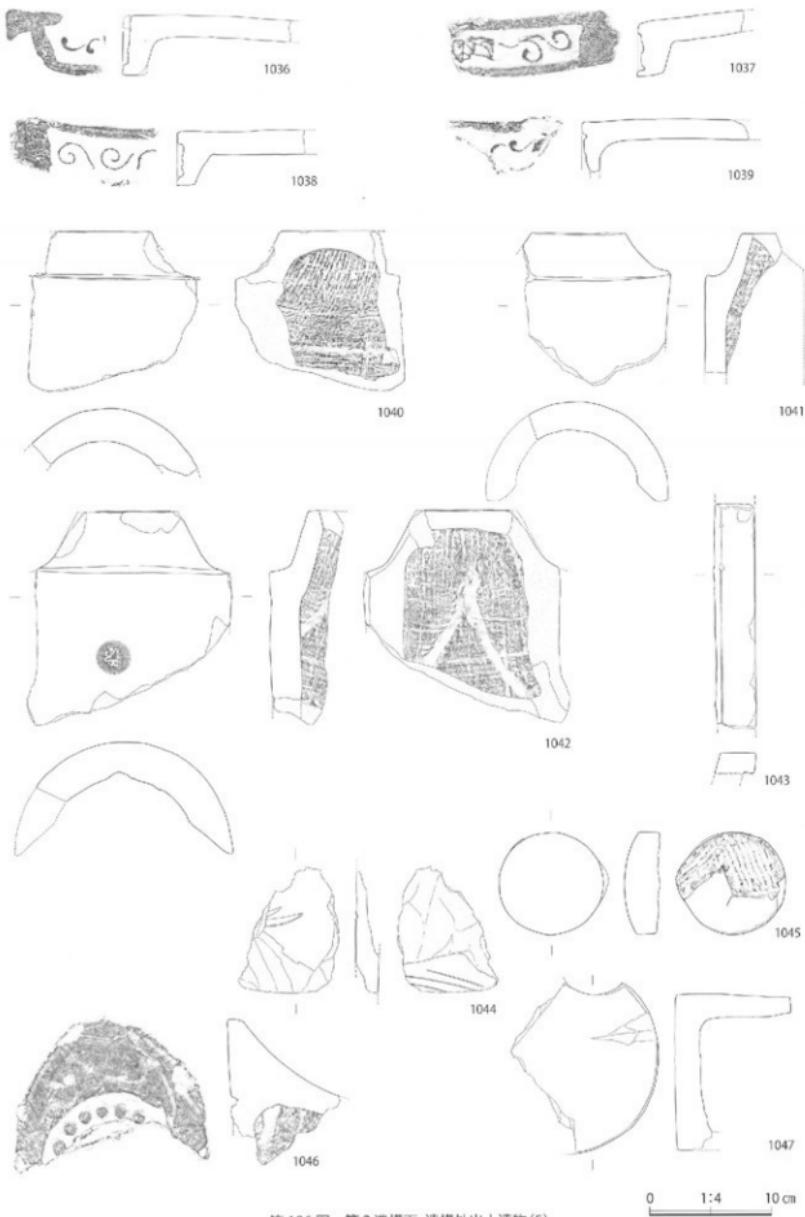


は丸型の連歛下駄で、外面に黒漆が塗られていたようである。前歛、後歛とともに右側の磨り減りが激しい。前緒穴前方に指の痕跡が残る。1029は陽物形の木製品である。1030は箱物あるいは折敷の側板と思われるもので、黒漆が塗られており、片面上面に口釘が1ヶ所打たれている。1031は折敷の側板と思われるもので、下端部以外に黒漆を施す。1032は枠である。1033は樽の蓋板で、面に円孔が2ヶ所開けられている。1034はヘラである。1035は羽子板で、片面に引抜き傷が見られ、もう片面は金彩が一部残存する。

瓦

1036～1047は瓦である。1036は軒平瓦で、中心飾りの左右に唐草文が配されるものである。1037は軒平瓦で、中心飾りに葉脈を入れた3葉を置き、その左右に2つずつ唐草文を配するものである。1038は軒平瓦で、中心飾りの左右に2つずつ唐草文を配するものである。1039は軒平瓦で、中心飾りに五葉を置き、その左右に唐草文を配するものである。1040・1041は丸瓦で、内面調整はコビキBである。1042は丸瓦で、外面に菊花文のスタンプが押されており、内面調整はコビキBである。1043は丸瓦で、内面調整はコビキBで、さらに紐の痕跡が残るものである。1044は鬼瓦の一部である。1045は万字である。1046は特殊な軒丸瓦である。1047は鬼瓦の一部であろうか。



第196図 第3遺構面 遺構外出土遺物(5)

第5節 第4遺構面(第197図)

第4遺構面の 概要 第3遺構面の形成上とその下層の生活層と思われる土層を取り除いたところ、黄色系の山上が厚く堆積し、これに形成される面が調査区全体に広がるため、これを第4遺構面と認識した。

第4遺構面は北屋敷の遺構面の中で最も遺構の残存状況が良く、屋敷地の空間利用について具体的に推定することができた。大きくは、庭園遺構 SG01: 池、SG02: 池、SX01: 植栽跡、SX02: 花壇とそれを鑑賞する建物跡 SB03・04 といった表向きの空間と、その横の空閑地 SA08: 堀跡、その後 SK28: 廃棄土坑など、跡跡 SA07 と素掘溝 SD06・07 を隔てた長屋跡 SB05 といった奥向きの空間とに分けられると考えている。

また、詳しくは第6章で述べられるが、戸敷境を示す素掘り溝 SD01 が調査区に南端で検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分(南 SA02)が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

なお、トレーニチによる確認調査で、詳しくは第7章で述べられるが、この遺構面より下層で遺構を検出しているが、この遺構が調査区全体に広がるものではなく部分的に存在することから、第4遺構面が城下町を造成した時の最初の戸敷地にあたるものと考えている。

SG02: 池(第198・199図)

SG02 調査区南側で第3遺構面から掘り方を確認し調査を行った遺構であるが、前節で述べたおり、SG01とSD01で繋がった平面ひょうたん型の池が存在していたことが分かっている。改修の痕跡を見つけるために、追加で部分的に調査を行った。

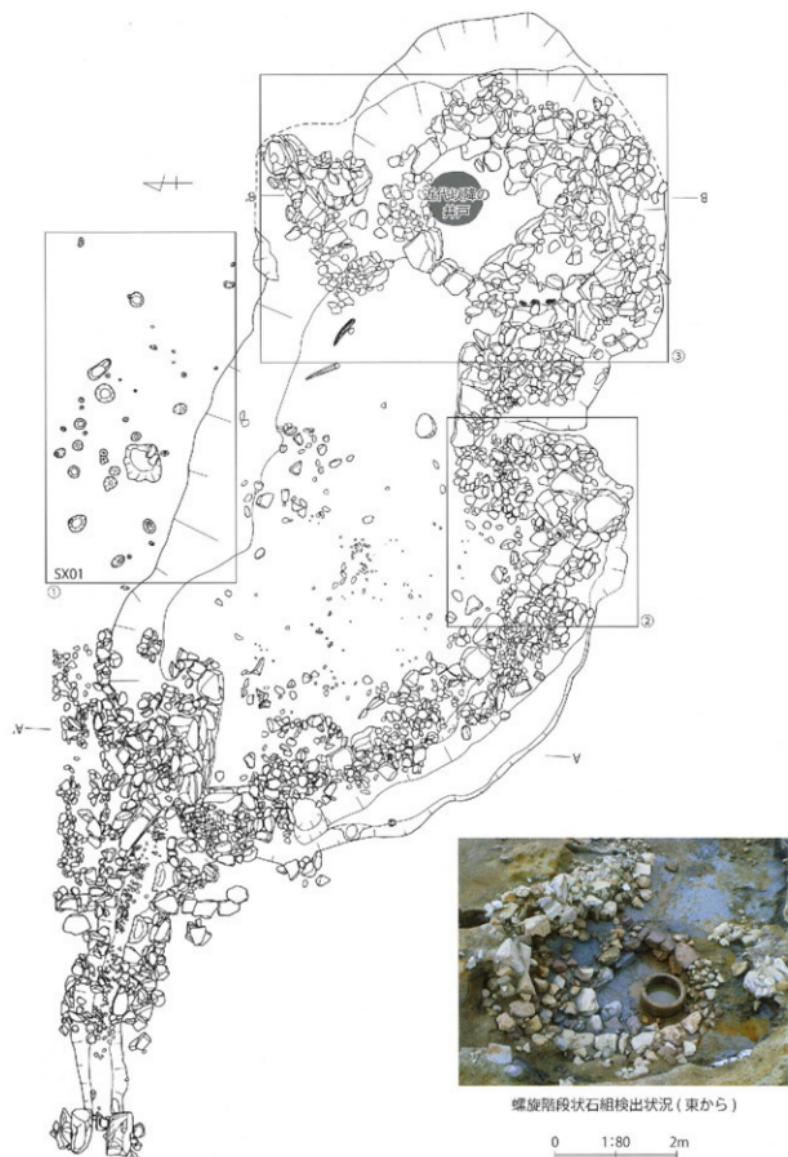
第3遺構面に伴う石をはずし精査したところ、深さ約15cm程度のピットをいくつか検出した。これらのピットの下端は先細りし、またピットの並びに規則性が見られなかったため、植栽の痕跡 SX01 と推定した。ピットの規模から小形の植物が植えてあったと思われる。ピットの埋土は池の底面で検出される玉砂利と砂質土が多く含まれていた。また、池の護岸にも、玉砂利を含む砂質土を使用している箇所が認められたことから、この部分が改修された痕跡と思われる(第198図の枠線内の範囲①)。南東側の護岸に使用されている扁紋の刻印を持つ石の裏込め上にも、玉砂利を含む砂質土が認められ、改修時に積み直されたか改めて積まれたものと思われる。また、南側の第3遺構面に伴う石を除去したところ、池の改修による掘り方が検出された。この埋土とこれに乗る礫石を除去したところ、大形の割石の並びが検出できた。これにより、池が形成された当初は大形の割石で護岸されていた可能性が高いことが判明した。(第198図の枠線内の範囲②)

また、東側においては、底面に敷かれていた玉砂利を除去したところ、下部に石積が見つかり、この石積が螺旋を描きながら上部につながっていくことが分かった。なむ、この石積の北側に、導水及び排水施設がある可能性が指摘されたため、精査を行ったが、導水及び排水施設の痕跡は見つからなかった。その他、北東側の石積の下に改修の掘り込みの痕跡が見られ、この中から中国磁器の青花の細片とロクロ成形の土師器皿 751 が出土した。(第198図の枠線内の範囲③)

SG02 の改修時期について、改修に伴う拳人の石を除去中に桔梗文の瓦 755・756 が出土しており、第3遺構面の戸敷境の裏込めからも同様の瓦が出土していることから、第3遺構面で行われたものと考えている。

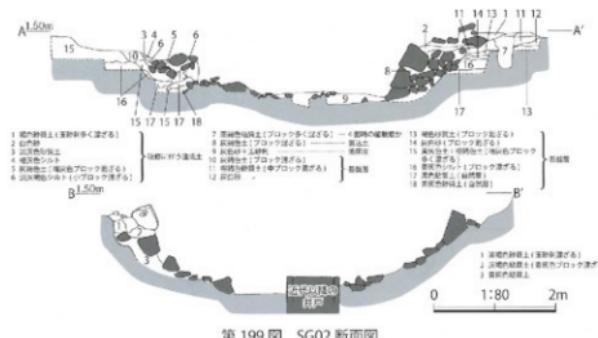


第197図 第4遺構面 全体図



第198図 SG02 平面図

*□の範囲は追加調査部分



第199図 SG02断面図

SG02刻印

SG02で検出した石材の刻印の拓本を第200図に示す。地紙型の中に「一」が入る。

SX02 : 花壇(第201図)

SX02

池 SG02 の北東側で検出した植栽の痕跡を含む隅丸長方形形状の人形土坑である。中央の直径約1.0mの皿状の土坑に黒色粘土が堆積しており、この土を除去したところ、コモのよう網状の痕跡を検出した。おそらく樹木の根巻きの痕跡と思われる。この樹木の痕跡の東西両側には、黄色土が2条の帯状に認められ、西側は溝状を呈し、東側は土坑埋土が盛り上がった状態で検出されているものである。帯の中心を通るようにピットが4穴並んでおり、枝の支え木跡の可能性も考えられるが、帯状の黄色シルトを意識して掘られているため、植栽跡の可能性もある。根巻き痕からは根が張った形跡が見られないことから、根付く前に撤去された可能性が高い。また、これらの遺構を開むように黒色土が、南北に約4m、東西に約7.5mの範囲で広がるのが確認できた。黒色土のプランの一端で、人頭大の石が3つ並んで残っており、本來は石がこの黒色土の範囲を開いて、植栽の境を形成していた可能性も考えられる。この黒色土が広がる部分に断ち割りを入れたところ、大きく掘り込まれた土坑に黒色土が入れられたことが判明した。のことから、植栽をするために土坑を掘り、土を入れ替えたものと推測した。この黒色土からは、陶磁器や木製品などが廃棄された状況で出土している。

SX02出土遺物(第202図)

国産陶器

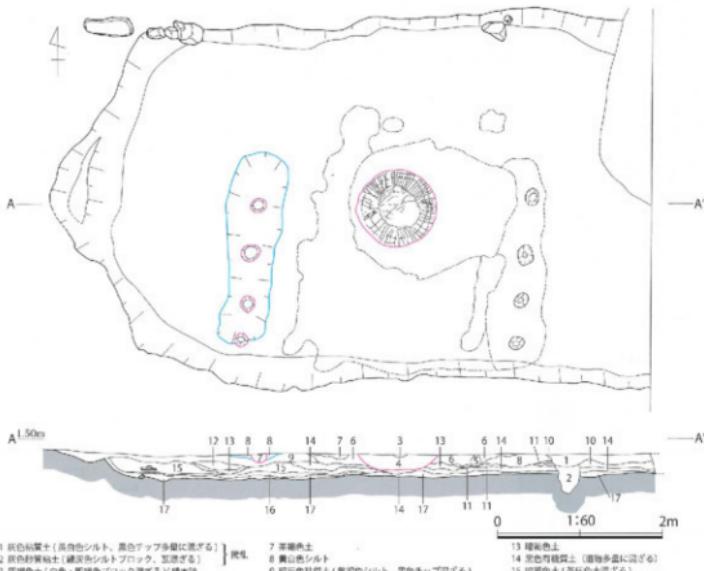
1048・1049は肥前陶器の皿で、内面見込部分に胎土目跡がある。1050は肥前陶器の水差と思われ、底部外面に貝目跡が残る。1051は志野の蓋と思われる。



第200図 SG02刻印拓影(S=1/4)



SG02刻印石棟出状況



第201図 SX02 平面図・断面図

1052は志野の小碗で、長石釉が全面に施釉される。1053は小形のるつぼで、詳細は第8章で述べられるが、内面の溶着物を科学分析したところ、鉛と銅の成分が検出された。これにより、鉛と銅の溶融に使用されたものと判明し、この遺構面で銅の鋳造が行われた可能性が考えられる。1054

墨書き製品は墨書きのある木製品で、文字の解説はできていない。4ヶ所目釘穴が確認でき、何らかに転用されたものかもしれない。1055

金属製品～1057は銅貨である。1055は「□元通宝」で、他は不明である。1058は漆桶の蓋で、外側、内面ともに赤塗りで、把手部分は黒塗りである。1059～1062は木製品である。1059は鍊頭で、この先に鉄製に鍊先を装着して使用したものと思われる。1060は角型の連齒下駄で、歯がなくなるほど使い込んでいる。1061は丸型の削り下駄で、比較的小形のため、子供用の可能性がある。1062は羽子板である。



SX02 検出状況(東から)



第202図 SX02出土遺物

SB03 : 建物跡、SD02 : 石積溝、SD04 : 石積溝、SD05 : 素掘溝 (第 203 ~ 206 図)

SB03 潛食区の中央で検出した建物本体が東西 9 間 × 南北 4 間の建物跡で、1 間約 1.98 m を測るものである。建物本体の北側に増築の可能性が考えられ、それを含めると東西 9 間 × 南北 6 間の規模になる。また、礎石が部分的にしか残っていないが、建物本体の東側と南側に縁側が周っていたことが想定できた。この縁側から渡り廊下 SC01 が南側に延び、礎石列 SB04 へつながるのだが、礎石の残りが悪く、建物の規模までは想定できないが、おそらく比較的小規模な建物が存在したものと思われる。茶室のような離れ座敷があったのであろうか。SB03 と SB04 は池 SG01・02 と花壇 SX02 を鑑賞するための建物と推測する。

また、池 SG02 と SB03 の間に植栽跡 SX01 を検出した。この植栽跡が建物の縁側と近接することから、当初、縁側は存在せず、植栽を取り除いた後に、縁側を付け足した可能性も考えられる。

SD02 さらに、SB03 西側で SD02 を検出しており、SB03 に付随するものと思われる。SD02 は前節でも述べたとおり、第 3 遺構面まで存続するものである。SB03 北東側では石積溝 SD04 と素掘溝 SD05 を検出しており、SD04 は SB03 に付隨する雨落ち溝と考えられる。SD04 と SD05 は層位的には同一層から掘り込まれているため、時期差なく形成されたものと思われる。十脚の切り合いなどで前の前後差は不明だが、SD05 を埋めた後に増築し、SD04 をつくり直したとを考えたほうが自然のように思われる。

SD04 出土遺物 (第 207・208 図)

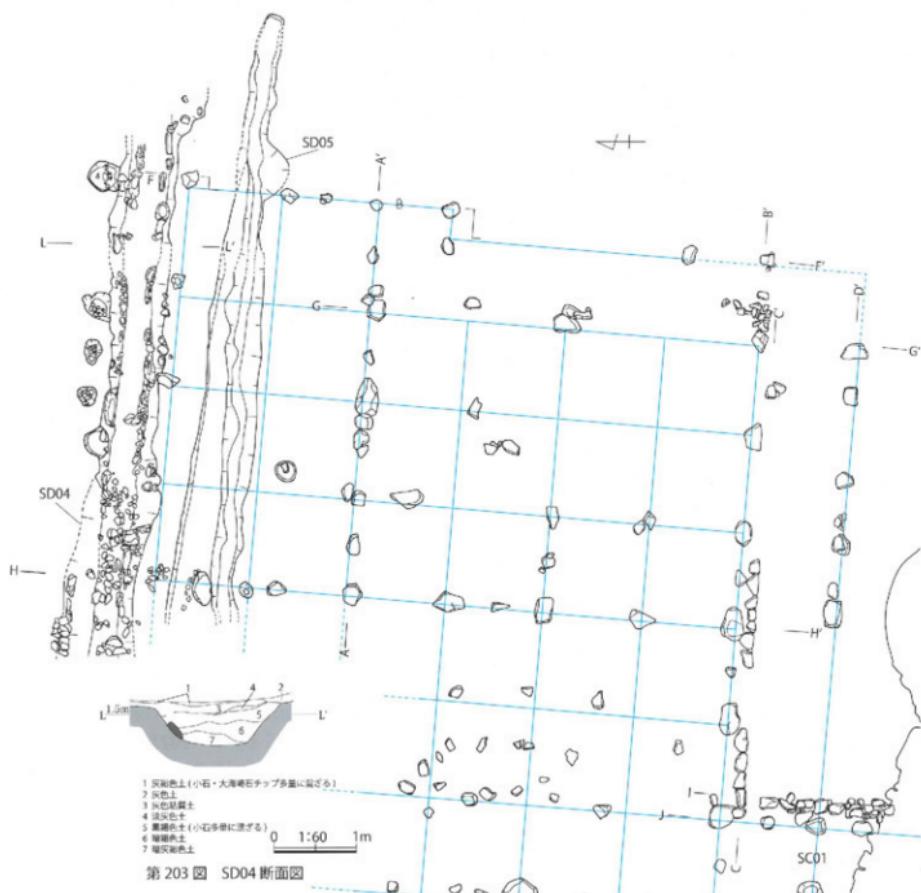
国産陶器 1063 ~ 1072 は陶磁器と石製品である。1063 ~ 1065 は肥前陶器の大口碗である。1063 は外面に鉄絵が描かれるものである。1064 は内外面に鉄袖が掛けられるものである。1066 は肥前陶器の大皿で、内面に鉄絵が描かれており、内面見込み部分に胎上口跡が残るものである。1067 は備前年の鉢である。1068 は肥前系搖鉢である。1069 ~ 1071 は中国磁器である。1069 は漳州窯系の青花碗で、1070 は漳州窯系の青花皿と思われる。1071 は景德鎮窯系の青花皿と思われる。1072 は火打ち石と思われ、玉湯の花仙山でよく見られるタイプの駒卡を使用している。石の稜部に擦痕とぶつれが見受けられ、使用頻度が高い印象である。⁽¹⁵⁾

土師器皿 1073 ~ 1086 は上師器皿、木製品である。1073・1074 はロクロ成形の上師器皿である。いずれも中皿で、1074 は油煙痕が残る。1075 ~ 1084 は手づくねの十師器皿で、1075 は小皿である。1076 ~ 1083 は中皿で、そのうち 6 点が口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと思われる。また 1076 ~ 1078 は、口縁端部を軽くつまみ上げて成形してある。1084 は大皿で油煙痕が残る。

漆塗 木製品 1085 は漆塗で、外面は黒、内面は赤に漆塗りが施され、外面に赤草と紅葉文が描かれている。1086 は木製品で、何かの脚部と思われる。上下側面に貫通する鉄釘が 2 本打たれている。この他、下駄 2 点に加え、貝殻類（テングニシの蓋）、魚骨類（スズキ属、マダイ亜科）、獸骨類（ニホンジカの肩甲骨）も出土している。

SD05 出土遺物 (第 209 図)

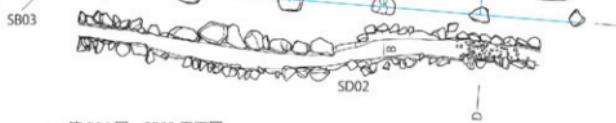
1087 は肥前陶器の人鉢で、底部外面に貝口跡が確認できる。1088 はノミのような工具の柄部分と思われる。



第203図 SD04断面図



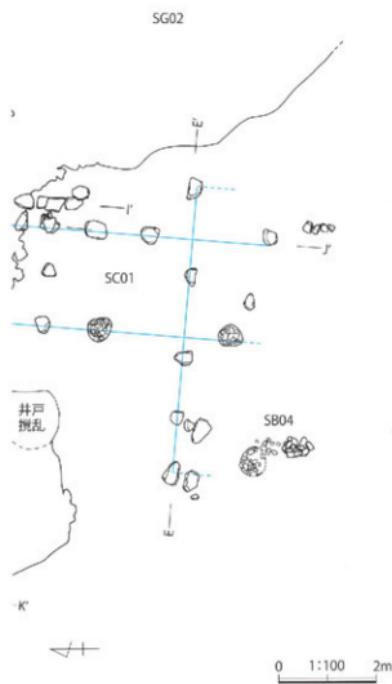
SD04 完掘状況(東から)



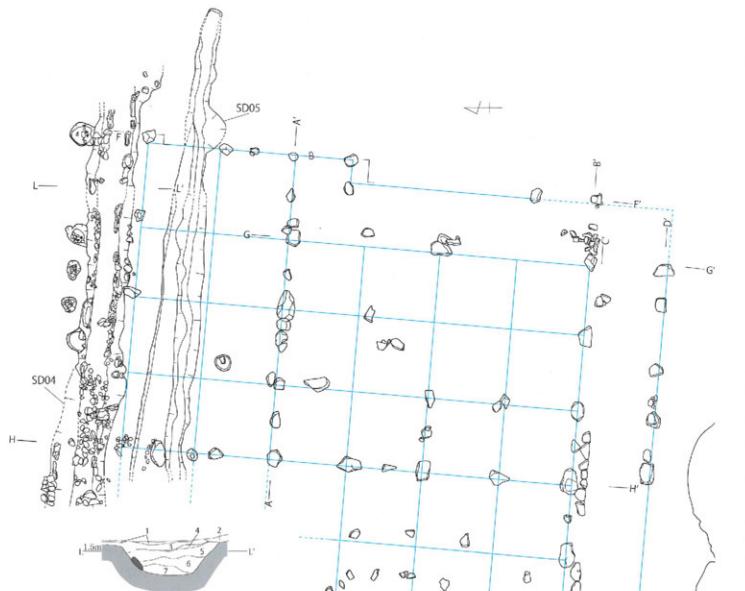
第204図 SB03平面図



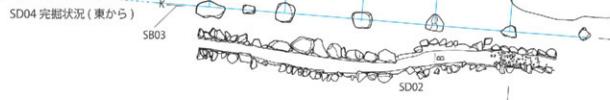
SG02 と SB03・SB04 検出状況



第205図 SB04 平面図



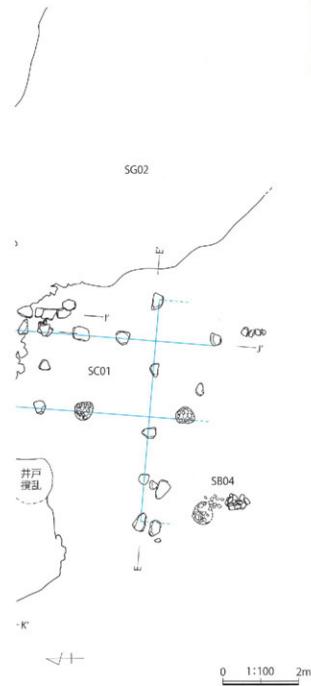
第203図 SD04断面図



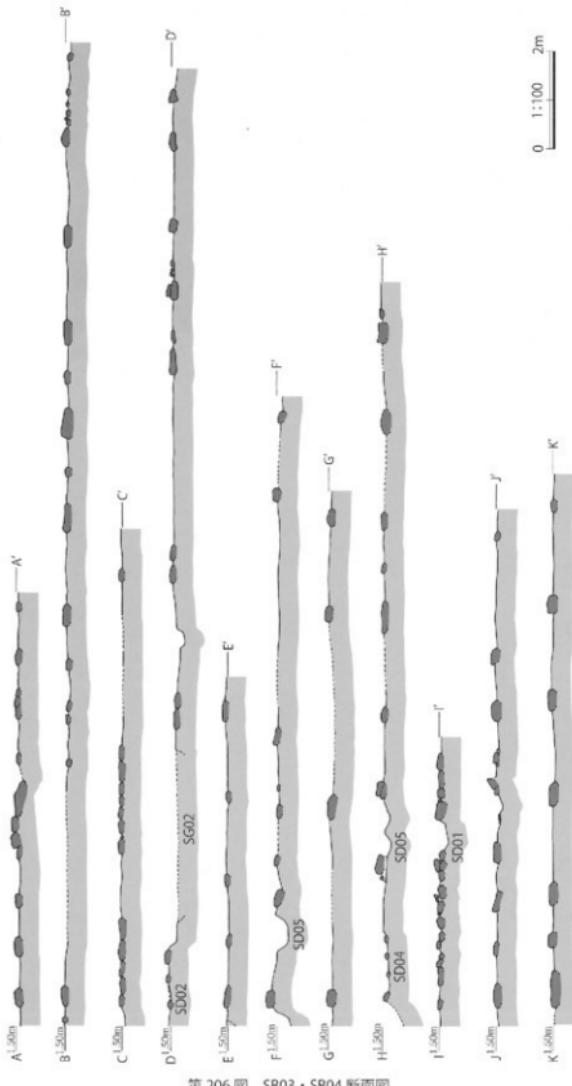
第204図 SB03平面図



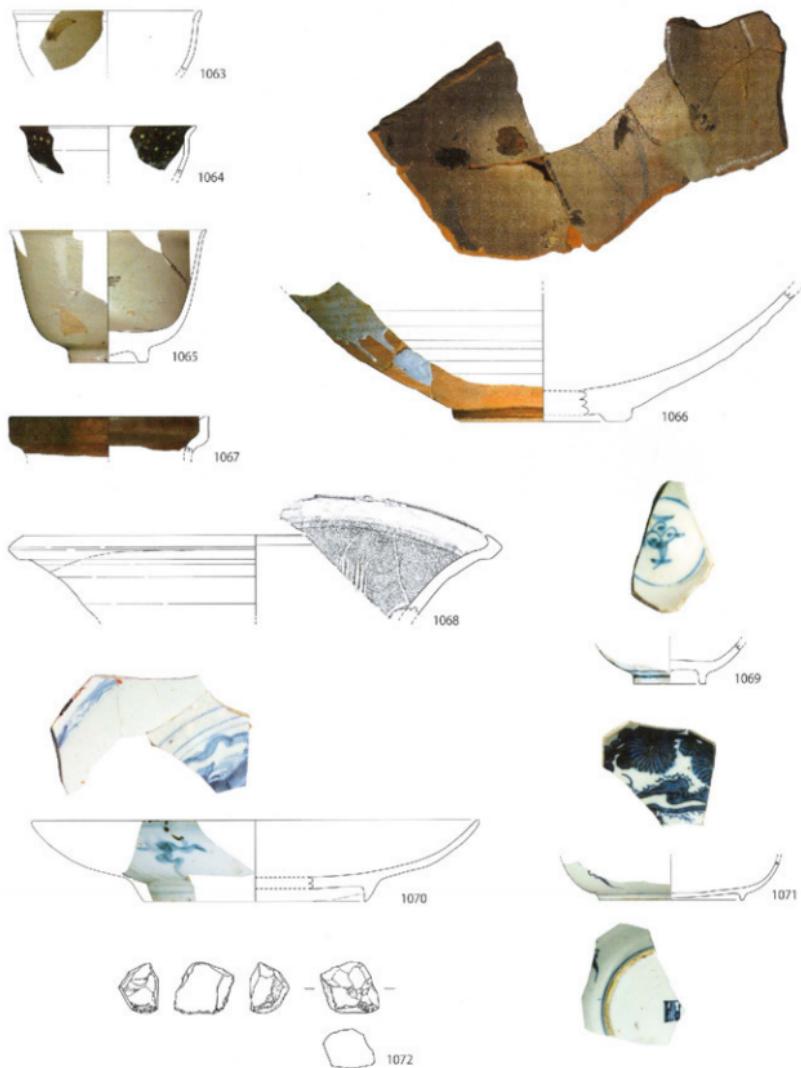
SG02とSB03・SB04検出状況



第205図 SB04平面図

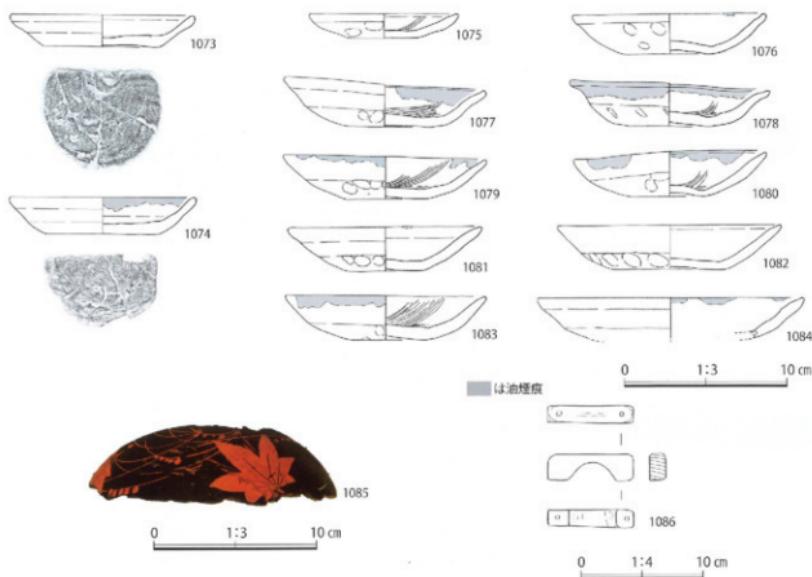


第206図 SB03・SB04断面図

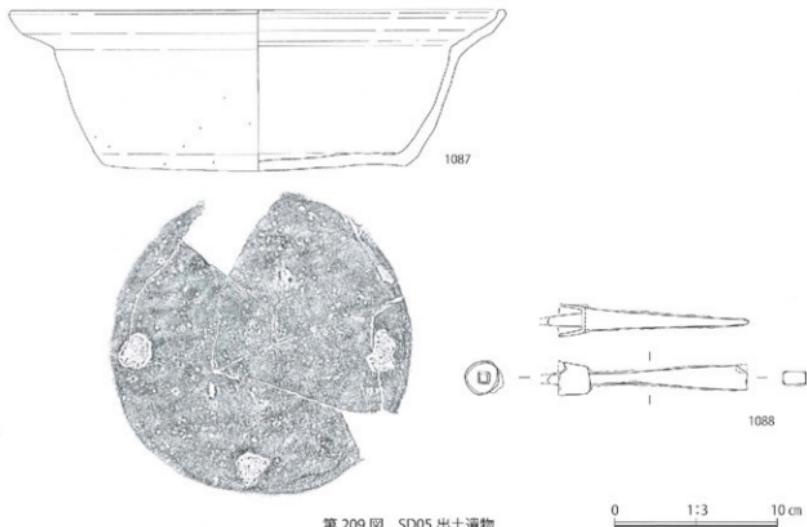


第207図 SD04出土遺物(1)

0 1:3 10 cm



第208図 SD02出土遺物



第209図 SD05出土遺物

SB05・06：建物跡（第210・211図）

SB05は調査区の北側で検出した建物跡である。東端の礎石がほとんど抜き取られてしまっているが、1間約1.98mを測る東西2間×南北4間の建物の存在を推定した。この建物跡の北側に、約60cm離れて東西に並ぶ礎石列が確認でき、SB05がさらに北側に延びると考えれば、この礎石列は東柱を支えるものであった可能性がある。

SB06はSB05の南側で検出した建物跡である。西端と中央部の礎石とがほとんど抜き取られてしまっているが、東西2間×南北3間の建物の存在を推定した。この建物は基本的に1間約2.0mを測るが、南側の1間分は南北の幅が1.64mと異なる。この建物の南側には、SD06とSD07、SA08が隣接していることが分かっている。

これらの遺構については、「当初、SB05とSB06を合わせて東西2間×南北9間の南北に長い1棟の礎石建物跡を想定していたが、その後、見識者を加えた検討の結果、空間利用の視点から見ると、東西に長い2棟の長屋が存在した可能性の方が高いとの結論に至った。⁽¹⁰⁾ 今回の調査で確認できたのは、2間×4間の建物跡SB05と2間×3間の建物跡SB06であるが、これらの建物跡は調査区の東側に広がる可能性も含んでいる。

SA07：堀跡・SD06：素掘溝・SD07：素掘溝（第212図）

調査区の中央からやや北側で、東西に延びる杭列SA07とその両側に溝SD06・07を検出した。

SA07については、杭1～15が東西方向に直線状に打ち込まれたもので、杭の間隔に規則性が見られず、遮蔽するための堀があったものと推測する。使用された杭は、打ち込まれた深さや加工に違いがあるため、同時に設置されたものではない可能性がある。杭2だけは、角材でホゾを入れたものを使用しており、建築部材の転用と思われる。また、下端の1方向から斜めに加工して、打ち込みやすくしている。さらに、全体的に炭化している。杭10、杭13、杭15は丸材で他の杭より太く、杭の下端は2方向から荒い削りを施している。また、いずれも下端部を炭化させている。腐食防止のため、杭の下端部を炭化させているものが多く見られる。

SD06は幅約0.3～0.6m、深さ約0.1mを測る東西に延びる素掘溝で、SA07と同様に空間を別ける施設と思われる。

SD07は幅約0.8～1.2m、深さ約0.2mを測る東西に延びる素掘溝で、SD06との切り合い関係は不明である。SA07と同様に空間を別ける施設と思われる。

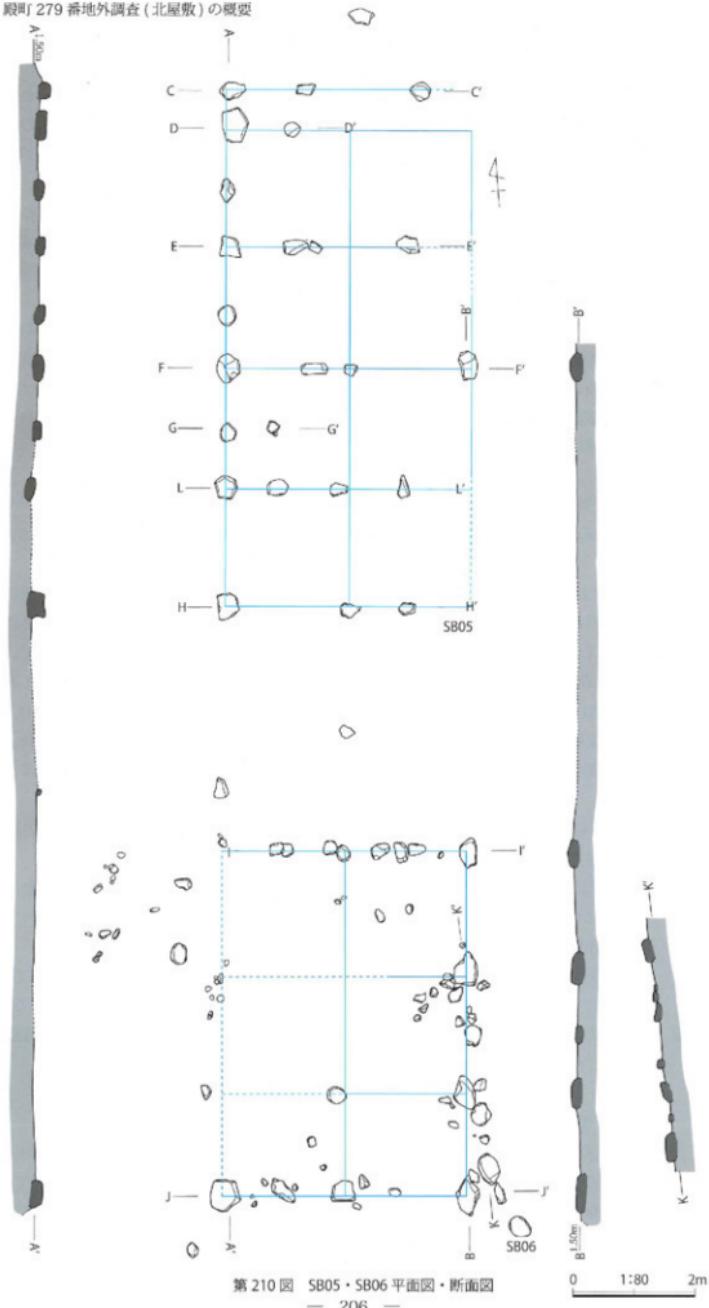
SD07出土遺物（第213図）

国産陶器
土師器皿
墨書き木製品

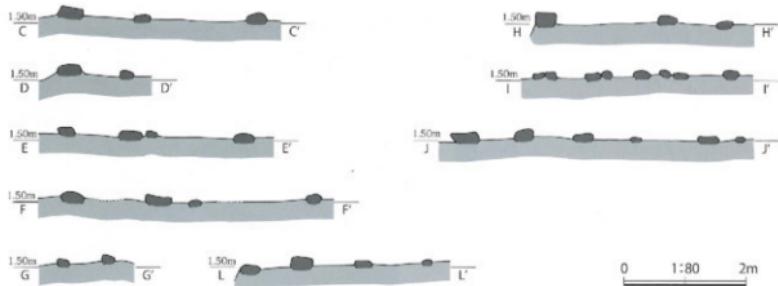
1089は肥前陶器碗である。1090～1095は手づくねの土師器皿である。すべて中皿で、灯明IIIに使用された痕跡があるものは、1090・1091・1093・1094の4点である。1096は墨書きのある木製品で、片面に「四月十七日」と書いており、もう片面の墨書きは確認できなかった。

SA08：堀跡（第214図）

調査区の東側で検出した15cm程度の根石をそれぞれにもつ柱穴1～5が、直線的に並ぶものである。柱穴2を除けば、柱穴の間隔は約2.0mを測る。柱穴の上面が削平されているが、本来はもっと深さがあったと思われる。これに相対する柱穴は調査区内では認められなかつたため、堀跡と推定しているが、根石が多く、規模の大きい建物の基礎である可能性も否定でき



第210図 SB05・SB06 平面図・断面図



第211図 SB05断面図

ない。この柱穴と相対する遺構があるとすれば、調査区外に広がっているものと思われる。この下からは廐棄土坑SK28が検出されており、廐棄土坑を埋めた後にSA08が設置されたようである。

SA09：堀跡（第197図）

SA09 調査区南東側で検出した礎石列で、1間 1.65mを測るものである。1間の幅から考えて建物の基礎ではなく、空間を遮蔽するものと判断した。

調査区南端で検出した屋敷境については、詳しくは第6章で述べられるが、屋敷境を示す素掘り溝（屋敷境SD01）が検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分（南SA02）が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

この他、SB03の東側で廐棄土坑SK26・28などがいくつか検出されており、これらはSA08とSX02の下から検出されたもので、SA08とSX02がつくられるまでは、この部分が空閑地として機能していたと考えられる。また、SD07の北側にも用途不明の土坑やピット、廐棄土坑SK27を検出している。

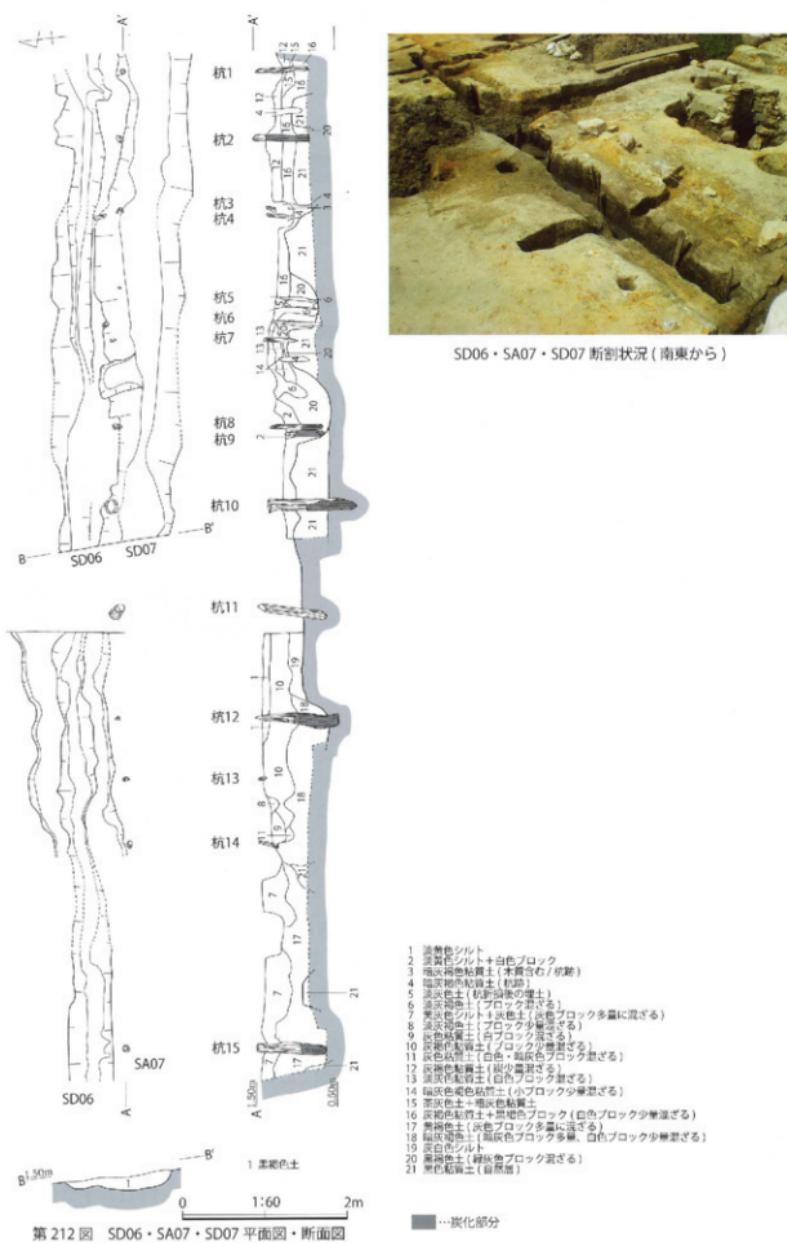
以下は、詳細な遺構図は掲載していないが、第4遺構面の年代的特徴を表す遺物を掲載したものである。出土した遺構の位置については、第197図の調査区全体図を参照していただきたい。

SK26：廐棄土坑出土遺物（第215・216図）

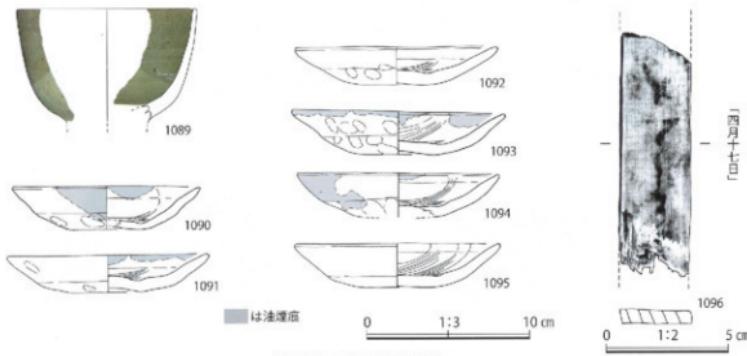
国産陶器 SK26は調査区の東側で検出した廐棄土坑である。1097～1098は陶磁器、土師器皿、鉄製品、漆碗である。1097・1098は肥前陶器の碗である。1099は肥前系陶器の瓶で、やや青味がかった灰釉が掛かるものである。1100は肥前陶器の大皿で、内面見込み部分に胎土目跡が残る。1101は中国磁器の大皿で、内面に赤絵が施される漳州窯系の五彩である。1102～1104はロクロ成形の土師器皿である。1102は小皿で、1103と1104は中皿であるが、1104のみ煤が付着しており、灯明皿で使用した痕跡がある。1105～1111は手づくねの土



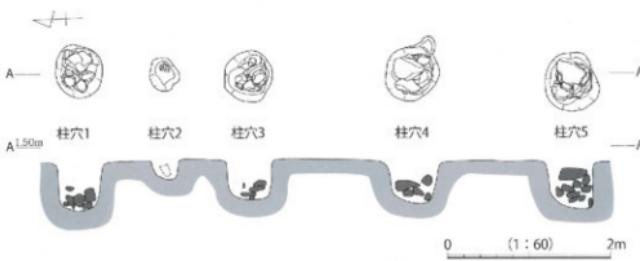
SB05・SB06検出状況



第212図 SD06・SA07・SD07 平面図・断面図



第213図 SD07出土遺物



第214図 SA08平面図・断面図

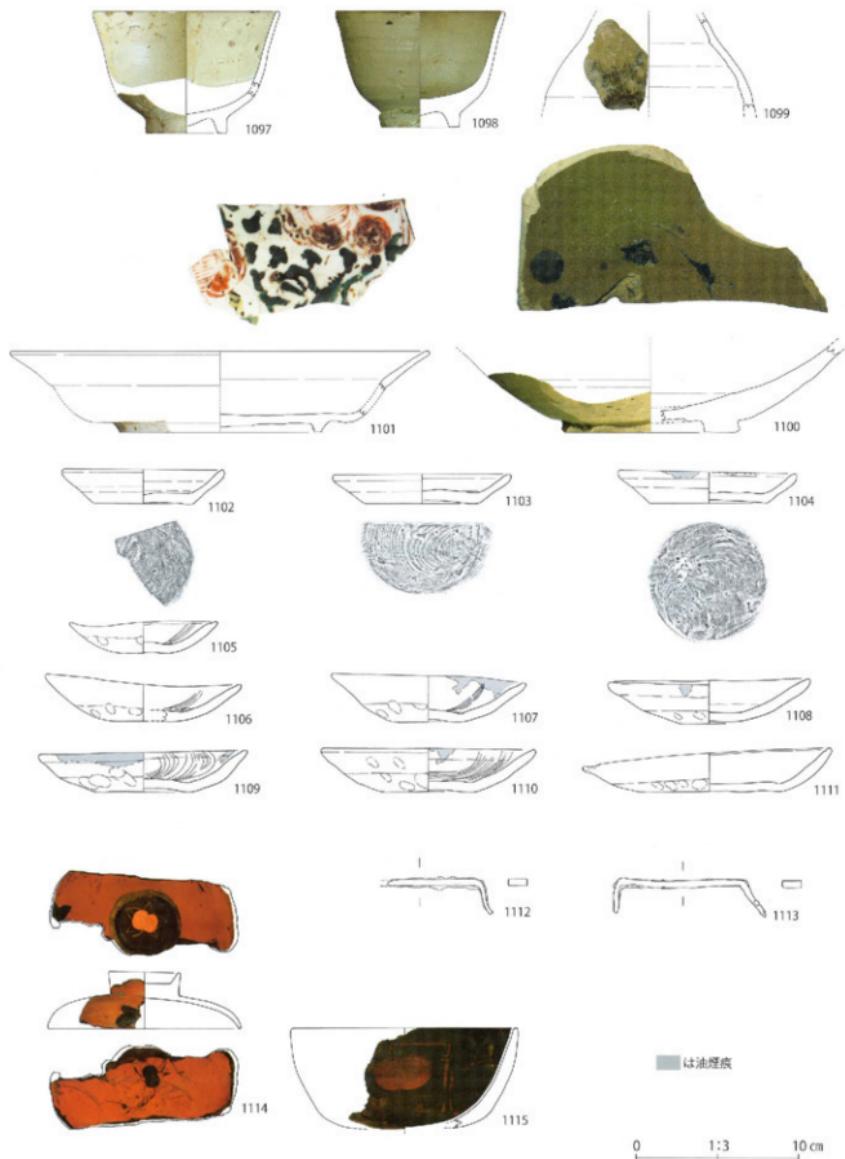
漆器皿である。1105は小皿である。1106～1110は中皿で、灯明皿に使用されたものは、1107～1110の4点である。1111は大皿で、口クロ成形した後で指押さえによって手づくね風にみせている。1112・1113は鉄製品で、かすかにと思われる。1114は漆塗の蓋で、高台内が黒漆塗り、その他は赤漆塗りである。高台内部に赤漆で草文と果実の文様が、外面は黒漆で草文が、内面を黒漆で草文と果実の文様が描かれている。1115は腰丸椀で、外黒内赤の漆塗りが施されるものである。文様があるようだが、風化のため不明である。

金属製品
漆器

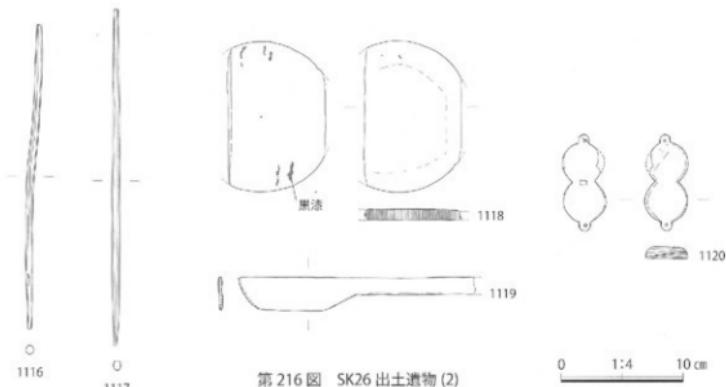
SA08検出状況(北東から)

木製品

1116～1119は木製品である。1116と1117は白木の箸で、1116は一方が平らで、もう一方は尖っている。1117は両端が尖っている。1118は曲物の蓋板で、片面に黒漆が塗られており、面中央に目釘穴が1ヶ所認められる。1120は建具の飾りであろうか。両側突出部に孔が設けられており、裏面に目釘穴が1ヶ所ある。1119は片刃のヘラである。



第215図 SK26出土遺物(1)



第216図 SK26出土遺物(2)

SK27 : 废棄土坑出土遺物 (第217図)

国産陶器 SK27は調査区の北東側で検出した廃棄土坑である。1121・1122は肥前陶器碗で、1121は小碗で高台がほとんどないものである。1122は高台内側に胎目が残るものである。

土師器皿 1123はロクロ成形の土師器皿で、口縁部が欠損している。1124～1128は手づくねの土師器皿である。1124は小皿で、油煙痕が付着するため、灯明に使用されたものと思われる。

金属製品 1126・1127は中皿で、灯明皿で使用された痕跡がある。1128は大皿で、ロクロ成形された後に指押さえによって手づくね風にみせている。

墨書き木製品 1129は銅製品で、部分的に金メッキが残り、用途不明のものである。1130は墨書きの書かれた木製品である。墨書きは両面に書かれており、片面は解読不能で、もう片面は「戌霜月十」と読める。この遺構面に該当する可能性のある「戌年」は、1610年、1622年、1634年が挙げられる。

瓦 1131は丸瓦で、内面の調整はコビキBである。

木製品 1132は角型の連歛下駄である。1133はヘラである。1134は木製の栓で、柄、樽あるいは徳利に使用したと思われる。栓の頭になる部分は、角状を呈し、栓として機能する部分は頭より径が小さく、円状を呈する。1135は木製桶の蓋か底の部分で、約1/2が欠損している。1136は木製の蓋と思われる。ロクロ挽きの痕跡が見られる。

その他、貝類(サザエ)、魚骨類(スズキ属、マダイ亜科)がこの遺構から出土している。

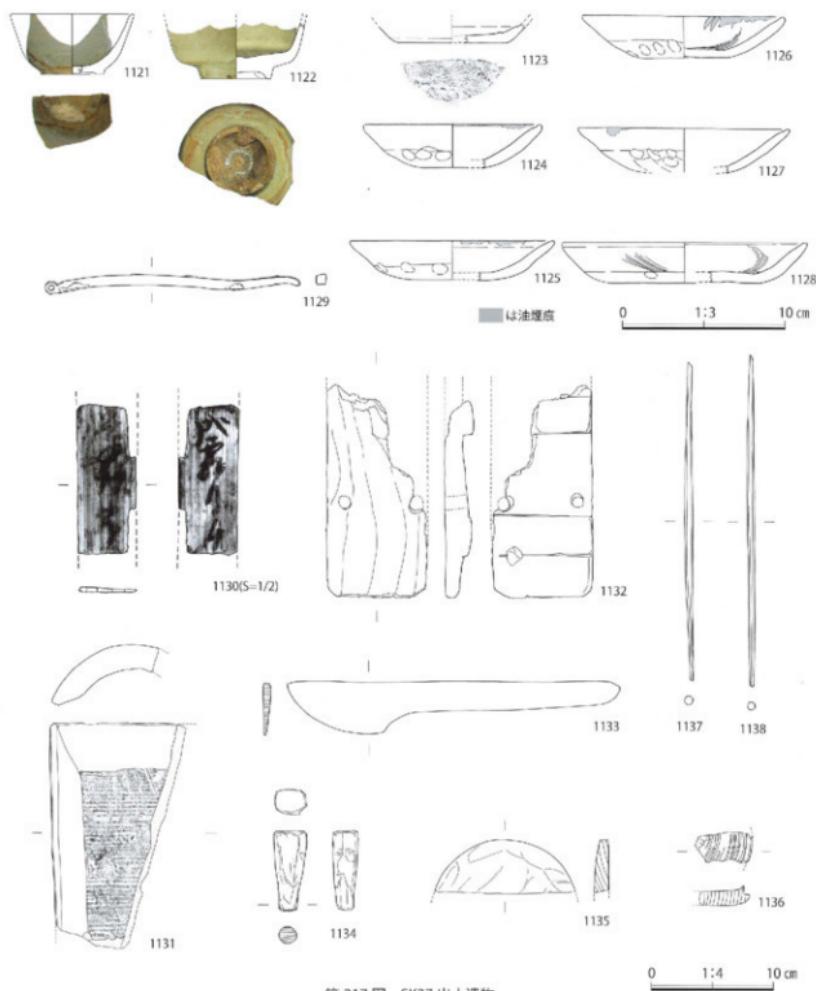
SK28 : 废棄土坑出土遺物 (第218、219図)

国産陶器 SK28は調査区の東側で検出した廃棄土坑である。1139～1150はSK28から出土した陶器、土師器皿、木製品である。1139は肥前陶器の碗で、外面に鉄絵が描かれるものである。

土師器皿 1140・1141は手づくねの土師器皿である。1140は底部中央を押し上げて成形している。

墨書き木製品 1141は、内面のナデ上げ調整をやり直している痕跡が認められる。1142は墨書き木製品で、片面に墨書きが確認できるが、「御□ぬ」と読める以外は、内容は不明である。

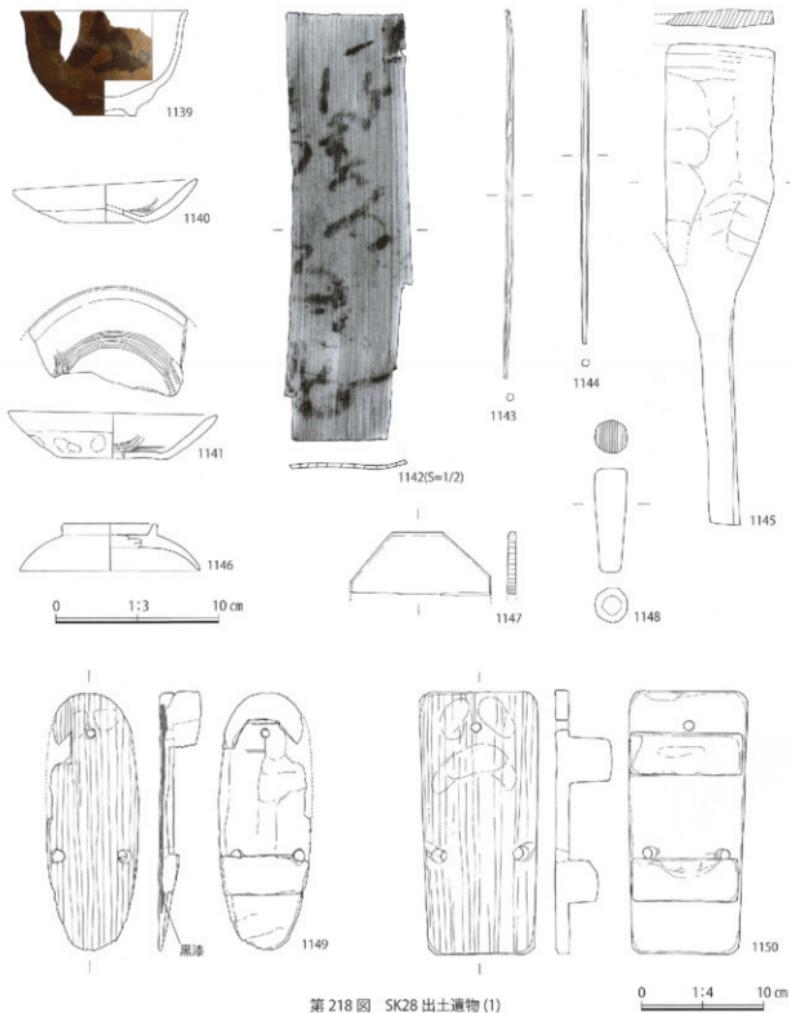
木製品 1143・1144は白木の箸で、両側にむかって先細りしている。1145は羽子板状の木製品で、不整形な上に工具痕の残りも目立つため、作成途中のものである可能性がある。1146は漆椀の蓋で、把手内部は黒塗り、他は赤塗りである。1148は栓である。1147は用途不明の木製品で、八角形状の板が半分に欠損しているようである。側面に目釘が残ることから、何らかの底板の可能性がある。1149は丸型の倒リ下駄で、後ろの歛がかなりすり減っている。1150は角型の連歛下



第217図 SK27出土遺物

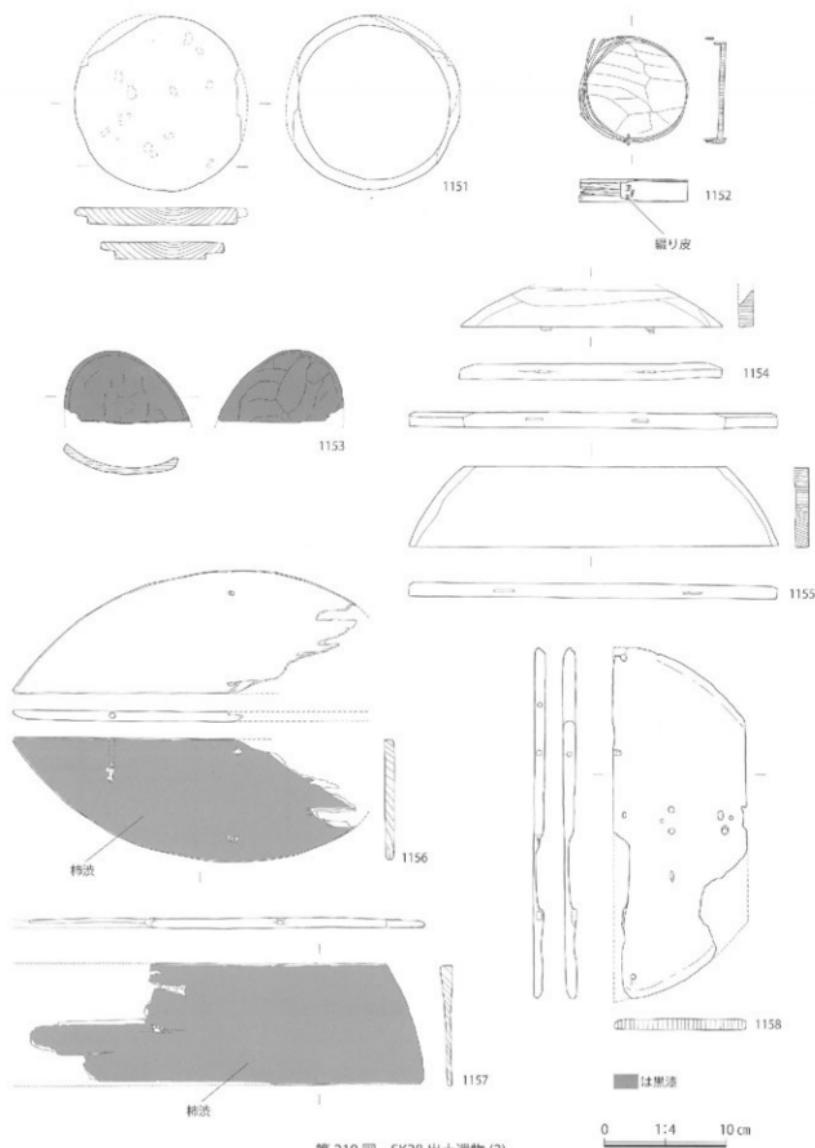
駄で、後ろの歯がかなりすり減っている。

1151～1158は木製品である。1151は曲物の底板か蓋板と思われ、片面を段状に加工している。1152は曲物か柄杓の底板と側板の一部と思われ、側板を留める綴皮と側板と底板を留める目釘が認められる。1153は用途不明木製品で、内外面に黒漆が塗ってある。1154は1155と同一個体になるもので、側断面に目釘が2ヶ所確認できる。1155は桶か樽の底板と思われるもので、側断面に目釘穴が2ヶ所ずつ計4ヶ所確認できる。1154と接合するもので



第218図 SK28出土遺物(1)

ある。1156は桶か樽の底板あるいは蓋板で、片面に柿渋が塗られている。側断面に目釘穴が1ヶ所認められ、面に直線上に2ヶ所穿孔が施されている。1157と同一個体になるものである。1157は1156と同一個体になるもので、面に2ヶ所穿孔が認められ、側断面に目釘穴が1ヶ所確認できる。1158は樽の蓋板で、面に2個対の穿孔が2ヶ所とそれに直交するように長辺に沿って穿孔がいくつか施される。また、側断面に目釘が4ヶ所打たれている。



第219図 SK28出土遺物(2)

- SK29 SK29：土坑出土遺物（第220図）
調査区の中央で検出した十坑から出土した遺物で、1159は肥前陶器の小碗である。
- SK30 SK30：十坑出土遺物（第221図）
調査区の中央からやや西側で検出した十坑から出土した遺物で、1160は瀬戸・美濃の天目碗である。
- SK31 SK31：土坑出土遺物（第222図）
調査区の中央で検出した十坑から出土した遺物で、1161は中国の白磁皿である。
- SD08 SD08：素掘溝出土遺物（第223図）
調査区の東側で検出した素掘溝から出土した遺物である。1162は肥前系の擂鉢で、擂目部分に貝目跡が残る。
- SK32 SK32：土坑出土遺物（第224図）
調査区の北東側で検出した七坑から出土した遺物である。1163は真鍮製の煙管の羅字部分と思われる。
- SK33 SK33：上坑山上遺物（第225図）
調査区の北東側で検出した土坑から出土した遺物である。1164は銅製の建具の留め金具と思われる。
- SK34 SK34：十坑出土遺物（第226図）
調査区の北東側で検出した上坑から出土した遺物である。1165は碁石で、黒石として使用されたものと思われる。
- SK35 SK35：土坑出土遺物（第227図）
調査区の北東側で検出した十坑から出土した遺物である。1166は錢貨で、銭種は不明である。
- SK36 SK36：上坑山上遺物（第228図）
調査区の中央から北側で検出した土坑から出土した遺物である。1167は用途不明の木製品で、片面に柿渋が塗ってある。
- SK37 SK37：十坑出土遺物（第229図）
調査区の西側で検出した土坑から出土した遺物である。1168は肥前陶器のなぶり口を有する鉢である。1169はロクロ成形の十師器皿で、灯明として使用された痕跡がある。1170は手づくねの土師器皿の小皿である。
- SK38 SK38：廐棄土坑出土遺物（第230図）
調査区の中央からやや東側で検出した廐棄土坑から出土した遺物である。1171は鉄釘で、断面方形を呈する。

第4遺構面遺構外山上遺物（第231～236図）

以下は第4遺構面の包含層から出土したものである。

- 国産陶器 1172～1189は国産陶器である。1172から1175は肥前陶器の碗である。1172は小碗で高台がほとんどないものである。釉薬が白っぽくなってしまっており、火を受けたものと思われる。1175は鉄種の上からいっちゃん掛けが施されるものである。1176は志野の碗の可能性がある。1177は肥前の陶器か磁器かの見分けがつきにくいもので、外面に鉄絵が描かれていたようである。肥前磁器とすれば、初期の頃のものと思われる。1178は肥前系陶器碗で、内外面に青味がかった灰釉が掛けられるものである。1179は志野の小碗である。1180・1181は黒織



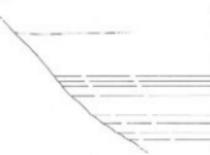
第220図
SK29出土遺物 ($S=1/3$)



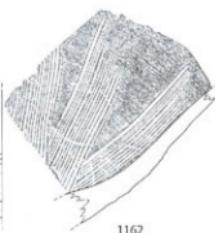
第221図
SK30出土遺物 ($S=1/3$)



第222図
SK31出土遺物 ($S=1/3$)

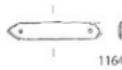


第223図
SD08出土遺物 ($S=1/3$)



第224図
SK32出土遺物 ($S=1/3$)

第225図
SK33出土遺物 ($S=1/3$)



第226図
SK34出土遺物 ($S=1/3$)



第227図
SK35出土遺物 ($S=1/2$)



第228図 SK36出土遺物 ($S=1/3$)



第229図 SK37出土遺物 ($S=1/3$)



第230図 SK38出土遺物 ($S=1/3$)



部の沓形碗である。1182～1187は肥前陶器の小皿で、1182～1185は胎土目跡が残るものである。1186・1187は口縁部が溝線状を呈し、内面見込み部分に砂目跡が残るものである。1188は肥前陶器の小壺と思われ、外面に鉄釉が掛かるものである。1189は産地不明陶器で鉢の取手部分と思われる。釉薬が白っぽく、火を受けたものと思われる。

1190～1193は肥前陶器の大皿である。1190は内面に鉄絵が描かれるものである。1191も内面に鉄絵が描かれるもので、見込み部分に胎土目跡が残る。また、火を受けたようで釉薬が白っぽくなっている。1192は素地がかなり分厚いもので、内面中央に沈線が残るために、粘土を充填して成形した可能性が考えられる。素地の厚さからかなりの大形品が想定され、輪積成形されたものかもしれない。1193は内面に鉄絵が描かれるもので、内面見込み部分に砂岩目跡が残る。

1194～1202は国産陶器である。1090は肥前陶器の壺の蓋と思われ、刷毛目塗りが施さ



第231図 第4遺構面 遺構外出土遺物(1)

0 1:3 10cm

れている。1195は肥前陶器の水注の蓋で、外面は鉄絵が施されており、内面は糸切りで仕上げである。1196は備前の大甕である。1197は備前擂鉢である。1198と1199は肥前系擂鉢である。1200は底地不明の擂鉢である。1201は備前の鉢である。1202は備前のこね鉢である。

貿易陶磁

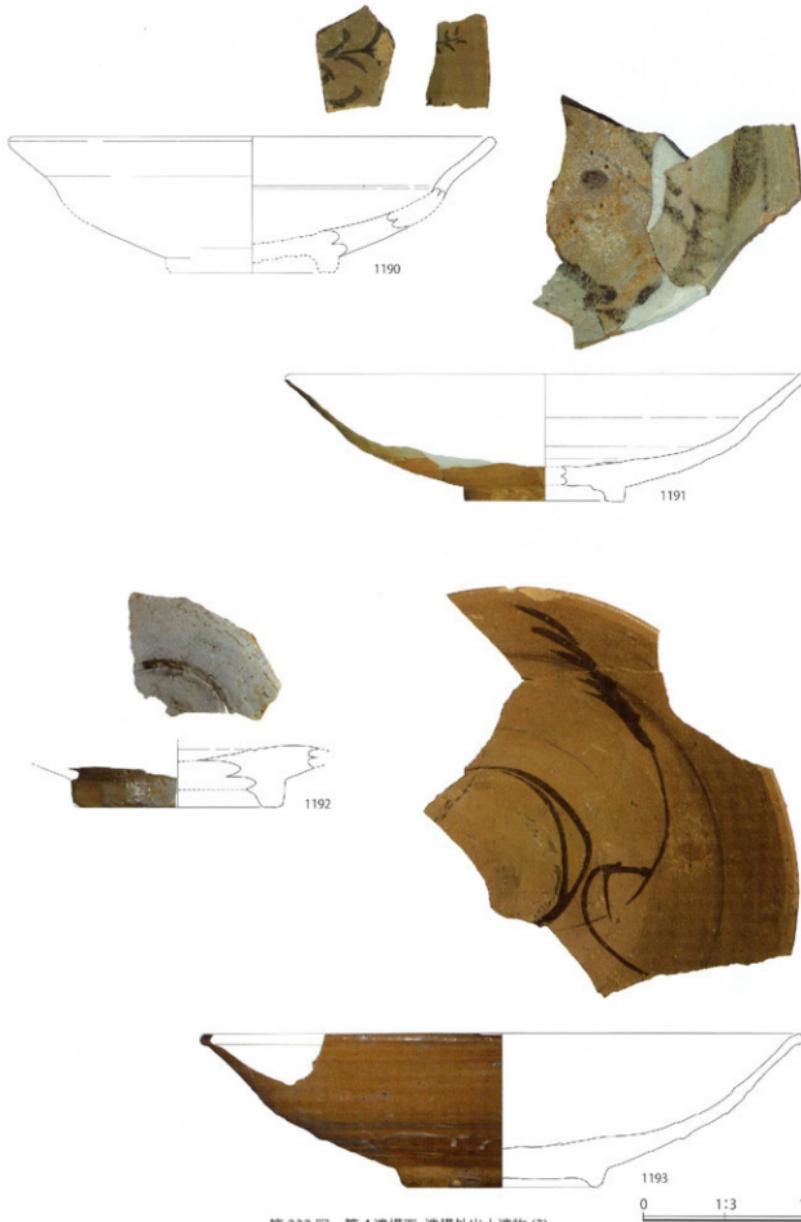
1203～1223は中国磁器、土器、石製品、金属製品である。1203～1210は中国磁器である。1203～1206は青花碗である。1207・1208は芙蓉手の青花鉢である。1209は青花皿あるいは鉢である。1210は景徳鎮窯系の青花皿と思われる。1211は用途不明の瓦質土器である。1212・1213は手づくねの土師器皿である。いずれも大形のもので、口クロア形成した後に指押さえを施し手づくね風に見せている。1214～1221は金属製品である。1214と1215は鉄釘で、断面方形を呈する。1216・1217は切羽で、鉄と銅の合金製でその上から金メッキが施されるものである。1218は真鍮製の煙管の椎首である。1219は銅製の小柄と思われる。1220は銅製の水滴である。1221は1220の底板部分である。1222・1223は砥石で、1222は中砥と思われる。1223は砥石にしてはかなり薄いもので、仕上げに使用されたものと思われる。

石製品

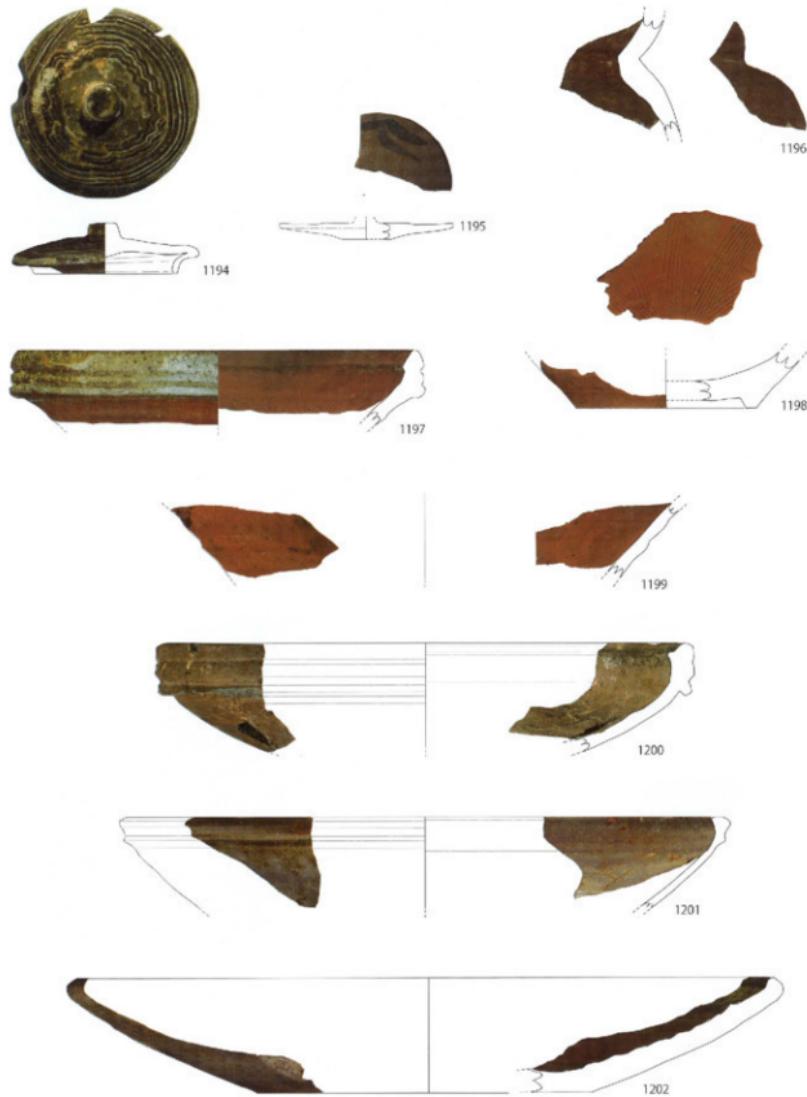
1224～1238は木製品、銭貨である。1224・1225は墨書の書かれた木筒である。1224は墨書がほとんど消えており、上部に「存」、中央部に「吉」とだけ読める。1225は両面に「九右口」と書いてある。1226～1229は銭貨である。1226は北宋銭の「聖宋元宝」で、初鑄年は1101年である。1227は北宋銭の「元豐通寶」で、初鑄年は1078年である。1228は北宋銭の「大觀通寶」で、初鑄年は1107年である。1229は明銭の「永樂通寶」で、初鑄年は1408年である。1230は丸型の連歛下駄である。1231は角型の差込下駄である。1232は木製品の桶の蓋と思われ、面中央に穴が確認でき、紐を通した穴と思われる。1233は木製の桶の蓋あるいは底にあたるものである。1234は用途不明の木製品で、黒漆が塗ってある。1235は木製の羽子板と思われ、羽部分と柄部分が半分欠損している。1236～1238は白木の箸で、いずれも両側の先端を細く加工している。

瓦

1239～1251は瓦である。1239～1246は軒丸瓦である。1239は中央に三巴文、その外側に團線があり、さらにその外側に珠文が17個配されるもので、頭部は右向き、尾部は左向きである。1240は中央に三巴文と團線、そのまわりに珠文が配されるもので、約1/2が欠損しているが、珠文は7個認められる。巴文の向きは、頭部は右向き、尾部は左向きである。1241は三巴文の周りに珠文が配されるもので、6個確認でき、巴文の向きは、頭部は右向き、尾部は左向きである。1242も三巴文の周りに珠文が配されるもので、珠文は他のものよりやや小ぶりで7個確認できる。1243は三巴文と團線の周りに珠文が配されるもので、珠文はやや小ぶりで7個確認できる。1244～1246も三巴文と團線の周りに珠文が配されるものである。1244は珠文が6個、1245は珠文が4個、1246は珠文が5個確認できる。1247は軒平瓦で、中心飾りは葉脈のある三葉文が、その両側に2つずつ唐草文が施される。1248～1251は丸瓦で、1252は内面調整がコビキBである。1252は鬼瓦の一部と思われる。

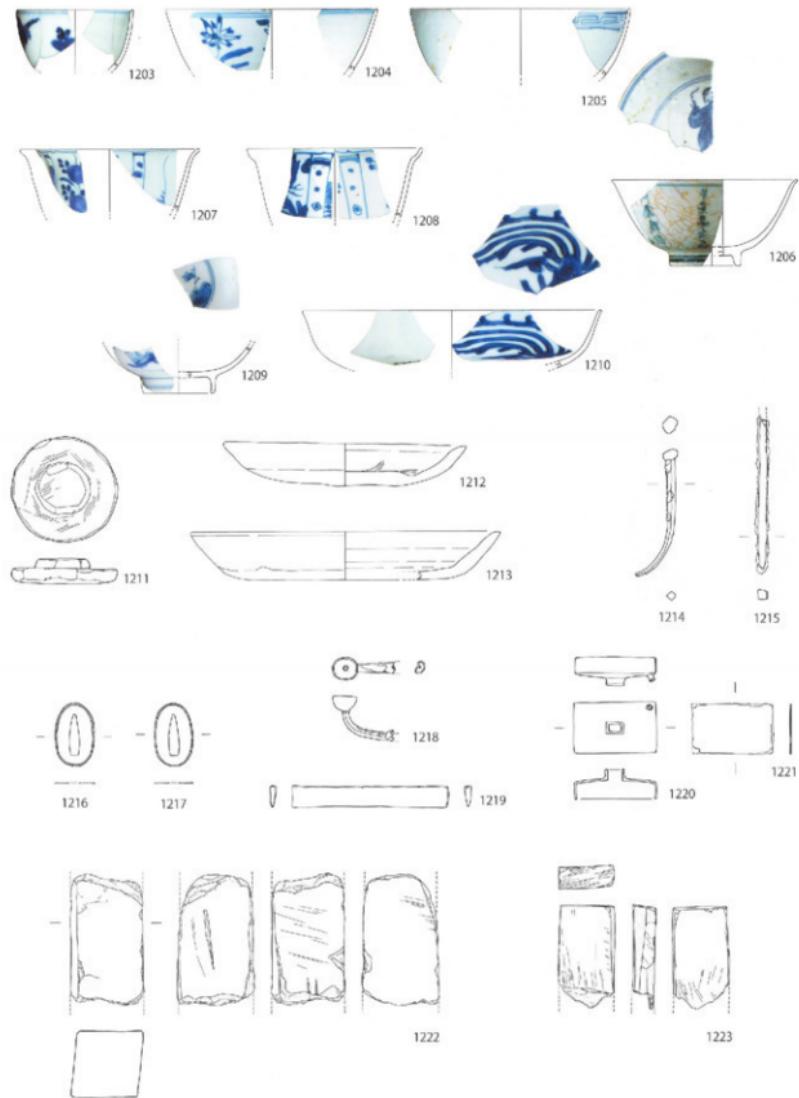


第232図 第4遺構面 遺構外出土遺物(2)



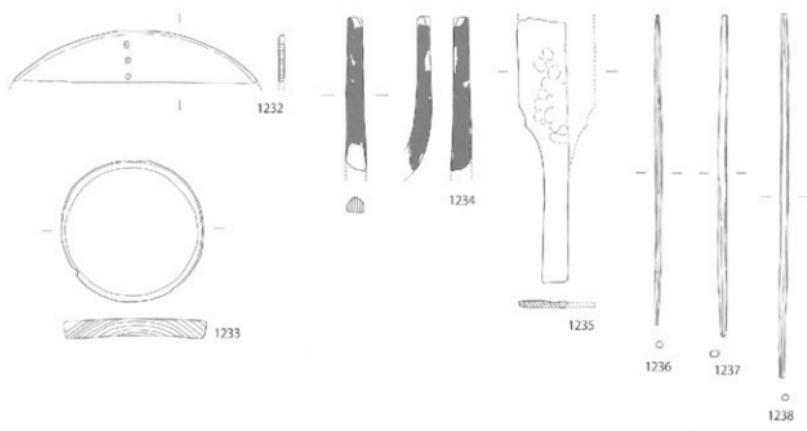
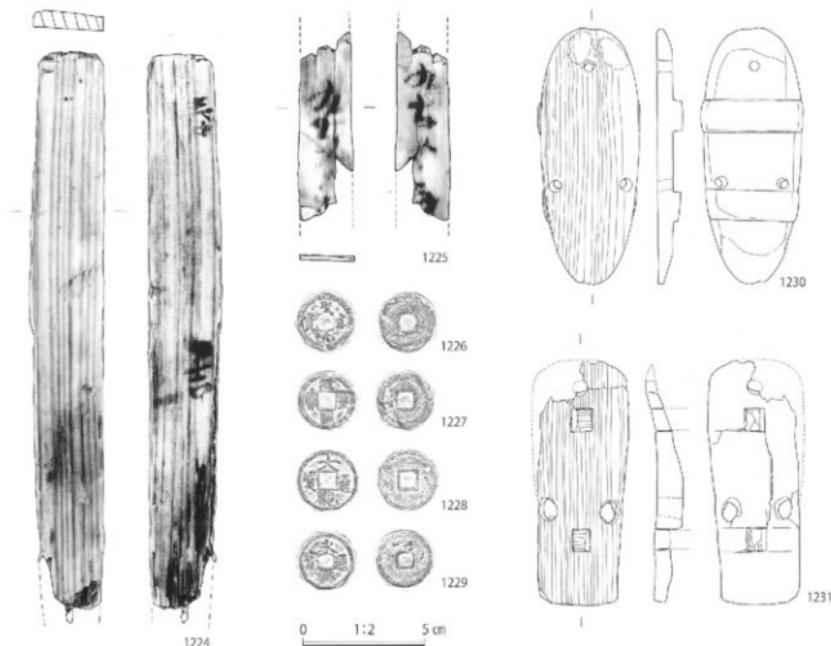
第233図 第4遣構面 遣構外出土遺物(3)

0 1:3 10cm

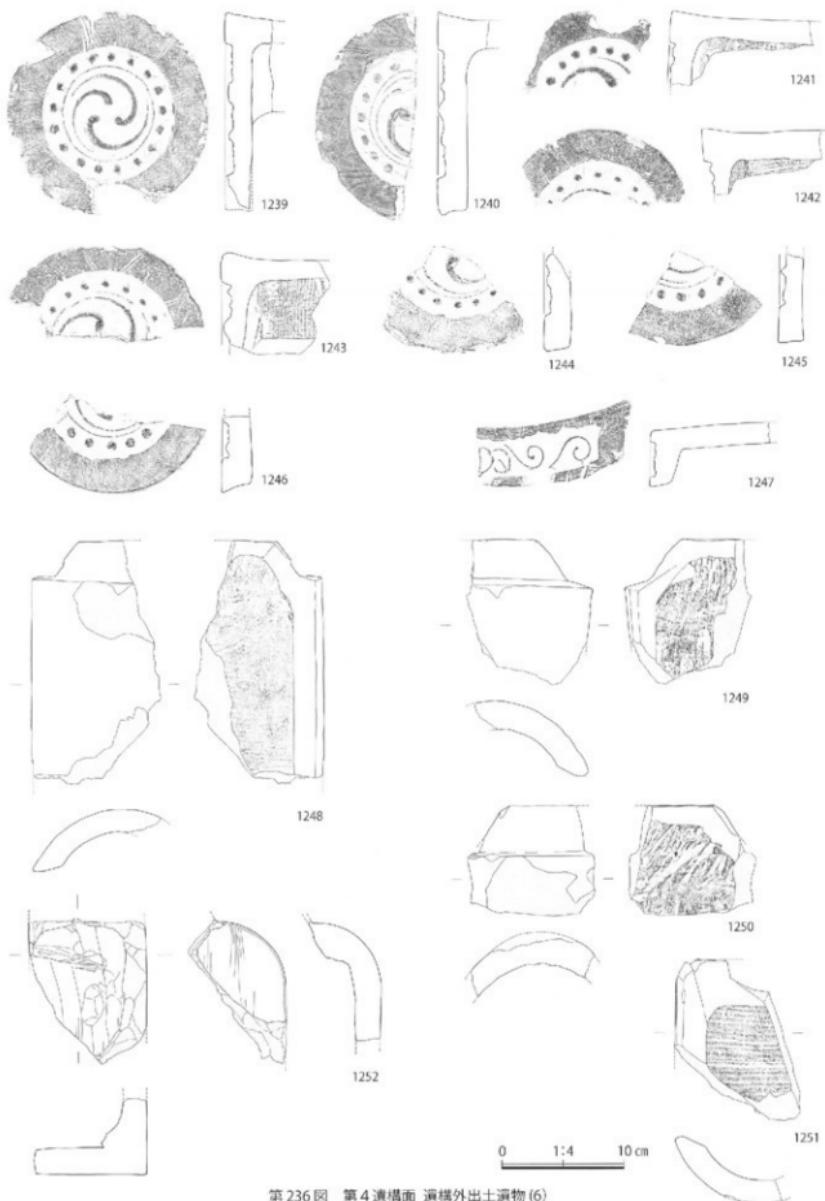


0 1:3 10 cm

第234図 第4遺構面 遺構外出土遺物(4)



第235図 第4遺構面 遺構外出土遺物(5)



第236図 第4遺構面 遺構外出土遺物(6)

第6節 小結

北屋敷では今回の調査により、遺構の残存状況が良好ではない遺構面があるものの、屋敷地の空間配置の変遷をある程度追うことができた。ただし、今回の調査の対象となっているのは、屋敷境から北側の屋敷地の約1/3の範囲であるため、屋敷地のすべての様相を表すわけではないことをお断りする。

まず、北屋敷における各遺構面の変遷について、屋敷地が形成された「初」の遺構面である第4遺構面から順に説明していきたい。

屋敷地の変遷

第4遺構面は北屋敷の遺構面の中で最も遺構の残存状況が良く、屋敷地の空間利用について具体的に推定することができた。表向きの空間にあたる屋敷地の南側では、小型の池SG01とひょうたん型の池SG02をもつ庭園が備えられ、その北側には庭園が鑑賞できる建物跡SB03が存在したと思われる。また、この建物跡から渡り廊下SC01が伸びており、その先に茶室のような小規模な建物SB04が設置され、そこからも池が鑑賞できるようになっていたと思われる。庭園については、SG01とSG02がSD01で繋がった状態で検出されている。また、SG02の北側に比較的小さな植栽跡SX01が見つかり、小形の植物が植えられていたものと思われる。さらにSX01の北側に、建物本体が東西9間×南北4間あるいは6間の礎石建物が存在したことが明らかになった。この建物の西側と北東側にはそれぞれ溝SD02・04・05が検出され、この建物に付随するものと考えられる。さらに、この建物には周り縁があり、遺水SD01の上を渡り廊下SC01が走り、南側の礎石建物SB04と繋がっていたことも分かった。この他、SG02の東側からは、植木を中心化壇として造作された痕跡が見つかっている。また、SG02の南側は遺構らしきものがほとんど見られないことから、この空間に築山のようなものが想像される。

SB03の東側には空闊地が存在したようで、根石を持つ堀跡SA08が最初に検出され、それを取り除いた後に大きな廐棄土坑SK28が検出された。その他にも、比較的小型の廐棄土坑もいくつか検出されている。さらに、これらの遺構とSB03やSD04を隔てるように、2本の溝SD06・07を中心にして杭列SA07が並ぶのを確認できた。この溝と杭列の北側には、2間×3間と2間×4間の建物跡が検出され、規模が小さいことから長屋を想定している。これらの遺構が存在する部分は、奥向きの空間であったと推測する。

また、詳しくは第6章で述べられるが、屋敷境を示す素振り溝（屋敷境SD01）が調査区に南端で検出されている。この北側には杭列が並ぶ部分（南SA02）が認められ、遮蔽施設が存在した可能性が考えられる。

松江城下町においては「有澤家」、「二谷家」などの屋敷絵図で、屋敷地に池を含む庭園を備えるものがあることが分かっているが、⁽¹⁷⁾今回の発掘調査により、それを証明する貴重な成果を得ることができた。また、庭園を備えた建物と空間を分ける遺構の検出により、表向きと奥向きの空間の存在を想定することができた。庭園を備えた建物のある空間を表向きとすれば、おそらく調査区の東側に奥向きの空間が広がることが推測される。

第3遺構面にも、第4遺構面から引き続き小型の池SG01とひょうたん型の池SG02が遺水SD01でつながって存在している。SG02は大形の割石を組んだ雄壮なものから、河原石を護岸として張り巡らした流麗なものに改修されている。改修に使用された土の中から枯梗文の瓦が出土しており、これと同様の瓦が第3遺構面に伴う屋敷境SD01の石積の裏込めからも出土していることから、SG02が第3遺構面の時期に改修した可能性が高い。このSG02と併

せて松江城を望むように、小規模な建物跡 SB04 が存在したことが判明した。また、SG01 と SG02 の北側にも渡り廊下 SC01 をもつ建物跡 SB02 の存在が想定される。この渡り廊下は、第4遺構面とは形状を変え、SG02 の東側の建物跡 SB01 となっていた可能性も考えられる。また、この建物には石積溝 SD02 が付随していたと考えている。さらに、この遺構面では塙 SA05・06 をはさんで、もう一つの池 SG03 を設けている。このように見していくと、調査区の南側が庭園とそれを鑑賞する建物といった表向きの空間で占められていることがわかる。SB02 の東側には、「佐々」名の荷札木簡が出土した廐棄土坑 SK23 や用途不明の土坑が検出された空間があり、この部分が屋敷地の中で空閑地であったと言える。調査区の北東側は疊敷が部分的に見つかり、この疊敷が建物の基礎構造物と考えれば、この空間にも建物が存在した可能性がある。

さらに、第3遺構面では屋敷境を示す素掘りの溝が埋め立てられ、石組の溝につくり替えられたことが分かっている。

第2遺構面では、遺構の残存状況が悪いものの、門柱を伴う柱列 SA01 の北側に建物を想定することができた。また、この建物には便槽 SK20・21 が付隨していたものと考えている。さらに、この建物の東側に塙 SN01 が存在したことが判明した。第3遺構面まで存在していた池は、この遺構面では見られなくなり、その上に何らかの施設があったものと思われる。この他、空間を分けるための塙 SA03・04 が存在する。

屋敷境は調査区の東側では石積の溝が使用されなくなる。西側では新たに石積が積み直されている。

第1遺構面では、さらに遺構の残存状況が悪く、空間配置については検証できなかった。造成上とともに積み上げられた比較的大形の石積方形土坑2基について、南屋敷の第3遺構面では、小形の石積方形土坑がいくつか検出され、使用されている石も小形の削石や河原石が多いが、北屋敷の石積方形土坑では大形の大海崎石が使用されている。そのうちの1基からは、良好な一括資料を得ることができており、稻荷神社の存在を示す狐人形や石造物、屋敷地内で焼かれた可能性のある陶器（御庭焼）や、人工の名前や建築木材に関する墨書きのある木製品が見つかっている。稻荷神社の存在に関しては、文献資料にも記述が残っており、それを証明することができた。また、御庭焼については、今のところ乙部家文書などの文献資料では確認されていないため、今後の検討課題である。さらに、人工の名前などの墨書き資料についても、その内容についてさらに解明していくことも課題である。

また、松江藩主松平定安の八女「^{はなこ}」出生時の胞衣箱埋納坑 (SK04) は、当時の習俗を知るうえで貴重な資料である。

この遺構面での屋敷境を示す遺構は確認できなかった。

各遺構面の年代	次に各遺構面から出土した陶磁器から、各遺構面の年代を推定することができた。(表6)
	第4遺構面では出土した陶器の大半が肥前産のもので、九陶I・2期(1594～1610年代)から九陶II期(1610～1650年代)に比定されるもので占められている。
	第3遺構面は「佐々」名の荷札木簡が出土した廐棄土坑 SK23 の一括資料をもとに考えると、SK22 からは第4遺構面同様肥前陶器が中心に出土しており、九陶II期に比定されるものが多くなるが、肥前陶器は伴わない。しかし、池 SG02 の埋土や遺構面の包含層から 17世紀中頃に比定される肥前陶器が出土しているため、第3遺構面の年代を 17世紀前半から中頃と推定した。

この第3遺構面の年代から考えて、第4遺構面が17世紀初頭から17世紀前半にあたると思われる。

第2遺構面は遺構面の残存状況が悪いが、九陶Ⅲ期（1650～1690年代）から九陶Ⅳ期（1690～1780年代）に比定される肥前磁器が多く出土しており、17世紀中頃から18世紀代にあたると考えられる。ここで見られる陶磁器の年代が第3遺構面と第1遺構面の推定年代の間を示すことから、第2遺構面の推定年代とする。

第1遺構面は遺構面全体では、九陶Ⅳ期（1690～1780年代）から九陶Ⅴ期（1780～1860年代）に比定される肥前陶磁器や19世紀代の漸焼磁器などが見られるが、石積方形土坑SK02で九陶Ⅳ期（1690～1780年代）に比定される肥前磁器が主体となって出土していることと、胞衣箱（SK04）が明治4年の銘をもつことから、第1遺構面は18世紀代から明治初頭にあたると推定した。

居住者の変遷 この年代観に基づき、各遺構面に居住していたと思われる人物を推定してみた。（表7）

第4遺構面については、1620～1633年にかけての松江城下町絵図が残されており、^[18] 北屋敷にあたるところに堀尾采女の名前が書かれている。これより以前の絵図は見つかっていないが、1611年に松江城と城下町が完成したとされており、^[19] この時に堀尾采女の父である堀尾民部がこの屋敷に住んでいた可能性が高い。

第3遺構面については、この遺構面に伴う廐棄土坑SK23から「佐々九郎兵衛」名の荷札木簡が出土していることから、「佐々九郎兵衛」が住んでいたことは間違いない。また、この遺構面から17世紀中頃を示す肥前磁器が出土していることやSK23から「乙部」と書かれた可能性がある木簡も存在することから、「佐々」の次に入居したことが分かっている「乙部九郎兵衛」も第3遺構面に存在した可能性が高い。ここで問題となるのが、堀尾采女がこの遺構面にまで存在したかということである。第4遺構面、第3遺構面で出土した陶磁器の年代では確定はできなかった。しかし、1634年に藩主が替わるとともに入居した佐々九郎兵衛は、石高1万石を拝領し、松江藩主京極忠高に最も信頼された人物であったことが文献資料で分かっており、^[20] 屋敷地を新たに造成する財力も十分兼ね備えていたと思われる。

また、第3遺構面でつくられた屋敷境の石組の裏込め上とともに枯梗文の瓦が出土しているが、枯梗文は指斐姓の家紋とされており、^[21] 第4遺構面に住んでいたと思われる堀尾民部は出雲入部以前は指斐宮内という名前であったことが分かっている。^[22] 第4遺構面で堀尾民部が屋敷に枯梗文を使用していたとすれば、第3遺構面造成時に堀尾家の屋敷を解体した時に混ざったものである可能性が考えられる。

第2遺構面の造成は、乙部家の2代目あるいは3代目が行ったものと思われる。^[23] 出土した陶磁器の年代から、この遺構面に4代目が住んでいたのは間違いないであろう。

第1遺構面の造成は、乙部家の5代目以降に行われたと思われる。それ以降は10代目が役儀御免になるまで乙部家が居住していたことが文献でも分かっている。

以上のように、今回の発掘調査により、文献と合致する資料も多く得ることができ、松江での上級藩士の屋敷の空間利用や生活の一端を知ることができたのは大きな成果と言える。しかしながら、墨書きの内容など、今回解明できなかったこともあり、今後さらに検討が必要と思われる。

表6 北屋敷における遺構面の年代観

第4遺構面	17世紀初頃～前半
第3遺構面	17世紀前半～中頃
第2遺構面	17世紀中頃～18世紀代
第1遺構面	18世紀代～明治初頃

表7 北屋敷における居住者変遷案

遺構面	藩主時期	居住者	年代
第4遺構面	堀尾期	初代 堀尾民部	1611～1620?年
第4遺構面／第3遺構面		2代目 堀尾采女	1620～1633年
第3遺構面	京極期	初代 佐々九郎兵衛	1634～1637年
第3遺構面	松平期	初代 乙部九郎兵衛	1638年
第3遺構面／第2遺構面		2代目 乙部勘解由	1649年
第3遺構面／第2遺構面		3代目 乙部九郎兵衛	1662年
第2遺構面		4代目 乙部九郎兵衛	1693年
第2遺構面／第1遺構面		5代目 乙部九郎兵衛	1727年
第2遺構面／第1遺構面		6代目 乙部九郎兵衛	1736年
第2遺構面／第1遺構面		7代目 乙部九郎兵衛	1753年
第2遺構面／第1遺構面		8代目 乙部九郎兵衛	1786年
第1遺構面		9代目 乙部九郎兵衛	1791年
第1遺構面		10代目 乙部九郎兵衛	1844年

註

- (1)山陰近世考古学研究会会報 第1号 2010年
- (2)江戸遺跡研究会編「因幡江戸考古占学研究辞典」柏書房 2001年
- (3)酒川家臣蔵資料「新屋太助」の日記にその記述が残されているとのこと。松江歴史館学芸員 松原祥子氏の御教示による。
- (4)袖原恒平「松江城下町遺跡 賀町344番地外发掘調査概報」(財)松江市教育文化振興事業団 2010年
- (5)原宏ほか「日本やきもの集成8 山陰」平凡社 1981年
- (6)松江市市史編纂室 内田文忠氏の御教示による。
- (7)松平直亮「松平定安公傳」1934年
- (8)福井県産業労働省地域産業・技術振興課参考 井中照久氏の御教示による。
- (9)(2)に同じ。
- (10)人阪城天守閣長松尾信治氏の御教示による。
- (11)内田文忠氏、西島太郎氏の御教示による。

- (12) 総合地球環境学研究所 石丸恵利子氏の御教示による。
- (13) 東国夫「近世備前焼指鉢の編年案」岡山城三之曲輪跡一表町・1丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一、2002年
- (14) 森村健・「福建省漳州窯系鉢器(ソフトウ・ウェア)について」「大阪城跡発掘調査報告1—大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—自然科学・考察編」財團法人大阪府文化財センター、2002年
- (15) 島根県埋蔵文化財センター丹井勝裕氏の御教示による。
- (16) 足立正智氏(建築設計事務所 館屋工房)、後藤史樹氏(有限会社 後藤屋)の御教示による。
- (17) 島根県立図書館所蔵「有澤権五郎屋鋪絵図」は、描かれた年代は不詳、有澤家は一時期から2500石程度を拝領している。二谷家所蔵「三谷家屋敷絵図」は文化9年(1826年)に描かれたもので、三谷家は3670石を拝領していたことがわかっている。松江歴史館学芸員 松原祥子氏の御教示による。
- (18) 島根大学附属図書館編「絵図の世界—出雲国・隱岐国・桑原文庫の絵図」2006年
- (19) 松江歴史館「義州松江の歴史をひもとく・松江歴史館展示案内」2011年
- (20) 西島太郎「京極忠高の出雲国・松江」松江市教育委員会 2010年
- (21) 「日本家紋図鑑」角川書店 1993年
- (22) 松江歴史館「平成23年度特別展春の巻ー 松江創世紀 堀尾氏三代の因縁づくり」2011年
- (23) 島根県立図書館所蔵「松江藩士列土録」

表 8 殿町 279 番地外(北屋敷) 陶磁器・土器遺物観察表

遺物番号	直線名	材質	形状	座標(cm)			所在地	発掘編年	備考
				口径	底径	高さ			
256	SK01	陶器	鉢	6.0	2.6	2.9	在地外	-	-
257	SK01	陶器	水注	11.0	5.0	2.7	櫻山南5:	不明	裏口径3.1/底径1.6/厚み0.6cm。
258	SK01	陶器	水注	10.0	5.0	2.6	在地外	不明	-
259	SK01	陶器	十字鉢	9.0	4.0	3.2	在地外	不明	-
260	SK01	陶器	中壺	11.0	3.8	6.4	在地外	-	1850年代。
261	SK01	陶器	中壺	21.0	10.0	16.8	在地外	-	裏口徑16.0cm、底径8.0cmの穴口壺。
262	SK01	陶器	中壺	9.0	5.0	2.5	在地外	-	底径6.0cm、底部に凹部あり、底部向外に0.6cmの摩耗。直縁。
263	SK01	陶器	中壺	7.0	4.4	1.8	在地外	-	半径0.6cm、底径は直線的。
264	SK01	陶器	直小口	7.7	3.4	1.8	在地外	-	-
265	SK01	陶器	中壺	16.0	6.0	1.0	在地外	V	-
266	SK02	陶器	小鉢	8.0	3.0	1.0	在地外	V	-
267	SK02	陶器	小鉢	8.2	3.2	1.2	在地外	-	時代: 云々内に1月鳥、鶴。
268	SK02	陶器	小鉢	8.2	3.2	1.2	在地外	V	-
269	SK02	陶器	中壺	12.0	6.0	2.0	在地外	V	三足。
270	SK02	陶器	小鉢	10.0	4.7	3.0	在地外	-	第2内に○印。鳥取県因久山の可能小豆。
271	SK02	陶器	中壺	10.3	4.1	2.1	在地外	不明	-
272	SK02	陶器	中壺	12.1	6.0	2.0	在地外	-	スリ口直底水。
273	SK02	陶器	小鉢	12.5	6.0	2.0	在地外	V	直縁。
274	SK02	陶器	中壺	5.7	2.6	4.2	在地外	V	出云文。
275	SK02	陶器	中壺	9.0	4.8	2.4	在地外	V	N-V
276	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
277	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
278	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
279	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
280	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
281	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
282	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
283	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
284	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
285	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
286	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
287	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
288	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
289	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
290	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
291	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
292	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
293	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
294	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
295	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
296	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
297	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
298	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
299	SK02	陶器	中壺	9.3	4.6	2.4	在地外	V	-
300	SK03	陶器	小鉢	15.5	9.0	2.8	在地外	-	赤ちぢみ、表面は凹板め切り。
301	SK03	陶器	小鉢	13.0	8.2	2.5	在地外	-	赤ちぢみ、底盤は斜板め切り。
302	SK03	陶器	小鉢	12.0	7.8	2.5	在地外	-	赤ちぢみ、底盤は斜板め切り。
303	SK03	陶器	小鉢	12.0	6.0	2.7	在地外	-	赤ちぢみ、ナゲ上に施釉不均、凹板め切り。
304	SK03	陶器	小鉢	12.0	6.0	2.5	在地外	-	白色系、ナゲ上に施釉不均、赤地底。
305	SK03	陶器	小鉢	6.3	3.6	4.1	在地外	-	-
306	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.4	3.9	在地外	V	-
307	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	-
308	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	-
309	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	-
310	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	-
311	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	-
312	SK03	陶器	小鉢	7.0	3.0	3.0	在地外	V	型板焼。
313	SK03	陶器	丸皿	8.0	2.0	1.0	在地外	-	19世紀前半。
314	SK03	陶器	丸皿	8.0	2.0	1.0	在地外	-	19世紀前半。
315	SK03	陶器	丸皿	8.0	2.0	1.0	在地外	-	18世紀末～19世紀初。ドウ接合。
316	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	15世紀後～19世紀初。ドウ接合。
317	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
318	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
319	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
320	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
321	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
322	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
323	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
324	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
325	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
326	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
327	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
328	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
329	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
330	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
331	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
332	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
333	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
334	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
335	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
336	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
337	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
338	SK03	陶器	小鉢	9.0	3.4	4.9	在地外	-	-
339	SK03	陶器	中壺	12.0	6.0	2.5	在地外	-	-
340	SK03	陶器	中壺	11.0	4.7	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
341	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
342	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
343	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
344	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
345	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
346	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
347	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
348	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
349	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
350	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
351	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
352	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
353	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
354	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
355	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
356	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
357	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
358	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
359	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
360	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
361	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
362	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
363	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
364	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
365	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
366	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
367	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
368	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
369	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
370	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
371	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
372	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
373	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
374	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
375	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
376	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
377	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
378	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
379	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
380	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
381	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
382	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
383	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
384	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
385	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
386	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
387	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
388	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
389	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
390	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
391	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
392	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
393	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
394	SK03	陶器	中壺	11.0	4.6	6.0	在地外	-	内付内に黒色あり、「火」字。
395	SK03								

第4章 残留 279番地外調査(北側敷)の概要

品目番号	遺物名	材質	附属	形態	長さ(cm)	幅さ(cm)	厚さ(cm)	その他の特徴	位置	発見年	備考
369	石器	中継 石器		丸筒形 直筒形	16.0 11.4	5.0 4.2	6.1 6.1		腰前 腰前	V V	
370	SK03	石器	中継	直筒形	11.4	4.2	6.1		腰前	V	
371	SK03	石器	中継	圓筒形	10.0	4.8	6.0		腰前	V	
372	SK03	石器	中継	圓筒形	10.9	4.3	6.0		腰前	V	
373	SK03	石器	中継	圓筒形	11.5	4.5	6.4		腰前	V	
374	SK03	石器	中継	圓筒形	16.0	4.5	6.4		腰前	V	
375	SK03	石器	中継	丸筒形 直筒形	13.8	4.5	6.4		腰前 腰前	V IV	内側にヒラヒア文様。
376	SK03	石器	中継	丸筒形	15.0	9.0	3.8		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
377	SK03	石器	中継	丸筒形	10.2	4.0	2.4		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
378	SK03	石器	中継	丸筒形	10.8	7.1	2.1		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
379	SK03	石器	中継	丸筒形	14.6	7.9	3.5		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
380	SK03	石器	中継	丸筒形	15.4	9.5	3.0		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
381	SK03	石器	中継	丸筒形 直筒形	15.4	9.5	3.0		腰前	V	内側にヒラヒア文様。
382	SK03	石器	中継	丸筒形 直筒形	15.8	3.4	9.3		腰前	IV	
383	SK03	石器	中継	丸筒形 直筒形	4.0				腰前	V	
384	SK03	石器	中継	丸筒形	8.6				腰前	-	
385	SK03	石器	中継	丸筒形	7.2				腰前	-	
386	SK03	石器	中継	丸筒形	7.0				腰前	-	
387	SK03	石器	中継	丸筒形	7.0				腰前	-	
388	SK03	石器	中継	丸筒形	7.0				腰前	-	
389	SK03	石器	中継	丸筒形	8.2	3.2	1.9		腰前	-	
390	SK03	石器	中継	丸筒形	8.2	5.0	1.5		腰前	-	
391	SK03	石器	中継	丸筒形	7.9	3.0	1.6		腰前	-	
392	SK03	石器	中継	丸筒形	8.8	5.5	1.6		腰前	-	
393	SK03	石器	中継	丸筒形	8.3	5.2	1.6		腰前	-	
394	SK03	石器	中継	丸筒形	8.2	4.9	1.5		腰前	-	
395	SK03	石器	中継	丸筒形	8.9	8.0	1.9		腰前	-	
396	SK03	石器	中継	丸筒形	14.9	8.0			腰前	-	
397	SK03	石器	中継	丸筒形	19.3	10.0	23.1		腰前	-	
398	SK03	石器	中継	丸筒形	20.4				腰前	-	
399	SK03	石器	中継	丸筒形	19.0	16.0	4.0		腰前	-	
400	SK03	石器	中継	丸筒形	21.0				腰前	-	
401	SK03	石器	中継	丸筒形	7.8				腰前	-	
402	SK03	石器	中継	丸筒形	8.0				腰前	-	
403	SK03	石器	中継	丸筒形	9.6				腰前	-	
404	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
405	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
406	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
407	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
408	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
409	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
410	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
411	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
412	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
413	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
414	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
415	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
416	SK03	石器	中継	丸筒形	8.5				腰前	-	
417	SK04	土器	(大)	直筒形	14.4	8.0	3.1		腰前	-	
518	SK04	土器	火打	直筒形	11.5	3.3	2.6		腰前	-	
519	SK05	土器	火打	直筒形	10.0	2.9	2.6		腰前	V	
520	SK05	土器	火打	直筒形	10.2	6.0	2.0		腰前	V	
521	SK05	土器	火打	直筒形	9.3				腰前	-	
522	SK05	土器	火打	直筒形	6.0	3.6	1.6	腰前	17.0	V	
523	SK05	土器	火打	直筒形	4.2	6.0	6.5	腰前	17.0	V	
524	SK05	土器	火打	直筒形	33.1	14.4	16.7		腰前	-	
525	SK05	土器	火打	直筒形	35.6				腰前	-	
526	SK06	織物	火打	直筒形	7.4				腰前	-	
527	SK06	織物	火打	直筒形	10.0	3.6	2.0		腰前	-	
528	SK06	織物	火打	直筒形	11.6	7.0	2.0		腰前	-	
529	SK06	織物	火打	直筒形	10.2				腰前	-	
530	SK07	織物	火打	直筒形	19.4	6.8	8.8		腰前	11.0	不判
531	SK07	織物	火打	直筒形	6.0	5.0			腰前	11.0	不判
532	SK08	織物	火打	直筒形	7.5				腰前	-	
533	SK09	水酒		瓶	3.8	1.7	2.1		腰前	V	腰あわせ。口部に十字に溝った痕跡。底面に鉛錠貫孔。外周部へ斜めに鋸歯状ナジ。
534	SK11	土器	火打	直筒形	3.9				腰前	V	
535	SK11	土器	火打	直筒形	8.2				腰前	V	
536	SK11	土器	火打	直筒形	5.9	6.1	6.1		腰前	V	
537	SK11	土器	火打	直筒形	7.4	4.8	2.5		腰前	V	
538	SK11	土器	火打	直筒形	13.8	8.1	3.7		腰前	V	
539	SK11	土器	火打	直筒形	25.6	11.5	1.7		腰前	-	
540	SK11	土器	火打	直筒形	16.9	6.8	8.9		腰前	-	
541	SK11	土器	火打	直筒形	4.4				腰前	-	
542	SK11	土器	火打	直筒形	3.3	3.4	2.6		腰前	-	
543	SK11	土器	火打	直筒形	10.8				腰前	-	
544	SK12	土器	火打	直筒形	5.9	2.6	5.0		腰前	V	
545	SK12	土器	火打	直筒形	3.8				腰前	-	
546	SK12	土器	火打	直筒形	4.0				腰前	-	
547	SK12	土器	火打	直筒形	29.4				腰前	-	
548	SK12	土器	火打	直筒形	25.6				腰前	-	
549	SK12	土器	火打	直筒形	3.3	3.4	2.6		腰前	-	
550	SK12	土器	火打	直筒形	10.8				腰前	-	
551	SK12	土器	火打	直筒形	3.5				腰前	-	
552	SK12	土器	火打	直筒形	3.8				腰前	-	
553	SK12	土器	火打	直筒形	4.0				腰前	-	
554	SK12	土器	火打	直筒形	29.4				腰前	-	
555	SK12	土器	火打	直筒形	25.6				腰前	-	
556	SK12	土器	火打	直筒形	3.8				腰前	-	
557	SK12	土器	火打	直筒形	3.8				腰前	-	
558	SK13	土器	火打	直筒形	6.1	2.6	3.4		腰前	-	
559	SK13	土器	火打	直筒形	14.0				腰前	-	
560	SK13	土器	火打	直筒形	9.4				腰前	-	
561	SK14	土器	火打	直筒形	33.6	16.7	13.0		腰前	-	
562	SK14	土器	火打	直筒形	9.3	8.0	12.5	腰前	12.0	V	
563	SK14	土器	火打	直筒形	29.4	4.0	15.3		腰前	-	
564	SK14	土器	火打	直筒形	10.2	7.7	1.9		腰前	-	
565	SK14	土器	火打	直筒形	11.5	6.2	2.5		腰前	-	
566	SK15	土器	火打	直筒形	6.0				腰前	-	
567	SK15	土器	火打	直筒形	3.6	5.9	7.4		腰前	-	
568	SK15	土器	火打	直筒形	32.0	12.0	12.6		腰前	IV	1.40.

植物觀察表

植物番号	品種名	特質	詳細	西高(%)			生産地	花期年数	備考
				1種	2種	3種			
572	SK17	上級	無虫害栽培の 新規品種	36.8	-	-	在田未 在田未	-	背面に3枚付葉。
573	SK17	上級	新規品種	29.4	-	-	在田未 在田未	-	背面に3枚付葉。
574	第1直進情熱 傷病性	開花	新規	-	2.3	-	-	-	-
575	第1直進情熱 傷病性	開花	新規	3.4	2.6	3.3	-	-	-
576	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	9.0	-	-	-	-	不明
577	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	-	4.7	-	-	-	不明
578	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	-	5.0	-	-	-	傷病性
579	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	-	11.1	-	-	-	19世紀末。
580	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	30.8	-	-	-	-	背面に3枚付葉。
581	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	15.0	-	-	在田未 在田未	-	背面に3枚付葉。
582	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	18.0	2.6	8.3	-	-	外側花輪。
583	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	31.6	-	-	-	-	花色。
584	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	7.8	2.0	-	前立葉 前立葉	-	花色は緑色を帯びたもの。
585	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	-	6.6	-	前立葉 前立葉	-	花色も緑色。
586	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 上級	-	-	-	-	-	-
587	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 上級	-	-	-	-	-	-
588	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 上級	14.2	-	-	-	-	-
589	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 白競馬新時代	10.2	3.6	3.0	-	-	日本育成。
590	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 白競馬	-	12.8	-	前立葉 前立葉	-	花色。
591	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	-	1.5	-	-	-	-
592	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	-	-	-	-	-	-
593	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	-	-	-	-	-	-
594	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	28.2	13.8	15.0	-	-	スリ日本育成。
595	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	27.8	10.4	15.7	-	-	スリ日本育成。
596	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	-	7.0	-	-	-	スリ日本育成。花色に濃度あり。
597	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	-	5.6	-	-	-	花色に濃度あり。
598	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	4.8	11.1	21.1	-	-	-
599	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	-	-	-	-	-	-
600	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	-	-	-	-	-	-
601	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	6.8	-	1.0	在田未 在田未	-	花色が濃度あり。
602	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	16.3	-	-	-	-	-
603	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 かぶせ形	23.0	19.0	-	在田未 在田未	-	花色が濃度あり。
604	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 七葉	5.4	-	-	在田未 在田未	-	花色が濃度あり。
605	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 七葉	9.4	9.8	3.0	在田未 在田未	-	花色が濃度あり。
606	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 七葉	19.8	-	-	-	-	-
607	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	8.0	3.2	3.0	-	-	-
608	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	2.5	3.0	3.7	-	-	19世紀末。
609	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	-	-	-	-	-	-
610	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	10.1	-	-	-	-	-
611	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	0.3	-	2.9	-	-	花色が濃度あり。
612	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	10.8	4.0	3.9	-	-	花色が濃度あり。
613	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	11.6	-	-	-	-	-
614	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	11.3	6.6	6.1	-	-	-
615	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	6.4	-	-	-	-	-
616	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 選種	9.8	4.2	6.2	-	-	-
617	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	12.6	-	-	-	-	-
618	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	10.8	4.0	3.9	-	-	-
619	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	10.8	3.8	3.7	-	-	-
620	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	11.0	5.0	8.1	-	-	-
621	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 大競	4.9	-	-	-	-	-
622	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	-	-	-	-	-	-
623	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	11.8	-	-	-	-	-
624	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	11.6	-	-	-	-	-
625	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	7.0	-	-	-	-	-
626	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	-0.59±0.12	0.37±0.34	3.1	-	-	-
627	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	10.6	3.4	2.5	-	-	-
628	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	-	-	-	-	-	-
629	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	8.5	-	-	-	-	-
630	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	4.9	2.8	3.1	-	-	花色が濃度あり。
631	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 中競	7.2	4.6	5.6	-	-	-
632	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 水泡	24.0	-	-	-	-	-
633	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	-	1.4	3.3	9.1	-	-
634	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	-	3.6	-	-	-	-
635	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 小競	-	-	-	-	-	-
636	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	-	-	-	-	-	-
637	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	8.8	3.7	1.6	-	-	-
638	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	8.2	5.6	1.3	-	-	-
639	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	8.8	4.9	1.4	-	-	-
640	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	9.4	5.1	2.0	-	-	-
641	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	9.8	6.2	2.2	-	-	-
642	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	10.4	6.3	2.0	-	-	-
643	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	10.2	8.0	2.2	-	-	-
644	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	10.6	6.4	2.4	-	-	-
645	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	11.0	3.0	2.8	-	-	-
646	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	12.0	2.0	2.0	-	-	-
647	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	12.4	7.2	2.2	-	-	-
648	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	11.8	4.0	2.6	-	-	-
649	第1直進情熱 傷病性	開花	新規 純形	13.6	5.6	2.7	-	-	-
650	SK16	開花	新規 純形	-	2.2	-	-	-	-
651	SK16	開花	新規 純形	-	-	-	-	-	-
652	SK16	開花	新規 純形	10.4	-	-	-	-	-
653	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
654	SK16	開花	新規 純形	12.4	-	-	-	-	-
655	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
656	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
657	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
658	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
659	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
660	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
661	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
662	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
663	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
664	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
665	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
666	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
667	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
668	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
669	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
670	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
671	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
672	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
673	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
674	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
675	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
676	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
677	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
678	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
679	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
680	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
681	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
682	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
683	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
684	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
685	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
686	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
687	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
688	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
689	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
690	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
691	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
692	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
693	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
694	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
695	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
696	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
697	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
698	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
699	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
700	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
701	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
702	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
703	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
704	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
705	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
706	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
707	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
708	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
709	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
710	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
711	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
712	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
713	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
714	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
715	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
716	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
717	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
718	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
719	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
720	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
721	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
722	SK16	開花	新規 純形	12.5	-	-	-	-	-
723									

第4章 照町 279番地外調査(北北東)の概要

造物番号	屋号名	材質	輪様	輪形	法長(cm)	口径	底径	高さ	その他	生年地	八輪輪作	届号
674	SK18	陶器	小鉢	ハコシナ・丸	—	7.6	—	—	八朔	—	—	—
675	SK18	陶器	小鉢	よしとがわ	31.3	—	—	—	癸酉	—	—	—
676	SK18	土器	盆	白	—	28.6	—	—	在癸酉	—	—	—
677	SK18	土器	盆	白	—	8.1	—	—	在癸酉	—	—	—
678	SK18	陶器	小鉢	純正形	6.6	—	—	—	—	IV	癸酉紀載手	—
679	SK18	陶器	小鉢	純正形	7.0	—	—	—	壬辰	IV	—	—
680	SK18	陶器	中皿	平頭	10.2	3.8	4.2	—	戊酉	IV	合形、三行脚輪	—
681	SK18	陶器	中皿	中頭	11.6	4.8	5.9	—	癸酉	III	合形	—
682	SK18	陶器	大皿	純正	—	6.9	—	—	癸酉	IV	脚折付	—
683	SK18	陶器	大皿	丸形底灰陶	15.0	4.4	4.2	—	癸酉	IV	庚辰年、くわんかい	—
684	SK18	陶器	大皿	純正	—	8.2	—	—	癸酉	IV	庚辰年、くわんかい	—
685	SK18	陶器	大皿	変形	16.4	9.5	4.3	—	癸酉	IV	庚辰年、くわんかい	—
686	SK18	陶器	大皿	変形	—	19.1	—	—	癸酉	IV	丁脚付	—
687	SK18	陶器	大皿	丸底灰陶	33.8	—	—	—	癸酉	V	—	—
688	SK18	土器	中皿	白	9.7	6.5	1.7	—	—	—	西朝系、西和田回転切切り	—
689	SK18	土器	中皿	白	9.4	6.2	1.9	—	—	—	白色系、足部は四角切切り	—
690	SK18	土器	中皿	白	10.2	7.4	1.9	—	—	—	白色系、西和田回転切切り	—
691	SK18	土器	中皿	白	10.0	6.4	1.7	—	—	—	白色系、近江は丸底あり、直脚底	—
692	SK18	土器	中皿	白	10.1	6.1	1.9	—	—	—	白色系、近江は回転切切り、直脚底	—
693	SK18	土器	中皿	白	10.0	5.1	2.2	—	—	—	白色系、近江は回転切切り、曲脚底	—
694	SK18	土器	中皿	白	10.0	5.3	2.1	—	—	—	白色系、其の上に回転切切り、直脚底	—
695	SK18	土器	中皿	白	10.3	5.2	2.4	—	—	—	白色系、其の上に回転切切り、曲脚底	—
696	SK18	土器	中皿	白	13.8	8.0	1.7	—	—	—	白色系、其の上に回転切切り、直脚底	—
713	—	陶器	中皿	白	1.4	4.5	1.7	—	不詳	—	—	—
714	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
715	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
716	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
717	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
718	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
719	第二横幅	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
720	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
721	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
722	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
723	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
724	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
725	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
726	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
727	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
728	窑業模様	陶器	中皿	白	—	—	—	—	—	—	—	—
729	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
730	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
731	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
732	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
733	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
734	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
735	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
736	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
737	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
738	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
739	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
740	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
741	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
742	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
743	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
744	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
745	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
746	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
747	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
748	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
749	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
750	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
751	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
752	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
753	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
754	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
755	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
756	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
757	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
758	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
759	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
760	窑業模様	陶器	七寸	白	—	—	—	—	—	—	—	—
761	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
762	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
763	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
764	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
765	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
766	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
767	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
768	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
769	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
770	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
771	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
772	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
773	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
774	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
775	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
776	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
777	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
778	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
779	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
780	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
781	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
782	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
783	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
784	SK23	陶器	大皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
785	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
786	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
787	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
788	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
789	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
790	SK23	陶器	中皿	御形	—	—	—	—	—	—	—	—
791	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
792	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
793	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
794	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
795	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
796	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
797	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
798	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
799	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
800	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
801	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
802	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
803	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
804	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
805	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
806	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
807	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
808	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
809	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
810	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—
811	SK23	陶器	手鉢	手鉢	—	—	—	—	—	—	—	—

登録番号	遺物名	材質	器種	記述	直徑(cm)			生産地	小指標
					口径	底径	高さ		
812	SK23	土師器	直筒(中)	灰陶器	12.6	3.3	2.6	-	-
813	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	12.8	3.3	2.4	-	-
814	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	12.1	3.4	2.7	-	-
815	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	12.6	3.4	3.0	-	-
816	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	12.9	3.3	2.6	-	-
817	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	13.0	5.5	3.0~3.7	-	-
818	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	13.1	4.9	4.6	-	-
819	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	12.2	5.3	4.4	-	-
820	SK23	土師器	直筒(中)	京都系	14.5	6.6	2.4	-	-
821	SK23	土師器	直筒(大)	京都系	15.1	8.1	3.8	-	-
822	SK23	土師器	直筒(大)	京都系	15.2	9.0	3.5~3.6	-	-
823	SK23	土師器	直筒(大)	京都系	15.0	8.0	2.6	-	-
936	黒漆漆塗SD01	漆器	平盤	杉形	11.4	4.9	5.3~7.3	漆器	E
951	漆器漆塗SD01	漆器	大皿	杉形	-	-	-	漆器	E
952	漆器漆塗SD01	漆器	楕円	漆器	26.4	-	-	漆器	E
963	漆器	漆	-	-	-	13.5	-	漆器	E
964	SK24	漆器	漆	-	-	-	漆器	E	
965	SL01	土師器	直筒	在京系	-	6.2	-	-	-
966	SL01	土師器	直筒(中)	在京系	11.7	7.2	5.4~6.6	-	-
967	SL01	土師器	直筒(中)	在京系	11.6	6.6	3.0	-	-
969	SK25	漆器	中鉢	漆器	17.4	7.8	10.4	漆器	E
970	SK25	漆器	小鉢	漆器	-	3.0	-	漆器	E
971	SK25	漆器	中皿	漆器	24.6	12.8	4.7	漆器	E
972	SK25	漆器	小皿	在京系	9.8	1.1	2.3	-	-
973	SK25	漆器	直筒(大)	在京系	11.4	4.0	2.5	-	-
974	SK25	漆器	直筒(中)	在京系	12.0	3.3	2.3	-	-
975	SK25	漆器	直筒(中)	在京系	12.7	3.2	2.1	-	-
986	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	大形	11.0	4.5	6.0	漆器	E
987	第3回遺物 漆器外	漆器	中鉢	大形	12.1	4.6	7.5	漆器	E
988	漆器漆塗SD01	漆器	中鉢	漆器	25.8	13.0	3.8	漆器	E
989	漆器漆塗SD01	漆器	小鉢	漆器	-	4.6	-	漆器	E
990	漆器漆塗SD01	漆器	中皿	漆器	12.0	4.6	3.8	漆器	E
991	漆器漆塗SD01	漆器	小皿	漆器	-	4.5	-	漆器	E
992	漆器漆塗SD01	漆器	中鉢	大形	10.4	-	-	漆器	E
993	漆器漆塗SD01	漆器	中皿	大形	-	-	-	漆器	E
994	漆器漆塗SD01	漆器	中皿	大形	22.6	-	-	漆器	E
995	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	-	7.6	-	漆器	E
996	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	9.5	-	-	漆器	E
997	第3回遺物 漆器外	漆器	前縁	小鉢	9.8	-	-	漆器	E
998	漆器漆塗SD01	漆器	中皿	漆器	-	11.3	-	漆器	E
999	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	-	4.0	-	漆器	E
1000	漆器漆塗SD01	漆器	直筒	中皿	14.6	3.6	2.4	漆器	E
1001	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	24.0	16.9	5.6	漆器	E
1007	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	30.0	-	-	漆器	E
1003	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	29.8	-	-	漆器	E
1004	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	27.8	-	-	漆器	E
1005	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	16.1	7.0	3.5	漆器	E
1006	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	16.6	7.6	3.7	漆器	E
1007	第3回遺物 漆器外	漆器	直筒	中皿	11.6	7.1	1.9	漆器	E
1008	漆器漆塗SD01	漆器	直筒	中皿	9.6	6.2	1.8	漆器	E
1009	漆器漆塗SD01	漆器	直筒	中皿	10.2	7.1	2.0	漆器	E
1010	漆器漆塗SD01	漆器	直筒	中皿	12.4	5.0	2.6	漆器	E
1011	漆器漆塗SD01	漆器	直筒	中皿	12.5	4.8	2.6	漆器	E
1012	第3回遺物 遺傳外	上納器	直筒(中)	京都系	12.2	4.8	3.0	-	-
1013	漆器漆塗SD01	漆器	直筒(中)	京都系	12.4	4.3	2.9	-	-
1048	SK02	漆器	中皿	丸型	13.0	4.9	3.7	漆器	E
1049	SK02	漆器	小皿	丸型	-	4.4	-	漆器	E
1050	SK02	漆器	水桶	-	-	15.2	-	漆器	E
1051	SK02	漆器	圓筒	-	13.6	-	-	漆器	E
1052	SK02	漆器	中皿	-	-	5.9	-	漆器	E
1053	SK02	漆器	中皿	丸型	-	6.0	-	漆器	E
1063	SD01	白磁	中皿	天形	11.6	-	-	漆器	E
1064	SD01	白磁	中皿	天形	10.8	-	-	漆器	E
1065	SD01	白磁	中皿	日式	12.0	4.7	6.2	漆器	E
1066	SD01	白磁	中皿	日式	-	10.0	-	漆器	E
1067	SD01	白磁	中皿	日式	-	12.2	-	漆器	E
1068	SD01	白磁	中皿	日式	-	12.6	-	漆器	E
1069	SD01	白磁	中皿	日式	-	12.6	-	漆器	E
1070	SD01	白磁	中皿	天形	-	13.8	5.0	中皿	E
1071	SD01	白磁	小皿	-	-	9.0	-	中皿	E
1073	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	11.4	7.2	2.0	-	-
1074	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	11.3	6.0	2.3	-	-
1075	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	9.2	4.0	1.8	-	-
1076	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.6	6.0	2.0	-	-
1077	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.5	4.9	2.0	-	-
1078	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.5	5.0	2.3	-	-
1079	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.5	4.9	2.2	-	-
1080	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	11.4	4.5	2.2	-	-
1081	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.0	4.8	2.7	-	-
1082	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	13.8	7.0	2.8	-	-
1083	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	12.3	4.1	2.8	-	-
1084	SD04	土師器	直筒(中)	在京系	16.3	-	-	-	-
1087	SD05	白磁	大皿	-	30.2	15.1	9.9	漆器	E
1089	SD07	漆器	中皿	圓筒	11.0	-	-	漆器	E
1090	SD07	漆器	中皿	圓筒	11.0	4.2	2.6	-	-
1091	SD07	漆器	中皿	圓筒	12.3	4.3	2.3	-	-
1092	SD07	漆器	中皿	圓筒	12.5	4.2	2.3	-	-
1093	SD07	漆器	中皿	圓筒	13.1	4.6	2.5~2.7	-	-
1094	SD07	漆器	中皿	圓筒	12.4	4.0	-	-	-

第4章 駅町 279番地外調査(北星敷)の概要

登録番号	地図名	対質	基準	基形	面積(㏊)				生産地	九块構成	備考
					口徑	深さ	底面	その他			
1059	S007	上町駅	重(大)	京都府	12.6	4.0	2.7	-	-	-	当色系。ナフコ付近で、底面不明瞭。
1067	SK26	御宿	中級	平野系	11.4	5.0	3.6	-	肥前	II	-
1059	SK26	御宿	中級	越縫形	10.4	4.8	7.1	-	肥前	II	-
1059	SK26	御宿	中級	平野系	-	-	-	-	上野系	-	-
1059	SK26	御宿	大級	越縫形	-	-	-	-	肥前	I-2	-
1101	SK26	御宿	大級	越縫形	25.8	12.4	-	-	中国	-	濃川流域。無。
1102	SK26	上町駅	重(小)	乙形系	10.0	4.0	2.1	-	-	-	赤色系。底面不明瞭。
1103	SK26	中町駅	重(小)	乙形系	11.0	7.3	1.6	-	-	-	白色系。底面不明瞭。
1104	SK26	上町駅	重(中)	乙形系	11.0	7.2	2.1	-	-	-	白色系。底面不明瞭。
1105	SK26	中町駅	重(小)	六筋形	9.1	3.0	2.0	-	-	-	当色系。アラミドの付近。底面不明瞭。
1106	SK26	上町駅	重(中)	六筋形	12.0	4.0	2.8	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1107	SK26	上町駅	重(中)	六筋形	12.0	4.4	2.6	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1108	SK26	中町駅	重(中)	六筋形	12.4	3.4	2.6	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1109	SK26	牛伏駅	重(中)	六筋形	12.9	5.8	2.6	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1110	SK26	上町駅	重(中)	六筋形	13.2	6.0	2.7	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1111	SK26	牛伏駅	重(大)	六筋形	15.3	9.0	2.3	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1121	SK27	御宿	小級	四筋形	7.6	3.8	3.7	-	肥前	II	西郷川流域(切り)。
1122	SK27	御宿	中級	四筋形	4.2	-	-	-	肥前	II	高村川付近。
1123	SK27	上町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	-
1124	SK27	中町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	赤色系。底面不明瞭。
1125	SK27	上町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1126	SK27	中町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1157	SK27	上町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1128	SK27	中町駅	重(中)	四筋形	-	-	-	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1129	SK28	四筋形	中級	四筋形	10.3	3.6	6.5	-	肥前	I-2	-
1349	SK28	四筋形	重(中)	六筋形	11.3	4.7	2.6	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1141	SK28	四筋形	重(中)	六筋形	12.8	6.4	2.8	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1149	SK29	小筋形	重(中)	六筋形	7.8	-	-	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1160	SK29	小筋形	重(中)	六筋形	-	-	-	-	-	-	-
1161	SK29	小筋形	重(中)	六筋形	12.0	-	-	-	肥前	I-2	-
1163	SK31	通水井	重(中)	複反形	16.7	10.0	3.6	-	肥前	II	人来川附近。
1165	SK31	通水井	重(中)	複反形	-	-	-	-	肥前	II	白柳川小町付近。
1167	SK31	通水井	小級	安井形(2口)	9.4	-	-	-	肥前	II	白柳川小町付近。
1169	SK32	上町駅	重(中)	在来系	6.2	-	-	-	肥前	I-2	赤色系。ナフコ付近。
1170	SK37	牛伏駅	重(中)	在来系	8.2	2.0	3.5	-	-	-	白色系。ナフコ付近。
1172	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	在来系	7.4	3.3	3.9	-	肥前	I-2	-
1173	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	在来系	9.5	4.6	8.0	-	肥前	II	-
1174	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	在来系	12.4	8.4	7.2	-	肥前	II	-
1175	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	在来系	16.2	-	-	-	肥前	II	イシチノ付近。
1176	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	在来系	-	-	-	-	肥前	II	-
1177	第4通水井 通水井	通水井	中級	在来系	-	-	-	-	肥前	II	通水井付近の河床性あり。
1178	第4通水井 通水井	通水井	中級	草原形(5)	11.0	-	-	-	肥前	II	上町駅高取川付近。
1179	第4通水井 通水井	通水井	小級	丸形	7.8	-	-	-	志野	II	大通路。
1180	第4通水井 通水井	通水井	中級	草原形(5)	12.4	-	-	-	肥前	II	-
1181	第4通水井 通水井	通水井	中級	蝶形	3.3	-	-	-	肥前	-	-
1182	第4通水井 通水井	通水井	小級	丸形	12.4	4.6	3.3	-	肥前	I-2	肥土付近。
1183	第4通水井 通水井	通水井	小級	丸形	11.6	-	-	-	肥前	I-2	肥土付近。
1184	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	11.4	4.3	3.2	-	肥前	I-2	肥土付近。
1185	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	13.2	4.5	3.7	-	肥前	I-2	肥土付近。
1186	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	13.3	4.1	3.5	-	肥前	I-2	肥土付近。
1187	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	13.7	4.5	4.9	-	肥前	I-2	肥土付近。
1188	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	4.4	-	-	-	肥前	-	-
1189	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	2.5	9.3	-	-	肥前	I-2	-
1190	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	29.6	-	-	-	肥前	I-2	-
1191	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	31.6	8.6	7.8	-	肥前	I-2	通水井。
1192	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	15.0	-	-	-	肥前	I-2	通水井。
1193	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	26.9	11.8	9.3	-	肥前	I-2	通水井。
1194	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	9.27万t(8.68万t)	3.1	2.1	ツムル付近。	肥前	-	-
1195	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	10.1	2.0	1.0	-	肥前	I-2	通水井。
1196	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	2.4	-	-	-	肥前	-	-
1197	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	11.0	-	-	-	肥前	-	-
1198	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	11.0	-	-	-	肥前	-	-
1199	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	32.7	-	-	-	肥前	-	-
1200	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	34.8	-	-	-	肥前	-	-
1201	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	22.4	21.8	7.1	-	肥前	-	-
1202	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	複圓形	4.3	-	-	-	肥前	-	-
1203	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	7.2	-	-	-	中国	-	晴。
1204	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	13.0	-	-	-	中国	-	小野川頭付近。
1205	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	13.6	-	-	-	中国	-	晴。
1206	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	11.5	1.3	4.3	-	中国	-	晴。
1207	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	11.0	-	-	-	中国	-	晴。
1208	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	10.8	-	-	-	中国	-	晴。
1209	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	4.3	-	-	-	中国	-	晴。
1210	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	6.6	-	-	-	中国	-	晴。
1211	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	6.6	-	-	-	中国	-	晴。
1212	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	11.8	6.9	2.7	-	中国	-	晴。
1213	第4通水井 通水井	通水井	重(中)	丸形	19.0	11.0	3.0	-	中国	-	晴。

表 9 殿町 279 番地外(北屋敷) 金属製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	法規		説明
				(cm)	(g)	
259	SK01	釘	銅	長:1.13/幅:0.25/厚:0.2	2.68	
260	SK01	釘	銅	長:2.7/幅:0.6/厚:0.2	4.38	
261	SK01	釘	銅	長:1.9/幅:0.7/厚:0.15	1.73	
262	SK01	釘	銅	長:1.9/幅:0.2/厚:0.15	2.70	
263	SK01	釘	銅	長:3.2/幅:0.15/厚:0.15	3.35	
264	SK01	釘	銅	長:1.5/幅:0.15/厚:0.3	9.06	
270	SD02	蓋	真鍮	丸径:0.8/外径:19.0/厚:0.7/幅:0.35	88.45	中央につまみ(耳)付、空気抜きのφ0.3cmの穿孔。
271	SD02	不明	銅	長:3.5/幅:0.10/厚:1.0	271.92	
296	SK02	器具	銅	φ:0.4/幅:2.0/厚:0.05	35.96	中央に鋸目。
297	SK02	古鏡	銅鏡	φ:1.28mm	3.35	丸六連下 1期一古鏡(1636~59)
		真鍮	丸径:0.9/大皿:1.5/小口:0.95	12.68		
		銅鏡(裏面)	銅	長:0.9/幅:0.95/厚:0.3	8.24	
		鏡筒(筒)	銅	長:7(復元)定長:9.7	1.28	
414	SK03	古鏡	銅鏡	直径:1.31/1.37mm	14.94	裏:銅鏡 2期(文政)文の字が見える2枚重なる。
415	SK03	古鏡	銅鏡	直径:1.17mm	3.51	裏:銅鏡 1期=古鏡(1636~59)
416	SK03	古鏡	銅鏡	直径:1.05mm	3.11	裏:古鏡
417	SK03	古鏡	銅鏡	直径:0.8mm/1.4mm	13.85	
418	SK03	鏡筒(鏡筒)	銅	長:1.1/火口:0.85/小口:0.1	7.1	
419	SK03	不明	銅	φ:3.5/厚:0.9	16.07	
420	SK03	釘	銅	長:0.5/幅:0.9/厚:0.3	4.70	
421	SK03	釘	銅	長:6.7/幅:0.7/厚:0.2	6.79	
422	SK03	釘	銅	長:5.15/幅:0.5/厚:0.2	8.62	
423	SK03	釘	銅	長:4.33/幅:0.5/厚:0.3	11.96	
424	SK03	釘	銅	長:5.0/幅:0.5/厚:0.4	10.66	
425	SK03	釘	銅	長:4.4/幅:0.5/厚:0.3	4.83	
426	SK03	釘	銅	長:4.3/幅:0.5/厚:0.5	3.23	
427	SK03	釘	銅	長:2.8/幅:0.6/厚:0.5	2.91	
535	SK07	包丁刀	銅	長:15.4/刃:3.8/柄:0.4	110.43	
s36	SK07	釘	銅	長:4.4/幅:0.3/厚:0.4	9.59	
537	SK07	占吉	銅鏡	直径:1.31mm	2.97	丸六連下 1期一古鏡(1636~1659)
654	第1層構造 壁構外	漆桶	漆	φ:6.0cm積み高さ:7.7	830.00	
656	第1層構造 壁構外	漆桶	漆	φ:6.1/高さ:1.28m	2.51	丸六連下 1期一古鏡(1636~1659)
738	第2層構造 壁構外	漆桶	漆	φ:6.0/高さ:1.0/横幅:0.6	5.69	
739	第2層構造 壁構外	不明	漆	φ:5.5/高さ:0.6/幅:0.5	7.70	耳皿に似似。
824	SK22	釘	銅	長:5.8/幅:0.6/厚:0.5	4.34	
825	SK22	釘	銅	長:5.6/幅:0.8/厚:0.7	5.96	
826	SK22	釘	銅	長:4.4/幅:0.6/厚:0.4	1.91	
827	SK22	釘	銅	長:4.6/幅:0.6/厚:0.5	4.94	
828	SK22	釘	銅	長:5.1/幅:0.9/厚:0.1	0.54	
829	SK22	釘	銅	長:4.3/幅:0.6/厚:0.3	3.13	
830	SK22	釘	銅	長:5.8/厚:0.3	2.21	
831	SK22	釘	銅	長:5.6/幅:0.6/厚:0.3	1.53	
832	SK22	釘	銅	長:5.9/幅:0.6/厚:0.3	2.03	
833	SK22	不明	漆	φ:3.8/高さ:1.7/幅:0.5	4.76	
834	SK22	漆器	漆	φ:6.0/高さ:7.5/幅:0.5	28.81	
835	SK22	漆器	漆	φ:4.4/火皿:0.3/小口:0.5	1.35	漆少しあり。
836	SK22	漆器	漆	φ:4.8/火皿:0.3/小口:0.5	2.24	
837	SK22	漆器	漆	φ:5.3/火皿:0.3/口付:0.2	3.98	
838	SK22	漆器	漆	φ:5.3/小口:0.5/口付:0.15	2.46	
839	SK22	漆器	漆	φ:4.2/火皿:0.3/口付:0.15	18.42	
840	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
841	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
842	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
843	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
844	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
845	SK22	漆器	漆	φ:5.8/火皿:0.3/口付:0.15	2.34	
846	SK23	大鉢	銅	直径:16.0mm	1.78	開口:通引 手:21.6
976	SK23	湯沸器	銅	φ:16.0/高さ:20.0/厚:1.0	71.72	内側に黒漆を塗る。
977	SK23	釘	銅	長:1.6/幅:0.5/厚:0.5	3.22	
1017	第2階構造 壁構外	大鉢	銅	直径:16.0mm	1.91	津津原家・文政10年(1809年)
1018	第2階構造 壁構外	占吉	銅	直径:15.8mm	2.89	元元治元 文政10年(1807年)
1021	第2階構造 壁構外	漆桶(漆器)	漆	直径:16.0/高さ:1.5/小口:0.5	7.15	木本に記載。漆の部分は眞鍮に刷毛を入れる。
1022	第2階構造 壁構外	漆桶	漆	直径:16.0/高さ:0.8/幅:2.15	36.35	
1023	第2階構造 壁構外	漆桶	漆	直径:16.0/高さ:0.8/幅:2.15	26.17	
1024	第2階構造 壁構外	釘	銅	長:4.3/幅:0.6/厚:0.3	4.57	
1055	SK02	古鏡	銅鏡	直径:9.0mm	2.34	
1056	SK02	古鏡	銅鏡	直径:10.0mm	1.93	1.下通引
1057	SK02	古鏡	銅鏡	直径:10.0mm	1.40	
1088	SD05	不明	銅	長:12.5/幅:2.1/厚:0.1	28.36	
1112	SK26	鏡	銅	直径:16.0/厚:0.4	13.31	
1113	SK26	鏡	銅	直径:14.0/厚:0.4	23.72	
1119	SK27	小鉢	銅	直径:15.0/高さ:0.8/幅:0.6	4.76	金メダル。
1163	SK32	短菅小	真鍮	直径:10.0/高さ:0.6	4.56	
1184	SK33	鰐の物	銅	直径:6.5/厚:1.1/高さ:0.01	1.26	
1166	SK34	占吉	銅	直径:10.0mm	1.26	
1171	SK38	釘	銅	長:10.5/幅:0.8/厚:0.3	8.05	
1211	第1層構造 蔵構外	釘	銅	長:10.0/幅:0.6/厚:0.3	5.18	
1215	第1層構造 蔵構外	釘	銅	長:9.5/幅:0.7/厚:0.5	12.95	鉛・四合合あり。無ネック輪す。
1216	第1層構造 蔵構外	釘	銅	長:9.5/幅:0.7/厚:0.7	5.14	秋田和の合金か。立メック輪す。
1217	第1層構造 蔵構外	釘	銅	長:9.5/幅:0.7/厚:0.6	5.14	秋田和の合金か。立メック輪す。
1218	第1層構造 蔵構外	座卓(脚付)	銅	直径:28.0/高さ:61.0/幅:30.0/厚:0.3	1.49	
1219	第1層構造 蔵構外	小口の箱	銅	直径:27.0/高さ:1.3/幅:0.4/材厚:0.05	15.00	
1220	第1層構造 蔵構外	木桶	銅	直径:31.0/高さ:0.7/幅:0.1/高さ:1.8	10.96	
1221	第1層構造 蔵構外	木桶	銅	直径:31.0/高さ:0.7/幅:0.1/高さ:1.8	6.59	
1226	第1層構造 蔵構外	木桶	銅	直径:27.0mm	2.24	単宇二重・文政11年(1828年)
1227	第1層構造 蔵構外	木桶	銅	直径:30.0mm	2.05	元単宇二重・文政11年(1828年)
1228	第1層構造 蔵構外	古鏡	銅鏡	直径:30.0mm	2.67	大底通引・文政11年(1828年)
1229	第1層構造 蔵構外	古鏡	銅鏡	直径:31.1mm	2.67	木素屋堂 銅鏡1808年

第4章 総町279番地外調査(北屋敷)の概要

表 10 殿町 279 番地外（北屋敷）石製品遺物觀察表

遺物番号	遺構名	種類	材質	寸法(cm)		重量(g)	備考
				高さ	幅		
410	SK03	甌	磁石	底13.4/腹7.4/厚2.3		369.92	外側に黒色の塗り。
411	SK03	甌	磁石	底13.7/腹7.0/厚2.8		22.79	上口狭形。
412	SK03	甌	磁石	底13.6/腹7.4/厚1.2		29.97	上口狭形。
413	SK03	甌	磁石	底7.2/腹11.6/厚1.1	底8.5/腹15.7	1728.00	深鉢式。
512	SK01	甌	磁石	底11.6/腹7.0/厚2.5			512~516は同一個体。
513	SK04	甌	磁石	底13.9/腹7.5/厚1.0			517~518は同一個体。
514	SK04	甌	磁石	底13.9/腹7.0/厚1.0			519~521は同一個体。
515	SK04	甌	磁石	底13.6/腹7.2/厚0.55			521~526は同一個体。底部「和」字が見えた。
516	SK04	甌	磁石	底13.4/腹7.0/厚0.65			521~526は同一個体。
540	SK10	甌	磁石	底2.5/腹0.9		8.48	白釉。
650	第1遺構付造拂手	拂手	磁石	底5.5/幅2.6/厚0.6		16.04	仕上げ不良。
651	第1遺構付造拂手	拂手	磁石	底2.3/幅0.7		4.14	第1拂手。
652	第1遺構付造拂手	拂手	磁石	底3.0/幅2.6/厚1.1		13.89	無蓋。
653	第1遺構付造拂手	拂手	磁石	底3.0/幅2.7/厚1.3		15.91	直口。
654	第1遺構付造拂手	拂手	磁石	底1.8/幅1.2/厚1.2		2.50	口台欠損。
655	SK18	甌	磁石	底3.5/幅3.4/厚0.4		7.50	上口狭形。
726	第2遺構付造拂手	拂手	磁石	底2.5/幅0.7		4.15	直口。
727	第2遺構付造拂手	拂手	磁石	底6.5/幅1.9/厚2.6		77.86	
732	SK09	甌	磁石	底17.0/腹7.8/厚2.8		400.00	「おつら」「ごく前」、「丁」と「×」の墨書きあり。
753	SK02	甌	磁石	底17.0/腹5.4/厚2.8		810.00	「ごく前」の墨書きあり。
764	SK25	甌	磁石	底2.2/厚		1.94	白釉。
1619	第3遺構付造拂手	拂手	磁石	底2.0/幅0.45		2.78	直口。
1820	第3遺構付造拂手	拂手	磁石	底4.2/幅3.3/厚0.85		12.43	
1872	SD04	打灯石	青白磁	底1.9/幅0.6/厚2.4		31.48	
1165	SK31	甌	磁石	底2.2~2.5/幅2.0/厚0.8		7.26	無蓋。
1222	第4遺構付造拂手	拂手	磁石	底1.0/幅4.4/厚4.1		217.63	半球形。
1223	第4遺構付造拂手	拂手	磁石	底1.0/幅3.8/厚1.3		45.11	仕上げ不良。

表 11 殿町 279 番地外（北屋敷）木簡遺物観察表

各社の・方針は本廃の16回、〇は無限を増加する、／は改行を増す

墨字番号	看板名	読み	書体(例)			備考
			横3	横5	横7	
428	SK03	・伝信 天下長次	10.1	5.4	0.7	板目 上端・下端は平らにカット。両面とも同じ内容の墨書き。
429	SK03	・井上 郷 大工又兵衛 父勤事	8.8	4.5	1.1	板目 上端・下端は平らにカット。
430	SK03	・大工 弘市	8.6	6.3	0.8	板目 上端・下端は平らにカット。片面のみ墨書き。
431	SK03	・L冠才次彌	9.7	5.4	1.1	板目 上端・下端は平らにカット。両面のみ墨書き。
432	SK03	・天平真〇	9.8	4.7	0.5	板目 上端・下端は平らにカット。片面のみ墨書き。
433	SK03		9.8	8.2	0.9	板目 上端・下端は平らにカット。片面に墨書きがある解説不能。
434	SK03	・土右	11.5	19.8	1.2	板目 下端火彌、両面のみ墨書き。
435	SK03	・大尺タ ハ五寸 五/ルニ	6.4	12.9	0.9	板目 片面のみ墨書き。
436	SK03	・本主 田代吉〇印・斜型下板 ノ/〇〇〇〇	5.4	17.0	0.8	板目 角丸・下端欠損。片面解説不能。
437	SK03	・生巳村 貞蔵	19.4	6.5	1.0	板目 上端欠損。片面解説不能。
438	SK03	・五助人	15.2	7.6	1.2	板目 上端火彌、両面のみ墨書き。
439	SK03		11.2	72.4	1.2	板目 片面に墨書きがある解説不能。
440	SK03	・木次北東本郡〇〇〇〇/木治町	75.6	5.7	0.7	板目 両面墨書き。
700	SK15	・二十八番 二十番 二十九番/三三番 夢想八番	15.5	5.9	0.6	板目 上端欠損。片面墨書き。片面解説不能。
701	SK15	・透(透)(ノ)	13.1	2.5	0.6	板目 上端火彌。片面墨書き。
702	SK15	・上				
703	SK15	・御正 桜次郎	12.6	2.6	0.5	板目 上端・右端火彌。片面墨書き。
847	SK23	・佐々九郎兵衛	14.2	2.9	0.4	板目 上端欠損。片面墨書き。片面解説不能。
848	SK23	・佐々九郎兵衛	12.3	2.7	0.6	板目 上端欠損。片面墨書き。
849	SK23	・佐	4.7	2.6	0.2	板目 上端・下端火彌。片面墨書き。片面解説不能。
850	SK23	・佐々九郎兵衛 内村長二郎	22.2	2.7	0.5	板目 上端に切込み、下端は尖らせる。片面のみ墨書き。
851	SK23	・乙羽	8.9	2.2	0.3	板目 上端に切込み、左端・下端欠損。片面解説不能。
852	SK23	・孫助	5.8	1.8	0.2	板目 下端二次加工か。片面墨書き。片面解説不能。
853	SK23	・九五郎	6.4	1.8	0.3	板目 両端・下端欠損。片面墨書き。片面解説不能。
854	SK23	・秀吉郎	6.2	1.4	0.4	板目 上端・下端火彌。片面墨書き。片面解説不能。
855	SK23	・五郎治門	11.3	1.7	0.4	板目 上部尖らせる。片面墨書き。片面解説不能。
856	SK23	・乃丈/舟真へ	26.5	3.6	0.5	板目 上端に切込み、下端をや尖らせる。片面墨書き。
		・名づかの和				

857	SK23	・古山町内門松之内 本丸ノ森弓櫓(右側)矢張曲輪へ	19.3	2.9	0.6	縦目	上部に切り込み。下端やや尖らせる。片面墨書き。
858	SK23	・大久野石碑ノ内 漢山より ○○西松信西(物語) 田邊(橋)川八	19.4	2.8	0.4	縦目	上部に切り込み。下端は平らにカットする。片面墨書き。
859	SK23	・民治後ノ内	8.9	2.8	0.3	縦目	上端・下端欠損。片面墨書き。
860	SK23	・六月人	11.2	2.1	0.5	縦目	片面墨書き。
861	SK23	・七月十五日	16.5	2.7	0.5	縦目	上部に切り込み。下端欠損。片面墨書き。片面解説不能。
862	SK23	・四月一一日	19.5	2.3	0.6	縦目	片面墨書き。
863	SK23	・三月八升中身	18.9	3.2	0.5	縦目	上端は尖らせる。片面のみ墨書き。
864	SK23	・様之内 本丸ノ森門松 有田左兵衛へ 拾伏ノ内 漢山万より	13.6	2.4	0.4	縦目	上端大根。片面墨書き。
865	SK23	・西治後(?)	11.9	3.1	0.3	縦目	上端・下端欠損。片面解説不能。
866	SK23	・水	13.1	3.0	0.4	縦目	上部尖めにカット。片面解説不能。
867	SK23		2.8	2.4	0.4	縦目	上端・下端欠損。解説不能。
868	SK23		6.4	1.4	0.1	縦目	片面のみ墨書き。
869	SK23	・やな葉門	7.6	2.7	0.7	板目	下端欠損。片面のみ墨書き。
870	SK23	・紙糊(か)石塀門	5.5	1.6	0.3	板目	上端・下端欠損。片面解説不能。
871	SK23		9.9	1.1	0.4	板目	上端・下端欠損。片面解説不能。
872	SK23	・五月十四日	19.3	2.4	0.5	縦目	右端・下端欠損。片面墨書き。
873	SK23	・大方瓦	14.4	2.0	0.1	縦目	左端・下端欠損。片面のみ墨書き。
874	SK23	・さんせし殿 八郎七	6.1	2.2	0.3	板目	下端・下端欠損。片面墨書き。
875	SK23	・你一	2.1	9.5	0.2	縦目	全端大根か。解説不能。
876	SK23	・ん/連/さ/無/な/そ	2.2	15.5	0.2	縦目	左端欠損。右端尖めにカット。
877	SK23	・熊尾	11.3	1.8	0.2	板目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解説不能。
878	SK23	・大豆門	11.0	1.9	0.3	縦目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解説不能。
879	SK23	・こ生	13.1	1.1	0.8	縦目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面解説不能。
880	SK23		19.5	2.4	0.5	縦目	下端欠損。片面解説不能。
881	SK23	・大豆二块之内	12.3	1.7	0.4	縦目	上部に切り込み。片面のみ墨書き。
882	SK23	・○江	11.5	3.0	0.2	縦目	上部に切り込み。右端・下端欠損。片面墨書き。
883	SK23	・人	9.9	2.0	0.4	縦目	上端・下端欠損。片端のみ墨書き。解説不能。
884	SK23		4.3	0.8	0.2	縦目	上端・下端大根。片面のみ墨書き。解説不能。
885	SK23		4.5	1.4	0.2	縦目	全端欠損か。解説不能。
886	SK23	・有	2.4	12.6	0.3	縦目	右端・左端欠損。片面解説不能。
887	SK23	・玄	2.9	5.4	0.3	縦目	右端・左端欠損。片面のみ墨書き。
888	SK23	・次	1.0	3.8	0.2	縦目	右端のみ墨書き。
933	SK23		8.7	1.6	0.1	縦目	片面とも墨あなし。
979	SK2b	・監査	19.6	2.6	0.2	板目	右端・左端欠損。片面墨書き解説不能。
1014		・九郎兵衛	27.1	4.1	0.4	縦目	中央部に直射穴。上部に切り込み。下端は尖らせる。
1015		・元田・山内門松之内 榎本丸ノ森内蔵(有)地主第 ・大久野石碑ノ内 漢山より	19.3	2.8	0.6	縦目	上部に切り込み。下端やや尖らせる。片面墨書き。
1016		・置	7.5	1.3	0.3	板目	上部に切り込み。下端欠損。片面のみ墨書き。
1096	SD07	・四月十七日	10.1	2.9	0.7	縦目	上端・下端欠損。片端のみ墨書き。
1150	SK27	・戊辰十月	6.2	2.1	0.2	縦目	上端・下端欠損。片面解説不能。
1142	SK28	・御〇み	17.6	5.0	0.2	縦目	片面のみ墨書き。
1224		・御〇口	23.4	3.0	0.7	縦目	下端欠損。片面解説不能。
1225		・九石〇〇	7.7	2.3	0.2	板目	上端・下端欠損。片面とも底に内巻き。

表 12 殿町 279番地外(北屋敷)木製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	名称	法長(cm)		木取り	備考
				部位	長さ(幅)		
272	SK03	桶	桶板	116.7	14.4	厚2.0	下端に側面に方形目打14つ、下方・中央にタガ孔、上端側面に方形目打14つ、口端にタガ孔。
273	SK03	桶	桶板	115.5	14.1	厚2.0	下端側面に方形目打14つ、下方・中央にタガ孔。
274	SK03	桶	桶板	105.7	12.2	厚2.0	下端側面に方形目打14つ。
275	SK03	桶	桶板	110.5	13.4	厚2.0	下端側面に方形目打14つ。
276	SK03	桶	桶板	109.4	13.5	厚2.0	下端側面に方形目打14つ。
277	SK03	桶	桶板	113.0	15.0	厚2.0	下端側面に方形目打14つ、下方・中央にタガ孔、下端側面に方孔目打1孔、口端斜削穴1孔、下方・中央にタガ孔。
278	SK03	桶	桶板	117.3	13.6	厚2.0	下端側面に方孔目打1孔、口端斜削穴1孔、下方・中央にタガ孔。
298	SK02	刷毛		14.4	2.4-7.2	厚0.8	木取
299	SK02	骨削小製品	板状鉗脚	16.1	3.8	厚0.5	板状 鉗脚
300	SK02	漆器	漆板	φ 8.5	2.7	厚0.5	漆板
301	SK02	漆器	漆板	φ 10.0	2.7	厚0.5	漆板
302	SK02	漆器	漆板	22.2	2.7	厚0.5	漆板
303	SK02	漆器	漆板	22.2	2.7	厚0.5	漆板
304	SK02	不明		φ 7.8	13.9		竹の茎を抜いて煮通したたたき品。
306	SK02	漆器	漆板	8.8	4.8	厚0.5	漆板
411	SK03	漆器小箱	蓋板か底板	17.8	8.0	厚0.8	漆器 直角四面に方孔目打1孔、内・外・高、側面に縦溝1列、内・外・高、側面に縦溝1列、漆面に漆刷り。
412	SK03	漆器	漆板	12.5	—		内・外・高、側面に縦溝1列、内・外・高、側面に縦溝1列、漆面に漆刷り。
443	SK03	漆器	漆板	11.0	5.8		内・外・高、側面に縦溝1列、漆面に漆刷り。
444	SK03	下板	舟形車の下板	24.2	8.4	厚1.2	漆面に漆刷り。
445	SK03	下板	舟形車の下板	23.9	8.6	厚1.2	漆面に漆刷り。
446	SK03	下板	舟形車の下板	7.3-9.9	8.9-11.7	厚1.2	漆面に漆刷り。
447	SK03	下板	舟形車の下板	9.8-10.0	7.8-10.0	厚1.2	漆面に漆刷り。
448	SK03	下板	舟形車の下板	11.8	5.8	厚1.2	漆面に漆刷り。
449	SK03	漆器	漆板	φ 11.5	—	厚1.0	漆面に漆刷り。
550	SK03	漆器	漆板	φ 16.7	4.8	厚1.1	漆面に漆刷り。
451	SK03	漆器小箱	漆板	17.5	6.0	厚1.6	漆面に漆刷り、側面に口打2孔。
452	SK03	漆器小箱	漆板	4.4	—	厚1.2	漆面に漆刷り、側面に口打2孔。
453	SK03	漆器	漆板	11.7	3.2	厚1.2	漆面に漆刷り。
454	SK03	漆器	漆板	14.3	1.6-12.2	厚0.8	漆面に漆刷り。
455	SK03	不明		22.5	—	厚0.5	漆面に漆刷り。
456	SK03	漆器	漆板	17.1	—	厚0.9	漆面に漆刷り。
457	SK03	漆器	漆板	6.0-22.7	0.4-0.6	厚0.1-0.3	上面にマークを描いてあるものと2件の差札。下端から11.8cmの位置より断面が彫りされる。
458	SK03	不明		19.7	2.8	厚1.4	漆面に漆刷り。
459	SK03	不明		16.8	3.5	厚1.2	漆面に漆刷り。
460	SK03	不明		23.4	2.8	厚1.2	漆面に漆刷り。
461	SK03	不明		24.5	2.3	厚1.6	漆面に漆刷り。
462	SK03	不明		14.3	6.3	厚1.4	漆面に漆刷り。
463	SK03	不明		6.0	4.5	厚1.7	漆面に漆刷り。
464	SK03	漆器	漆板	8.7	—	厚0.5	漆面に漆刷り。
465	SK03	漆器	漆板	3.7	—	厚0.3	漆面に漆刷り。
466	SK03	漆器	漆板	8.1	3.0	厚2.0	漆面に漆刷り。
467	SK03	漆器	漆板	12.9	4.6	厚0.9	漆面に漆刷り。
468	SK03	漆器	漆板	47.2	17.2	厚0.9	漆面に漆刷り。
497	SK04	外箱	巻	30.0	29.6	2.9	漆面に漆刷り。
498	SK04	外箱	巻	30.0	29.6	17.1	漆面に漆刷り。
499	SK04	内箱	巻	21.0	29.0	2.7	漆面に漆刷り。
500	SK04	内箱	巻	27.0	27.0	14.5	漆面に漆刷り。
501	SK04	内箱	巻	27.0	27.0	14.5	漆面に漆刷り。
502	SK04	漆器	漆板	φ 22.2	—	厚0.5	漆面に漆刷り。
503	SK04	漆器	漆板	24.6	9.3	厚0.5	漆面に漆刷り。
504	SK04	漆器	漆板	21.3-24.4-1.6	—	厚0.4-0.5	漆面に漆刷り。
505	SK04	漆器	漆板	18.2	—	厚0.6	漆面に漆刷り。
506	SK04	漆器	漆板	2.4	2.1	厚0.2	漆面に漆刷り。
507	SK04	漆器	漆板	2.7	2.5	厚0.2	漆面に漆刷り。
508	SK04	漆器	漆板	—	—	厚0.3	漆面に漆刷り。
509	SK04	漆器	漆板	6.2	—	厚0.2	漆面に漆刷り。
510	SK04	漆器	漆板	4.9	—	厚0.2	漆面に漆刷り。
511	SK04	漆器	漆板	3.8	—	厚0.2	漆面に漆刷り。
530	SK06	下板	下板	20.9	8.2	厚1.5	漆面に漆刷り。
531	SK06	漆器	漆板	11.6	—	厚2.0	漆面に漆刷り。
539	SK16	漆器	漆板	26.6	6.0	厚0.5	漆面に漆刷り。
570	SK16	漆器	漆板	32.5	8.2	厚1.9	漆面に漆刷り。
571	SK16	漆器	漆板	—	—	厚2.0	漆面に漆刷り。
655	SK16	漆器	漆板	—	—	厚2.0	漆面に漆刷り。
659	SK16	漆器	漆板	9.0	—		漆面に漆刷り。
703	SK18	下板	丸型木口付下板	20.7	7.8	厚2.0	漆面に漆刷り。
704	SK18	下板	丸型木口付下板	21.5	8.0	厚2.0	漆面に漆刷り。
705	SK18	下板	丸型木口付下板	21.2	4.8	厚2.0	漆面に漆刷り。
706	SK18	下板	平底	26.6	10.0	厚2.0	漆面に漆刷り。
707	SK18	曲面	漆板	φ 13.7	—	厚0.7	漆面に漆刷り。
708	SK18	曲面	漆板	φ 8.9	—	厚0.5	漆面に漆刷り。
709	SK18	漆器	漆板	13.5	2.8	厚0.5	漆面に漆刷り。
710	SK18	漆器	漆板	23.7	—	厚0.6	漆面に漆刷り。
711	SK18	漆器	漆板	26.4	—	厚0.6	漆面に漆刷り。
712	SK18	漆器	漆板	26.2	—	厚0.6	漆面に漆刷り。
745	漆器	漆器	漆板	14.0	—		内・外・高、表面で墨書き2つ、内・外・高、表面で墨書き2つ。
741	漆器	漆器	漆板	—	—		内・外・高、表面で墨書き2つ、内・外・高、表面で墨書き2つ。

遺物番号	遺物名	種類	部位	計量(cm)	その他	本歌	備考	
742	第3腰椎 遺構外	椎板	不明	13.2	5.1	79.5	椎板 内:赤・黒、外面に黄斑に失光感3本線。	
749	SK61	骨頭	不明	—	—	椎板	—	
754	SK62	骨頭	板状	φ19.7	—	椎板	表:前部赤黒、一部にへが御板が残る、片面にホコリ。	
766	SK22	椎間柱副	板状	φ12.2	—	椎板	—	
766	SK22	骨頭	板状	13.0	—	椎板	面に凹り点。	
767	SK22	骨頭	板状	24.6	—	椎板	—	
768	SK22	骨頭	不明	31.2	3.5~8.5	椎板	面に穿孔と、	
780	SB62	椎間柱	板状	26.6	2.8~7.0	椎板	表:前部赤黒、底と大約の幅員に穿孔し、先端部は凹取り。	
783	SB62	椎間柱	板状	25.7	1.7~6.6	椎板	—	
784	SK63	骨頭	不明	13.0	4.2	椎板	面に12.0cmの穿孔、側面の下方に凹り。	
788	SK63	骨頭	不明	17.7	10.2	椎板	骨頭の形状、2.4×3.5以上×1.9cmのホソク。	
842	SK23	骨板	板状	3.5	2.5	椎板	板状 厚0.4 底板	
843	SK23	骨板	板状	3.0	1.8	椎板	裏面が白、骨板//金。	
844	SK23	骨板	板状	3.6	2.0	椎板	裏面が白、骨板//金。	
845	SK23	骨板	板状	3.0	2.6	椎板	裏面が白、骨板//金。	
846	SK23	骨板	板状	3.1	2.8	椎板	裏面が白、骨板//金。	
849	SK23	骨板	板状	13.0	—	椎板	内:白、外:黒。裏面に赤2萬1色で三巴、比較的の上質仕上げ。	
890	SK23	漆桶	—	11.3	—	1.2	内:赤・黒、裏面に赤2萬1色で三巴、比較的の上質仕上げ。	
891	SK23	漆桶	—	—	—	—	内:赤・黒、漆桶部分、表面に金。	
892	SK23	漆桶	—	—	—	—	内:赤・黒、外面に漆桶の模様。	
893	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	16.3	6.1	3.5	1.0	
894	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	20.6	7.9	1.0	直腹 直腹	
895	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	21.0	8.0	2.0	直腹 直腹	
896	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	20.9	7.8	2.7	直腹 直腹	
897	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	22.2	8.7	3.6	直腹 直腹	
898	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	6.7	4.5	直腹 直腹	
899	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	8.6	3.9	直腹 直腹	
900	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	11.3	—	直腹 直腹	
901	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	7.4	3.7	直腹 直腹	
902	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	30.7	—	直腹 直腹	
903	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	26.1	—	直腹 直腹	
904	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	25.5	—	直腹 直腹	
905	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	20.5	—	直腹 直腹	
906	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	13.1	0.6	直腹 直腹	
908	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	12.9	0.9	直腹 直腹	
907	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	21.5	0.9~2.8	直腹 直腹	
908	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	25.0	1.9~3.6	直腹 直腹	
909	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	25.3	3.6	直腹 直腹	
910	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	2.1	1.6~3.1	直腹 直腹	
911	SK23	下臍	丸帯直腹下臍	—	6.6	2.1~2.5	直腹 直腹	
912	SK23	新敷小物	側板左	26.0	4.7	—	直腹 直腹	
913	SK23	新敷小物	側板右	22.8	2.5	—	直腹 直腹	
914	SK23	新敷小物	側板左	18.7	1.7	—	直腹 直腹	
915	SK23	新敷小物	側板右	16.4	2.5	—	直腹 直腹	
916	SK23	新敷小物	側板左	9.3	1.0	—	直腹 直腹	
917	SK23	新敷小物	側板右	28.7	2.6	—	直腹 直腹	
918	SK23	新敷小物	側板左	13.3	2.1	—	直腹 直腹	
919	SK23	新敷小物	側板右	15.3	2.2	—	直腹 直腹	
920	SK23	新敷小物	側板左	13.1	—	48.0	直腹 直腹	
921	SK23	新敷小物	側板右	42.3	1.9	—	直腹 直腹	
922	SK23	新敷小物	側板左	—	φ8.8	—	直腹 直腹	
923	SK23	新敷小物	側板右	—	10.1	10.4	直腹 直腹	
924	SK23	新敷小物	側板左	—	22.9	—	直腹 直腹	
925	SK23	新敷小物	側板右	—	36.6	13.1	直腹 直腹	
926	SK23	新敷小物	底板	19.5	9.3	—	直腹 直腹	
927	SK23	新敷	底板	13.0	3.5	—	直腹 直腹	
928	SK23	新敷	底板	19.5	12.5	—	直腹 直腹	
929	SK23	新敷	底板	6.5	0.9	—	直腹 直腹	
930	SK23	新敷	底板	6.5	0.7	—	直腹 直腹	
931	SK23	新敷	底板	26.4	7.3	—	直腹 直腹	
932	SK23	舟漏	底板	12.6	4.5	—	直腹 直腹	
933	SK23	舟漏	底板	—	—	直腹 直腹	長方形に丸穴1。	
934	SK23	舟漏	底板	9.9	1.8	—	直腹 直腹	舟漏:下部φ=0.3cmの穿孔中央に赤点丸穴、下部は楊枝穴(?)、左側部、底面は平な(?)形、側面に斜面感1。
935	SK23	舟漏	底板	7.0	2.0	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏の穿孔。
936	SK23	舟漏	底板	—	φ2.9	1.7	直腹 直腹	舟漏:舟漏の穿孔。
937	SK23	舟漏	底板	—	φ2.0	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏の穿孔。
938	SK23	舟漏	底板	20.0	12.0	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏の穿孔。
939	SK23	舟漏	底板	8.2	2.9	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏の穿孔。
940	SK23	舟漏	底板	—	φ11.0	—	直腹 直腹	舟漏:上部に斜面状に穿孔、下部に穿孔1。
941	SK23	舟漏	底板	13.8	3.4	—	直腹 直腹	舟漏:中央φ=0.3cmの穿孔。戸部端部に穿孔。
942	SK23	舟漏	底板	6.9	2.4	—	直腹 直腹	舟漏:φ=0.7cmの直穴(?)、戸部(?)、舟漏(?)、側面にト打穴。
943	SK23	舟漏	底板	11.2	6.1	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏穴1、舟漏斜面に舟漏斜板の舟漏2。
944	SK23	舟漏	底板	12.0	4.9	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
945	SK25	舟漏	底板	12.2	—	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
980	SK25	舟漏	底板	20.1	7.5	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
981	SK25	舟漏	底板	18.3	6.0	3.5	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
982	SK25	舟漏	底板	18.6	8.9	4.0	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
983	SK25	舟漏	底板	24.9	—	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
984	SK25	舟漏	底板	26.5	—	—	直腹 直腹	舟漏:舟漏斜板の舟漏。
1025	第3腰椎 遺構外	椎板	—	11.5	—	—	内:赤・黒、外:黒、片面赤斑文。	
1026	第3腰椎 遺構外	椎板	—	10.8	—	6.4	内:赤・黒、外:黒、底面に穿孔。	
1027	第3腰椎 遺構外	椎板	—	18.4	7.0	2.1	内:赤・黒、外:黒、舟漏の穿孔。	
1028	第3腰椎 遺構外	椎板	—	21.0	8.0	2.0	内:赤・黒、舟漏の穿孔。	
1029	第3腰椎 遺構外	椎板	—	φ3.0	—	16.0	舟漏の穿孔。	
1030	第3腰椎 遺構外	椎板	—	5.9	1.1	—	舟漏斜板の舟漏。	
1031	第3腰椎 遺構外	椎板	—	21.6	3.6	—	舟漏斜板の舟漏。	

第4章 殿町 279番地外調査(北屋敷)の概要

調査番号	地名	種類	形名	高さ(cm)	幅(奥)(cm)	厚さ(cm)	木枠	備考
1932	第1面積面 道傍所	柱	柱小口透	6.5	4.2×2.8	1.2	板目	
1933	第1面積面 道傍所	板	当板	32.8	10.5	2.2	板目	中央にφ2.4cmの穿孔1、両端に各φ1.3cmの穿孔1。
1934	第1面積面 道傍所	板	刀鋸	16.8	2.0	2.0	板目	
1935	第1面積面 道傍所	板	刀鋸	30.8	8.2	2.0	板目	
1936	SX002	不明		10.9	11.0	0.9	板目	片面に引ひ縫合縫、片面に合紙。
1937	SX002	漆桶	圓	10.6			内・外・漆、板目	
1938	SX002	漆桶	圓	21.8	10.6	3.0	板目	4.5×6.0×3.0cmの方角底漆桶ノズ。
1939	SX002	漆桶	圓	19.6	7.6	1.9	板目	漆の底漆の跡蓋。
1940	SX002	下駄	内面底面下駄	19.6	7.6	1.6	板目	漆:黒、向高:5cm。底の底り波の跡。指の痕跡あり。小空:有り。
1941	SX002	下駄	丸頭透下駄	14.6	5.6	2.2	板目	漆:黒、外縁:白。
1942	SX002	筒子板		34.4	8.6	2.4	板目	内:水、外:墨、外縁に木目シテ着。17cm底手。
1943	SX004	漆桶					板目	
1944	SX004	下明	筒地	7.0	2.2	3.4	板目	上下面同、真直子(鉢刺)。
1114	SX006	漆桶	圓	11.5		3.5	内・外・墨、つまみ内:墨、底部に毛糸文・米葉。	
1115	SX006	漆桶	圓	14.5			内・外:墨、底部に毛糸文・米葉。	
1116	SX006	漆桶	圓	25.1			内・外:墨、底部に毛糸文・米葉。	
1117	SX020	漆桶	圓	27.8			白木	
1118	SX020	漆桶	圓	12.3			板目	片手:墨、画面の奥に日封穴1。
1119	SX028	筒(刀刃)		19.4	2.7	2.0	板目	
1120	SX028	桶(刀)		7.9	3.8	1.0	板目	内側突出部に凹凸2つ。蓋:墨に刀刃形、黒漆付帯。
1132	SX027	下駄	内面底面下駄	17.3	8.1	2.3	板目	漆:墨。底:白。
1133	SX027	脚(刀刃)		27.1	4.2		板目	
1134	SX027	脚			6.5		板目	上方は直往状、下方は斜状。
1135	SX027	脚	底板が魚鱗	11.4	4.5		板目	
1136	SX027	脚		4.1	2.6		板目	内・外:墨、つまみ内:墨。
1137	SX027	脚		26.6			板目	内・外:墨、底部に毛糸文・米葉。
1138	SX077	著		97.5			白木	
1143	SX078	著		30.6			板目	
1144	SX078	著		27.5			板目	
1145	SX078	著		39.4	5.0		板目	史跡記を少し削る。
1146	SX078	漆鏡	鏡	11.0		2.9	内・外:墨、つまみ内:墨。	
1147	SX078	小鏡		11.5	6.2		板目	八角形吹びのひら。
1148	SX078	鏡	鏡				板目	
1149	SX078	下駄	丸頭透下駄	30.9	7.5	3.4	板目	金墨:墨、蓄葉:2.2cm。蓋の極度絞り、指の痕跡あり。
1150	SX078	下駄	内面底面下駄	21.5	9.4	4.7	板目	蓋:墨。底:白。
1151	SX078	脚	脚底か腰板	11.3			板目	蓋:墨。内:白。
1152	SX078	脚	脚底か腰板	7.8			板目	脚底:墨をやわらかく皮と綴続とめると白到あり。
1153	SX078	脚	小刀	10.4	5.7		板目	脚底:墨。内:白。
1154	SX078	脚	脚底	21.4	3.2		板目	脚底:墨。内:白。
1155	SX078	脚	腰板	30.1	6.6		板目	脚底:墨。内:白。
1156	SX078	脚	腰板	28.0	10.1		板目	脚底:墨。内:白。
U-87	SX078	脚	腰板	37.3	10.0		板目	脚底:墨。内:白。
1158	SX078	脚	腰板	28.6	10.9		板目	脚底:墨。内:白。
1161	SX078	脚	腰板	17.2	4.8		板目	脚底:墨。内:白。
1162	SX078	脚	腰板	21.6	5.0	2.1	板目	内・外:墨、蓄葉:0.8cm。蓋の極度絞り、指の痕跡あり。
1163	SX078	脚	腰板	20.2	7.1		板目	内:白。
1164	SX078	脚	腰板	20.0	1.2		板目	内:白。
1165	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1166	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1167	SX078	脚	腰板	17.2	4.8		板目	内:白。
1168	SX078	脚	腰板	21.6	5.0	2.1	板目	内・外:墨、蓄葉:0.8cm。蓋の極度絞り、指の痕跡あり。
1169	SX078	脚	腰板	20.2	7.1		板目	内:白。
1170	SX078	脚	腰板	20.0	1.2		板目	内:白。
1171	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1172	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1173	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1174	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1175	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1176	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1177	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1178	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1179	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1180	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1181	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1182	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1183	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1184	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1185	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1186	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1187	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1188	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1189	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1190	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1191	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1192	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1193	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1194	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1195	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1196	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1197	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1198	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1199	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1200	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1201	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1202	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1203	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1204	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1205	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1206	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1207	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1208	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1209	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1210	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1211	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1212	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1213	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1214	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1215	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1216	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1217	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1218	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1219	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1220	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1221	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1222	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1223	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1224	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1225	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1226	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1227	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1228	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1229	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1230	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1231	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1232	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1233	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1234	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1235	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1236	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1237	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1238	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1239	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1240	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1241	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1242	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1243	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1244	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1245	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1246	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1247	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1248	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1249	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1250	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1251	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1252	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1253	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1254	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1255	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1256	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1257	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1258	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1259	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1260	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1261	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1262	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1263	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1264	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1265	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1266	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1267	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1268	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1269	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1270	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1271	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1272	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1273	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1274	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1275	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1276	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1277	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1278	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1279	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1280	SX078	脚	腰板	19.5	1.2		板目	内:白。
1281	S							

455	SK03	小形	外径3.0/内径3.8/高さ9厘1.4	外灰/灰褐色	セヌニニア文、左巻、珠文12。
456	SK03	丸瓦	長11.1/幅13.7/厚2.8/表端面5.6/底長3.9	外灰/灰褐色 内灰褐色	丸瓦の一端分。
457	SK03	板瓦(方)	長10.4/幅16.3/厚2.0	外灰/灰褐色	コビキ瓦。
458	SK03	板瓦(方)	長8.0/幅10.5/厚1.7	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、變化。
459	SK03	板瓦(方)	長14.4/幅16.7/厚2.0	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
460	SK03	板瓦(方)	長8.7/幅26.0/厚1.6	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
461	SK03	板瓦(方)	長29.9/幅35.2/厚2.2	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
492	SK03	板瓦(方)	長29.9/幅38.4/厚2.1	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、變化。穴孔と要われる穴。
493	SK03	板瓦(方)	長8.8/幅17.7/厚1.8	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
494	SK03	板瓦	長22.9/幅25.3/厚1.9	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、變化。のみが少く左右不規。
495	SK03	板瓦(方)	長29.3/幅30.3/厚2.0	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、變化の可能性あり。
496	SK03	板瓦(方)	長4.9/幅11.1/厚2.1	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
528	SK03	板瓦(方)	長29.3/幅32.7/厚2.0/万當高4.7/厚灰層1.6	外灰/灰褐色	實品文、變化。
637	第1構造 漢構体	丸瓦	長10.6/幅6.9/厚2.0/上縫長2.5/後縫3.8	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦。
638	第1構造 漢構体	丸瓦	長12.0/幅8.3/厚1.8/上縫長3.1/後縫2.3	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、コビキ瓦。
639	第1構造 漢構体	丸瓦	長1.9/幅9.3/厚2.4	外灰/灰褐色	スタンダリ瓦、變化、せん不明。
640	第1構造 漢構体	丸瓦	長3.6/幅3.1/厚1.7	外灰/灰褐色	外内灰褐色。
743	第2構造 漢構体	軒丸瓦	長11.7/幅11.7/厚1.7	外灰/灰褐色/灰白色	油漆二巴文、左巻、珠文19。
744	第2構造 漢構体	丸瓦	外径10.8/幅10.8/厚1.7	外灰/灰褐色/灰白色	油漆三巴文、左巻、珠文19。
745	第2構造 漢構体	丸瓦	長2.0/幅11.3/厚2.0/上縫長2.9/後縫2.4	外内灰褐色	コビキ瓦。
746	第2構造 漢構体	丸瓦	長15.6/幅10.7/厚2.6	外灰/灰褐色/灰白色	外灰/灰褐色/灰白色/内褐色。
747	第2構造 漢構体	丸瓦	長16.0/幅14.0/厚2.1	外灰/灰褐色/灰白色	外灰/灰褐色/灰白色/内褐色。
748	第2構造 漢構体	小形	幅13.8/幅15.5/厚2.5	外灰/灰褐色	外灰/灰褐色。
755	SG02	軒丸瓦	外径6.6/内径6.2/厚1.8	外灰/灰褐色	枯櫻文。
756	SG02	軒丸瓦	外径10.3/内径7.1/厚2.4	外灰/灰褐色/灰白色	枯櫻文。
759	SD01	丸瓦	長17.8/幅16.1/厚2.4/三縫長3.4/後縫5.3	外内灰褐色/灰色	コゼキ瓦、椎石として使用。
760	SK22	軒丸瓦	外径7.8/内径11.6/厚2.3	外内灰褐色	油漆二巴文、左巻、珠文4。
763	SK22	軒丸瓦	外径3.3/内径3.5/厚2.0	外灰/灰褐色/内褐色	油漆三巴文、左巻、珠文4。
789	SG03	縮丸瓦	長13.8/幅16.7/厚1.9	外灰/灰褐色	コゼキ瓦。
945	SK03	丸瓦	外径17.6/内径12.2/丸瓦層2.0	外内灰褐色	油漆三巴文、右巻、珠文4。
946	SK03	丸瓦	外径17.0/幅17.0/丸瓦層3.1	外内灰褐色	油漆三巴文、右巻、珠文4。
947	SK03	丸瓦	長17.3/幅9.7/丸瓦層2.0/後縫2.3	外内灰褐色	油漆三巴文、右巻、珠文4。
948	SK03	丸瓦	長13.3/幅6.6/厚4.1/前縫3.2/後縫2.8	外内灰褐色	コビキ瓦。
949	SK03	縮丸瓦	長16.7/幅6.0/厚2.7	外内灰褐色	油漆三巴文。
953	面敷地盤SD01	削丸瓦	外径10.4/幅10.0/丸瓦層2.0	外内灰褐色	枯櫻文。
954	面敷地盤SD01	削丸瓦	外径8.8/幅8.8/丸瓦層1.6	外内灰褐色	油漆二巴文、左巻、珠文4。
955	面敷地盤SD01	削丸瓦	上部1.2/下部2.7/後縫2.0/万當高1.6/平瓦層2.3	青海灰/灰褐色/灰白/灰白色	青海灰/灰褐色/灰白/灰白色。
956	可動地盤SD01	丸瓦	長7.0/幅12.0/厚1.4	外灰/灰褐色	森口文、文様は二葉系、スタンダリ。
957	可動地盤SD01	丸瓦	長3.0/幅3.0/厚1.9	外内灰褐色	コゼキ瓦。
958	可動地盤SD01	丸瓦	長7.4/幅8.9/厚2.3/三縫2.3/後縫2.1	外灰/灰褐色/内成1.1/持縫	コゼキ瓦、スタンダリ、白口底。
959	可動地盤SD01	丸瓦	長13.1/幅11.1/厚2.2	外灰/灰褐色	コゼキ瓦、スタンダリ。
960	可動地盤SD01	丸瓦	外径11.3/内径11.3/厚2.0	外内灰褐色	油漆二巴文、左巻、珠文4。
961	可動地盤SD01	丸瓦	長15.6/幅5.8/厚2.4/前縫4.0/後縫8.3	外内灰褐色	油漆三巴文、右巻、珠文4。
962	可動地盤SD01	半瓦	長7.1/幅12.0/厚2.3	外内灰褐色	スタンダリ。
963	S103	半瓦	外径11.7/幅11.4/丸瓦層2.0	外内灰褐色	油漆二巴文、左巻、珠文4。
965	S103	半瓦	外径11.7/幅11.4/丸瓦層2.0	外内灰褐色	油漆三巴文、左巻、珠文4。
1036	第3構造 漢構体	丸瓦	長12.6/幅12.4/后縫4.9/幅11.8	外灰/灰褐色/黄褐色	油漆二巴文、左巻、珠文4。
1037	第3構造 漢構体	削平瓦	外径15.6/幅12.4/后縫14.3/平瓦層1.9	外灰/灰褐色/黄褐色	油漆文。
1038	第3構造 漢構体	削平瓦	上部2.2/下部1.2/丸瓦層4.5/平瓦層2.0	外灰/灰褐色	油漆文。
1039	第3構造 漢構体	削平瓦	外径16.2/幅14.2/后縫2.1/幅11.7	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、油漆密。
1040	第3構造 漢構体	丸瓦	長13.0/幅6.5/厚2.7/前縫3.6/後縫7.7	外内灰褐色/灰白色	油漆文、油漆密。
1041	第3構造 漢構体	丸瓦	長12.4/幅6.5/厚2.4/前縫3.6/後縫7.7	外内灰褐色/灰白色	油漆文、油漆密。
1042	第3構造 漢構体	丸瓦	長11.6/幅5.4/厚3.1/三縫4.1/後縫7.0	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1043	第3構造 漢構体	丸瓦	長11.6/幅5.4/厚3.1/三縫4.1/後縫7.0	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1044	第3構造 漢構体	丸瓦	長10.3/幅7.1/厚2.0	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1045	第3構造 漢構体	丸瓦	長8.5/幅9.0/厚3.0	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1046	第3構造 漢構体	起伏瓦	瓦1.5~2.5	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1047	第3構造 漢構体	丸瓦	瓦1.5~2.5	外内灰褐色/灰白色	油漆文。
1131	第3構造 漢構体	削平瓦	長18.5/幅11.1/厚2.0	外内灰褐色	油漆文。
1229	第4構造 漢構体	削平瓦	外径16.2/幅10.7/丸瓦層2.2	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆二巴文、左巻、珠文4。
1240	第4構造 漢構体	削平瓦	外径17.0/幅10.9/丸瓦層2.5	外内灰褐色/内成1.0/持縫	油漆二巴文、左巻、珠文4。
1241	第4構造 漢構体	削平瓦	外径16.0/幅15.3/厚1.9	外内灰褐色/内成1.0/持縫	油漆二巴文、左巻、珠文4。
1242	第4構造 漢構体	削平瓦	外径5.3/内径5.3/丸瓦層2.3	外内灰褐色/内成1.0/持縫	油漆二巴文、左巻、珠文4。
1243	第4構造 漢構体	丸瓦	外径2.5/幅4.8/丸瓦層1.8	外灰/灰褐色/内成/黃褐色	油漆文。
1244	第4構造 漢構体	削平瓦	外径16.2/幅10.7/丸瓦層2.2	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、改善文。
1245	第4構造 漱道構体	削平瓦	外径3.3/幅15.4/丸瓦層2.1	外内灰褐色	油漆文。
1246	第4構造 漱道構体	削平瓦	外径6.2/幅15.3/丸瓦層2.1	外内灰褐色	油漆文、改善文。
1247	第4構造 漱道構体	削平瓦	外径12.5/幅11.8/瓦高4.6/丸瓦層1.5	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、改善文。
1248	第4構造 漱道構体	削平瓦	瓦19.8/幅10.6/厚1.1~3.3/持縫3.7	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、改善文。
1249	第4構造 漱道構体	削平瓦	瓦11.0/幅10.2/厚2.3/持縫3.8/持縫5.2	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、改善文。
1250	第4構造 漱道構体	削平瓦	瓦0.9/幅10.0/厚2.4/持縫3.8/持縫5.5	外灰/灰褐色/内成1.0/持縫	油漆文、改善文。
1251	第4構造 漱道構体	削平瓦	瓦11.1/幅5.7/厚1.8	外灰/灰褐色	油漆文。
1252	第4構造 漱道構体	削平瓦	瓦11.6/幅9.6/厚2.4	外内灰褐色	油漆文。

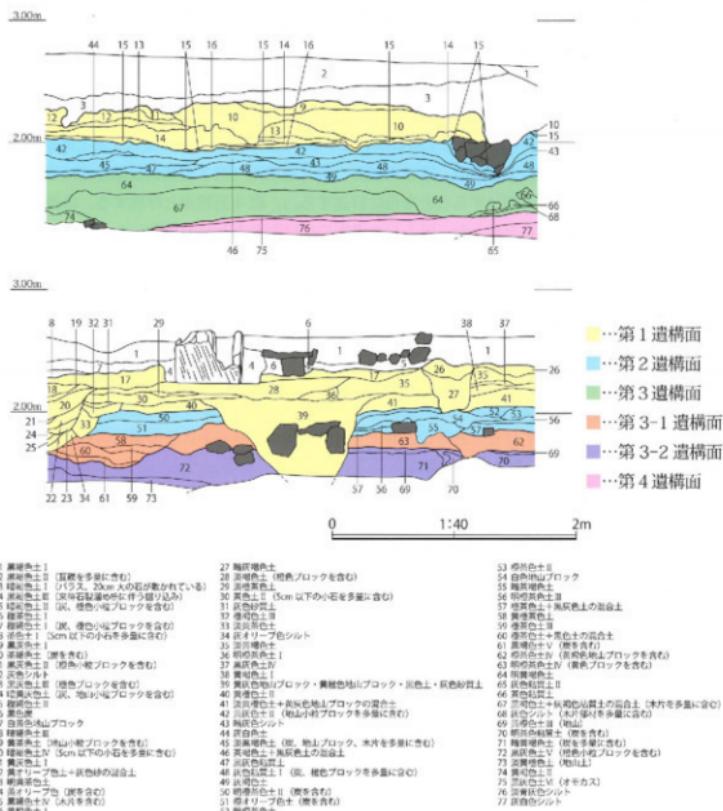
第5章 殿町279番地外調査（南屋敷）の概要

第1節 基本層序：土層堆積状況と遺構面（第237図）

基本層序 第5章で扱う範囲は、第3章・第4章で詳細を述べた北屋敷地と屋敷境石積溝SD01を挟んだ南側に広がる。調査開始時、南屋敷地の西側に南北方向に長い41m×2mのトレーンチを掘削し、分層作業を行った。上層堆積状況から、遺構面と思われる造成上面を確認した。これらを上層面から第1遺構面、第2遺構面、第3遺構面（第3遺構面は部分的に第3-1遺構面と第3-2遺構面に細分することを後に詳述する。）、第4遺構面と呼称する。各遺構面の年代については、遺構面直上から出土した遺物の年代編を主として考察した。なお、第4遺構面に関しては第6章でその詳細を述べる。

第237図の基本土層図は上図が南北トレーンチ南側一部分、下図は北側一部分を掲載している。これは南側で第3遺構面が存在する間に、北側では第3-1・3-2遺構面が造成されることを示すために異なる位置の上層を掲載している。

- 第1遺構面より上層** <第1遺構面より上層> 標高2.60～2.74m、第1層～第8層（近現代）
1～3層はいずれも黒色系の土層で、瓦礫やコンクリート片を多量に含む。4～6層は米待石製溜槽に伴う掘り込みである。
- 第1遺構面** <第1遺構面> 標高2.12～2.42m、第9層～第41層（18世紀後半～明治初頭）
9～16層は第1遺構面の南側に広がる形成土である。黒色・褐色系の土層で、厚い堆積の10層下には13～15層が薄く堆積する。15層は橙褐色を呈するシルト状の土層である。26～38層は北側の形成土で、灰色・黄褐色系を中心とした上層である。39層は40・41層が造成された時に掘られた土坑で幅約1.5m、深さ0.6mを測る。
- 第2遺構面** <第2遺構面> 標高1.98～2.06m、第42層～第57層（18世紀前半～後半）
42～49層は第2遺構面の南側に広がる形成土である。黄色・灰色の土色を示し、シルト系・粘質系の土層が水平に堆積している。45・48層はいずれも炭、地山ブロック、木片などを多量に含む土層である。50～57層は北側の形成土で、橙色・茶色系の土層が水平に堆積している。このうち50・51層は上中に炭を含んでいる。
- 第3遺構面** <第3遺構面> 標高1.56～1.90m、第64層～第68層（17世紀前半～18世紀前半）
64～68層は第3遺構面の南側に広がる形成土であり、64層は最大厚32cmを測る明黄褐色土である。65・66層はいずれも粘質土の塊りが64層中に入り込んだものである。67層は黒褐色土と灰褐色粘質土の混合土で、木片を多量に含んでいる。
- 第3-1遺構面<第3-1遺構面>** 標高1.80～1.90m、第58層～第63層（17世紀中頃～18世紀前半）
58～63層は北側のみに見られる土層で、第3-1遺構面形成土である。いずれもほぼ水平に堆積し、形成土の厚みは約16cmを測る。
- 第3-2遺構面<第3-2遺構面>** 標高1.56～1.75m、第69層～第73層（17世紀前半～中頃）
69～73層も北側のみに見られ、第3-2遺構面を形成する厚み約25cmの形成土である。このうち71層は炭を多量に含む暗黄褐色土、72層は最大厚32cmを測る黒灰色土である。
- 第4遺構面** <第4遺構面> 標高1.30～1.34m、第74層～第77層（17世紀初頭）
75層は約5cmの厚みを測る黒灰色土で、薄く水平に堆積する。76・77層は淡青灰色・灰白色シルトである。



第2節 第1遺構面

第1遺構面の概要 第1遺構面はその大半が近代建築物の基礎によって壊壊を受けている。これらが及ぼなかつた部分で以下の遺構を検出した。遺構面は標高2.12～2.42 mを測る。

第1遺構面の遺構は、調査区南東側から建物跡SB01・02（第240～242図）、樋列SA01・02（第240図）、SB01・02の周囲からは土坑SK01・02・03（第240図）を検出した。調査区最東端からは陶器窯を埋設した土坑SJ01（第245図）、調査区中央部分から井戸SE01（第247図）・02（第248図）、調査区最西端からは土坑SK04・05（第251図）を検出した。

また、長方形祈禱具埋納土坑SK06（第254図）と八角形祈禱具埋納土坑SK07に関しては第1遺構面より下層面での検出（SK06は第3-2遺構面、SK07は第4遺構面）であったが、遺物の年代が明確に特定できていることと、第1遺構面の建物跡SB01・02との関係性が強く想定されることから、第1遺構面の遺構として扱っている。

第1遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、18世紀後半～明治初頭を想定している。

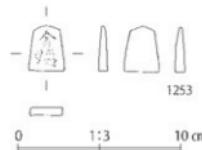
- SD01 : 屋敷境石積溝（第239図）**
- SD01は北屋敷と南屋敷を区切る石積溝であり、調査区のほぼ中央に東西方向に位置する。松江城下町形成時である第4遺構面では素掘溝の形態を取り（第365図）、遺構面の嵩上げに伴つてつくり変えられてきた石積を検出した。また、屋敷地を区切る境界線であるとともに、排水施設としても機能していたと考えられる。
- 第1遺構面時につくられた石積は検出しなかった。北側の石積も確認できなかったことから、第1遺構面時にSD01は存在していなかった可能性が考えられる。

- SB01 : 建物跡（第240・241図）**
- SB01は調査区の最南東域において検出した建物跡である。SB01は真北から東に4度傾く輪で、東西4間（1間2.08m）×南北5間（1間1.96m）の範囲を検出した。A-A'以西には礎石の並びが確認できなかったことから、SB01の西端はA-A'であると思われる。

礎石は50～70cmの大人の形の石で、石材は主に安山岩（通称：大海崎石）を使用している。礎石の下に根石が入れられているものの他に、礎石が抜き取られて根石のみが残るもの、礎石・根石が抜き取られ掘り方のみが残るものなどが見られた。

北側・南側・東側においては礎石が続いている可能性があり、SB01の規模は現状より広がることが想定される。

- 礎石1 内 矩石1 山上遺物（第238図）**
- 1253は将棋の駒で、長2.75cm、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重量2.88gを測る。表面には「金将」と彫られ、陰刻部分に墨が入れられている。材質は石製か骨製の可能性が考えられる。



第238図 矩石1出土遺物

- SB02 : 建物跡（第240・242図）**
- SB02はSB01と重なる位置で検出した建物跡である。SB02は真北から東に4度傾いており、SB01の軸とはわずかにずれている。D-D'・E-E'内の礎石間数を主として図上計算したところ、推定で東西6間（1間1.98m）×南北5間（1間2.00m）の建物跡が想定できた。

第5章 殿町279番地外調査（南尾敷）の概要



第239図 第1遺構面 全体図



第240図 SB01・02 平面図



第241図 SB01 断面図



第242図 SB02断面図

礎石はSB01と同様で、50～70cmの大形石を利用している。また、礎石間にはプロック状の来待石や30cmの大石が列状に並べられており、SB02の基礎構造の一部であったと思われる。SB02は推定範囲の東側・南側に広がっていくものと思われる。

SA01・02：柵列（第240図）

SA01・02

SA01はSB01・02の北側に東西方向に15個並ぶピット列である。長さ約15mを測り、ピットは1.1～1.5m間隔で並び、ピット径は0.20～0.35mの間におさまる。SA02はSB01・02の東側に南北方向に3個のピットが並ぶもので、長さ約5.5m、ピット間2.75m、ピット径0.3mを測る。どちらの列もピットの深さが0.10～0.15mと浅いことから、第1遺構面より上層から掘り込まれたピットの最深部である可能性が考えられる。これらは第1遺構面より上層面でつくられた壙などの遮蔽物であったと想定される。

SP01

SA02内 SP01 出土遺物（第243図）

国産磁器

1254は肥前系磁器の極小皿で、底径1.6cmを測る。丸形に近い 第243図 SP01出土遺物形状であるが、底部のみの残存である。



0 1:3 10 cm

SB01・02に付属する遺構（第240図）

SK01

SB01・02の周囲には多数の土坑を検出している。SK01は調査区東端に位置する円形土坑で、直径0.9～0.95mを測る。SK02はSA01付近に位置する直径0.9mを測る円形土坑で、内部には20cmの大來待石などが入れられていた。SK03は調査区西端、SE01の南側に位置する不定形土坑で、長辺1.55m、短辺1.0mを測る。

SK01～03 出土遺物（第244図）

SK01

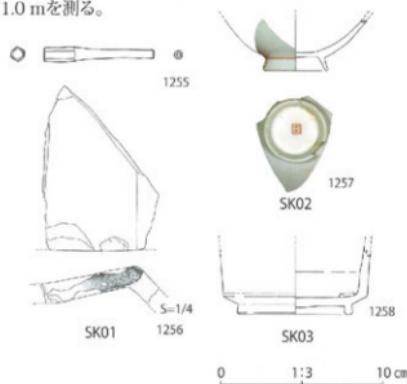
SK01 1255は真鍮製の煙管で、吸口部分の完形である。長さ6.8cm、小口径0.9cm、口付径0.5cmを測る。口付部分約2.0cmの範囲が面取り状に加工されており、断面から見ると六角形を呈している。

瓦

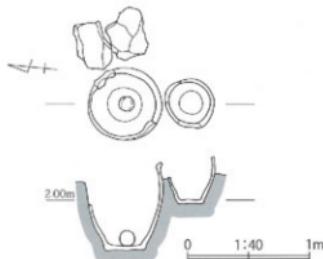
1256は左棟瓦で、厚さ1.7cmを測る破片である。側面の屈折部分にスタンプが押されている。

SK02

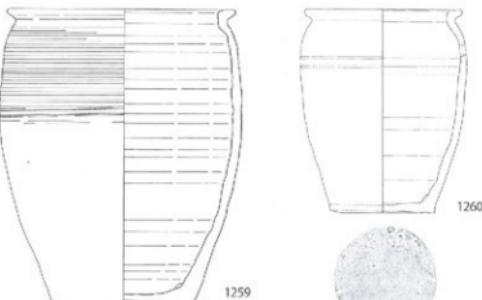
SK02 1257は產地不明磁器の平形中碗である。高台内に「東陶」という銘が入るもので、近代に近い年代を示す。



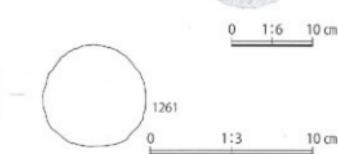
第244図 SK01～03出土遺物



第245図 SJ01平面図・断面図



SJ01（北から）



第246図 SJ01出土遺物

SK03 SK03 1258は京都・信楽系陶器の筒形中碗である。外面は底部から高台にかけて無釉である。

SJ01：上器埋設上坑（第245図）

SJ01は調査区の最東端に位置する。大きさの異なる2個の陶器甕が水平に埋設されたもので、北側に大形甕、南側に小形甕が埋められていた。大形甕は口縁部が7cm、小形甕は半分以上が地上に出ている状態で検出した。また、大形甕の東隣には40cm大の石が2個並べるように置かれていた。2つの甕が同時期に埋められたものか、もしくは新旧関係があるものかについては、掘り方を確認することができなかつたため判断できていない。

大形甕の内部には鉄製の球体が1個入っていた。この鉄球は意図的に入れられた可能性が高いと考えており、地鎮や祭祀的性格を示すものと思われる。

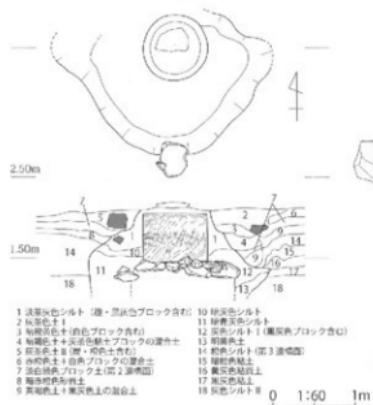
SJ01 出土遺物（第246図）

国産陶器 1259・1260は產地不明の陶器甕である。1259は口径28.0cm、底径17.4cm、器高35.8cmを測る大形のもので、胴部上方約10cm間に沈線が隙間なく引かれている。1260は口径19.2cm、底径12.8cm、推定器高25.0cmを測る小形の甕で、底部は回転糸切りで調整されている。いずれの甕も口縁部上面は水平で、端部を外側に引き伸ばす形状を呈する。

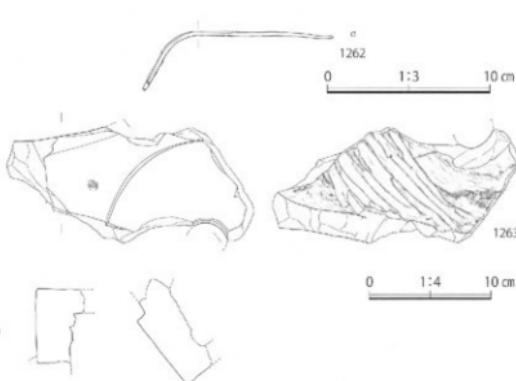
金属製品 1261は鉄製の球体で、直径6.25～6.35cm、ほぼ正円形を呈する。重量は980gを測る。

SE01：井戸（第247図）

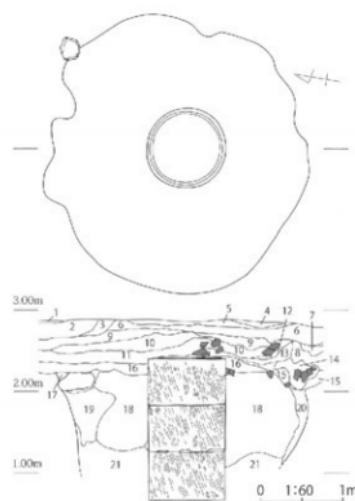
SE01はSBO1・02の西側に位置する井戸である。最上部には来待石製の井筒が1個設置されており、直徑0.8m、幅0.6m、厚み5cmを測る。外面には来待石特有の鑿加工痕が斜線状に見られる。この直下には、10～20cmの大海底石が輪状に積まれた状態を検出した。当初、海底石で輪積みの井戸をつくり、その後改修のため来待石製の井筒を置いた可能性が



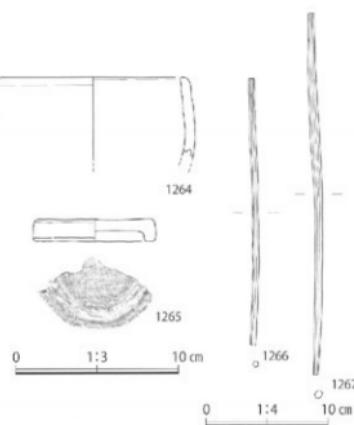
第247図 SE01 平面図・断面図



第248図 SE01 出土遺物



第249図 SE02 平面図・断面図



第250図 SE02 出土遺物

推測される。井戸の内部には廃絶する際に竹筒を埋め込んで「息抜き」^[1]とする儀式の形跡は見られなかった。

SE01 出土遺物 (第248図)

金属製品 1262は銅製品で、長さ11.8cm、直径0.25cm、重量4.66gを測る。全体の3分の1部分で約45度折れ曲がり先細る形状を呈する。火箸のようなものと考えているが、家屋の屋根瓦を葺く際に使用する止め具とも考えられる。

瓦 1263は鬼瓦の一部分で、最大長9.0cm、最大幅20.5cm、厚み3.5cmを測る。表面には

直径約16.4cmの浮き彫りがあり、その中央には直径3.6cmの穿孔が見られる。裏面は剥離した痕跡が認められる。

SE02：井戸（第249図）

SE02は第1遺構面（標高2.2m）からの掘り込みを確認した井戸である。來待石製の井筒が3個設置されており、直径1.0m、幅0.6m、厚み4cmを測る。井筒はSE01と比べてやや扁平な形状を呈する。SE02の掘り方は直径約3mを測る。

SE02 出土遺物（第250図）

国産陶器 1264は肥前系陶器の腰張形中碗で、推定口径11.4cmを測る。器壁は厚めで、口縁部は内湾し胴部はわずかに膨らむ。全面に緑黒色の釉薬が掛かる。

焼塙壺 1265は焼塙壺の蓋である。逆四字形を呈し、受口側端部は面取りが施されている。形押し成形で、内面には布目痕が見られる。

木製品 1266・1267は白木の箸で、1266は長さ21.8cmと比較的短い。1267は29.6cmを測る長い箸で、両端が先細る。いずれも直径は0.5～0.6cmである。

SK04・05：土坑（第251図）

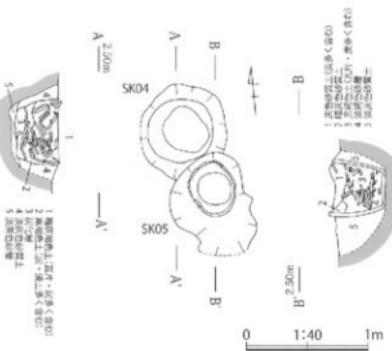
SK04・05は調査区最西端に位置する。北側のSK04を南側のSK05が切って掘り込んでいる。SK04はいびつな円形土坑で、掘り方直径0.75m、深さ約0.4mを測る。掘り方内には直径約0.55mを測る円形状の木枠らしきものが埋設されていた。この円形木枠内部には瓦の破片が多量に入り込み、焼土や粉状の炭化物も多く含まれていた。

SK05は不定形土坑で、長辺0.65m、短辺0.44m、深さ0.32mを測る。土坑内には陶器製の甕が水平に埋設されていた。甕の埋土は4層に分けることができ、第3層には瓦片や焼土・炭が包含されていた。第4層は、約8cmの厚みで砂が堆積している。この層から肥前磁器、瀬戸・美濃磁器が出土しており、その年代はおよそ1800年代頃を示す。また、甕内面の下方部分一方向には25×30cmほどのいびつな範囲で、白い石灰状の物質がこびり付いていた。これはトイレ遺構によく見られる尿石の痕跡と思われる。

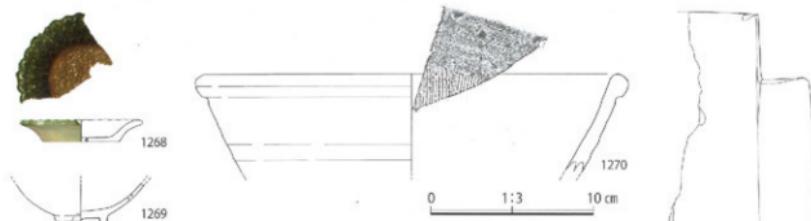
SK04 出土遺物（第252図）

国産陶器 1268～1270は陶器である。1268は四国産ミニペイ焼の可能性が高いと思われる極小甕である。口縁部内面は葉の形状を型押ししてあり、緑色の釉薬が掛かる。底部内面一面には小さな凹凸が多く、黄土色の釉薬が掛かる。1269は在地産の平形中碗である。1270は产地不明の擂鉢で、口径25.5cmを測る。口縁端部は粘土を折り曲げて丸くまとめている。

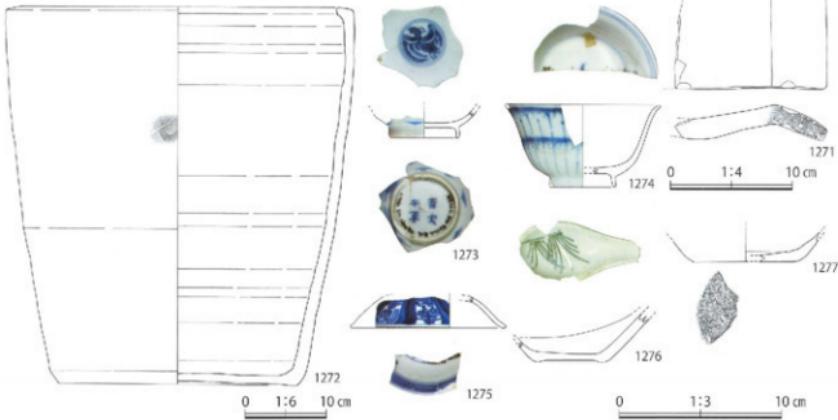
瓦 1271は長28.0cm、残存幅12.5cm、厚み1.7cmを測る左札瓦である。右上には山状の屈折に合わせて5.4×4.0cmの抉りが入り、側面にはスタンプが押印



第251図 SK04・05 平面図・断面図



第252図 SK04出土遺物



第253図 SK05出土遺物

されている。

SK05 出土遺物（第253図）

国産陶器

1272は産地不明陶器の大甕である。口縁部から底部まで屈曲なく成形され、口縁部は梢円形を呈する。全面に施釉が見られる。

国産磁器

1273・1275・1276は肥前磁器である。1273は中碗で、見込みに鳳凰、高台内に「道光年寿」の銘が入る。中国・明末期の模倣品とも考えられる。1275は端反形の中碗蓋で、外面には「福寿」文、内面は端部に四方櫻文が描かれる。1276は小形の散蓮草である。

1274は瀬戸・美濃磁器の端反形小碗で、外面全面に雨降文に似た文様が描かれる。1825～1850年代を示す。

土師器皿

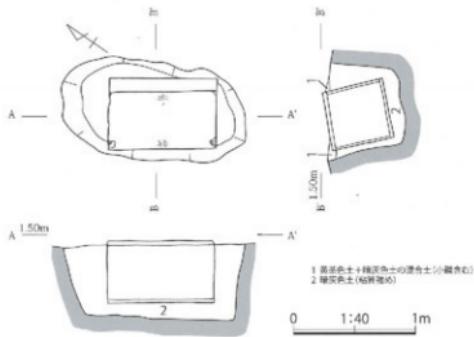
1277はロクロで成形された土師器皿の中皿で、底径6.2cmを測る。底部は回転糸切りで調整されている。

SK06：木箱埋納土坑（第254図）

SK06

SK06は調査区最東端に位置する。SK06を検出したのは第3-2遺構面であるが、土坑内に納められていた遺物の年代が第1遺構面の年代と合い、第1遺構面の礎石建物跡SB01・02との関係性が強く想定されるために、この面で取り扱うこととした。

SK06は北西一南東方向を長辺としたやいびつな梢円形を呈し、最大長0.75m、最大幅



第254図 SK06 平面図・断面図



SK06(東から)

0.41 m、底面長 0.6 m、底面幅 0.32 m、深さ 0.32 mを測る。検出面の標高は 1.45 mだが、本来はもっと上層から掘り込まれた土坑であったと思われる。土坑内の埋土は 1 層で、粘質が強めの暗灰色土が入れられていた。土坑内には長辺 44.0cm、短辺 24.4cm、高さ 26.0cm の木製箱が入っており、掘り方と同じ軸の北西—南東方向を向き、南西長辺側が沈み込み埋まっている状態で検出した。本来は水平に埋められていたが、水分を多く含む地盤であることを考慮すると、年月を経て自然に傾いたのではないかと推測する。

SK06 出土遺物（第255図～第263図）

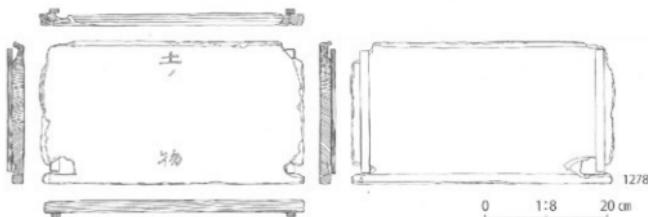
外蓋 木製箱は二重のつくりになっていた。外蓋 1278 は長辺 43.5cm、短辺 24.4cm、厚み 2.0cm を測り、内面には箱の内法に合わせた「かえし」が両短辺に付けられていた。目釘で固定した痕跡が見られないことから、膠などで接着したと思われる。外箱 1279 は長辺 44.0cm、短辺 22.8cm、深さ 23.0cm、内法は長辺 40.8cm、短辺 19.6cm、深さ 21.4cm を測り、厚みは全てのパーツで 1.6cm である。1279 のつくりは長さ 3cm、直径 0.5cm の目釘が長辺 3 本、短辺 2 本ずつの計 10 本を底面から打ち込むことで側板 4 枚を固定している。また、長辺側板の角部分に溝が切ってあり、両端が加工された短辺側板をその溝に差し込むことによって、4 枚の側板が組み合う。

内蓋 内蓋 1280 は長辺 37.1cm、短辺 21.0cm、厚み 2.4cm を測り、内面には 1278 と同様の「かえし」が見られるが、1280 は目釘 2 本ずつで固定されていた。内箱 1281 は長辺 37.2cm、短辺 20.2cm、深さ 14.4cm、内法は長辺 32.8cm、短辺 15.8cm、深さ 12.2cm を測り、厚みは全て 2.2cm であった。1281 のつくりは底面から目釘を打ち込んで側板を固定する方法は 1280 と同様だが、側板 4 枚に加工した痕跡や目釘などが見られず、強力に密着している様子がうかがえた。おそらく、膠などを接着材として使用したものと考えている。

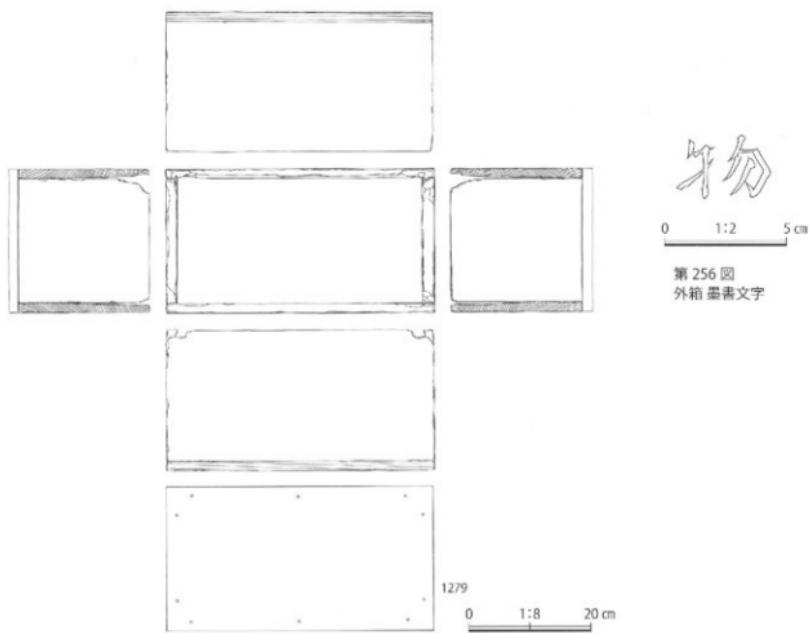
外箱 1278・1279、内箱 1280・1281 の木材は、各々一本から作り出したものであることがわかっている。いずれも側板 4 枚は木目を合わせてつくられている。

内箱外表面の長辺面に、変色した縦ラインが両側に 1 本ずつ見られた。何らかの要因で内箱外表面が変色した痕跡である。おそらく内箱を密閉する際に、幅 3cm ほどの帯のようなものを巻きつけ封じた痕跡ではないかと考えている。その確証となる物質等は検出されなかったが、可能性は高いと考える。

次に、外蓋 1278・内蓋 1280 に見られた墨書き文字と朱印について述べる。いずれも長辺に



第255図 長方形祈禱具 外蓋実測図



第256図
外箱墨書文字

第257図 長方形祈禱具 外箱実測図

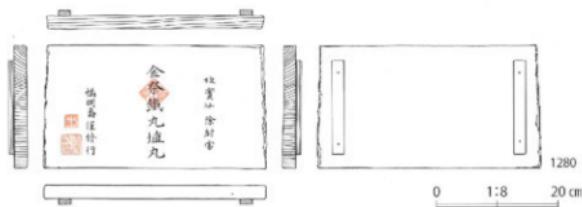
対して垂直に書かれ、押印されていた。

墨書文字

外蓋1278は、中央上部に「土」、下部に「物」と書かれているのが確認できた(第255・256図)。2つの文字の間にはわずかな墨書の痕跡と、13cmほどの空白があることから、本来は「土□□□物」というような5文字の言葉が書かれていたと推測する。空白部分は表面が劣化したことで墨書文字が消失した可能性が考えられる。

内蓋1280には右側から3列に渡って文字が書かれていた(第258・259図)。右側には一文字約1.5cm四方のサイズで「□故實法除尅害」とあった。この文は「故實に□□□、尅害を除す法」と読み下すことができ、それにより「故」の上にはもう一文字書かれていたと推測している。「故實に基づいて害となるものを取り除く法」という意味であると推察すると「故

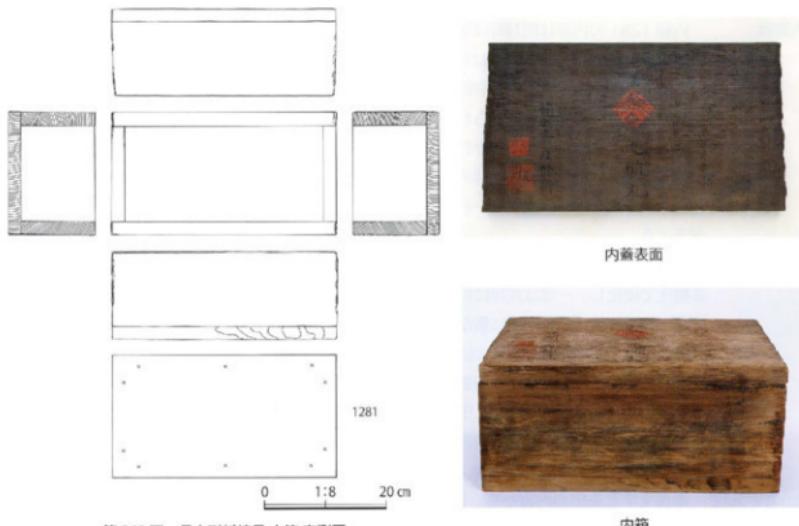
	実に依(撫)りて「故実を為(成)して」などが考えられ、「依」「撫」「為」「成」「基」などの文字が入る可能性が考えられる。 ^④
	中央には「□金祭鐵丸埴丸」とあり、一文字は両側の列よりも大きい約2.5cm四方サイズで書かれていた。「金」の上にはもう一文字書かれていたと考え、「土」ではないかと推測する。
	左側は右側とはほぼ同サイズの文字で、「橘明齋謹修行」とあった。「橘明齋」とは人名であり、「橘」が姓、「明齋」が名である。「橘明齋が執り行つた修行(もしくは祈禱)」という意味合いではないかと推測する。これらの文字は整った楷書体で書かれている。木材の表面に文字を書くことに長けた、あるいは手馴れた人物による墨書きであるといふことが言えよう。
	また、旧字体を使っている漢字が目立ち、右側の「実→實」、「剋→魁」、中央の「鉄→鐵」、左側の「明」は「日」が「口」として書かれている。「謹」は草冠の下に「一」が足されているなどが挙げられる。
朱印	内蓋には墨書きの他に朱印が3ヶ所押印されていた(第259図)。中央文字列の「金祭誠」に重なるように押されているのは、「上金両來」と篆書体で刻まれた印である。「十金」と「両來」を縦方向に配置しそれを2列に並べるもので、3.6cm四方の正方形の枠の中に入れられている。枠は四隅がわずかに丸みを帯び、文字の部分が凹んでいる陰刻でつくられている。この印は「十」の角を上にして、菱形状に押印されている。「十金両來」の「十金」は「□金祭」と結び付けて考えられ、また、「鐵丸」「埴丸」とも関連していると考えている。
	他の2個は文字左列の左側に、縦方向に並んで押印されている。いずれも四隅が丸味を帯び、上部の印は陰刻で、2.1cm四方の正方形形状を呈する。一見どのような文字が彫られているのか分からぬが、この字体は中国文字と思われ、「明齋」と刻まれている。「橘明齋」を表したものと思われる。下部の印は陽刻で、「斑鳩神祇司」と刻まれている。「斑鳩」と「神祇司」を縦方向に書き、それを2列に並べて、3.3cm四方の圓丸正方形の枠の中に入れている。「十金両來」と同じく篆書体で彫られている。
内容物	内箱1281の内部は開封時ほぼ満水の状態であり、地中で浸み込んだ水に保護される形で内部が残存していた。内部構造は複雑で、まず、内箱の内法に合うように切られた青竹1283・1284が半裁されており、その間に鉄製の球体1282が置かれていた。青竹の両側には紐が幾重にも巻かれていた痕跡が見られ、竹の外側にほどけた紐が落ちていた(第261図)。鉄球は箱の中心ではなく右寄りに置かれており、空いた左側には十が山状に積もっていた。この土は鉄球と同様のサイズで球状に固められていたものが崩れたと思われる。鉄の球と土の球が納められていることは、内蓋に書かれた「□金祭鐵丸埴丸」の「鐵丸」と「埴丸」が表していたと言えよう。
	鉄球の下部には繊維状の痕跡が残されていた(第262図)。繊維状の物体は鉄球の鉄分による酸化で硬化し、一部は鉄球に付着していた。繊物の布口や折り重なる状態を確認することができ、鉄球を納める際に下に敷かれた座布団のようなものではなかったかと推測している。鉄球と土球が挟んでいた竹には、様々な印が付けられている(第263図)。2つの球を挟む際、球と竹が密着する位置を球の円弧形に合わせて挟っている。挟った中心には墨書きが見られ、球をその位置に合わせて安置する印であったのだろうと思われる。また、竹の両側に幾重にも巻かれていた紐の位置も、竹の表面に墨書きで印を付けていたのを確認した。これら墨書きによる印は、長方形祈禱具が入念な準備、段階を経てつくり出されたことを物語るものである。
製作者について	墨書き文字と朱印の内容から、祈禱具の由来を辿っていくことが可能であった。まず、この祈禱具を製作した、もしくは依頼を託された人物は「橘明齋」という人物であろうと考える。



第258図 長方形祈禱具 内蓋実測図

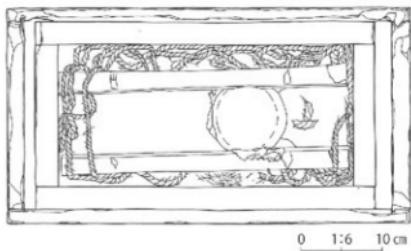


第259図 内蓋墨書文字・朱印

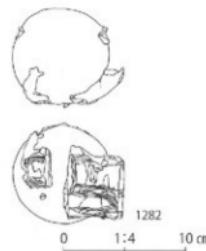


第260図 長方形祈禱具 内蓋実測図

内蓋



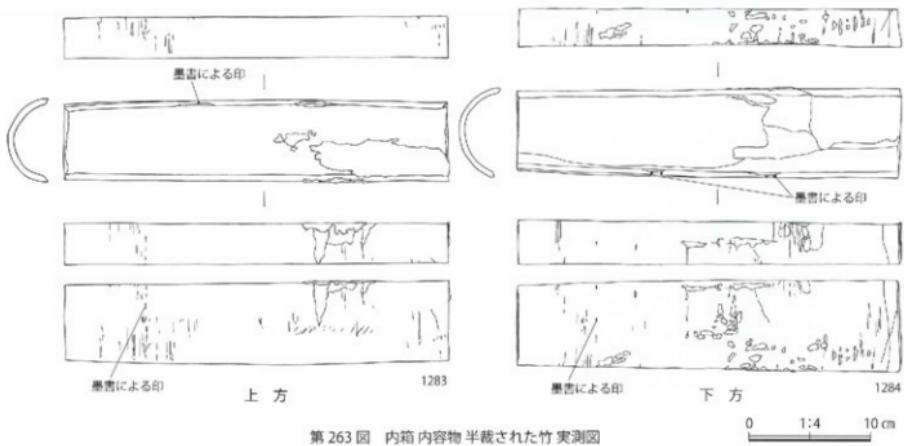
第261図 内箱開封状況実測図



第262図 内箱内容物 鉄球(鉄丸)実測図



内箱 開封状況



第263図 内箱内容物 半裁された竹 実測図

実際に明喬自身がつくり、祈祷を行ったかどうかまでは判別できないが、氏名が銘打たれることは祈祷の中心的な存在であったと考えられる。

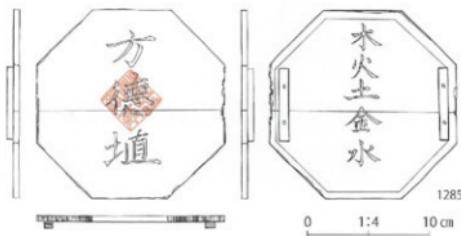
祈祷・風水・家相などの様々な分野を調べたところ、「松浦東鶴」⁽⁹⁾という人物に当たった。松浦東鶴は大坂で易学・易古学・家相学などを職にし、「松浦流」という家相学の流派を編み出した人物である。東鶴は「橘」姓を名乗っていたことがあり、斑鳩を拠点の1つとして活動していたと記されている。東鶴には「明喬（茂斎・明高とも）」という名の息子がいたことも記されている。東鶴の息子・明喬は、本遺跡で出土した祈祷具に名を刻まれた同一人物と考えてほぼ相違ない。

長方形祈祷具の構造は他に類を見ないものであり、どのような意義を込めて製作されたのかを把握するのはかなり困難である。祈祷具の製作過程を記した書物や、箱の内部構造を記録したものなどは現時点では見つけることができない。鉄の玉を鍛えて地中に埋める祈祷法の記述は見られるが、具体的にどのような方法で行うのかまでは書かれていない。⁽¹⁰⁾また、祈祷具の中身を公にせずに製作していた可能性も考えられる。製作法は口伝に近い形で伝え継がれていたか、もしくは製作したのは一度きりであったか、様々なケースが考えられる。

SK07：木箱埋納土坑（第264～267図）



蓋表面



第264図 八角形祈祷具 蓋 実測図



蓋裏面



第265図 蓋墨書文字・朱印

SK07

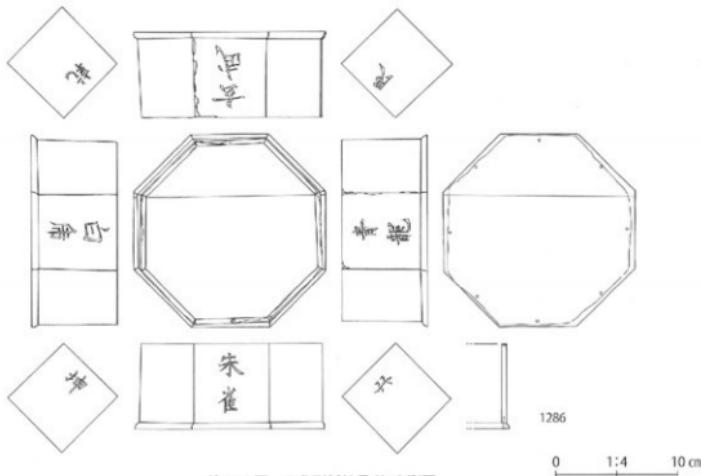
SK07は調査区最南端に位置する。SK07を検出したのは第4遺構面であるが、土坑内に納められていた遺物の年代が第1遺構面の年代と合い、第1遺構面の礎石建物跡SB01・02との関係性が強く想定されるために、この面で取り扱うこととした。これはSK06と同様の措置を取ったものである。

SK07は調査区最南端に位置する導水施設SX06（第4遺構面・第403図）を調査中に検出した土坑である。調査区南壁において上層から掘り込まれた土坑の断面を確認した。土坑内には木製の八角形状の箱が水平に埋められていた。

SK07出土遺物（第264～267図）

箱

木製箱1286は蓋1285が付くもので、一辺約6.4cmを測る面を8面持つ特殊なつくりで



第266図 八角形祈禱具 箱実測図

乾 白 坤 朱 隅 青 良 玄
児 雀 龍 武

第267図 侧面墨書き文字

0 1:2 5 cm



蓋箱

箱内容物

箱「朱雀」面

- ある。蓋を含むすべてのパーツは厚み 0.4 ~ 0.6cm で合わせられていた。
- 蓋**
- 蓋 1285 は箱底面と同一サイズの八角形の板が使われている。内面には箱の内法に合わせて「かえし」を 2ヶ所付けており、目釘 2本ずつで固定されていた。箱 1286 は底面の八角形板に側板 8枚が目釘各 1本ずつで固定され、側板 8枚は接着剤等は使用せずにつくられていた。
- 墨書文字・朱印** 蓋の表・裏面、箱の外面 8面にはそれぞれ墨書文字が書かれていた（第 265・267 図）。蓋の表面中央には一文字約 3.5cm 四方の大きさで「方徳埴」とあり、「徳」は旧字体「徳」と書かれていた。また、「徳」の真上に重なるように、長方形祈祷具に押されていた朱印「十金両来」とほぼ同一のものが、同じく菱形状に押印されていた。
- 蓋の裏面中央には一文字約 2.3cm 四方の大きさで「木火土金水」と書かれていた。
- 箱の外面 8面には「玄武」「艮」「青龍」「巽」「朱雀」「坤」「白虎」「乾」と書かれていた。旧字体での表記が多く、「玄武」の「武」内の「止」が「正」に、「青龍」の「龍」内右側一部分、「虎」は「庸」と書かれていた。
- 内容物**
- 「玄武」と「朱雀」が書かれた側板の上面には、目釘の痕跡が各 1本ずつ見られた。また、蓋の同位間に目釘が見られることから、箱と蓋は、対角線状の目釘 2本で閉じられていたと考えられる。箱の内部には土の塊りが崩れたような状態で入っており、その中央部分が山状に盛り上がっていた。おそらく上の球体が崩壊したものではないかと推測する。地中の水分が箱の中に染み入り、球体だった土は形状を留めることができなくなったと思われる。箱の内部に上で形成された球体が入っていたという推測は、蓋の表面に「方徳埴」と書かれていることを考慮して述べている。「埴」は土を示す文字であり、「十金両来」の「土」と考えられる。
- また、箱内でわずかな量の金箔を確認した。金箔は主に蓋の裏面に付着しており、箱の底部でもごくわずかに採取した。金箔を「金」の要素として取り入れるにはやや説得力に欠けるとも思われるが、箱の中に「土」と「金」を詰め、それを地中に埋めるという行為は長方形祈祷具と同様であると言えよう。
- 検出時、「玄武」面は北側を向けて埋められていた。陰陽五行説や四神思想では「玄武」は北、「青龍」は東、「朱雀」は南、「白虎」は西を司るものとして存在する。八角形祈祷具は四神が各方向に合わせて埋められていた。四神の間に書かれている「艮」「巽」「坤」「乾」は、方角や時間、暦を表す八卦思想の一部であり、四神思想との結びつきは強いものと言えよう。また、蓋の裏面に書かれていた「木火土金水」は、陰陽五行説に基づく五行循環の理りを表す言葉である。⁽⁵⁾
- 両祈祷具に押された朱印は同一のものである可能性が高く、また、墨書文字の字体・筆跡が同一人物によるものと推測されることから、長方形祈祷具に名を刻んだ「穢 明庵」が八角形祈祷具についても関与していたと考えられる。2つが同時期に埋められたかどうかを断定することはできないが、上記の事象は有力な要素であると考えている。さらに特筆すべきことは、両祈祷具が出土した位置についてである。建物跡 SB01・02 を中心として南北を軸にした場合、長方形祈祷具は北東に、八角形祈祷具は南西に埋められていた。この方角は陰陽五行説での「鬼門（北東方向）」と「裏鬼門（南西方向）」の位置に合致する。意図的に方角を合わせて埋める位置を選別したとも考えることができ、両祈祷具が同一の祈祷・祭祀において使われた可能性も示唆している。両祈祷具と共に通して言えるのは「土」と「金」を地中に埋めていることである。これは五行思想の相生の理に沿っており、「土」→「金」への循環を具現化したものが今岡山上した祈祷具に反映されていると考えている。
- 祈祷具は、吉相を願うためのものであったと思われる。⁽⁶⁾ 両祈祷具は屋敷地を挟むような位

箇関係で鬼門一裏鬼門の方角に埋納されていたことから、家屋に対する吉相、もしくは家運長久・無病息災・子孫繁栄などの住人に対する広義の願いを叶えるものであったと考えられる。幕末期は様々な民間信仰が流行り広まっていた時期であり、五行思想だけではなく、風水的な意味合いも込められていたのではないかと推察する。

第1遺構面 遺構外出土遺物（第268・269図）

国産陶器

1287～1290は在地・布志名焼の陶器である。布志名焼はベージュと黄色を混ぜ合わせたような黄地釉と、薄暗い緑色と灰色を混ぜ合わせたような青地釉のものが代表的であり、1287・1289・1290は前者、1288は後者である。1287は筒形小碗で、緑色釉が口縁端部に部分的に掛けられる。1290は橙色を呈する土鍋で、外面底部に煤が付着している。1289は完形の鉢で、口径23.3cm、器高12.3cmを測る大形品である。外面は濃い赤茶色、内面は黄色を呈する。

1291・1292は産地不明の陶器で、1291は扁平な香炉、1292は擂鉢である。

国産磁器

1293～1305は肥前磁器である。1293は紅猪口、1294は丸形小杯、1295は白磁の桶形小杯である。1297は平形中碗で、外面には色絵の痕跡が見られるが赤色の花文を残すのみである。1299は半筒形中碗で、窓絵内に赤絵の龍が描かれている。1300は合子で、省略したみじん唐草文が描かれる。1301は端反形の中碗蓋で、赤・緑・金色を使った色絵で鳥や花、草など様々な文様を描いている。1302は大碗で、断面には漆縫ぎで補修した痕跡が見られる。1303は丸形底広の小皿で、見込みに稻穂が描かれる。1304は蜻唐草文が描かれた銚子の持ち手である。1305は置物の最下部の破片で、人形の足部分と推測するが全体像は判明していない。

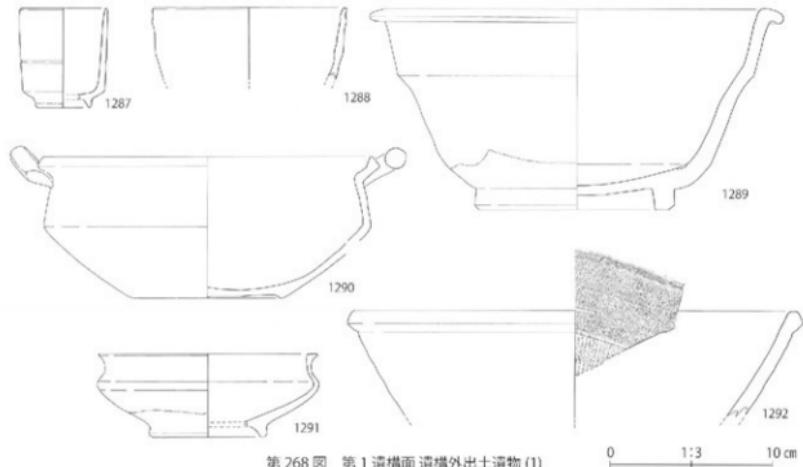
土師器皿

1306・1307はロクロで成形された土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。

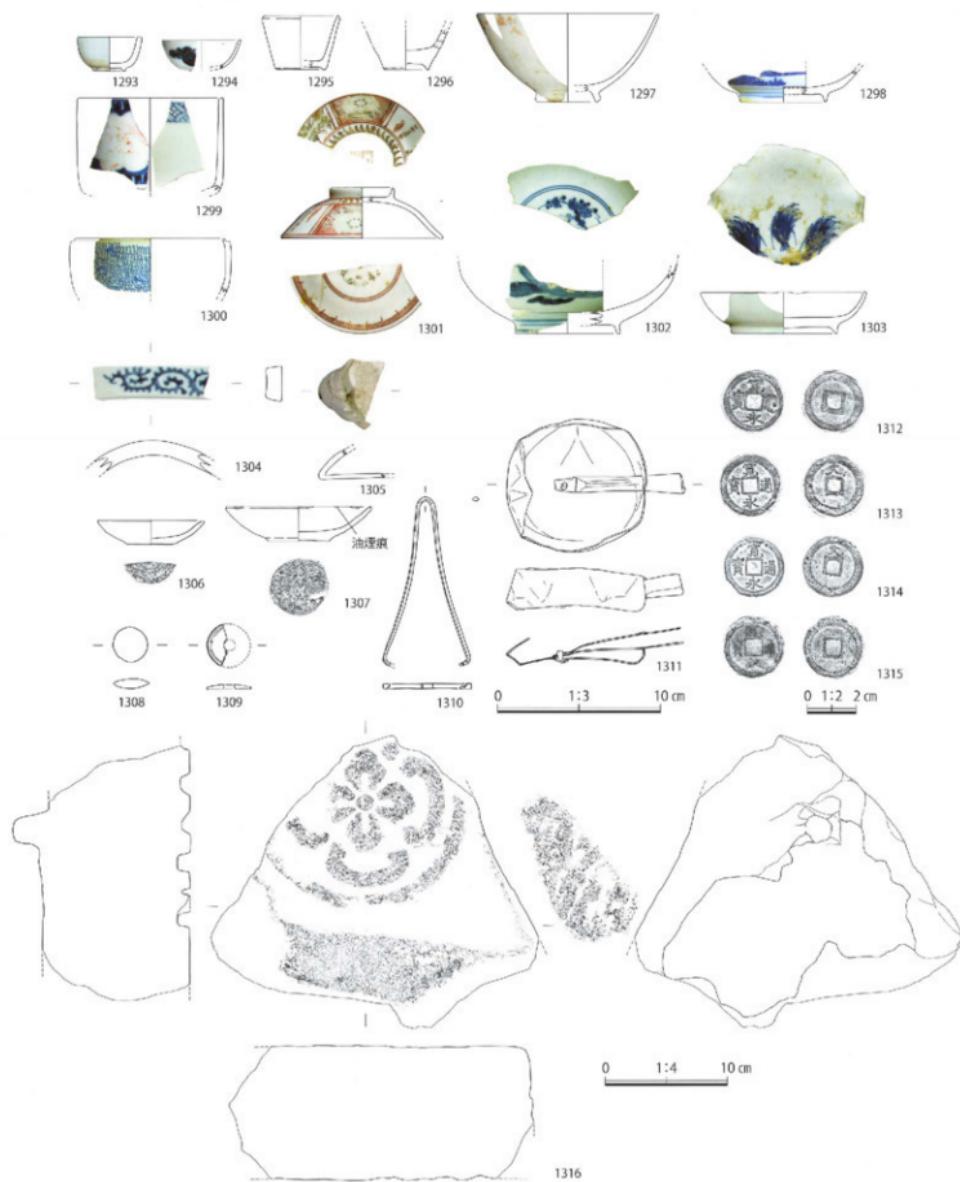
1307は口縁端部に油煙痕があり、灯明皿として使われていたと思われる。

石製品

1308は直径2.0cmを測る黒色の碁石である。1309は滑石製の紡錘車で、復元直徑2.6cm



第268図 第1遺構面 遺構外出土遺物(1)



第269図 第1縫横面縫横外出土遺物(2)

を測る。中央部分に直径 0.6cm の穿孔が開いている。

金属製品 1310 は長さ 10.4cm を測り、鉄製の火バサミのような形状を呈する。1311 は銅製の柄杓である。1312～1315 は寛永通宝で、1312 は古寛永、1313・1314 は文鏡、1315 は新寛永である。

瓦 1316 は来待石製の鬼瓦の一部で、中央に「丸に木瓜」紋が刻まれている。

第3節 第2遺構面

第2遺構面の概要 第2遺構面では近代の擾乱を受けた範囲は狭まり、それ以外で以下の遺構を検出した。遺構面は標高 1.98～2.06 m を測る。

第2遺構面の遺構は、屋敷境石積溝 SD01(第271図)を西半分の範囲で検出した。調査区南側では建物跡 SB03～07(第272～274図)、遮蔽物かと思われる SA03・04(第272・275図)、廃棄土坑 SK08(第280図)を検出した。調査区中央部分では石積溝 SD02(第279図)、廃棄土坑 SK15、調査区北～西端にかけては様々な大きさの土坑を多数検出した。

第2遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、18世紀前半～後半と想定している。

SD01：屋敷境石積溝（第271図）

SD01 第2遺構面での SD01 は調査区西端から東へ約 28 m の範囲で検出した。以東は石積は見られず、直径 0.3～1.0 m の不定形土坑を多数検出した。

石積は北側のみの検出で、南側には小さな石が点在し、溝の掘り方がわずかに確認できた。石材は主に白大海崎石を使用しており、大小様々なサイズの石が検出された。南側の石積がわずかに見られる中央部分において溝の幅は 0.6～0.8m を測る。石の天端の標高は西側が高く、東側が低いことから、SD01 は西から東へ水が流れているものと思われる。

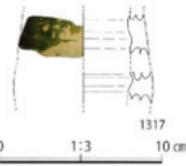
SB03：建物跡（第272・273図）

SB03 SB03 は調査区南東端に位置する建物跡である。真北から東に 4 度傾く軸で、東西 4 間(1 間 2.0 m) × 南北 2 間(1 間 2.0 m) の範囲を検出した。礎石の並びが明確なのは C-C' の東側のみで、他は 1 間 2.0 m の距離で割り出した推定ラインである。

礎石 1 からは以下の遺物が出土している。

礎石 1 SB03 内 級石 1 出土遺物（第270図）

軟質施釉陶器 1317 は产地不明の軟質施釉陶器で、香炉か火入れの可能性があるものである。

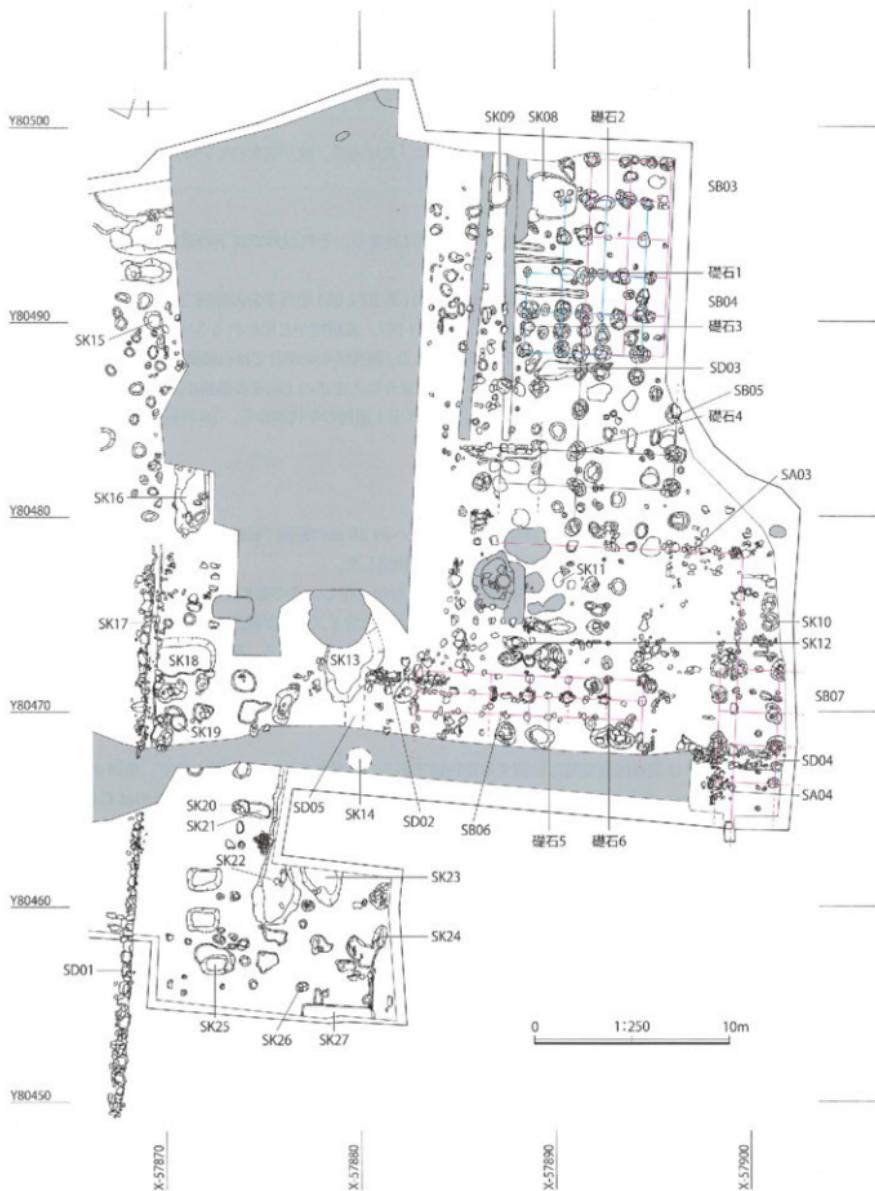


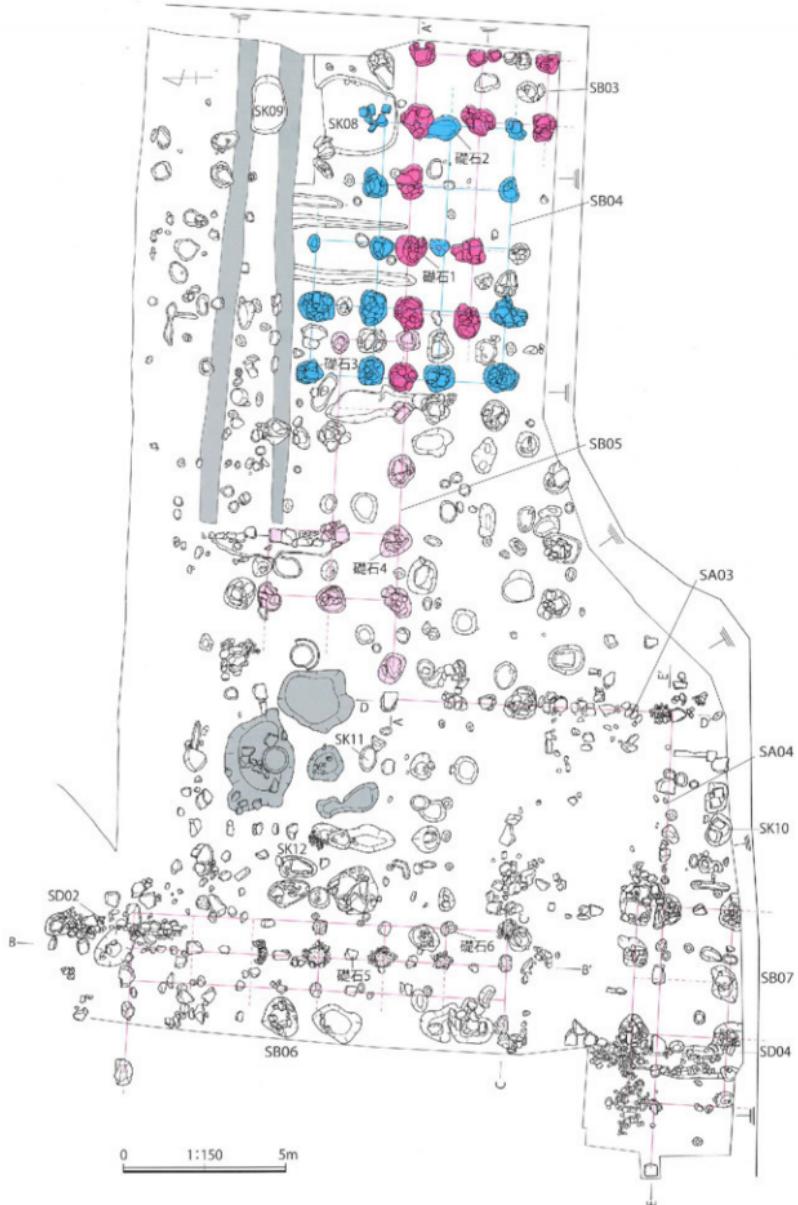
第270図 級石 1 出土遺物

SB04：建物跡（第272図）

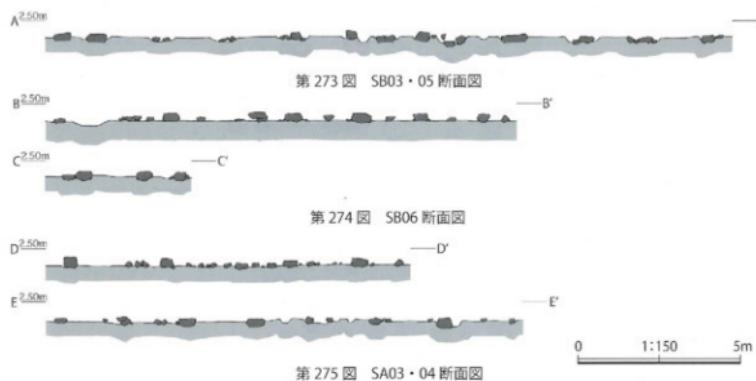
SB04 SB04 は SB03 に重なる位置にある建物跡で、東西 4 間(1 間 2.0 m) × 南北 3 間(1 間 2.0 m) の範囲を検出した。SB03 から北側に半間(1.0 m) 移動しており、建物の軸は SB03 と同一である。

SB04 を構成する礎石 2・3 からは以下の遺物が出土している。礎石 2 は東端にある礎石の抜き取り痕、礎石 3 は SB04 の西側にあたる礎石で、掘り方内には 50～80cm 大の石が 4 個入れられている。遺物はいずれも肥前磁器が出土している。

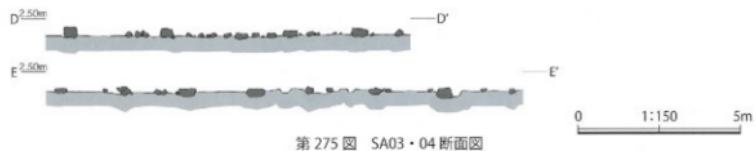




第272図 SB03～07平面図



第274図 SB06断面図



SB04内 磕石2・3 出土遺物（第276図）

磕石2 国産磁器
磕石2 1318～1320は肥前磁器である。1318は浅半球形小碗である。1319は腰張形小碗で、外面には赤・金色を取り入れた色絵で鳳凰が描かれる。1320は人形の胴部部分の破片で、外面には服の模様かと思われる色絵が描かれているが、全体像は判明していない。これらは概ね九陶IV期（1690～1780年代）のものである。

磕石3 国産磁器
磕石3 1321は肥前磁器で、胴部部分の残存径17.3cmを測る水指である。外面には菊花文が描かれる。九陶III期（1650～90年代）を示す。

SB05：建物跡（第272・273図）

SB05 SB05は第1遺構面においてSB01・02が建っていた場所に位置する建物跡である。SB05の範囲は西側に移動しており、SB03・04と幅は変わらない。東西5間（1間2.0m）×南北2間（1間2.0m）の範囲で検出しているが、磕石がない部分が多く見られることから、あくまでも推定ラインであると付記しておく。また、建物範囲は現状よりも広がると思われる。

SB05を構成する磕石4は磕石は残っておらず、根石と思われる20～40cm大の石が数個入れられている。ここからは肥前磁器が出土している。

磕石4 SB05内 磕石4 出土遺物（第277図）



国産磁器 1322は肥前磁器の白磁小壺である。口径5.2cm、器高5.4cmを測るもので、外面は型打陽刻によって花の文様が象られている。白磁であるが真っ白ではなく、やや黄身がかった色を呈する。

SB06：建物跡（第272・274図）

SB06 SB06は調査区西端に位置する建物跡である。SB03～05と建物の軸はほぼ同一である。東西2間半（1間1.95m）×南北6間（1間1.94m）の範囲で検出しており、西側へさらに続いているものと思われる。B-B'東側には同一軸で並ぶ礎石列があり、B-B'と半間（0.975m）の間隔が空いていることから、この例は建物の庇部分ではないかと想定している。

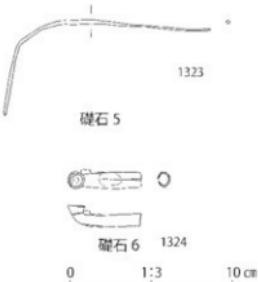
B-B'・C-C'内の礎石は40～50cmの大形石を使用しており、石材は島石⁽⁷⁾である。礎石の下には拳大の栗石が敷き詰められていた。このような構造の礎石は第2遺構面ではSB06のみに見られるものである。また、礎石間の中心部には30～50cm大小の小ぶりな礎石が均等間隔で置かれている。これらは安山岩（大海崎石）⁽⁸⁾であり、細い柱を支えるための束石であろうと思われる。

SB06を構成する礎石5・6の下部からは以下の遺物が出土している。

SB06内 級石5・6 山上遺物（第278図）

礎石5 金属製品 級石5 1323は最大長12.8cm、直徑0.2cm、重量2.83gを測る真鍮製品である。全体の3分の1部分で約90度折れ曲がり、長方が先細る。1262と類似する形状を呈する。

礎石6 金属製品 級石6 1324は真鍮製の煙管で、雁首部分である。長さ4.5cm、火皿径1.0cm、小口径0.9cmを測る。



SB07：建物跡（第272図）

SB07 SB07は調査区南西隅に位置する建物跡である。SB06の南側にあり、建物の軸は前述の建物跡とほぼ同一である。東西3間（1間2.0m）×南北1間（1間3.0m）の範囲で検出しており、南側へ続いているものと思われる。

SB07は1間間隔が3.0mであること、また、礎石の掘り方が大形であることなどが他の建物跡と異なる点である。

SA03・04：壇跡（第272・275図）

SA03・04 SA03（D-D'）は建物跡SB05の西側に隣接する礎石列である。軸は周開の建物跡と同一で、南北4間（1間2.1m）の範囲で検出した。SA03と直角に繋がる形で、SA04（E-E'）を東西7間（1間2.02m）の範囲で検出した。

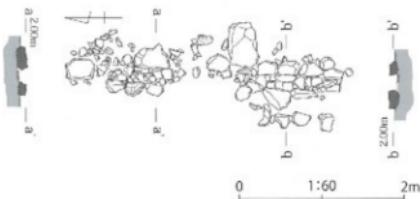
SA03・04の1間間隔は建物跡の1間よりも若干広いといえる。また、SA03・04の付近に建物を構成する礎石が見当たらず、この2本が独立しているように見えることから、壇のような遮蔽物であった可能性が考えられる。

SD02：石積溝（第279図）

SD02は調査区西側、SB06北側に位置する石積溝である。南北約4.3m、溝の幅は0.2mを測る。石材は20～30cmの大青海崎石を使用し、1段積みで高さは約0.1mを測る。

溝の底面には平瓦の破片が隙間なく敷き詰められていた。

SD02の天端・瓦敷の底面レベルは南側より北側の方が約5cm低くなっていることから、水は南から北に向かって流れていたものと思われる。北側には屋敷境石積溝SD01が位置している。雨水や生活排水は様々な水路を通じて最終的にSD01に流れ落ち、排水されるしくみになっていたと思われる。



第279図 SD02 平面図・断面図



SD02（北東から）

SK08：廃棄土坑（第280図）

SK08は調査区東端、SB03の北側に位置する長方形に近い形状を呈する廃棄土坑である。南北約2.7m、東西約2.5m、深さ約0.8mを測る。

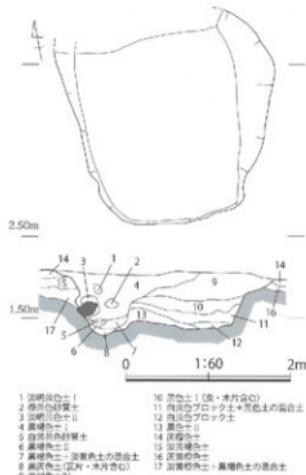
第13層は黒色土を呈するゴミ層であり、その上の第11・12層（白黄色ブロック土）でゴミを埋めていると思われる。第10層で再びゴミを入れ、その上から第9層で埋めている。最終的に第1層～第8層を掘り込んで、SK08は終了したものと思われる。

SK08が掘られた位置は第3造構面でも廃棄土坑SK41を検出している（第301図）。SK41に比べて規模は縮小しているが、同じ場所に廃棄土坑を掘り込んでいる。

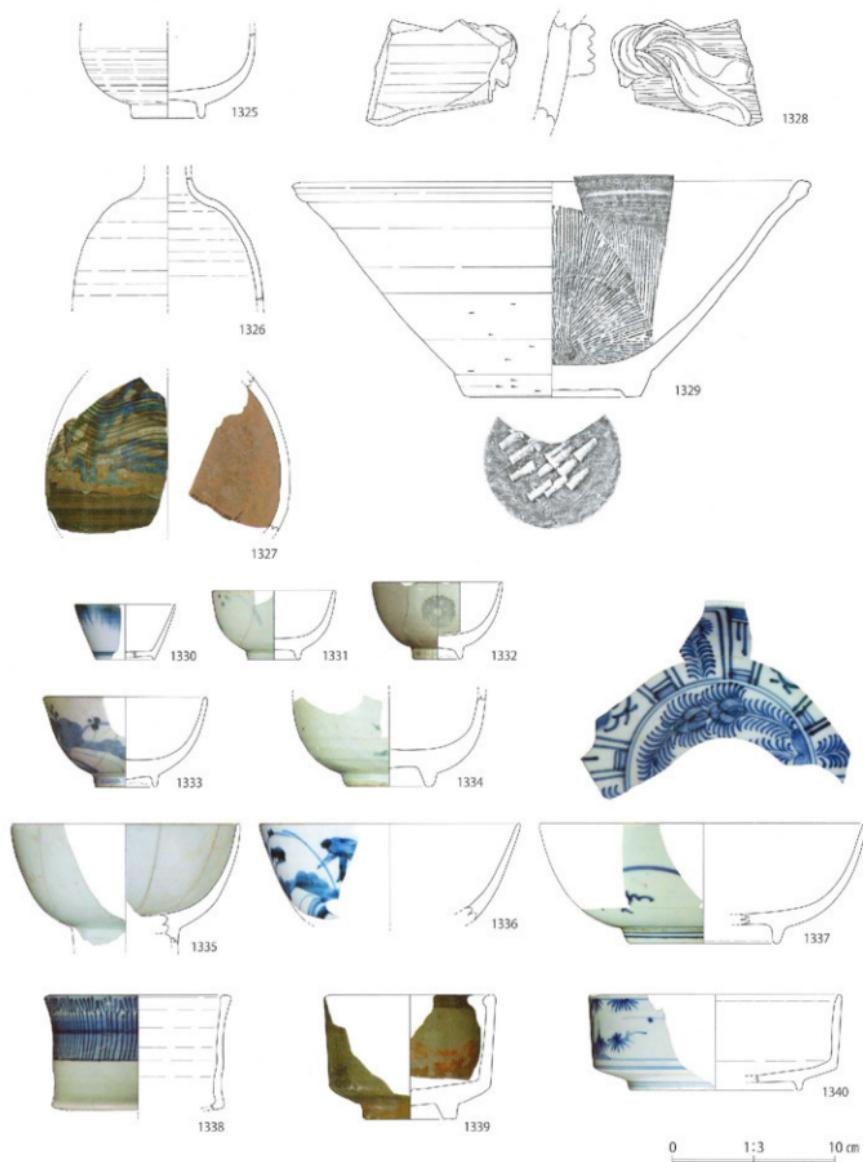
SK08からは陶磁器・土師器皿・焼塩壺・漆器・箸などの食器類、焰烙などの調理器類、金属製品・古錢・瓦などの生活用品が出土している。これらは主に陶磁器の年代測定から、九胸IV期（1690～1780年代）のものと思われる。

SK08 出土遺物（第281・282図）

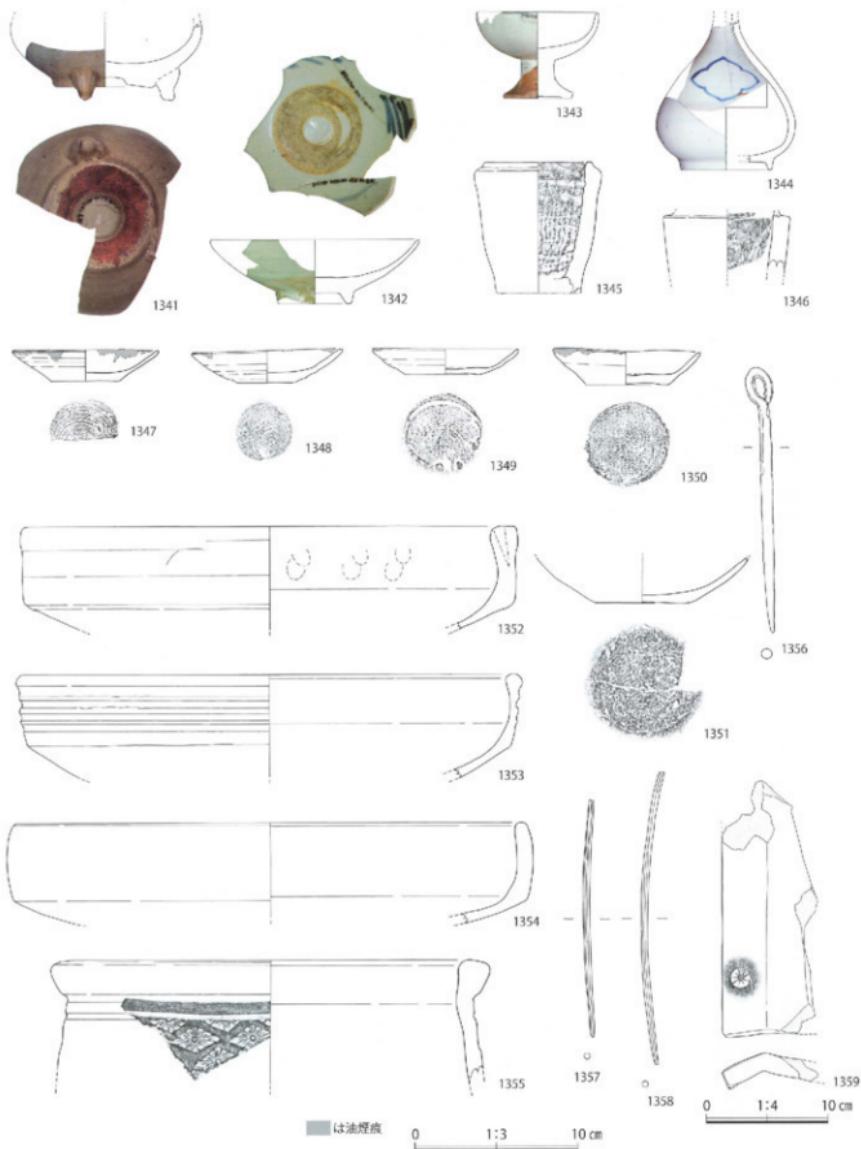
国産陶器
1325・1327は肥前陶器である。1325は京焼系の腰張形中碗で、九胸V期を示す遺物である。1327は胴部最大径15.4cmを測る大瓶である。外面には間隔の広い刷毛目文が全周し、その上から青緑色の釉薬が流れ落ちるように掛かる。



第280図 SK08 平面図・断面図



第281図 SK08出土遺物(1)

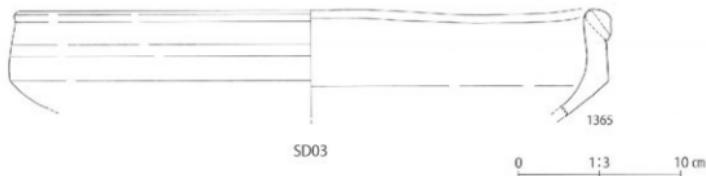


第282図 SK08出土遺物(2)

- 1326は備前の可能性が考えられる陶器の中瓶（人形徳利）である。頸部は細く、肩部が大きく張り出す。
- 1328は産地不明の陶器で、鉢胴部の装飾部分か把手部分と思われる。布もしくは紐を結んだ状態を精巧に表現している。
- 1329は須佐唐津の描鉢で、口径 30.5cm、器高 13.3cm を測る。高台内には須佐唐津特有のカンナ痕が見られる。
- 国産磁器**
- 1330～1344は肥前磁器である。1330は雨降文が描かれる桶形小杯、1331は波佐見焼の丸形小碗、1332は丸形小碗、1333・1334は丸形中碗で、1333は波佐見焼、1334は陶胎染付である。1335・1336は大碗で、1335は白磁で漆縫ぎによる補修の痕跡が見られる。1337は口径 20.1cm を測る浅丸形の中鉢で、漆縫ぎによる補修の痕跡が顕著に見られる。1338・1339・1341は香炉である。1338は青磁染付で、外面に柴垣文が描かれる。1339は陶胎染付、1341はくすんだ茶色に近い青磁で、蛇の口四型高台に足が3つ付く。1340は口径 15.3cm、器高 5.9cm を測る段重で、外面には笹文が描かれ、腹部に加工がないつくりである。1342は丸形底狭の五寸皿で、見込みに蛇の口釉剥ぎが見られる。1343は口縁部に兩ぶり文が描かれる仏飯器で、台底輪高台の形状を呈する。全体的に火を受けて白々としている。1344は腰丸形有首の髪山焼で、窓絵が枠のみ描かれる。窓絵は本来、中に赤絵を描くことが多いが、1344は何も描かれていない。
- 焼塙壺**
- 1345・1346は焼塙壺の身である。いずれもコップ型を呈する。
- 土師器皿**
- 1347～1351はロクロで成形された土師器皿で、底部はいずれも回転糸切りで調整されている。1347～1350は口縁部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使用したものと思われる。1351は口径 13.4cm、推定器高 2.8cm を測る大皿である。
- 土器**
- 1352～1354は焰窯で、1352は口縁部が肥厚して膨らみ、上部からの逆円錐状の穿孔が見られる。外面には煤が付着している。1353は口縁部付近に4条の沈線が廻り、外面に煤が付着している。1354は口縁部が内済して立ち上がる形状を呈する。
- 瓦質土器**
- 1355は瓦質土器の蓋で、口径 24.4cm を測る。口縁部下にはスタンプが押印される。
- 金属製品**
- 1356は鉄製品で、長さ 16.3cm、直徑 0.7cm、重量 28.27g を測る。形状は頭頂部を丸く曲げて穴を成形しており、工具の一種ではないかと思われる。
- 木製品**
- 1357・1358は筈で、1357は長さ 19.4cm、1358は 24.0cm、直徑はいずれも 0.5cm を測る。1359は右棧瓦の可能性が考えられる瓦で、側面にスタンプが押印されている。
- SK09：廃棄土坑（第 272 図）**
- SK09**
- SK09は建物跡SB03の北側に位置する梢円形の廃棄土坑である。東西長 1.6 m、南北 1.1 m、深さ 0.6 m を測る。遺物は肥前陶磁器が出土しており、時期は九陶IV期（1690～1780年代）を示す。
- SK09 出土遺物（第 283 図）**
- 国産陶器**
- 1360・1361は肥前陶器である。1360は口径 11.6cm、器高 7.5cm を測る腰張形中碗で、外面は細かく波打つ刷毛目文、内面はやや乱れた細かい刷毛目文が施され。1361は推定口径 31.7cm を測る描鉢で、釉薬は掛かっていない。
- 国産磁器**
- 1362～1364は肥前磁器である。1362は丸形小碗、1363は丸形小杯、1364は口縁端部外側面に四方櫛文が描かれる桶形猪口である。



第283図 SK09出土遺物



第284図 SD03出土遺物

SD03: 素掘溝（第272図）

SD03は建物跡SB03～05が重なり合う部分に位置する素掘溝で、南北長2.7m、東西幅0.7～1.0m、深さ0.3mを測る。遺物は培塿が1点出土している。

SD03 出土遺物（第284図）

土器 1365は培塿で、口径34.7cmを測る。口縁端部は粘土を折り曲げて丸くしている。

SK10～12：その他の遺構（第272図）

第2遺構面の建物跡は東側にSB03～05、西側にSB06・07が見られる。建物範囲が途切れている中央部分で検出した多数の土坑の中から、SK10～12について触れる。

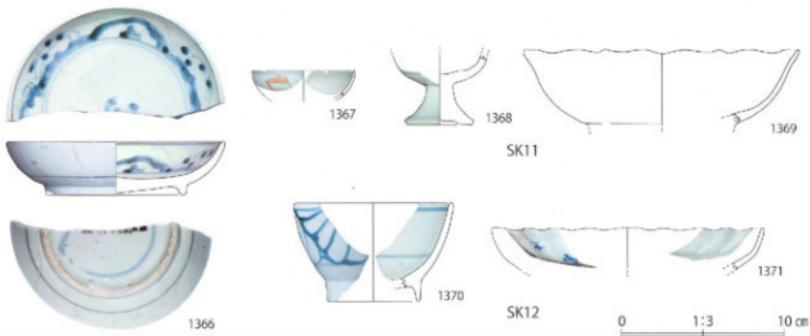
SK10はSB07の東側に位置し、調査区最南端で検出したいびつな円形土坑である。直径0.7～0.9m、深さ0.25mを測り、内部には大海崎石が2個入れられていた。遺物は肥前磁器が出土しており、時期は18世紀前半代を示す。

SK11はSB05とSB06の中間辺りに位置する楕円形土坑である。東西長0.78m、南北幅0.5m、深さ0.2mを測る。遺物は肥前磁器が出土しており、時期は九陶IV～V期（1690～1860年代）のものである。

SK12はSK11から約4mの北西方向に位置する楕円形土坑で、南北長1.1m、東西幅0.65m、深さ0.15mを測る。内部には70cmの大形石が入れられていた。遺物は肥前磁器が出土しており、九陶IV～V期（1690～1860年代）を示す。

その他の遺構 出土遺物（第285図）

SK10 1366は肥前磁器・波佐見焼の丸形底広五寸皿で、くらわんか時代のものである。高



第285図 SK10～12出土遺物

国産磁器 台に砂が付着している。

SK11 1367～1369は肥前磁器である。1367は赤絵で羽子板と羽根が描かれた小碗、1368は台底輪高台の仏飯器、1369は口径16.9cmを測る白磁の変形鉢で、内面は型打陽刻で象られている。また、漆継ぎによる補修の痕跡が顕著に見られる。

SK12 1370・1371は肥前磁器である。1370は広東形中碗で、大きな菊文が外面を埋め尽くすように何個も描かれる。1371は口縁部が波打つ菊花形の五寸皿で、口鋸が見られる。

SK13：廐棄土坑（第271図）

SK13は調査区中央、石積溝SD02の北側に位置するいびつな楕円形の廐棄土坑である。東西残存長1.1m、南北幅1.8m、深さ0.8mを測る大形の土坑で、東側はSE02（第249図）に切られている。

SK13が掘られている位置は第3-1遺構面においても廐棄土坑SK52～55が掘られる場所である（第320図）。さらに第3-2遺構面でも廐棄土坑SK71・72を検出しており（第378図）、造成面を嵩上げしても、同じ場所に同じ性格の土坑を掘るという意識が続いていたことがわかる。

SK13からは陶磁器・土器・漆器・木製品・瓦など多数の遺物が出土している。遺物の時期は九胸II-2期からIV期の間で見られるが、年代の古いものは下層面を掘り込んだ際に上がってきたものと思われ、概ねIV期のものと考えている。

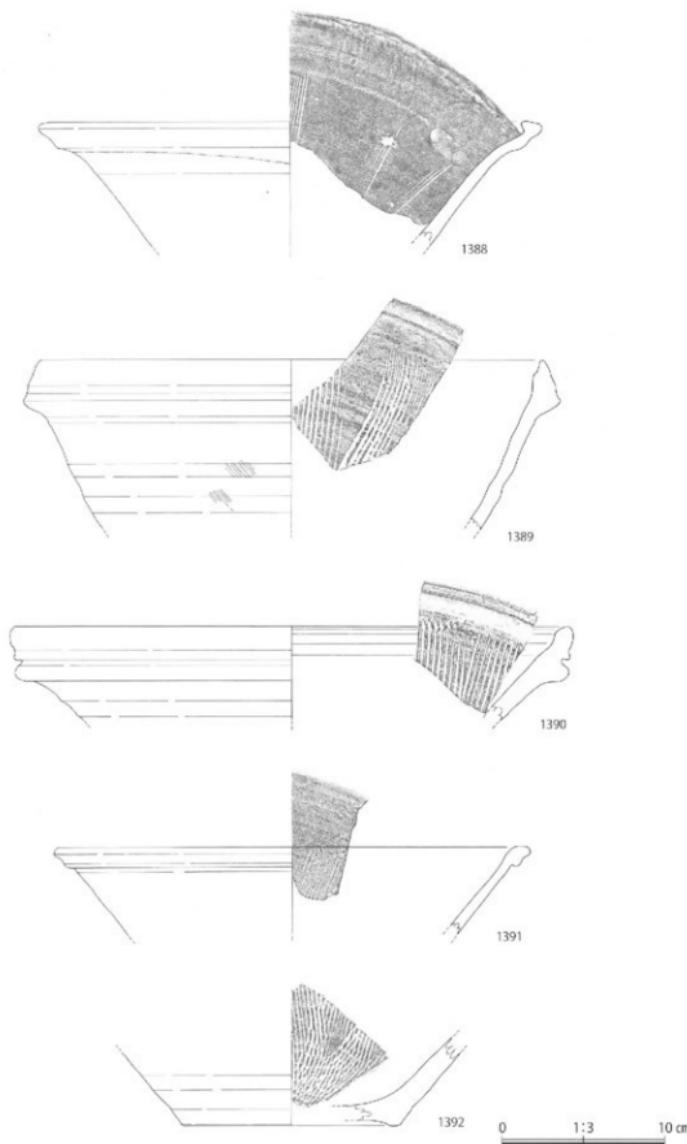
SK13 出土遺物（第286～289図）

国産陶器 1372・1375～1379・1381・1384・1385・1387は肥前陶器である。1372は京焼系の小形合子、1375は丸形小碗、1376は口径12.3cmを測る平形中碗、1377は口縁部が内湾する中碗で、上野・高取系の可能性も考えられる。1378・1379は大皿である。1378は口径28.5cm、器高7.8cmを測る三島手の大皿である。1379は高台に透かしが入る木盆形の大皿である。高台が2.5cmと高く垂直に立ち上がる。1381は片口の口縁部分、1384は中碗の高台部分である。1385は推定口径48.6cmを測る大形の甕か鉢である。口縁端部は内面に大きく張り出し、上面に水平面を持つ。1387は口径30.0cm、器高17.0cmを測る大形の植木鉢で、高台の内側に直径0.4cmの穿孔が1ヶ所見られる。

1373は京都・信楽系の中碗である。高台径が5.4cmと大きい。



第286図 SK13出土遺物(1)

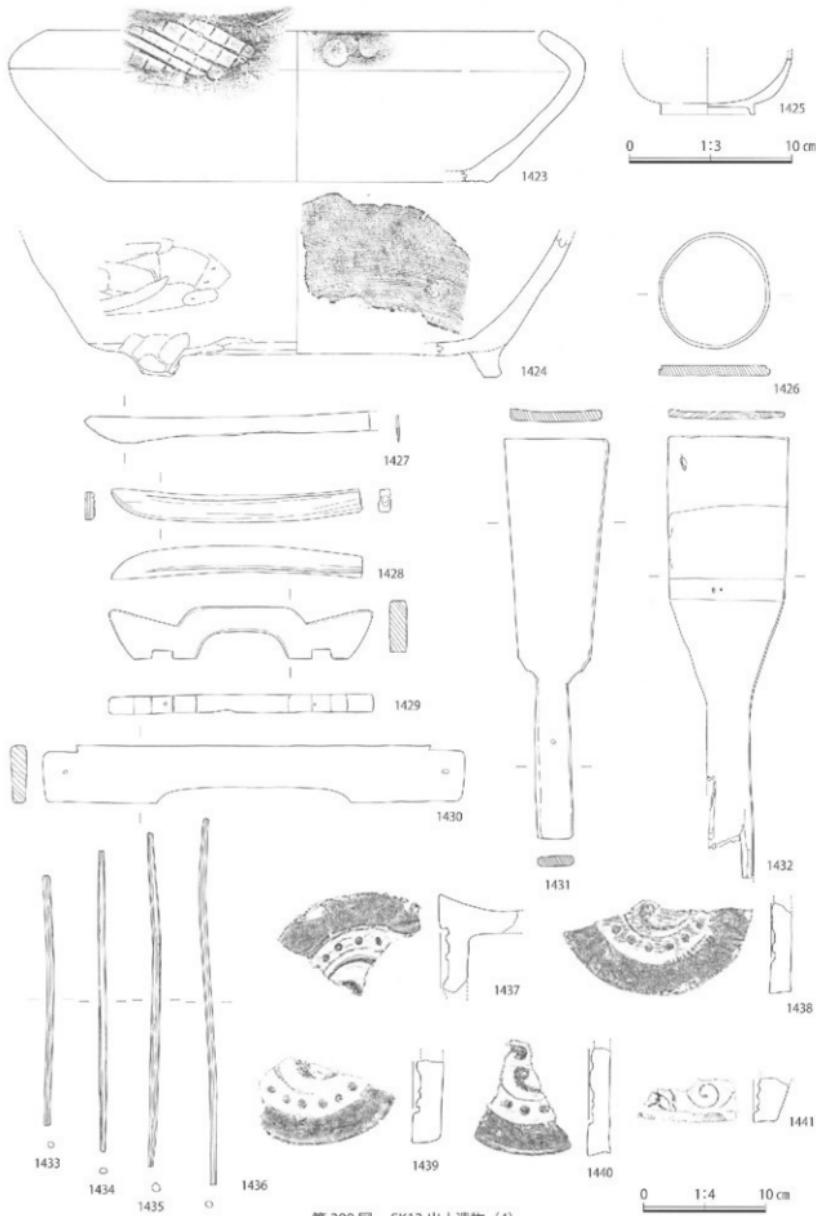


第287図 SK13出土遺物(2)



第288図 SK13出土遺物(3)

■は油煙痕
0 1:3 10cm



第289図 SK13出土遺物(4)

1374 は志野焼の向付である。高台部分のみの残存で、外内面ともに鉄軸が掛け分けられている。

1382 は在地陶器と思われる灯明受皿である。口径 8.6cm、受部径 11.3cm を測る皿で、灯明皿を乗せて使用したものである。

1380・1383・1386 は产地不明の陶器である。1380 は口径 12.1cm を測る蝶形の中碗で、口縁部は緩やかに外反する形状を呈する。1383 は瓶、1386 は口径 15.5cm、器高 10.5cm を測る大鉢で、口縁端部が内側に折れ曲がって肥厚する。口縁端部外面と腰部外面には、寸間隔に直径 1.2cm のボタン状の装飾が貼り付けられている。

1388～1392 は鉢である。1388 は肥前陶器で、口縁部は外傾して端部に水平面を持つ。

1389・1390 は備前陶器である。1389 は口径 30.4cm を測り、端部は三角形状の断面を呈する。1390 は口縁部に明確な溝を持ち、全体的に肥厚する。

1391・1392 は須佐吉津の様鉢で、1391 は薄手の口縁部、1392 は底部部分の残存である。

国産磁器

1393～1400・1402～1412 は肥前磁器である。1393 は型押成形を施した菊花形紅猪口、1394 は小环で、外面全面に縱方向の深い溝が刻まれている。1395 は端反形小碗で、高台無脚である。また、外面に「寿」の文字が書かれている。1396 は丸形小碗、1397 は腰張形小碗である。1398～1400・1402～1404・1410 は中碗である。1398 は氷裂文と萩文が描かれ、1399 は外面全面に菊花文が描かれ、高台内には「福」の銘が入る。1400 は赤・緑色の色絵が描かれている。1402・1403 はいずれも高台に砂が付着し、無文である。1404・1410 は半筒形で、1410 は外青磁であり、口縁端部内面に四方樺文が描かれている。1405 は蒸物の巻、1409 は小壺、1406～1408 は五寸皿である。1406 は見込みに手描きの五弁花文が見られ、高台内には「福」の銘が入る。1407 は丸形底広の青磁で、口鉢が見られる。1408 は丸形底広の蛇の目四型高台で、高台内に「福」の銘が入る。1411 は香炉、1412 は香炉の蓋である。直徑 1.6cm と 2.0cm の穿孔が 2 ケ所見られるが、元来どのような形状であったかは判明していない。

貿易磁器

1401 は中国磁器で、漳州窯系の中碗である。口径 13.6cm を測る。

土師器皿

1413～1422 は土師器皿である。1413・1414 は手づくね成形、1415・1416 は偽手づくね成形と呼ばれるもので、1417～1422 は底部が回転糸切りで調整されているロクロ成形である。1414・1416・1417・1419～1421 には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと考えられる。

土器

1423・1424 は土器で、火鉢である。1423 は口径 30.7cm、器高 9.3cm を測る人形で、口縁部は内面に強く倒れるつくりになっている。いずれも外面に煤が付着している。

漆器

1425 は腰丸形の漆椀である。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には赤絵、高台内に赤絵草文が描かれている。

木製品

1426～1436 は木製品である。1426 は曲物で、直徑 9.5cm を測る柄杓の底板である。1427 は片刃のヘラである。1428 は薙刀の模倣品と思われるもので、刀身部分が精巧につくり出されている。1429 は桶に取り付けられた把手部分かと思われる。1430 は脇か折敷の脚部ではないかと思われる。1431・1432 は羽子板で、1431 の把手には火起こしの痕跡が見られる。二次的に火起こしで使用したものと思われる。1433～1436 は白木の箸で、1433 は長さ 20.5cm と短く、1436 は長さ 30.0cm を測る長い箸である。

瓦

1437～1441 は瓦である。1437～1440 は軒丸瓦で、いずれも左三巴文が中央に入り、その周囲を珠文が廻っている。1438 は左三巴文・珠文の範囲に横方向の粗い線が入っている。

これは瓦を製作する際に使う木製の型が、劣化している状態のものを使ったことがわかる遺物である。使い古した型で瓦をつくるなければならなかつたということから、当時の時代背景などを知ることができよう。⁹⁹⁾ 1441は軒平瓦で、唐草文様が刻まれている。

その他の遺構（第271図）

ここで触れる遺構は、建物跡が広がる範囲から北側に位置するものである。東側は大部分が近代の搅乱を受けていたが、西側では遺構面を確認し、土坑などを検出した。

SD05・
SK14~27

SD05はSK13の西側に位置する溝で、東西方向に走る。SK14はSD05からさらに西側に位置する。SK15は調査区東側に位置する素掘の土坑で、SK16は調査区中央部分に位置するやや大形の楕円形土坑である。SK17は屋敷境石積溝SD01に隣接する小形土坑で、SK18は南北方向を長軸とする長方形に近い土坑である。SK19はSD01に程近い場所に位置する正円形の土坑で、底面は水平で板が敷かれていた。SK20～27は調査区西端に位置する一角で検出した土坑群である。以下、出土遺物の詳細を述べる。

その他の遺構 出土遺物（第290～293図）

SD05
国産陶器

SD05 1442は肥前陶器の端反形中碗で、外内面ともに比較的間隔の大きな刷毛目文が施文される。また、高台に砂が付着している。1443は須佐唐津の可能性が考えられる擂鉢である。口径 29.4cm を測る。

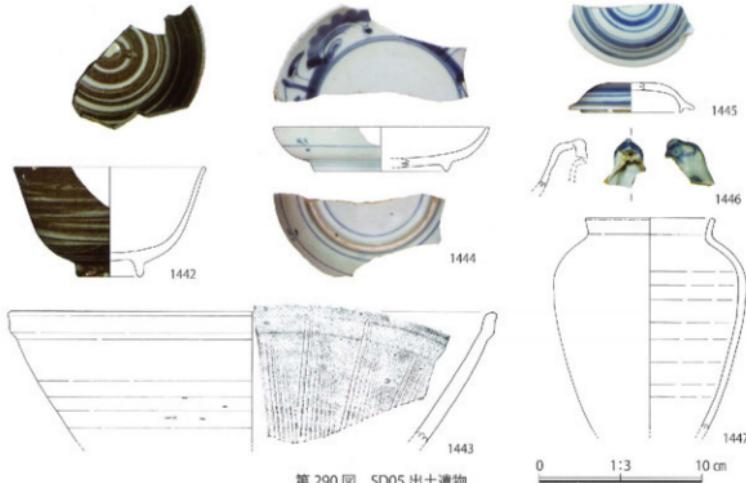
国産磁器

1444～1447は肥前磁器である。1444は丸形底広の五寸皿である。1445は小形の蓋物蓋で、外面には刷毛目文のような同心円文が描かれている。1446は鶏を模した水滴で、頭部部分が残存している。嘴部分から水を出すしづみでつくられている。1447は口径 7.8cm、残存高 13.0cm を測る白磁の小壺である。口縁部は外傾気味に開き、肩部は大きく張って最大径 11.9cm を測る。底部部分を欠損しているが、全体的に卵形を呈する。

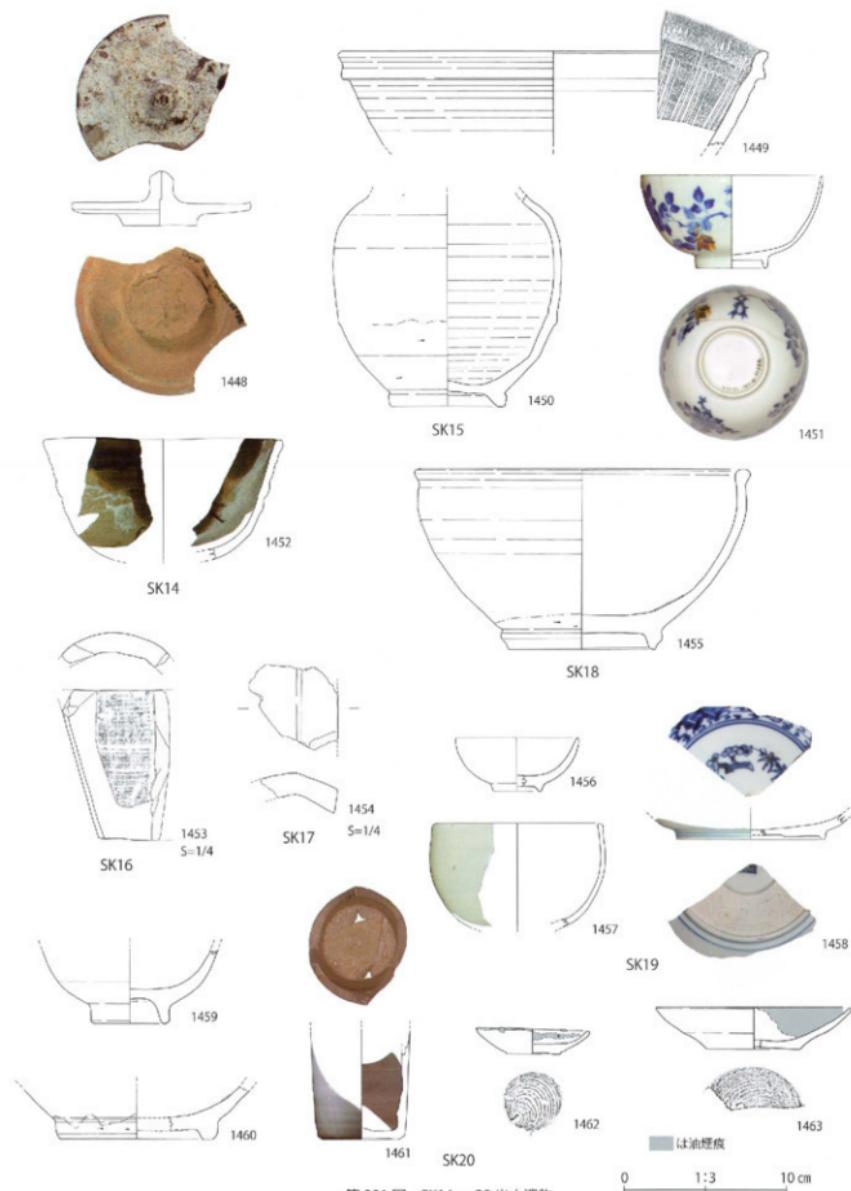
SD05から出土した遺物は概ね九陶IV期（1690～1780年代）のものが多い傾向にあった。

SK14

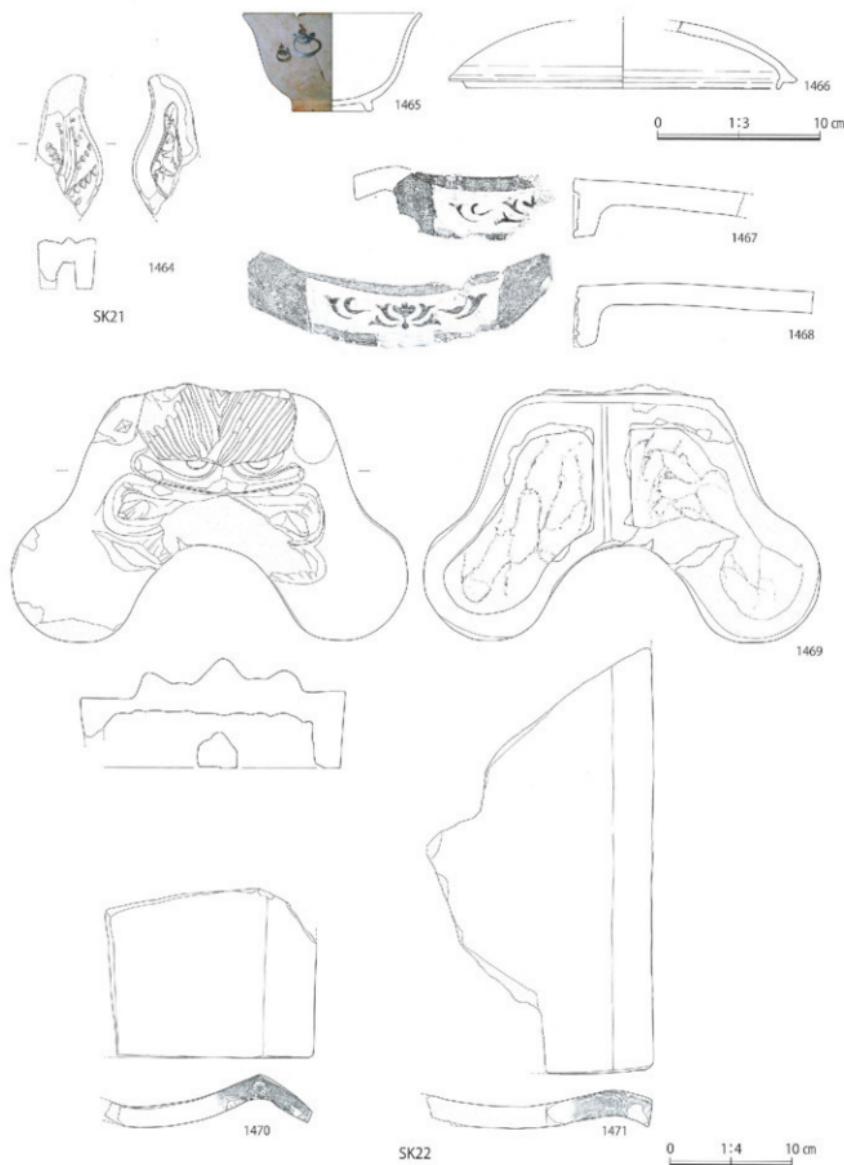
SK14 1452是在地陶器で口径 14.8cm を測る中鉢である。外面には暗緑色の釉薬を掛け



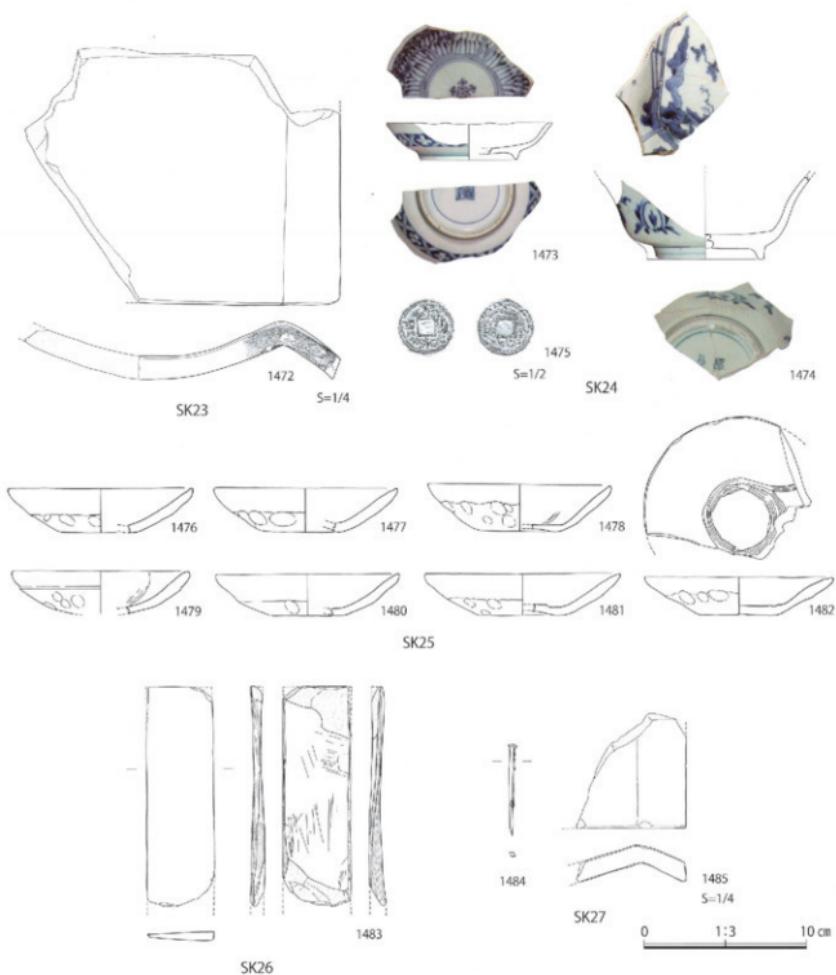
第290図 SD05出土遺物



第291図 SK14～20出土遺物



第292図 SK21・22出土遺物



第293図 SK23～27出土遺物

国産陶器 おり、織部焼風を目指した復興織部と考えられる。

SK15 1448～1450は肥前陶器である。1448は急須の蓋で、底部は回転糸切りで調整さ

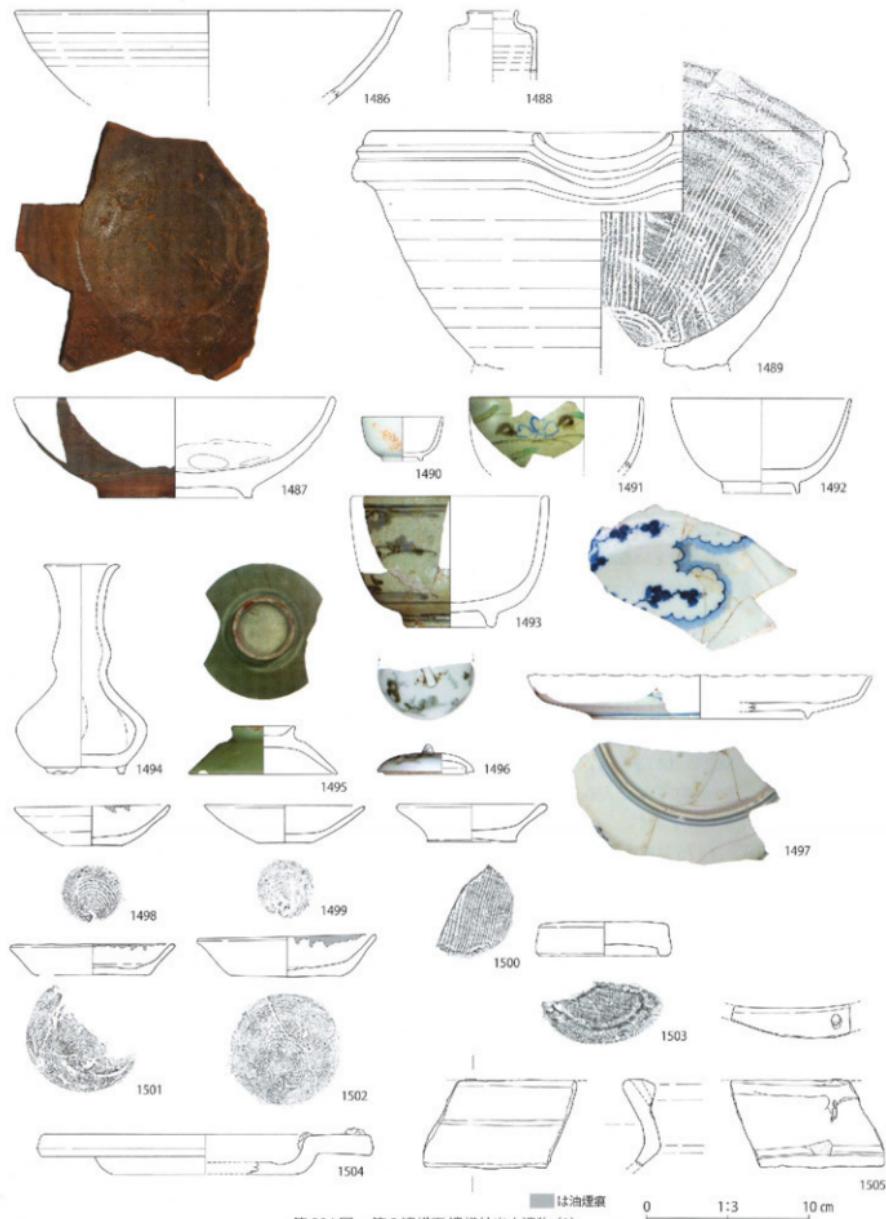
れています。1449は口径 25.9cm を測る擂鉢で、全面に施釉されている。1450は胴部が丸く張り出した瓶で、底部から高台にかけて無釉である。

国産磁器 1451は肥前磁器で、丸形中碗の完形品である。

SK15は九陶三期（1650～90年代）を示すと思われる。

- SK16 SK16 1453は棟込瓦で、コビキBである。内面に布目が見られる。
- SK17 SK17 1454は棟瓦か軒瓦の小片である。
- SK18 SK18 1455は肥前陶器の片口で、内面に胎土目痕が見られる。九陶IV期(1690～1780年代)を示す。
- SK19 SK19 1457は京都・信楽系陶器で、半球形の中碗である。口縁部は内湾し、腰部は丸く張る。1456・1458は肥前磁器である。1456は浅半球形の薄手酒杯か紅猪口である。1458は蛇の目凹型高台の五寸皿で、高台内に「福」の銘が入る。また、断面に漆雜ぎによる補修の痕跡が見られる。SK19は九陶IV～V期(1690～1860年代)を示すものと思われる。
- SK20 国産陶器 SK20 1459・1460は肥前陶器である。1459は呉器形中碗で、全体的に厚手で重量感がある。九陶III～IV期(1650～1780年代)を示す遺物である。1460は内面に胎土目痕が見られる鉢である。
- 国産磁器 1461は產地不明の青磁である。筆立てのような筒形を呈し、底部外面は釉剥ぎされている。幕末期のものか。
- 土師器皿 1462・1463はロクロ成形による上師器皿である。いずれも口縁部には油煙痕が残り、灯明皿として使用されていたことが考えられる。
- SK21 SK21 1464は鬼瓦の一部分で、最大長11.5cm、最大幅5.0cmを測るものである。刻まれた文様が鱗のようにも見えるが、この破片が鬼瓦のどの部分なのかは判別できていない。
- SK22 国産陶器 SK22 1465・1466は在地陶器である。1465は端反形中碗で、外面に宝珠文が描かれる。火を受けているため、全体的に光沢感が見られない。1466は在地・布志名焼の蓋の蓋で、かえり径が19.5cmと大形のものである。
- 瓦 1467・1468は唐草鎌軒瓦である。1468は完形に近いものである。1469は鬼瓦で、ほぼ完形に近いため鬼の表情が見て取れる。1470・1471は左棟瓦で、側面にスタンプが押印されている。
- SK23 SK23 1472は左棟瓦である。最大長20.5cm、最大幅25.9cm、厚み2.0cmを測り、全体的に銀化している。側面にスタンプが押印されている。
- SK24 国産磁器 SK24 1473・1474は肥前磁器である。1473は菊花形小皿で、見込みに五弁花文、高台内に「福」の銘が入る。1474は方形小鉢で、高台内に「富貴長春」の銘が入る。いずれも18世紀代を示す。
- 古錢 1475は寛永通宝で、裏面上部に「文」が刻まれる文錢である。
- SK25 SK25 1476～1482は手づくね成形による上師器皿である。口径11.5～12.0cm、器高2.3～2.9cmを測り、同法量の中皿がまとまって出土している。1482の底部内面ナデ上げ調整は、工具による角ばったものとなっている。
- SK26 SK26 1483は砥石である。最大長13.5cm、幅4.1cmを測り、厚みは均一ではなく最大で0.8cm、中央部分は薄くなり0.6cmである。刃用の砥石であると考えられ、使用する回数が多くかった中央部分が磨り減っている。
- SK27 SK27 1484は最大長5.5cm、重量0.42gを測る鉄製の釘である。
1485は左棟瓦右下部分の破片で、側面にスタンプは見られない。

第5章 殿町 279 番地外調査（南尾敷）の概要



第294図 第2選構面 遺構外出土遺物(1)

第2遺構面 遺構外出土遺物（第294～296図）

国産陶器

1486は須佐唐津陶器の中鉢で、灰釉捏ね鉢である。口径23.3cmを測る。

1487・1488は肥前陶器である。1487は中鉢で、内面に貝止めの痕跡が見られる。1488は小瓶で、肩部が直角的に屈曲する。

1489は備前の播鉢で、8.6cmの片口を持つものである。

国産磁器

1490～1497は肥前磁器である。1490は赤絵の腰張形小皿、1491・1492は中碗である。1491は青磁染付で、外面に緑・青色などで花文が描かれる。1493は陶胎染付の大碗である。1494は瓢箪形三足の徳利である。外面には東屋山水文が描かれ、高台内には「大門成化」の銘が入る。1495は外青磁の中碗蓋、1496は小形の蓋物蓋、1497は変形形の五寸皿で、口鉗が見られる。

土師器皿

1498～1502はロクロ成形による土師器皿で、このうち1498・1501・1502には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されたものと考えている。

焼塩壺

1503は焼塩壺の蓋である。逆凹字形を呈し、受口側端部は面取りが施されている。形押し成形で、内面には布目痕が見られる。

瓦質土器

1504は瓦質土器である。外面に煤が付着している。

土器

1505は焙烙である。外面に煤が付着している。

石製品

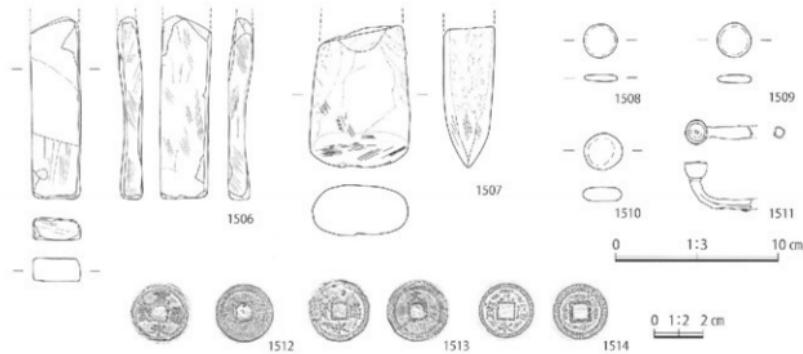
1506は砥石で、残存長11.2cm、幅2.9cm、厚みは1.3cmを測り、中央部分は使用の痕跡のため厚み1.0cmに達している。1507は蛤刃石斧で、残存長8.8cm、刃部幅6.2cmを測る。1508～1510は碁石で、いずれも直径2.1～2.4cm、厚みは1508・1509が0.5cm、1510が0.8cmを測る。

金属製品

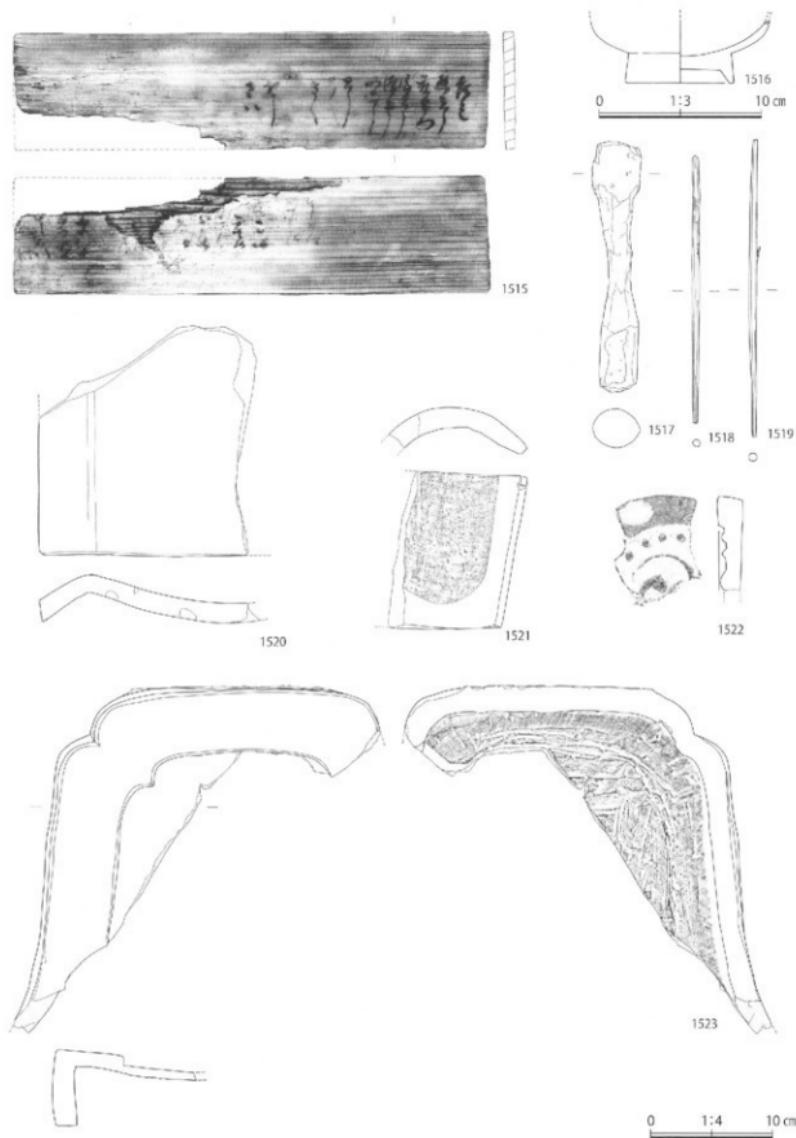
1511は真鍮製の煙管で雁首部分である。最大長4.1cm、火皿径1.4cm、小口径0.6cmを測る。1512～1514は古銭で、1512は古寛永、1513は文鏡、1514は新寛永である。

墨書き木製品

1515は長さ7.3cm、幅29.2cmの大きな板の両面に墨書きが見られるもので、板の短辺に縦書きされている。このうち解説が可能であったのは片面で、左端から「庄三」「惣三郎」「藤右衛門」「弥三郎」「源二郎」「庄二郎」と読める。わずかな空白を置いた隣には「とり」「とく」「きく」「きし」「さい」などと書かれている。人名は全員が男性であると思われる。右側の平仮名表記は、女性の名か、もしくは食材などの可能性が考えられる。



第295図 第2遺構面 遺構外出土遺物（2）



第296図 第2遺構面遺構外出土遺物(3)

瓦	1520は右棧瓦の可能性がある。1523は鬼瓦で、最大長28.5cm、最大幅30.0cmを測る大形のものである。1521は棟込瓦で、コビキAである。1522は軒丸瓦で、中央に左三巴文があり、その周囲を珠文が廻る。
漆器	1516は腰丸形の漆碗である。漆は外面を黒色、内面を赤色で塗られており、外面には黄色で二重丸、赤色で梅を3つ配置する文様が描かれている。
木製品	1517は杵型木製品で、長さ20.6cm、最大径3.9cm、最小径1.8cmを測る。中央部分が上方・下方よりも細く加工されているのは、この部分を握りやすくするためと思われる。
	1518・1519は箸で、1518が21.9cmとやや短く、1519が24.3cmを測る。直徑はいずれも0.6cmである。

第2遺構面罫土 出土遺物（第297～299図）

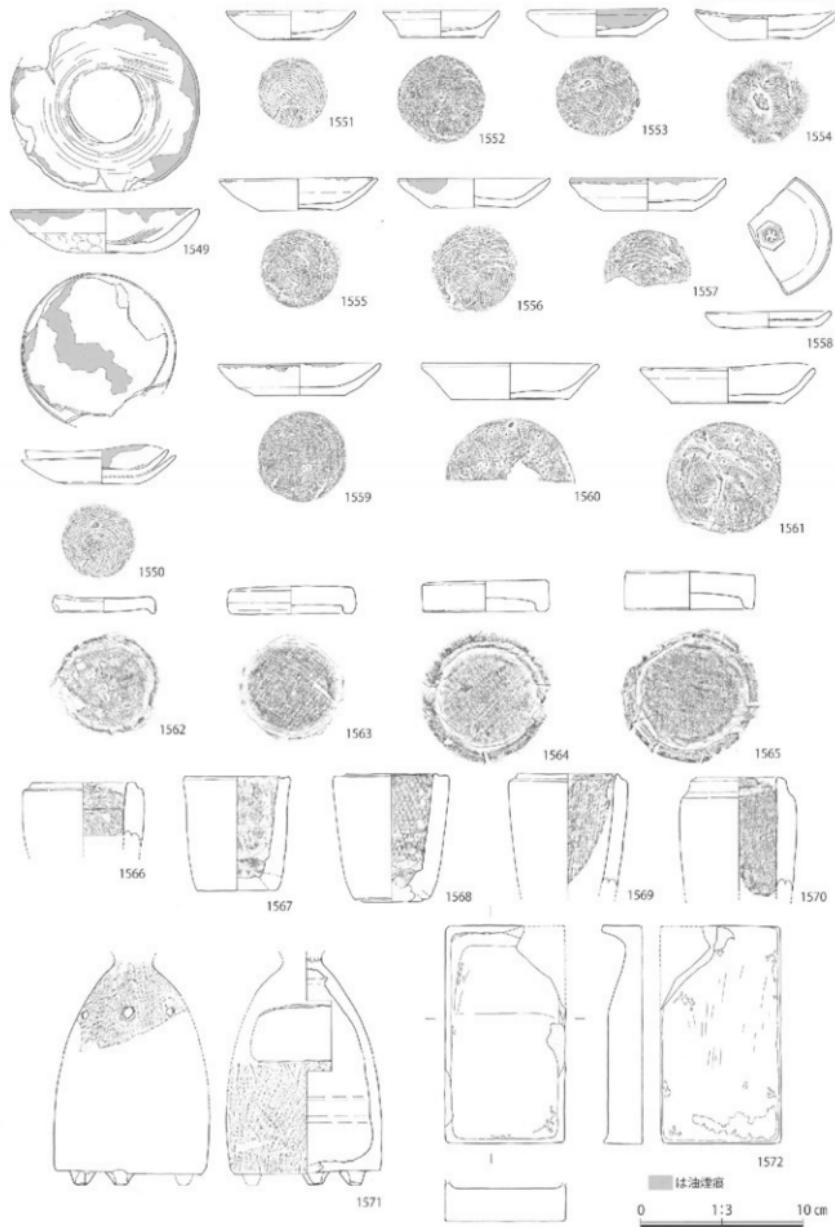
国産陶器	ここで取り上げる遺物は、第2遺構面の上層から出土したものである。 1524～1526・1528・1532は京都・信楽系陶器である。1524の高台内には墨書文字が見られるが解読はできなかった。1525は杉形中碗、1526は半球形中碗である。1528は腰折形中碗で、外面に菊花文が描かれる。1532は蓋物の蓋で、かえり径7.7cm、器高2.0cmを測る。 1527・1529は瀬戸・美濃陶器である。1527は浅平球形中碗、1529は半球形中碗で、高台内に「○」のスタンプが押印されている。
国産磁器	1531は在地の幡形中碗である。口径12.5cm、器高8.2cmを測る。外面にスタンプ印が押してあり、おそらく「樂山」 ⁽¹⁰⁾ と刻まれていると思われる。
土師器皿	1533～1548は肥前磁器である。1533はミニチュア碗、1534～1538はいずれも白磁の小杯・小碗・中碗である。1535の外面は、型紙白絵技法で紅葉の葉が浮き出すように施されている。1536はロクロ型打技法で、外面全面に扁を散らした優美な器である。1538は断面に漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1539は陶胎染付白化粧の人碗である。1540は青磁の香炉で、蛇の目四型高台に窯道具が付着している。1541は型打彫刻された白磁の極小皿、1542は青磁の仏花瓶で、漆継ぎによって補修されている。1543は水漿か大形の香炉で、口径27.6cm、胴部最大径28.8cmを測る。断面は漆継ぎで補修されており、絵付け・絵柄とともに秀逸である。1544は陶胎染付の建水で、器高15.6cmを測る。口縁部にかけて径が小さくなり、瓢箪形に近い形状を呈する。1545・1546は水滴か置物かと思われる。いずれも色絵で美しく施文されている。1547は鳥型の水滴で、嘴部分から水が漏るしきみになっている。1548は鼠型の根付で、上方に紐を通すための穴が開けられている。
焼塩壺	1549は手づくね成形による土師器皿で、口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたものと考える。1550～1561はロクロ成形による土師器皿で、この内1550・1551・1553～1555・1557・1559・1561は口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿と考える。また、1558の底面部内面には、六角形の中に「人」の文字が入っている印が押されている。
土器	1562～1570は焼塩壺で、1562～1565は蓋、1566～1570は身である。蓋は外径6.4cm～8.7cmの間でおさまり、いずれも逆四字形を呈する。内面には布目の痕跡が見られる。身は全てコップ形を呈し、端部の形状は様々である。

第5章 殿町 279 番地外調査（南屋敷）の概要

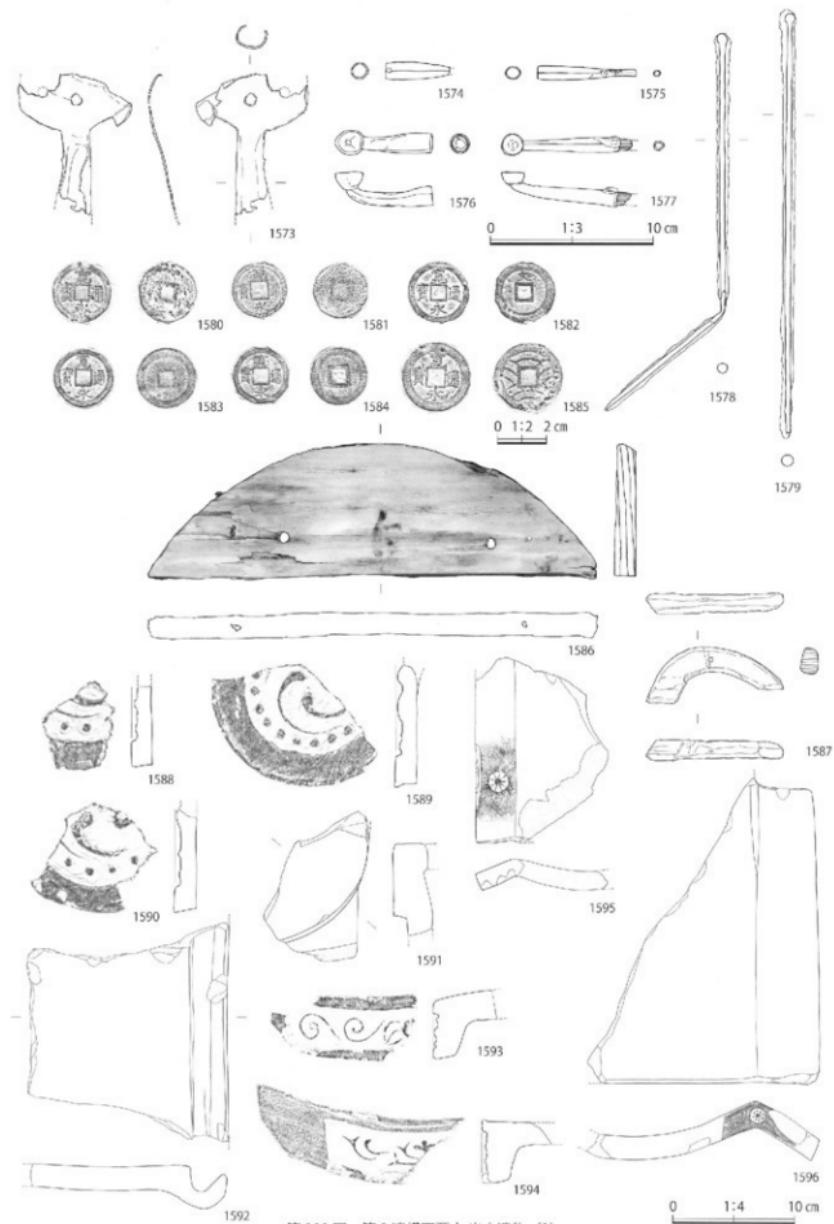


第297図 第2回構面覆土出土遺物(1)

第3節 第2遺構面



第298図 第2遺構面覆土出土遺物 (2)



第299図 第2遺構面覆土出土遺物(3)

- の跡が無数に見られる。装飾として付けられたものか。断面には漆織ぎによって補修された痕跡が確認できる。
- 石製品** 1572は長さ13.4cm、幅7.4cm、厚み2.35cmを測る硯である。海最深部は1.4cmほど抉られている。
- 金属製品** 1573は青銅製の十能で、最大長8.5cm、最大幅6.9cm、厚みは0.2cmを測る。
- 1574～1577は真鍮製の煙管で、1574・1575は吸口部分、1576・1577は雁首部分である。1577は竹製の縦字が残存している。
- 1578・1579は鉄製の火箸のようなもので、30cm前後の長さを測る。1578は全体の3分の1あたりで約50度屈折している。
- 1580～1585は古錢で、1580・1581は古寛永、1582は文鏡、1583・1584は新寛永、1585は四文鏡である。
- 墨書き木製品** 1586は桶の蓋か底板と思われる曲物の破片である。残存部分には両側に1ヶ所ずつ穿孔が開けられ、割れ口の側面には円釘の痕跡が確認できる。二次的に何かに転用された可能性が高い。さらに片面の中央部分には墨書き文字が見られ、「白」と書かれている。
- 木製品** 1587は把手状を呈する木製品である。全体を丁寧な面取りで仕上げてある。また、湾曲する部分に円釘の痕跡が見られる。
- 瓦** 1588～1590は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が廻る。1591は鬼瓦の一部分で、最大長7.7cm、最大幅12.0cm、厚み3.3cmを測る。表面には直径約17.0cmの浮き彫りが見られる。1592は右端に幅2.5cm、深さ1.8cmほどの溝を擁する瓦だが、どの種類であるかの判別はできていない。1593・1594は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。1595は右棟瓦の可能性を考えられるもので、表面にスタンプが押されている珍しいものである。1596は左棟瓦で、側面の崩折部分にスタンプが押されている。

第4節 第3遺構面

第3遺構面の概要 第3遺構面は南側に広がる建物跡SB08～10（第301図）の範囲と、北側の細長い帯状の区間に分けることができる。この帯状区画では多数の廃棄土坑を検出しており、南側とは違う空間であったと思われる。建物跡の北側に隣接する石積溝SD07（第321図）は建物に伴う雨落ち溝であると考えており、この溝を境に、南側は屋敷地、北側は廃棄土坑などをつくる場所、という認識があったように思われる。

帯状区画の直下にはもう一面遺構面が存在するのを確認した。SD07がつくりられたほぼ同じ位置、東西軸は同じで若干北へ移動した位置に、素掘の浅い溝SD10（第366図）を検出した。溝の内部には拳大の石が多数入れられていることから、建物に伴う雨落ち溝の可能性が高いと考えられる。溝以外の他の遺構も上層面とは異なった様相を呈していた。この2面は建物跡が存在していた時期に2回造成を行ったと判断し、それぞれ第3-1遺構面、第3-2遺構面と呼称する。SD07・10に関してはそれぞれ異なる遺構面で検出していることから、建物跡に伴う溝であるが、各遺構面で詳細を記すこととする。なお、建物跡は第3-1・3-2遺構面時をまたいで継続していたことになり、この部分はそのまま第3遺構面として扱っている。

本節では第3遺構面の詳細を述べ、第3-1遺構面は第5節、第3-2遺構面は第6節でその詳細に触れる。



第300図 第3遺構面全体図

第3遺構面では調査区南側で建物跡SB08・09（第301～303図）、西側でSB10（第301・304図）を検出した。SB08・09とSB10の間にあたる位置では素掘溝SD06（第301図）、SB08・09の東側では廃棄土坑SK41、調査区最南端では木枠施設SK39（第309図）、石積方形土坑SK40（第310図）を検出した。

第3遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、およそ17世紀前半～18世紀前半と想定している。第3.1・3.2遺構面はさらに細分化され、第3-1遺構面は17世



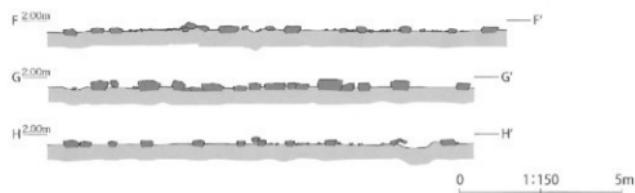
第301図 S808・09・10平面図



第302図 SB08断面図



第303図 SB09断面図



第304図 SB10断面図

紀中頃～18世紀前半、第3-2遺構面は17世紀前半～中頃にあたると考えている。

SB08：建物跡（第301・302図）

SB08は第1遺構面ではSB01・02（第240図）、第2遺構面ではSB05（第272図）が建っていた場所に位置する建物跡である。建物の軸は第1・2遺構面とほぼ変わらず、真北から東へ4度傾く。東西7間（1間1.97m）×南北5間（1間1.97m）の範囲で検出し、南西隅は東西3間×南北1間の範囲が張り出るような形状であると考えている。建物の外縁ラインは、東側はA-A'、西側はB-B'、北側はC-C'、南側はE-E'である。

SB08の範囲を検討するにあたって参考にしたのは「墨書き」が見られる礎石が存在したことである。建物を構成する主要礎石に、墨で文字や記号が書かれていた。礎石5には正方形の中心に点を描いた記号、礎石6には「丂」、礎石7には「井」、礎石8には「三」、礎石9には「井」、礎石10には「十」と書かれていた。礎石5・10はSB08の枠内から外れているが、墨書きが見られるために建物と関連がある石と捉えている。上屋を建てる前段階において、大工達の共通認識のために書かれたものであろうと考えている。

建物の北・西側は礎石の残りが良く、墨書きされた石も多く見られるが、これに対して南・東側は礎石があまり見られないということが言える。建て替えの際に動かしたものと考えることができよう。また、SB08はA-A'が東端となり、建物の範囲を終了していると思われる。A-A'の東側にはSK41を含む大形廐棄土坑が検出されることから、以東は建物とは別の空間として分けられていたと推測する。

また、SB08内の西側には東西約6.3m×南北約6.3mの範囲で黒色土層が広がるのを確認した。黒色土層は主に炭が細かく碎けたような状態であり、火災の痕跡ではないかと考えている。

SB08の範囲は現状の復元案がすべてではなく、南側へ拡大する可能性が考えられるが、現時点ではこの復元案で留めておきたい。

SB08を構成する礎石のうち、礎石1は北側C-C'上に位置し、礎石2は中央から西寄りに位置する。いずれも礎石が抜き取られた痕跡が見られ、礎石2には栗石(根石)のみが残されていた。SK28は中央部分に見られるいびつな方形土坑で、東西1.6m、南北1.9m、深さ0.4mを測る。

SB08内 磂石1・2・SK28 出土遺物(第305図)

礎石1

礎石1 1597は中国磁器・精製で、漳州窯系の中碗である。

礎石2

礎石2 1598は銅製の煙管で、吸口部分である。最大長6.7cm、小口径1.0cm、口付径0.3cmを測る。

SK28

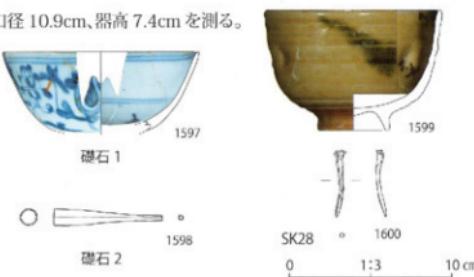
SK28 1599は肥前陶器の中碗で、口径10.9cm、器高7.4cmを測る。

国産陶器

外面には釉薬の掛け分けが施され、胴部部分は窪みが見られる。

金属製品

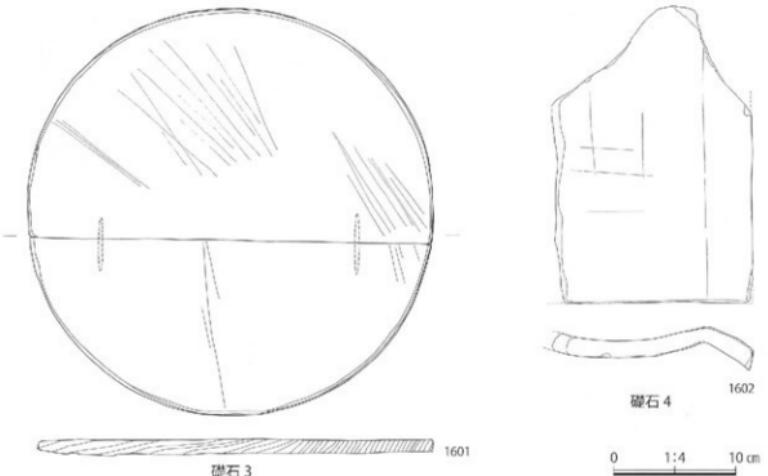
1600は最大長4.1cm、重量1.37gを測る鉄製の釘である。



第305図 磂石1・2・SK28出土遺物

SB09

SB09はSB08と重なる形で検出した建物跡である。建物の軸はSB08とほぼ同一であり、SB08の礎石配列から南側に半間



第306図 磂石3・4出土遺物

(1.0m) ずつずれる位置に、礎石・礎石を抜き取った痕跡が見られる。東西7間（1間 1.97 m）×南北5間（1間 1.97 m）、南西隅の張り出しの範囲はSB08と同じであり、一律して南側に移動している様相がうかがえる。

SB08を1間 1.97 mで復元した後、これに当てはまらない礎石・抜き取り痕が同じ軸上で検出されており、SB09として提示した。建物の詳細は明確ではなく、あくまでも可能性としてSB09を挙げたことを記述しておく。

SB09を構成すると思われる礎石のうち、礎石3は北東隅で、礎石4は礎石3から西へ1間の位置にある。いずれも礎石は抜き取られており、小さな根石が残る状態であった。

SB09内 級石3・4 出土遺物（第306図）

- 礎石3** 級石3 1601は桶か樽の底板で、直径49.8cm、厚み1.8cmを測る大形のものである。様々な部分に工具による加工痕が見られることから、二次的に使用された可能性が高いと思われる。
- 礎石4** 級石4 1602は左棟瓦で、残存長24.2cm、残存幅16.5cm、厚み1.4cmを測る。側面にスタンプは見られない。

SB10：建物跡（第301・304図）

- SB10** SB10は第2遺構面においてSB06（第272図）が建っていた場所に位置する建物跡である。建物の軸はSB08・09とほぼ同一であり、真北から東へ4度傾く。

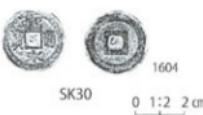
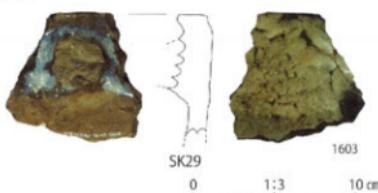
SB10として検出したのは南北方向に並ぶ礎石列F-F'・G-G'・H-H'の3本と、これに直交する東西方向の礎石列1本である。東西2間（1間 1.90 m）×南北6間（1間 1.90 m）の範囲で検出したが、南北方向にはこの数値を当てはめた位置に礎石が置かれていらない部分が見られた。よって、南北の間数は推定である。また、SB10の範囲は北側・西側に広がる可能性が考えられる。

F-F'・G-G'・H-H'は3本とも50～70cm大の礎石を使用しており、礎石間に束石と思われる20～40cm大の小ぶりな石を配置している。また、F-F'には10cm以下の小礎が多数配置されており、他2本との様相の違いが見られる。

SB10内のSK29・30からは以下の遺物が出土している。SK29はF-F'の北寄りに位置する土坑で、SK30はH-H'の南側に位置するいびつな橢円形土坑である。

- SK29** SK29 1603は上野・高取系陶器で、鉢の口縁部片であろうと思われる。残存状況が悪く全体像が掴めないが、内部に剥離の痕跡が見られる。
- 国産陶器**

- SK30** SK30 1604は寛永通宝で、いずれも古寛永である。



SD06：素掘溝（第301図）

- SD06** SB08・09とSB10の間には東西2間分（約4.0 m）の空間が空いており、そこに素掘溝SD06が建物の軸に添って掘られている。残存長約13m、幅0.75～1.00m、深さ0.15～0.20 mを測る。SD06はSB08・09の雨落ち溝であると思われるが、SB08・09が建てられ

第307図 SK29・30出土遺物

た東側とSB10が位置する西側とを区切る境界線のようにも見える。また、SD06を掘り込むようにして並ぶ上坑列があり、さらにその西側には半間（1.0 m）間隔で礎石列が並んでいた。これら3列の軸は建物跡と同じであり、SB08・09とSB10との関連性があると思われるが、詳細は判別していない。

その他の遺構（第301図）

ここで扱う遺構は建物跡SB08～10の周囲に見られる上坑である。建物と関連する可能性がある土坑も見られるが、建物範囲外の遺構として挙げている。

- SK31～38・
SP02 SK31～34・SP02はSB08・09の東側で検出した。このうちSK31～33はSB08・09の東西軸の延長線上に位置すると思われるが、建物配置に関わる遺構であるかの判断はできない。



第308図 SK31～38・SP02出土遺物

SK35はSB08・09の北側に位置する直径約0.6mを測る小土坑である。

SK36はSB08・09の南側に位置する小土坑である。付近にはSB08の礫石が見られる。

SK37はSB08・09の南西側に位置する円形土坑である。

SK38はSB10の南側に位置する土坑で、G-G'の延長線上に見られる円形土坑である。

その他の遺構 出上遺物（第308図）

SK31 SK31 1605は肥前陶器の蓋物の蓋で、かえり径6.9cmを測る。端部にかけて肥厚する。17世紀代のものである。

SK32 SK32 1606は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。

SK33 SK33 1607は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が残存で10個廻る。

SK34 SK34 1611は瓦質土器で、口径9.6cm、胴部最大径18.3cmを測る壺である。器壁は全体を通して厚く1.2cmを測り、口径は小さく、胴部は強い丸味で横に張り出す形状を呈する。内面には焼が付着していることから、火消し壺として使用されたものであろうと思われる。

漆器 1612は漆椀の平碗で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。胴部には明確な稜線が2本見られ、外面には黄色の草文が描かれている。

SK35 SK35 1608は肥前磁器の腰張形小碗で、外面には折枝梅文が描かれている。1610～30年の間のものと思われる。

SK37 SK37 1609は肥前陶器の中碗で、高台まで施釉するものである。高台内は浅く、漆継ぎで補修している部分が見られる。九陶II期（1630～50年代）を示す。

SK36 国産磁器 1613・1614は肥前磁器である。1613は腰張形の中碗で、外面には直径4.4cmの菊花文が型打成形で施されている。1614は水滴である。これらは17世紀中頃を示すものである。

土師皿皿 1615～1618は土師皿皿で、1615～1617は手づくね成形、1618はロクロ成形によるもので、底部は回転糸切りで調整されている。1616・1617は口縁部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたと考えられる。

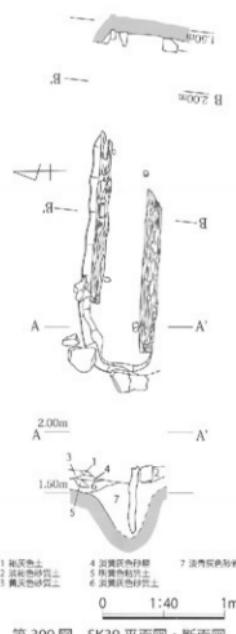
SK38 国産陶器 1619は肥前系陶器の壺で、底径11.0cmを測る大形のものである。胴部内面に叩き目が見られず、在地で作られた可能性も考えられる。17世紀後半を示す遺物である。

貿易磁器 1620は中国磁器・精製の端反形中碗である。清朝の流れを汲む可能性が考えられる。

SP02 SP02 1610は肥前磁器の白磁で、型押成形によって芋の葉の形状を象った小皿である。17世紀末～18世紀代を示す。

SK39：木枠施設（第309図）

SK39は調査区最南端、SB08・09の南側に位置する東西方向に長い長楕円形の土坑である。土坑は東西1.95m、南北0.60～0.65m、深さ0.45mを測るもので、掘り方内の北側と南側に角材2本が置かれている。北側の角材は最大長1.44m、最大幅0.12m、厚み0.12mを測るもので、中央部分に貫通する9×2cmのホゾ穴が開けられており、東



第309図 SK39 平面図・断面図



SK40 (北西から)

端部は $18 \times 3\text{cm}$ の抉り込みが見られる。南側の角材は最大長 1.34m 、最大幅 0.14m 、厚み 0.13m を測る。

角材を固定するためのものとして、角材の内側、北と南に長さ $0.20 \sim 0.55\text{m}$ 、直径 0.04m の杭を2本ずつ打ち込んでいる。

SK39の性格・用途は判然としないが、北側には礎石列が並び、石積方形土坑SK40とも近距離に位置している。また、SK39の東西軸がSB08・09と合うことから考えて、建物に付随する何らかの施設であったと考えられる。

SK40：石積方形土坑（第310図）

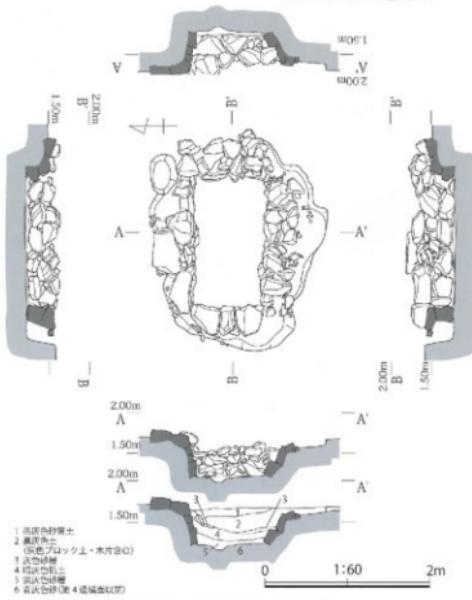
SK40

SK40は調査区南側、SK39から南西方向に約 3.5m の位置に設置された石積方形土坑である。SK40の位置はSB08・09とSB10の間に見られる東西2間分の範囲の延長部分に位置しており、建物跡との関連性も考えられる。

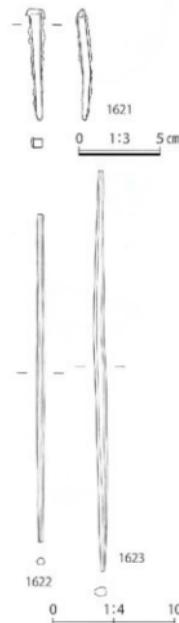
内法は東西長 1.55m 、南北幅 0.85m を測り、3段の石積による深さは約 0.6m である。石材は大海崎石などの $10 \sim 50\text{cm}$ 大の石を使用している。石の天端は標高 1.74m で、底面のレベルは標高 1.20m を測る。

北側長辺の石積上面には、礎石らしき石が2個設置されている。また、SK40の周囲にも礎石が並んでいることから、屋内施設であった可能性も考えられるが、その詳細は不明である。SK40の南側には南北長 1.1m 、東西幅 0.45m の範囲を測る小礎敷遺構SX01を検出した。SX01の北側が不自然な形で終了していることから、SK40がつくられたことによって壊された可能性が考えられる。

石積施設は貯蔵・水溜め・井戸などとしてつくられることが多いが、SK40についてはその性格は判明していない。出土遺物もわずかなも



第310図 SK40平面図・断面図



第311図 SK40出土遺物



第312図 SK41出土遺物

ので、その用途が分かるようなものは出土していない。

SK40 山上遺物（第311図）

金属製品 1621は最大長6.9cm、重量7.87gを測る鉄製の釘である。頭部に近い部分の断面は方形を呈する。

木製品 1622・1623は白木の箸で、1622は長さ26.8cm、1623は32.7cmを測るもので、いずれもやや長い形状を呈する。

SK41：廃棄土坑（第301図）

SK41 SK41は調査区東端、SBO8・09の東側に位置する廃棄土坑である。南北長3.0m、東西幅2.4m、深さ0.5mを測る正方形に近い方形土坑で、南西隅を別の土坑に切り離している。ここからは多量の遺物が出土しており、その時期はおよそ九陶Ⅲ期（1650～90年代）を示すものが多い。

SK41 出土遺物（第312図）

国産陶器 1624・1625は肥前陶器の中碗である。1624は京焼系で、外側は茶色の釉薬が掛かる。1625は杉形の中碗で、口径10.5cm、器高6.9cmを測る大口の名残りを持つ形態であり、若干古い九陶Ⅱ期にあたるものである。

1626～1628は攝鉢である。1626は産地不明で、口縁部に2条の凹線文が見られる。1627は肥前のもので、口径36.8cmを測る。口縁端部が耳たぶ状の形状を呈する。1628は須佐店津で、底部部分の残存である。

国産磁器 1629～1633は肥前磁器である。1629は白磁の丸形中碗で、見込みの釉薬の掛かりがやや甘い。1630は丸形中碗、1631・1632は五寸皿、1633は口径23.5cmを測る中皿で、口縁端部がわずかに立ち上がり直立する。

貿易磁器 1634は中国磁器・精製の大皿である。残存部分は底部の破片で、厚さ0.8cmを測る。内面には文様が明確な線で描かれている。

漆器 1635は口径8.1cmの小形漆器皿か小杯で、全面に赤色の漆が塗られている。内面には金線で流水文が描かれ、特別な時に使用するものであった可能性が考えられる。1636は扁平な漆器碗で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。外面には赤色の二重丸に山文が2つ描かれたものが3つ配置されている。

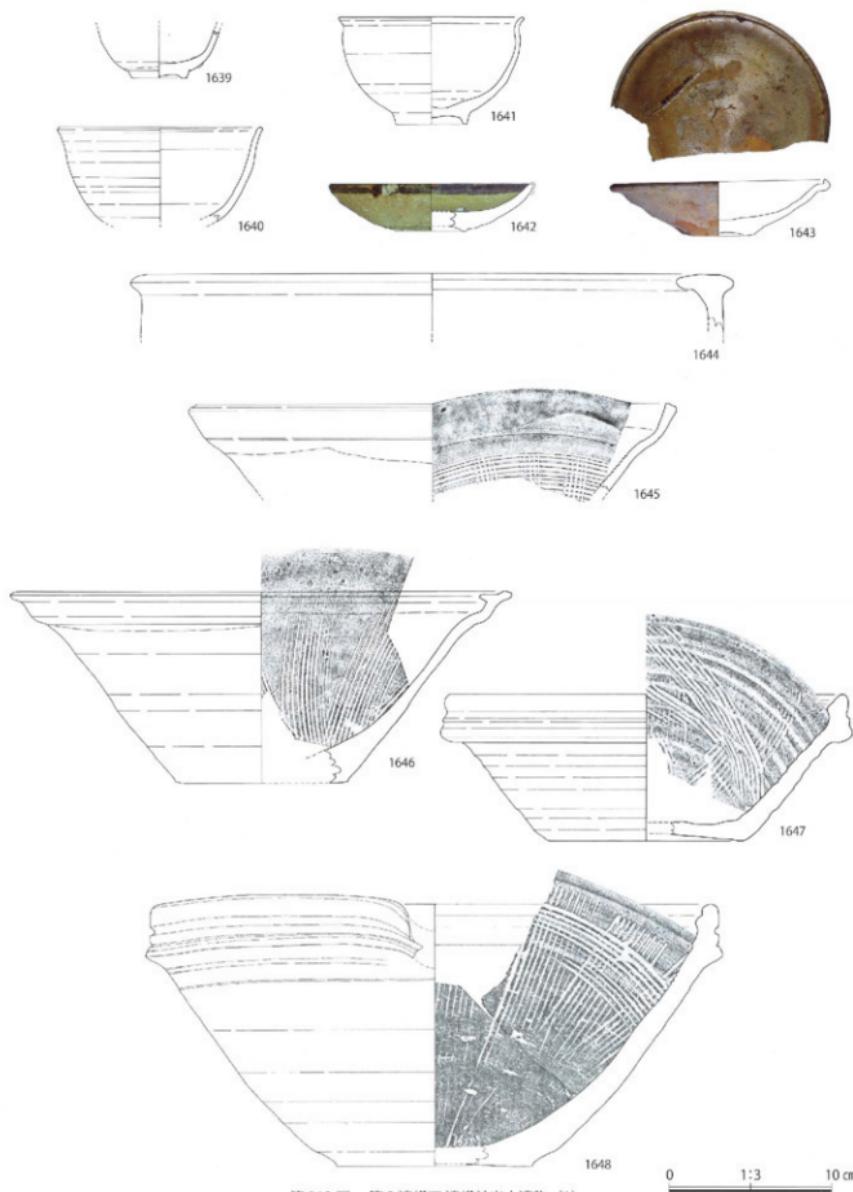
木製品 1637は最大長16.9cm、直径1.8cmを測る不明木製品で、片方の端部が段状に加工されており、先端は先細る。1638は長さ21.8cmの折畳の底板で、板の外周に目釘痕が見られる。

第3遺構面 遺構外出土遺物（第313～316図）

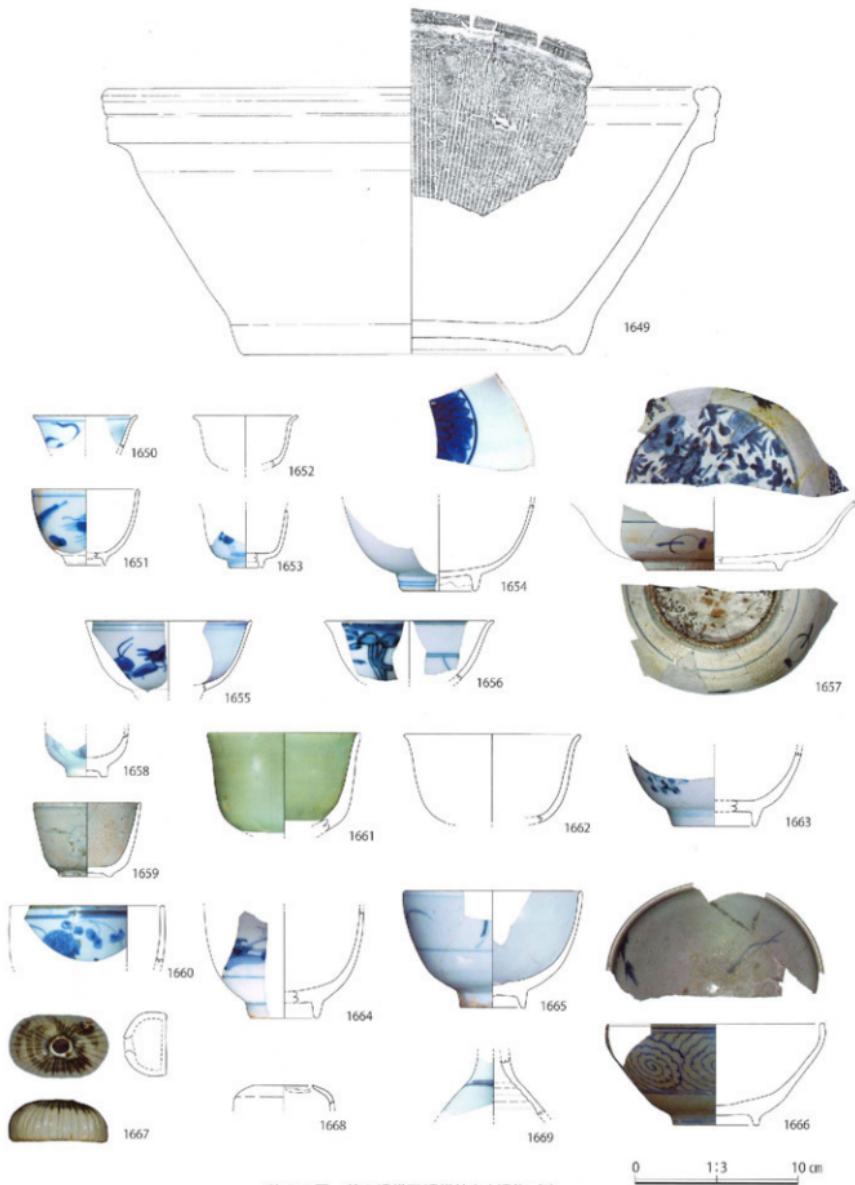
国産陶器 1639は萩焼の小碗で、高台が明瞭に削り出されたものである。内外面に胎土口痕が見られる。

1640～1644は肥前陶器である。1640・1641は端反形の中碗で、全面に細かい稜線に入る。外面に鉄釉が掛けられている。1641は高台に砂が付着している。1642・1643は小皿で、内面に胎土口痕が見られる。1644は推定口径35.0cmを測る人形の裏で、口縁端部上面に幅3.5cmの面を持つ。

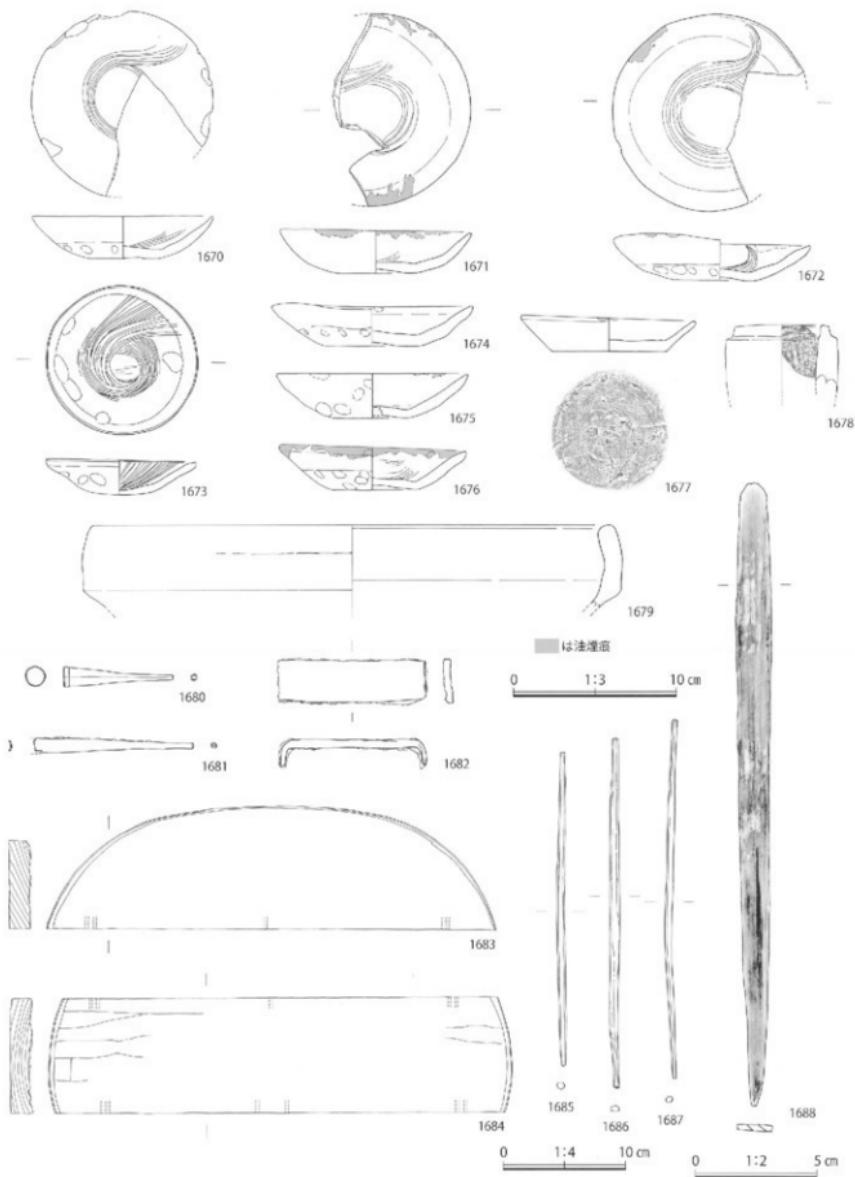
1645～1649は攝鉢である。1645・1646は肥前産で、口径は30cm前後を測る。1647・1648は備前産で、1647は口径24.0cm、器高9.0cmを測るやや小形のもの、1648は片口が付く。1649は備前系の模倣品と思われ、口径36.8cm、底径20.7cm、器高16.4cm



第313図 第3連構面 連構外出土遺物(1)



第314圖 第3還構面 邊樣外出土遺物 (2)



第315図 第3遺構面 遺構外出土遺物 (3)



第316図 第3遺構面 遺構外出土遺物(4)

を測る大形品である。

貿易磁器 1650～1656は中国磁器・精製である。1650～1653は景德鎮窯系の小杯で、1650は端反形、1651は丸形、1652・1653は腰張形である。1654は丸形大碗、1655・1656は小碗である。1656は漳州窯系である。1657は中国磁器・粗製である。底径16.5cmを測る色絵の大皿であり、口縁部は強く外反する。高台には砂が多量に付着している。

国産磁器 1658～1669は肥前磁器である。1658は呉器形小杯で、外面には蘭文が描かれる。1659は腰張形の小碗で、高台内は浅く腰部から直線的に伸びる形状を呈する。1660～1665は中碗である。1661は腰部にかけて肥厚し、わずかに端反形を呈する。全面無文で、山辺山窯で焼かれた可能性が高いものである。1662は白磁の端反形中碗、1663は高台に二重の瀬線が引かれるものである。1664・1665は丸形中碗、1666は口縁端部付近で直立し、わずかに内湾する形の人碗である。外面には雲気文が描かれている。

1667は水滴で、長楕円形のドーム状を呈する。最大長6.2cm、最大幅3.9cm、高さ2.6cmを測り、ドーム状の中心・頂点に直径1.0cmの孔が開いている。1668は茶入れで、口径3.6cm、肩部は推定6.2cmを測り、口縁部が強くそぼまる形状を呈する。1669は小瓶である。

土師器皿 1670～1676は手づくね成形、1677はロクロ成形による土師器皿である。1671・1672・1675～1677の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていたと思われる。

焼塙壺 1678は焼塙壺の身である。コップ形を呈し、口縁端部は明確に段が付く。

土器 1679は土器で、焰燃である。口径31.0cmを測るもので、外面に煤が付着している。

金属品 1680・1681は銅製の煙管で、いずれも吸口部分である。1680は長さ6.7cm、小口径1.25cm、口付径0.35cmを測る。1681は残存長9.8cm、小口径0.9cm、口付径0.4cmを測る長い吸口である。1682は最大長9.1cm、幅2.6cmを測る鉄製の鍔である。

木製品 1683・1684は桶の底板で、いずれも最大長70cmを超える大形のものである。断面に目釘痕が数ヶ所見られ、他でも加工痕が認められることから、桶の後に転用されていたと考えよい。1685～1687は白木の箸である。

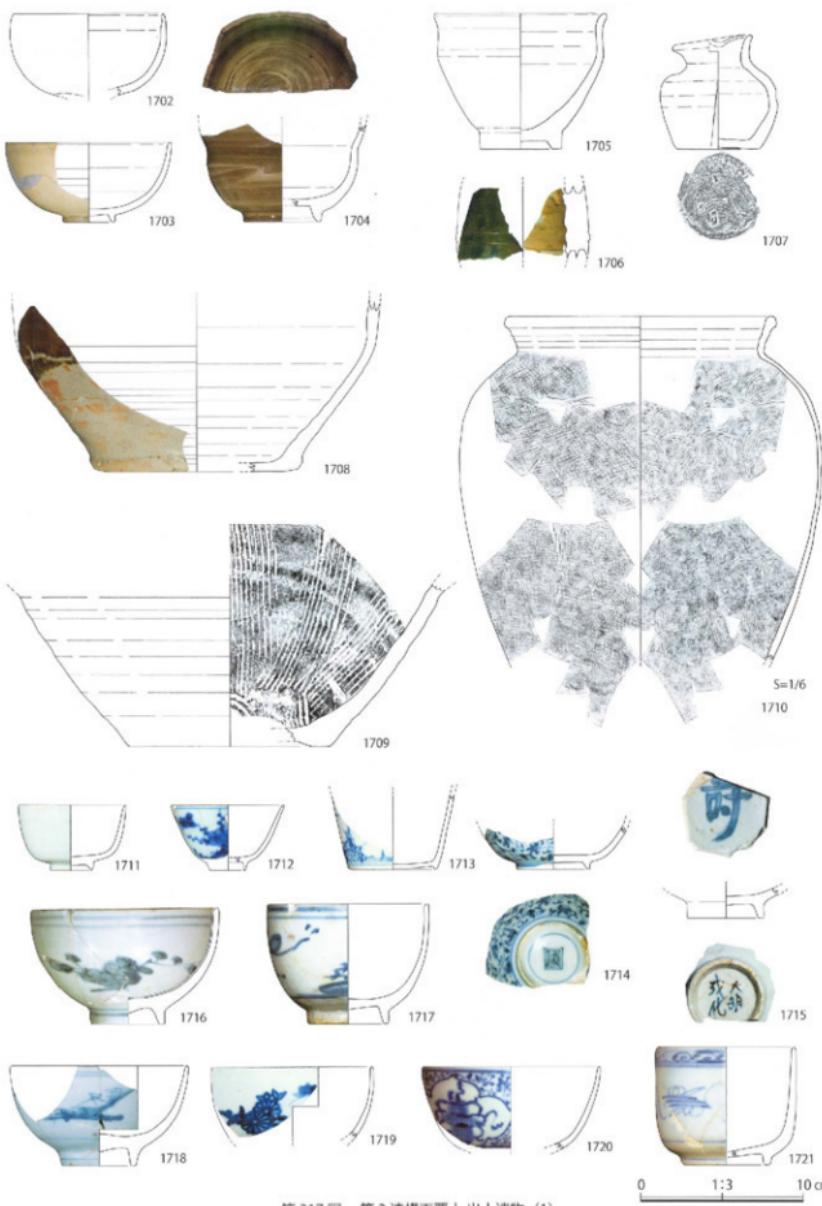
荷札木筒 1688は最大長25.6cm、最大幅1.5cm、厚み0.3cmを測る荷札木筒である。面上に墨書きがあったと思われるが、劣化が激しく文字を読むには至らなかった。

瓦 1689・1690は丸瓦で、1690は最大長28.9cm、玉縁長3.9cmを測る完形のコビキBである。1691・1692は棟込瓦で、いずれもコビキBの布口である。1693は鬼瓦の一部であろうと思われる。1694～1696は軒平瓦で、いずれも唐草文であり、1695・1696の唐草文は三葉系である。1697・1698は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が廻る。1699は種類・部位が不明の破片、1700は左右不明の棟瓦である。1701は平瓦で、長さ28.6cm、残存幅14.5cm、厚み2.3cmを測る。

第3遺構面覆土 出土遺物（第317～319図）

ここで扱う遺物は、第3遺構面より上層で出土したものである。

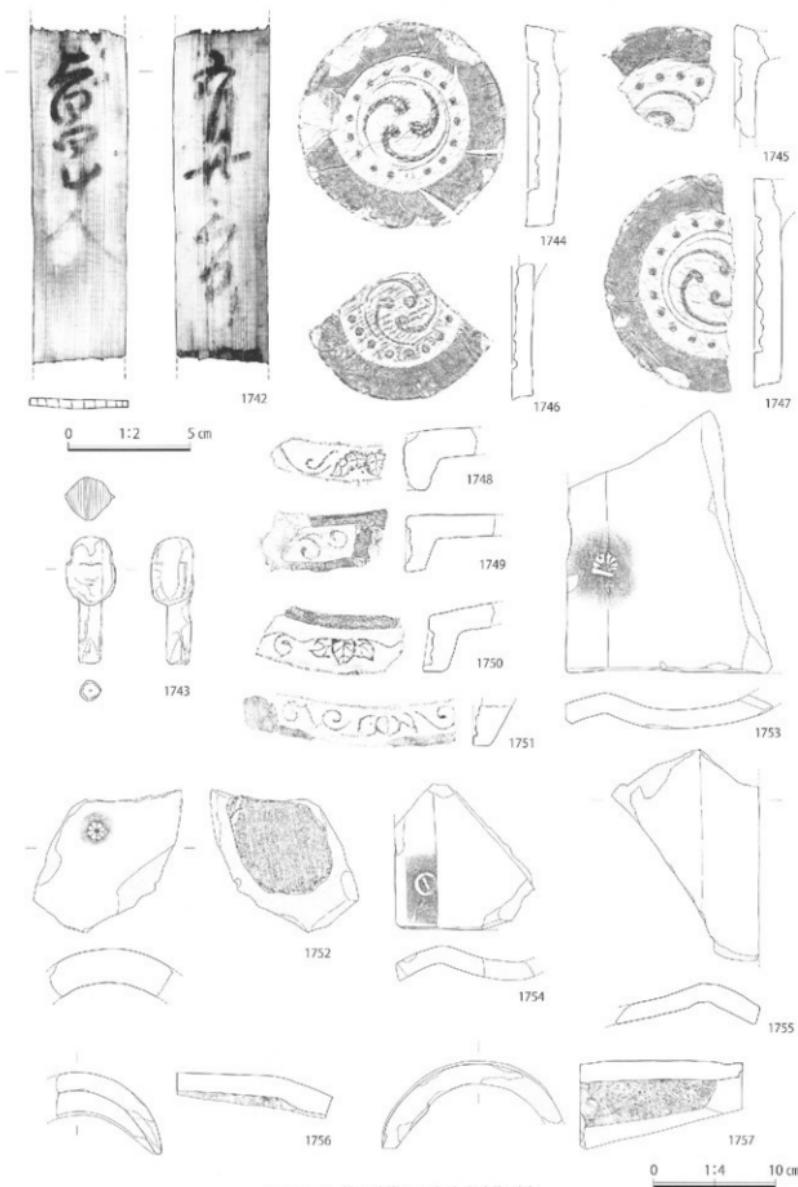
国産陶器 1702～1705・1708・1710は肥前陶器である。1702・1703は半球形の小碗、1704は腰折形の中碗で、外内面に刷毛目文が施文されている。1705は天口形の中碗で、口縁部がくびれる。1708は壺の胴部下方～底部にかけての残存で、底径は13.0cmを測る。1710は口径32.5cm、胴部最大径45.0cmを測る大形の壺で、内面には同心円状の叩き痕が残る。



第317図 第3遺構面覆土出土遺物(1)



第318図 第3回発掘面覆土出土遺物(2)



第319図 第3遺構面覆土出土遺物(3)

1706は産地不明の軟質施釉陶器で、器種は不明である。

1707は備前系の小皿である。口頸部は外反して立ち上がり、底部は回転糸切りで調整されている。外面に松の灰釉が掛かる。

1709は越前でつくられた可能性が指摘されている備鉢である。底径 12.4cm を測り、内面だけではなく見込みにもスリ口が入れられている。

貿易磁器 1711・1712・1715・1727は中国磁器・精製である。1711は白磁の小碗で、内面は型打陽刻で文様が浮き彫りになっている。1712は景德鎮窓系の小碗である。1711・1712にはいざれも漆緋ぎによる補修の痕跡が見られる。1715・1727は漳州窓系で、1715は中碗で、見込みに「寿」高台内に「太明成化」の銘が入る。1727は丸形底広の小皿で、見込みに「寿」と書かれている。

国産磁器 1713・1714・1716～1726・1728～1731は肥前磁器である。1713は桶形猪口、1714は浅半球形の中碗で、高台内に「福」の銘が入る。1716～1720は丸形中碗で、1717は高台平碗である。1719の外面にはコンニャク印判、また、漆巻ぎで補修された痕跡が見られる。1721は半筒形中碗、1722は腰張形中碗で、高台内に「福」の銘が入る。1723は青磁染付の壺で、頸部は直線的に立ち上がる。肩部外面に菊花文が描かれている。1726は浅半球形の中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。1724は口径 14.2cm、器高 8.3cm を測る青磁の香炉、1725は皿の一部で、外面には鉄釉が掛かり窓絵が立体的に貼り付けられている。1728は玉環形の小皿で、外面に源氏香文が描かれている。1729は端反形の五寸皿で、内面には最大径 7.5cm の菊花文を中央に配置し、その周囲に隙間なく菊花文を描いている。1730は青磁で、蛇の目四型高台の大皿である。1731は白磁の端反形大皿で、内面は型打陽刻で文様が浮き彫りになっている。また、漆緋ぎによる補修の痕跡も顯著に見られる。

土師器皿 1732は上器の小皿で、口径 11.0cm、底径 8.2cm、器高 2.3cm を測る。全体的に約 1.0cm の厚みを持ち、口縁部が直角に折れて直立する形状を呈する。口縁端部内面には指頭川痕が見られ、また、底部内面には煤が付着していることから、灯明皿として使われていたと考える。

焼塙壺 1733・1734は焼塙壺である。1733は蓋で、逆凹字形を呈する。1734は身で、筒形を呈し口縁端部には指頭川痕が見られる。

石製品 1735は最大長 5.3cm、最大幅 5.8cm、厚み 2.2cm を測る石で、石材は玉髓である。火打ち石として使用したものと思われる。

金属製品 1736は銅製の手鏡で、鏡部分は直径 9.3cm の正円形、柄部分は長 7.4cm、幅 1.8cm を測る。厚みは全体を通して 0.2cm の薄さである。

1737～1741は寛永通宝で、全て古寛永である。1741は中国の明錢で、洪武通宝（1368）である。

墨書き木製品 1742は残存長 14.0cm、幅 4.0cm、厚さ 0.4cm を測る木片で、おそらく桶蓋か底の切れ端を転用したものと思われる。両面に墨書きが確認でき、左面には「上田四斗入」、右面には「五月廿三日」とある。「上田」は人名か地名を表し、「四斗」は約 72 リットルの容積物を示すものと推測する。右面は日付「5月 23 日」と明確に読み取ることができる。5月 23 日付で、上田という人物か場所から何かを 4 斗ほど仕入れたことの記録であろう。

木製品 1743は木製の人形の頭部である。頭頂部～頸までは最大長 5.7cm、幅は両耳で 4.0cm を測るもので、表情にはあまり特化しないつくりになっている。目・鼻・口・耳は線刻とわずかな削り出しで表現し、顔立ちははっきりしていない。また、頭が 5.0cm と長く、内部には円

錐状の穴が開けられている。この穿孔は指を差すものと思われ、指人形として使われた玩具であると推測している。

瓦 1744～1747は軒丸瓦で、いずれも中央に左三巴文、その周間を珠文が16～17個囲んでいる。1744・1747は巴の周りに圓線があり、1746の巴文・珠文の面に入る斜線は、型が劣化している状態で瓦を制作すると、このような筋が入ることが分かる貴重な資料である。1748～1751は軒平瓦で、いずれも文様は三葉系の唐草文である。1752は丸瓦で、表面にスタンプが見られるコビキBである。1753～1755は棟瓦で、1753・1754は右棟瓦の可能性が考えられるもので、表面にスタンプが押印されている。1756・1757は棟込瓦で、1756はコビキBである。

第5節 第3-1 遺構面

第3-1 遺構面 第3-1 遺構面は建物跡SB08～10の北側に広がる遺構面で、東西間約40m、南北間約10mを測る帯状の区画である。遺構面の標高は1.80～1.90mを測る。

第3-1 遺構面では屋敷境石積溝SD01（第320図）を西端から東端まで検出した。中央部分では建物跡SB08・09の北側に位置する石積溝（雨落ち溝）SD07（第321図）を、調査区東端では廐棄土坑群1（第320・324図）、井戸SE03（第349図）を検出した。中央より西側では廐棄土坑群2（第337図）、性格不明の土坑SK56（第344図）・57、石積溝SD08、瓦敷遺構SU02を、調査区西端では石積方形土坑SK58（第346図）、土坑SK59・60を検出した。

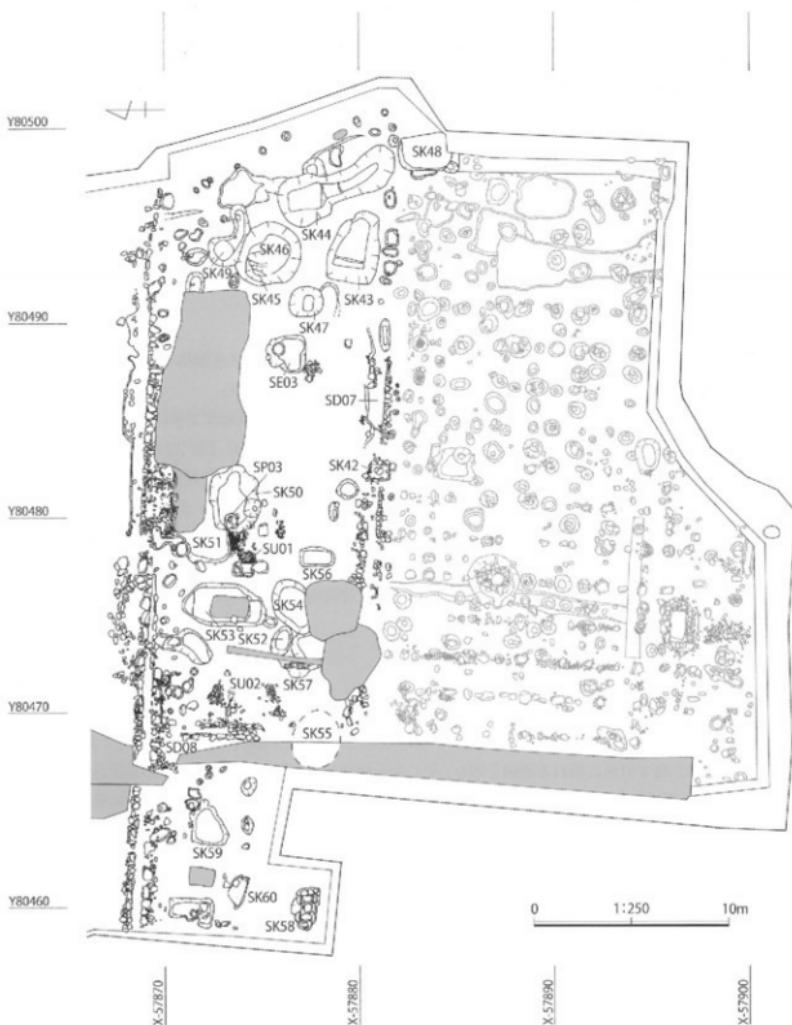
第3-1 遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、17世紀中頃～18世紀前半と想定している。

SD01：屋敷境石列溝（第320図）

SD01 SD01は第2 遺構面時からかなり様相が変化している状態で検出した。石積は西端から東端まで途中やや崩抜けになる部分はあるが、ほぼ残存している。西側から約18m地点で北側に1.5mの距離で直角に折れる形態を取り、そこから再び東に向かって伸びる。この屈折点以東、北側の石列は掘り方のみの検出で、石はほとんど置かれていなかった。さらに東端に至ると、石列がわずかな角度で南下していく、微妙に屈折していた。この屈折は石が自然に動いたとは考えにくいもので、何かの意図の下にこのような形状を成したと推測している。

上記した屈折点のすぐ東側は、約2mに渡って石列が消失している。この部分だけ石が抜かれた、もしくは破壊されたものと思われる。石列の南側ではこの空白域を挟むような配置で、東側と西側に小礫が撒かれている部分が見られる。さらに、周辺には礎石らしき石や上坑を点々と検出し、SD01と関わりを持つ遺構ではないかと考えている。

SD01は屋敷地の境界線であるとともに、排水機能を携えた施設である。雨水や生活排水を敷地外に流すことによって、人の生活は成り立つと言っても過言ではない。よって、屋敷地の規模・形態に合わせてこのような溝をつくるものと思われる。SD01の屈折点は、南側に想定できる建物跡の規模や形態に合わせてつくられた可能性が高いと考える。石列の中に礎石としての石を置くことによって、建物と溝とが構成されていたのではないだろうか。第3-1 遺構面では明確な建物跡は確認できていないが、この下の第3-2 遺構面で、SD01に伴う建物跡SB11（第373図）が建っていたことが判明している。



第320図 第3-1 遷構面 全体図

SD07：石積溝（第321図）

SD07

SD07は調査区中央部分、建物跡SB08・09の北側に隣接する石積溝である。屋敷境石積溝SD01から南方向へ約10mの位置にあり、東西方向に伸びる。SD07はSB08・09の軸に添ってつくられている。石材は大海崎石と島石が混在する状態で、石積は1段、所々石がない部分が目立つ。溝の両端は不自然な形状で終了しており、破壊及び搅乱で消滅したものと考え

る。SD07の規模は東西約14mで、溝の内法は0.4～0.6m、深さは0.25mを測る。

SD07の西側はSE02(第249図)、廃棄土坑SK13(第271図)に切られているため、どのような形状であったかは不明である。ただ、SK13の西側にわずかではあるが石積の名残りらしき石が散在している。これらの石はSD07からほぼ直線上に位置することから、SD07の一部であったものと考えている。SD07がどこまで続くのかは不明であるが、可能性として石積溝SD08と直交、もしくは直角にぶつかることが考えられる。両溝とも途中で分断されているため推測の域を出ないが、本来の姿はSD07からSD08に繋がり、さらにSD01へ通ることによって、屋敷地の排水機能を果たしたものではないだろうか。

東側も西側と同様で、石・掘り方ともに消滅している。約1.5mの空白域の東側に、廃棄土坑が集中する範囲を検出した。

SD07の底には第3層暗灰色砂質土が薄く堆積しており、水が流れていることを示すと考えている。また、SD07の標高は西側が高く、東側が低いことから、西から東へ水が流れていると思われる。

SD07からは肥前磁器、煙管、丸瓦が出土している。

SD07 出土遺物(第322図)

国産磁器

1758・1759は肥前磁器である。1758は端反形小壺で、高台無釉で砂が付着している。1759は色絵の中皿か大碗で、推定底径10.0cmを測る。1758は九胸II-2期(1630～50年代)を示すものである。

金属製品

1760は真鍮製の煙管で、雁首部分である。残存長3.5cm、火皿径1.6cmを測る。

瓦

1761・1762は丸瓦で、いずれもコビキBある。1762はほぼ完形品で、長さ24.5cm、幅13.5cm、厚み2.0cmを測る。

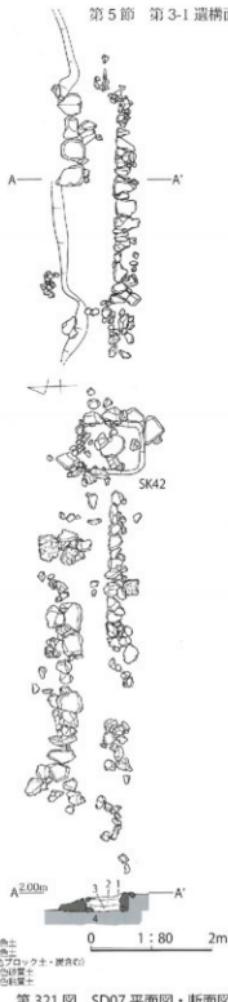
SK42：石積方形土坑(第321図)

SK42

SK42は石積溝SD07の中央部分につくられた石積方形土坑である。内法は南北長1.0m、東西幅0.9m、深さ0.01mを測る小形のもので、東側長辺には島石の石積が残存していることから、全面に石が積まれていた可能性が考えられる。

SK42の床面にはいびつな梢円形の掘り込みが見られるが、深さ0.10mと浅いものである。

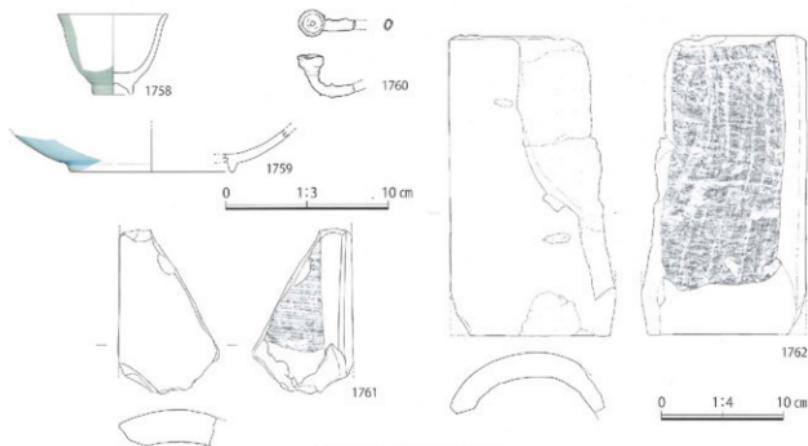
遺物は肥前磁器、土器、碁石などが出土している。



第321図 SD07 平面図・断面図



SD07(西から)



第322図 SD07出土遺物

SK42 出土遺物（第323図）

国産磁器

1763・1764・1766は肥前磁器である。1763は腰張形に近い形状を呈し、口縁部は端反形の小环で、瑠璃釉・墨はじきという技法が使われている優品である。1764は端反形の猪口か小环で、高台に砂が付着している。九陶II-2期(1630～50年代)のものと思われる。1766は色絵で装飾された女性像の人物である。残存部分は足元を含む底部部分と右腕部分であり、着物の装飾と思われる絵柄が色絵で描かれている。また、底部外面には墨書が見られるが、解読できなかった。

土器

1765はミニチュア土器の釜である。外面には花文のスタンプが押され、底部は回転糸切りで調整されている。

石製品

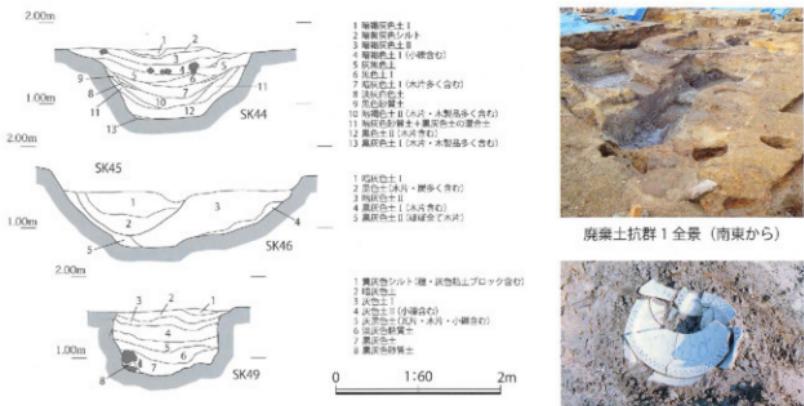
1767は直径2.3cm、厚み0.6cmを測るもので、双穴の駒である可能性が考えられる。また、材質が鹿骨であるとも推測する。



第323図 SK42出土遺物

SK43～49：廐棄土坑群1（第320・324図）

廐棄土坑群1 SK43～49は調査区東端、帶状区画の東端一角で検出した廐棄土坑群である。東西約9m、南北約10mの範囲に大形廐棄土坑が集中して掘られている。その形状は多種多様であり、大形で不定形のSK44、その西隣にあるいびつな楕円形のSK43、SK43とSE03（第349図）に挟まれる形で位置す



第324図 SK44・45・46・49断面図

1787出土状況

小形円形のSK47、SK44の南東側隣に位置するSK48、SK44とSK49の間に位置する正円形に近いSK45・46、SK45・46の北側に隣接し、勾玉状を呈するSK49の5個の廃棄土坑を検出した。いずれも隣接して掘られている状況から、廃棄土坑群1と呼称する。なお、各土坑の詳細は後述する。

廃棄土坑群1内の土坑群はゴミを捨てるために掘られた素掘りの穴である。いずれの土坑も覆土は黒色を呈し、灰や炭、木片等を多量に含んでいた。これは廃棄したゴミから発生する悪臭を防ぐため、またはゴミにたかる害虫等を寄せ付けないために、意識的に炭や灰を投棄する習慣に習ったものであると思われる。^[13]

上坑はSK45・46とSK49が若干密接する以外は独立しており、土坑の切り合い関係が見られない。土坑ごとの間隔は狭い所で0.5m、広い所では1.3mほど空いている。ゴミを捨てるために掘り、ゴミを捨て、埋めるという一連の作業を繰り返すのが廃棄土坑の性格と捉えられるが、ここではおそらく次々に土坑を掘り、短期間でゴミが満杯になったところで埋め、それ以降の掘り直しは行われなかつたことがうかがえる。穴を掘り分けた理由としては、ゴミの量が多かった、もしくは一度に大きな穴を掘るより小さな穴を何個も掘る方が効率が良かった、などが考えられる。

前述した土坑と土坑の幅についてであるが、ゴミを捨てる時に人が歩けるスペースを取っていたのか、偶然空いただけなのかは判断できていない。土坑が掘られた面の土は黄色シルト層であり、ゴミを捨てるたびに足元が弱くなる事態が予想できる。足場となるようなもの（木の板など）を敷いてゴミを捨てていたとも考えられる。

この土坑群の中でゴミを一括して埋めたと思われる土層を示すのはSK45・46である。廃棄された土層の細かい分層はできず、1層しか確認できなかったことから、一度にゴミを捨て埋めたものと考えられる。

各土坑から出土した遺物は多量で、陶磁器、土師器皿の他に、煙管・釘などの金属製品、火打石・砥石などの石製品、漆椀、墨書きが見られる荷札木簡、下駄・折敷・曲物・箸などの木製品、鬼瓦を含む瓦など、その種類は様々である。また、廃棄土坑でよく出土する貝殻や魚骨、獸骨などの動物遺体は廃棄土坑群1ではあまり出土していない。他の位置に掘られた廃棄土坑、

前述した第2遺構面のSK13（第271図）・後述する廃棄土坑群2（第337図）などからは多量の動物遺体が出土していることから考えて、廃棄土坑群1には食物残滓をあまり捨てなかった傾向を学げることができる。^[17] これは、食生活に関わる生ゴミと、他の生活において発生するゴミは捨てる場所が分けられていた可能性を示唆していると思われる。生ゴミは台所の近くに捨て、それ以外のゴミは別のゴミ捨て場に捨てたということが分かれば、当時の人々のゴミ捨てに対する観念をわずかでも知ることができよう。

SK43：廃棄土坑（第320図）

SK43

SK43は廃棄土坑群1の範囲内の南側に位置するいびつな楕円形土坑である。東西長3.8m、南北幅1.4～2.7m、深さ0.2mを測る土坑である。

遺物は廃棄土坑群1内で最も多量に出土しており、陶磁器・土師器皿・金属製品・漆器・木製品・木簡・瓦などが出土している。遺物の時期は九陶II～IV期（1610～1780年代）のものが見られ、このうちⅢ期（1650～90年代）を示す遺物が最も多いと思われる。

SK43 山上遺物（第325～328図）

国産陶器

1768～1772・1774は肥産陶器である。1768は高台に砂目か船止目痕が見られる中碗、1769・1770は呉器形中碗で、丸味が強い形状を呈する。1771はこげ茶色の外内面に白色刷毛目文が施される中碗である。内面の施文は上から見ると見込み部分に花文が描かれているように見える優品である。1772は見込みに蛇の目釉刺しが見られる皿、1774は口縁部外内面に施釉が見られる描鉢である。

1773は产地不明の陶器で、鉢か皿の底盤である。高台が高く、内面に船止目痕が見られる。

国産磁器

1775～1787は肥前磁器である。1775は丸形小碗で、高台内に「太明成化」の銘が入る。1776は腰張形の小碗で、口縁部がわずかに内傾する。外面に色絵が描かれる。1777は丸形中碗で、外面には所狭しと円形（菊花文など）の文様が描かれ、見込みに五弁花文、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。1778は大碗で、外面四方に円形文、その周囲には「寿」の文字が数多く書かれている。1779は蓋物の蓋で、つまみは欠損している。1780は見込みに菊花文が描かれる小皿で、添漆ぎで補修された痕跡が見られる。1781は口縁部が直口気味に立ち上がる小皿である。口縁部外面には渦巻文が描かれている。1782は口縁部が明確に屈曲し、斜め上方に開く特徴的な小鉢である。1783は青磁で、蛇の目凹型高台の香炉である。胴部下方に明確な段を付ける。1784は波佐見焼・青磁の中鉢で、蛇の目凹型高台である。1785は徳利形の中瓶で、口径6.0cm、肩部最大径12.1cm、底径7.1cm、器高21.0cmを測る。胴部全面に網目文が描かれている。1786・1787は初期伊万里の優品である。1786は丸形底狭の五寸皿で、内面には鶴が描かれている。1787は直径36.0cmを測る大皿で、内面には皿のサイズに合った大きな菊花文が1つ描かれている。また、高台には砂目痕が見られる。

土師器皿

1788～1790はロクロ成形による土師器皿で、いずれも底部を回転糸切りで調整している。1788・1790には口縁端部に油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたものと考える。

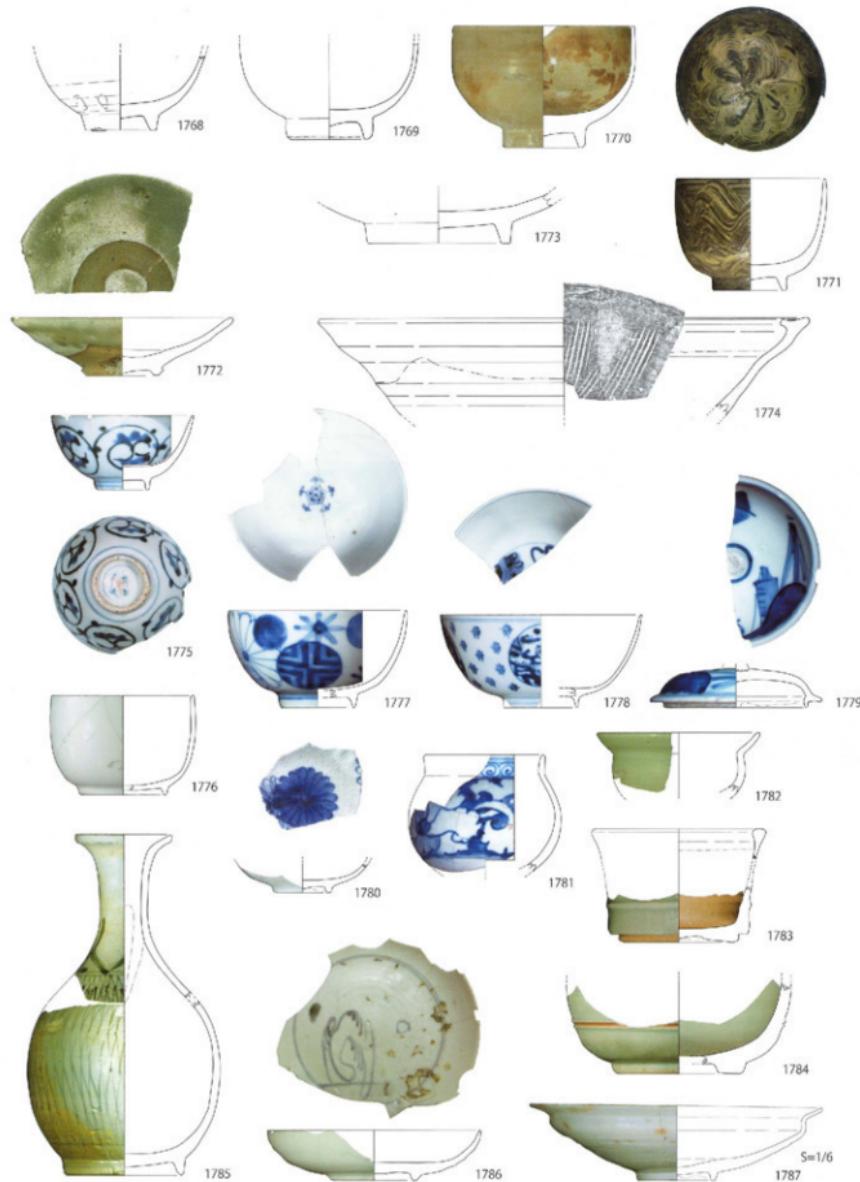
金属製品

1791は真鍮製の煙管で、雁首部分であるが火皿が欠損している。残存長は6.9cm、小口径1.2cmを測る。

石製品

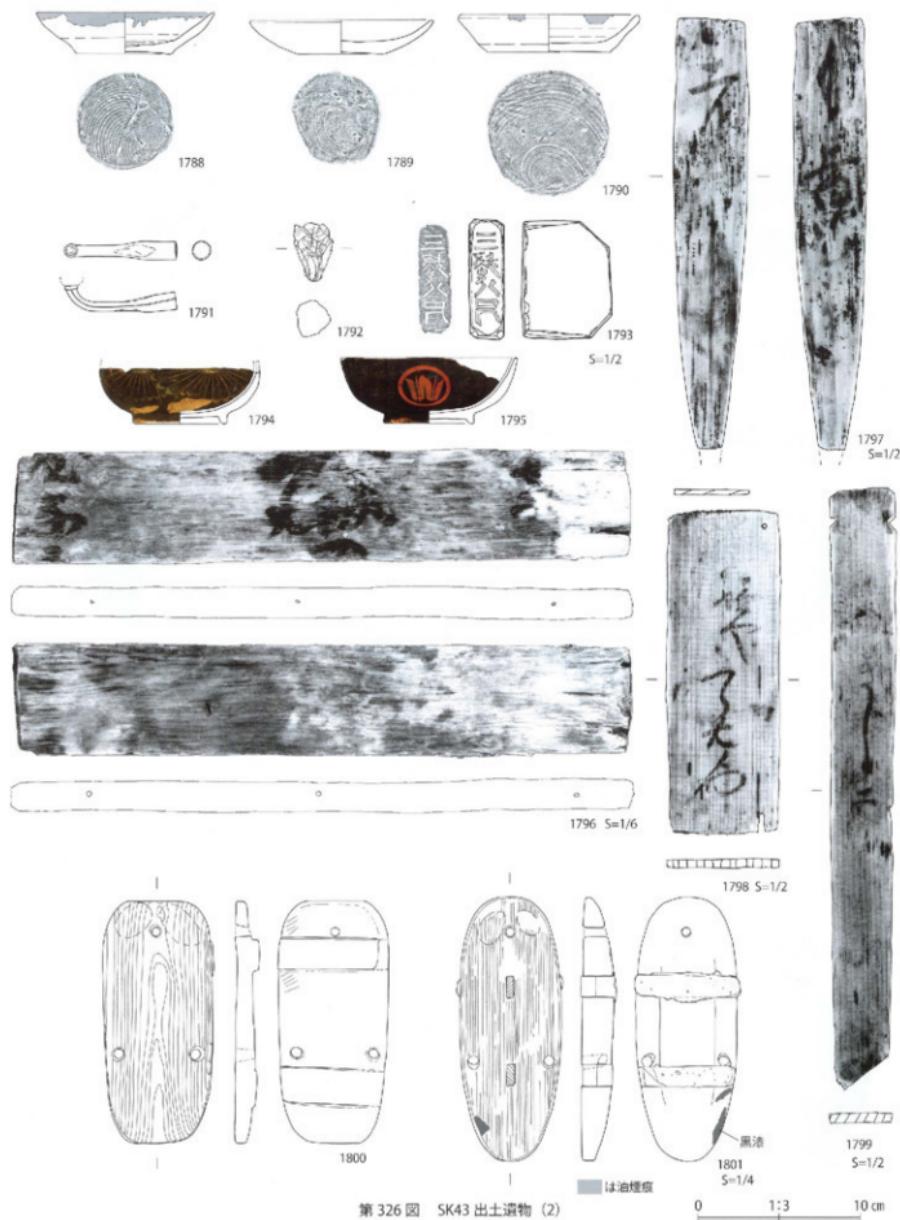
1792は火打ち石として使用されたもので、材質は不明である。最大長3.7cm、最大幅2.5cm、厚み2.2cm、重量20.39gを測る。

1793は石製の落款印である。落款印とは、書・絵・俳句などに作者の署名として押すもの

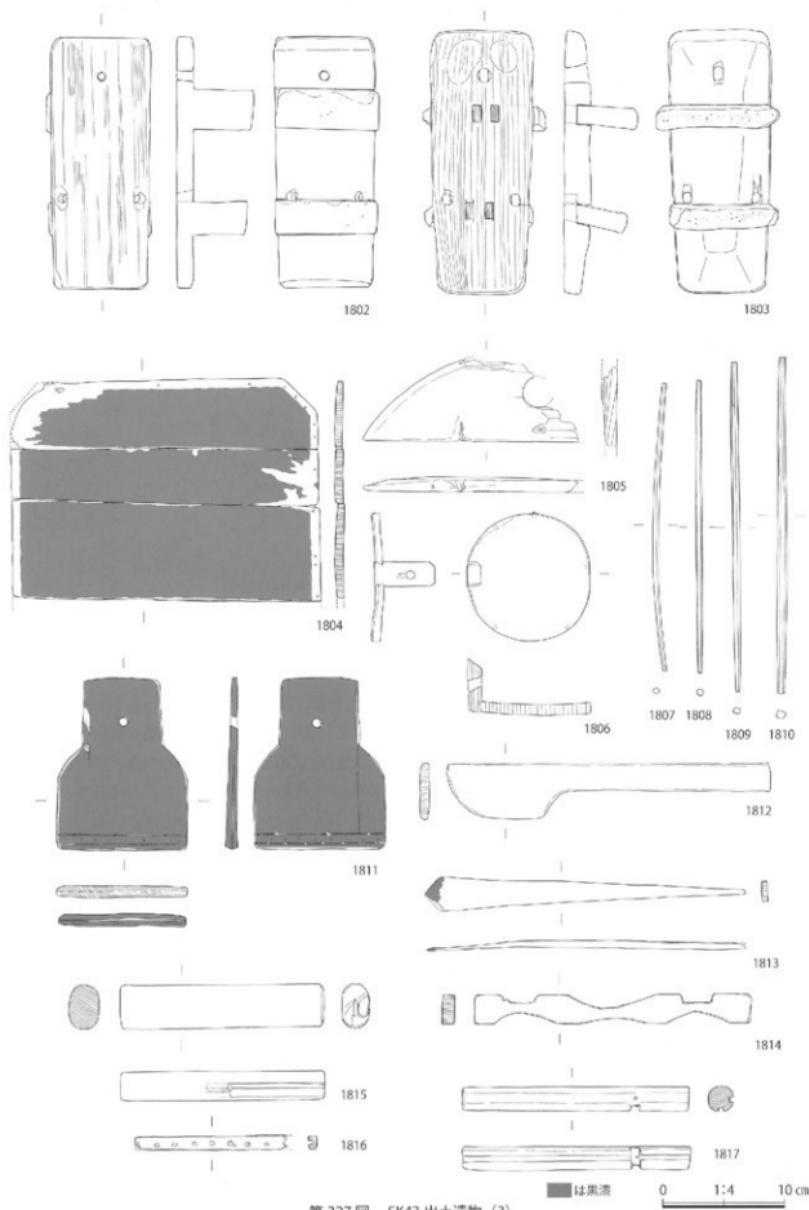


第325図 SK43出土遺物(1)

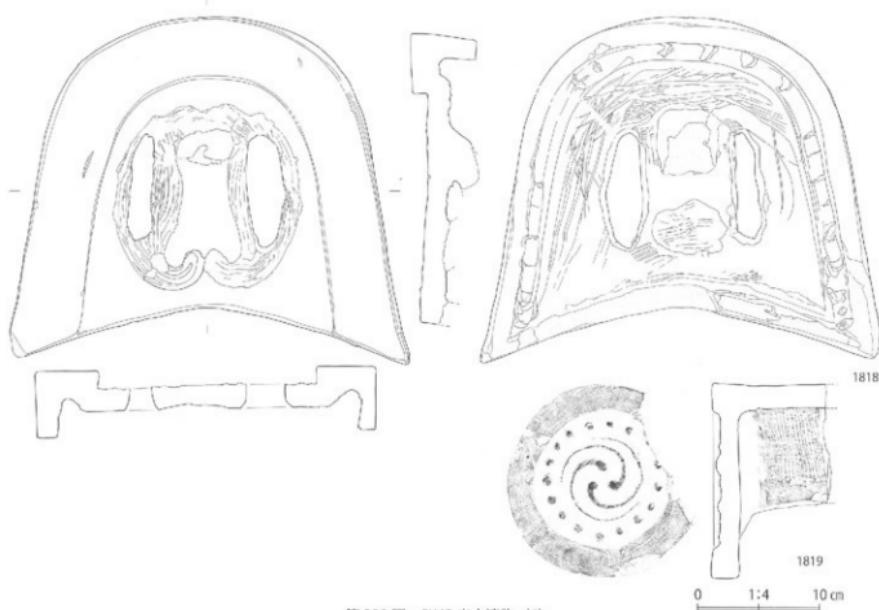
0 1:3 10cm



第326図 SK43出土遺物(2)



第327図 SK43出土遺物(3)



第328図 SK43出土遺物(4)

である。長さ4.9cm、幅3.7cm、厚み1.4cm、重量52.45gを測る。文字が刻まれていない方は持ち手であり、両角が斜めに削り落とされている。持つ際に握りやすいように加工されたものと考える。印文は、「三餐八尺」と陰刻されている。これは、「大廈千間 夜臥八尺 良田千畝日食三餐」という四言詩から「八尺」と「三餐」を引用したものと思われる。この詩は「大きな屋敷が無くとも寝るだけの広さがあればいい。千枚も水田が無くても、一日三度の食事ができればいい」という意味であり、贅沢をせずに質素儉約を貫くことを掲げている。この落款印がどのような境遇でつくられ、どのような意図の下に使われたかは判明していない。

漆器

1794・1795は漆塗で、外面に黒色、内面に赤色の漆塗りを施す。1794は黄絵で菊文が、1795は赤絵の丸文に筐が、それぞれ外面に描かれている。

墨書き製品

1796は最大長37.9cm、最大幅7.1cm、厚み1.8cmの大形板に墨書きが書かれている。文字の方向は板を横にした状態で縦書きされており、おそらくこの板1枚ではなく上下に何枚か繋げてあったものと思われる。

荷札木簡

1797は荷札木簡で、下方部が細く削られている。最大長17.7cm、最大幅3.1cm、最小幅1.0cm、厚み0.3cmを測る。両面に墨書き文字が見られ、左面には「二月（十一月か）四□」、右面には「上田□□」と書かれている。

1798は最大長13.3cm、最大幅4.7cm、厚み0.4cmを測る長方形形状の板で、右上に直径0.2cmの穿孔が見られる。墨書き文字があるのは片面のみで、「塩や一郎左衛門」と書かれている。

1799は上方部に紐を巻き付ける挟りが入れられている荷札木簡である。最大長24.6cm、最大幅2.8cm、厚み0.5cmを測る。墨書き文字は片面のみに書かれ、「き□二」または「さら二」

と読める。

木製品

1800～1803は下駄である。1800は連歯下駄で、角型と丸型の中間を示す丸型である。1801は角型の連歯下駄で、齒の厚みは前歯が3.2cm、後歯が2.6cmを測る。1802は丸型の差込下駄で、部分的に塗りの痕跡が見られる。1803は角型の差込下駄で、齒を差し込むホゾ穴が2個ずつ開けられている。1802・1803の歯裏には砂が密着しているのが見て取れる。また、前方鼻緒部分には指の跡が残っているものもあり、履かれていた当時を偲ばせるものである。

1804は長さ25.1cmを測る折板の底部で、表裏両面に黒漆が塗られている。1805は樽の蓋板で、端部付近に直径2.5cmの孔が開いている。1806は直径10.5cmの柄杓で、身部側板と底板の残存である。1807～1810は白木の箸で、長さは24～27.5cm間にわたり、全体的に長い箸である。1811は全面に黒漆が塗られている刷毛で、柄の中央に直径0.6cmの穿孔が見られる。紐を通した孔であろうか。刷毛部分には毛を通すために付けられた線刻状の痕跡も見られる。1812は最大長26.5cm、刃部8.0cm、柄の幅2.2cmを測る片刃のへら、1813は最大長26.1cm、柄の先端は0.4cm、刃部にかけて太くなり幅2.8cmを測るへら状のものである。刃部の先端には漆が付着しているが、何に使用されたものかは不明である。1815・1817は柄となる部分であり、1814・1816は不明品である。

瓦

1818は最大長28.5cm、幅32.9cm、厚み2.0cmを測る鬼瓦の一端で、鬼の顔を貼り付けた痕跡が顕著に見られる。1819は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲に珠文が17個廻る。巴文が通常より若干小さく、細い傾向にある。

SK44：廃棄土坑（第320・324図）

SK44

SK44は廃棄土坑群1内の最東端に位置する不定形の大形土坑である。南西—北東方向を軸として、長辺6.5m、短辺1.5～2.6m、深さ0.85mを測る。

遺物はSK43に次いで多く出土しており、その時期は九陶Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）に渡るもののが見られ、Ⅲ期（1650～90年代）が最も多いと思われる。

SK44 出土遺物（第329・330図）

国産陶器

1820～1823・1825～1827は陶器である。1820は肥前の丸形中碗、1821は肥前の呉器形中碗である。1822は瀬戸・美濃の腰張形中碗で、腰部が強い稜線とともに明確に折れ曲がる。1823は在地産の聾盤で、残存長10.4cm、器高3.7cmを測る。1825は口径30.5cmを測る肥前の大皿で、内面は幅の広い刷毛目文が描かれ、胎十目痕が見られる。1826・1827は鉢鉢で、1826は肥前系（備前系の可能性もある）、1827は須佐店津である。

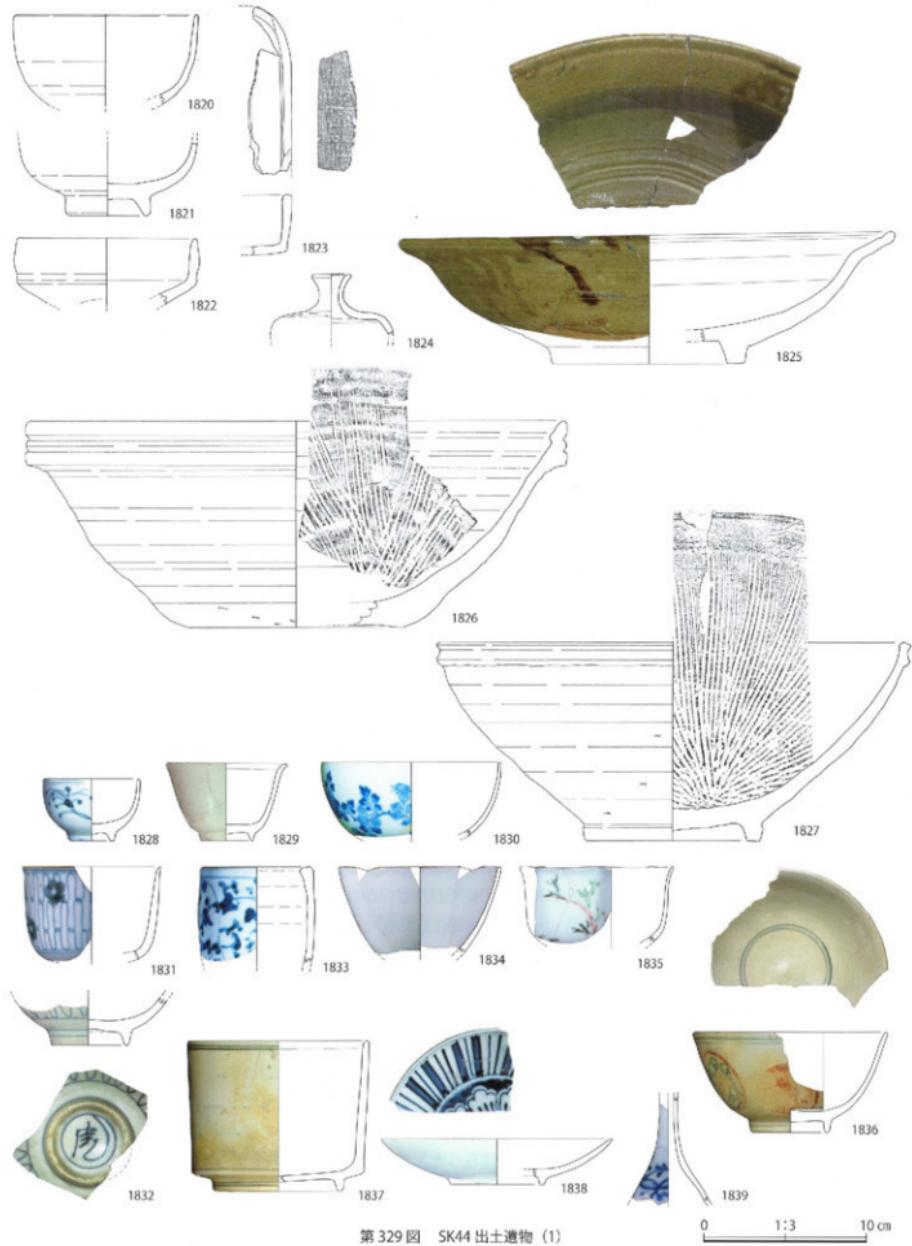
1824は炻器のペコカン形小瓶であり、備前系の可能性が考えられる。

国産磁器

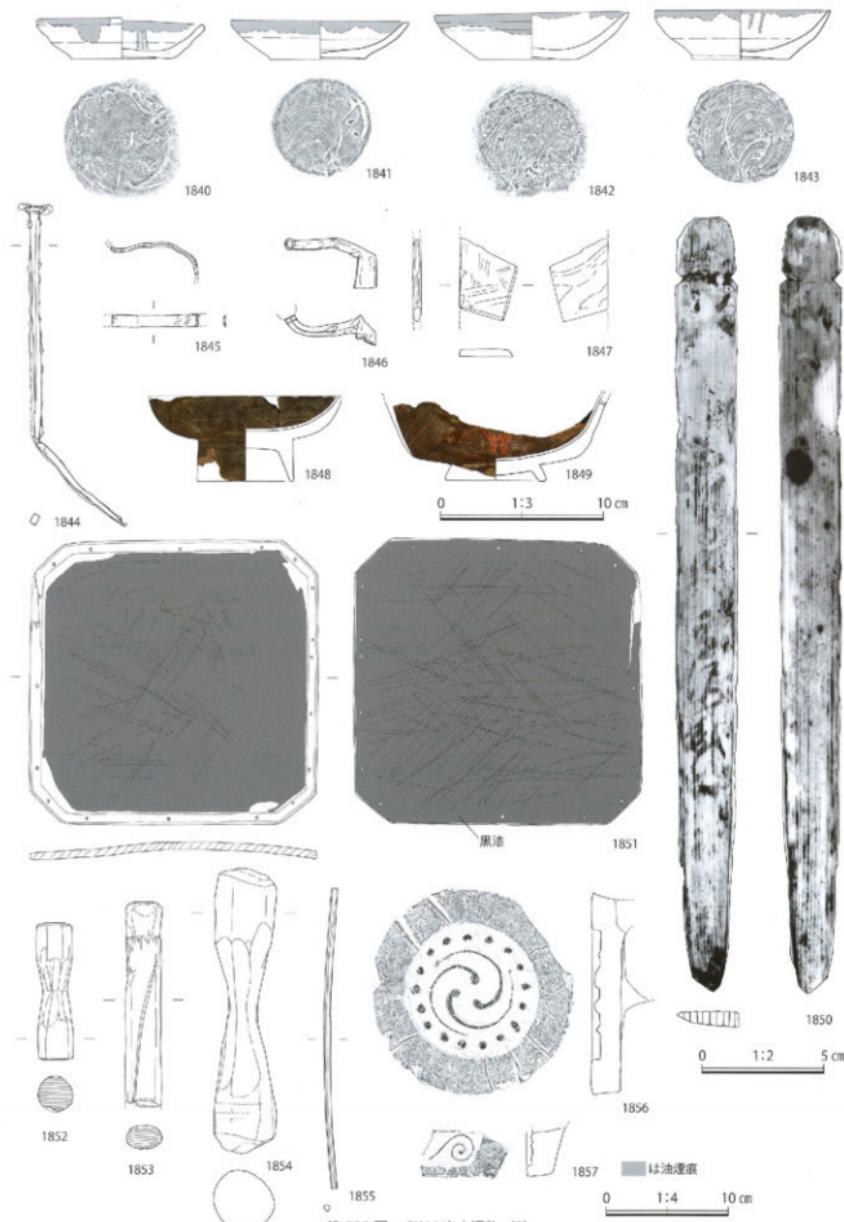
1828～1839は肥前磁器である。1828は腰張形小瓶、1829は白磁の端反形猪口である。1830～1832・1836は中碗で、1831は口縁端部に口銷を施し、外而是形化された綱目文に花文が点々と重なる美しい文様が描かれる。また、漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。1832は外面上に刷毛目文が描かれる。1836は外面上に色絵が見られる。1832・1836はいずれも高台に砂目痕が見られる。1833は外面上に蓮草唐草文が描かれる香炉、1834は白磁の體輪形向付、1835は色絵の八角形小鉢である。1837は口径11.2cmを測る半筒形の蓋物、1838は丸形底狭の五寸皿である。1839はらっきょう形の小瓶で、漆継ぎによる補修の痕跡が見られる。

土師器皿

1840～1843はロクロ成形による十割器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。すべて

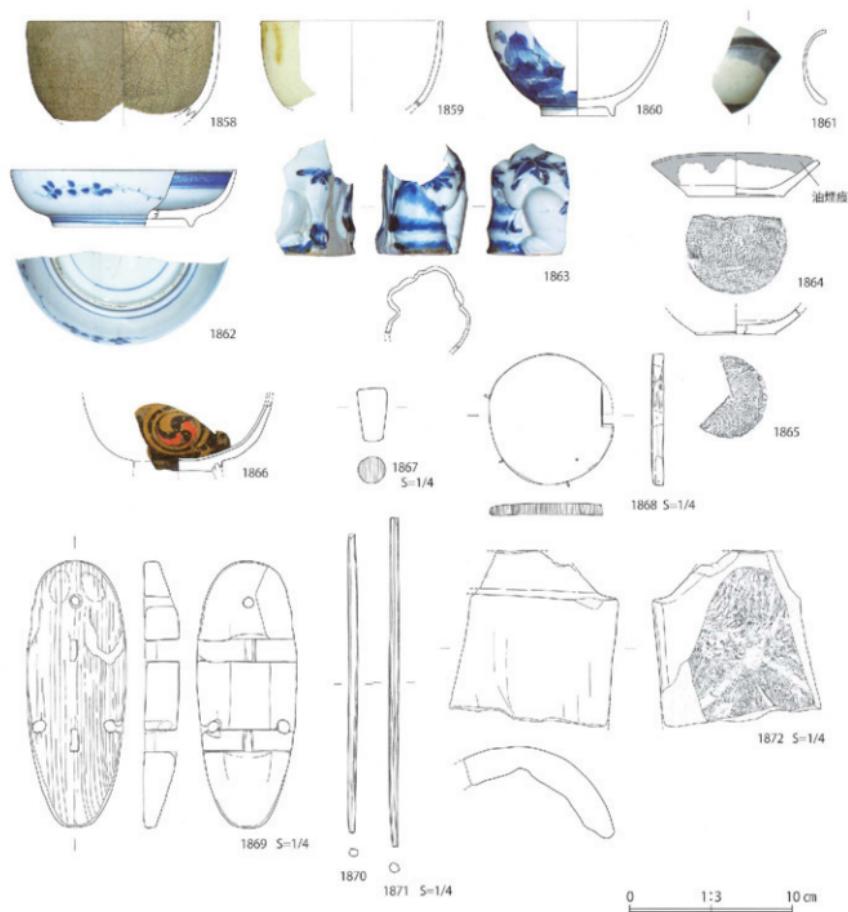


第329図 SK44出土遺物(1)



第330図 SK44出土遺物(2)

	の口縁端部に油煙痕、1840・1842の底部に火芯痕が見られることから、火明皿として使用されていたと考える。
金属製品	1844は鉄製の釘で、下方部で折れているが復元最大長は22.3cmを測り、カサ部分は2.1cmの面を持つ。1845は銅製の不明品、1846は真鍮製の煙管で、吸口部分である。
石製品	1847は砥石で、残存長4.4cm、残存幅3.5cm、厚みは0.45cmを測る。小さい破片だが使用痕は顕著に見られ、刃用の砥石ではないかと推測する。
漆器	1848は足高漆椀で、高台部分と器部分がともに2.6cmを測る特殊な器形を呈する。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には黄色で草文が描かれる。1849は一文字椀と呼ばれる漆椀で、腰部が一文字に見えるほど明確に張っている。外内面は全て黒色の漆が塗られ、外面には赤色でススキ文が描かれている。
荷札木筒	1850は最大長31.9cm、幅2.5cm、厚み0.6cmを測る宍形の荷札木筒である。上方部は紐を掛けるための抉りが両側から入り、下方部は先細るように加工されている。両面に墨書き文字が見られ、このうち解読が可能であったのは左面のみであった。「『御取品 有沢織部』と書かれており、「有沢織部」という人物が何かの品を納める、もしくは贈答する、というような意味合いでなかろうか。
木製品	1851は折敷の底板で、長さ23.5cm、幅23.3cmを測り、ほぼ完全な形で残る。全面に黒漆が塗られており、周縁には竹釘の痕跡が18個見られる。両面には引っ掻いたような傷が多数付けられている。1852・1854はほぼ同一形状を呈する糸巻きである。1852は最大長11.2cm、最大径2.9cm、最小径2.0cm、1854は最大長23.3cm、最大径5.2cm、最小径2.5cmを測り、どちらも中央部分を細く削り、全面に面取り加工を施している。1853は何かの柄となる木製品である。1855は長さ24.7cm、直径0.5cmを測るの白木の箸である。
瓦	1856は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が17個廻る。1857は軒平瓦で、唐草文が刻まれている。
	SK45・46：廐棄土坑（第320・324図）
SK45・46	SK45・46はSK46の中にSK45が後に掘られた重なりが見られる円形廐棄土坑である。SK45は直径1.5m、深さ0.55mを測り、SK46は直径3.1～3.5m、深さ0.7mを測る。
	SK45・46の出土遺物はいずれも九陶III期（1650～90年代）にあたると思われ、2つの土坑が掘られた期間は短い間に行われたものであったと言える。
SK45	SK45 出土遺物（第331図）
国産陶器	1858・1859は肥前陶器である。1858は丸形中碗で、1859は京焼系の丸形中碗である。
国産磁器	1860～1863は肥前磁器である。1860は丸形中碗で、高台に砂口痕が見られる。1861は合子の蓋、1862は丸形底広の五寸皿である。高台には砂が付着し、断面には漆継ぎによる補修が見られる。1863は猫が竹を抱いている様子を象った置物である。
土師器皿	1864・1865はロクロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1864は口縁端部に油煙痕が見られることから、火明皿として使用していたと考える。
漆器	1866は漆椀で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には黄色の「重丸に一部赤色の左三巴文が描かれる。
木製品	1867は円柱状の栓で、長さ4.3cm、最大径2.5cm、最小径1.7cmを測る。1868は柄杓の底板で、直径10.7cmを測る。
	1869は丸型の差込下駄で、最大長21.8cm、最大幅8.2cmを測るやや小さいものであ



第331図 SK45出土遺物

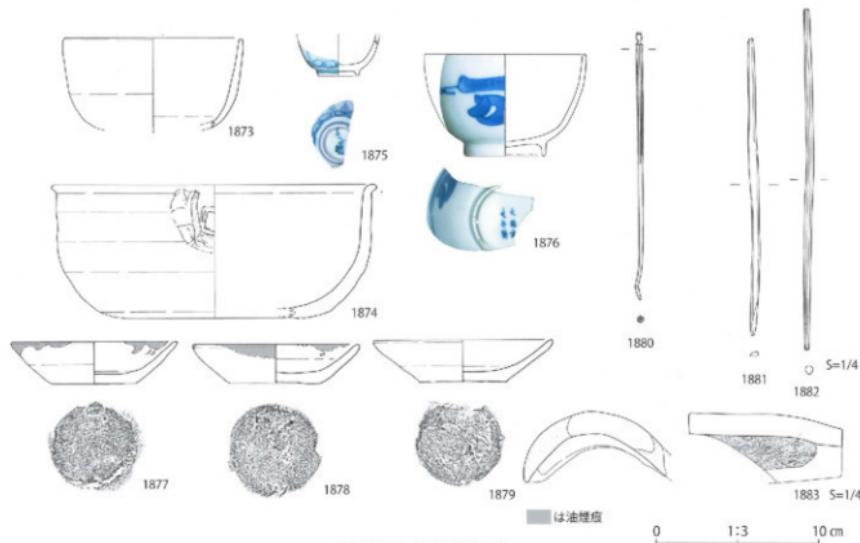
1870・1871は白木の箸で、1870は24.5cm、1871は27.0cmを測る。直径は0.6～0.8cmとやや太く、長い箸である。

瓦 1872は丸瓦で、コビキBである。

SK46 出土遺物(第332図)

国産陶器 1873・1874は肥前陶器である。1873は口径11.1cmを測る腰張形の中碗、1874は口縁切込丸形の片口である。腰溜が大きく張り出す形状を呈する。

国産磁器 1875・1876は肥前磁器である。1875は丸形小坏で、高台内に「太明」の銘が入る。1876は半球形の中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。



第332図 SK46出土遺物

- 土師器皿** 1877～1879はロクロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。
1877・1878の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたと思われる。
- 金属製品** 1880は長さ16.5cm、直径0.4cm、重量10.95gを測るもので、材質は不明である。頂部は頭部分が削り出されており、また端部は緩やかに歪曲している。この形状から、簪ではないかと推測する。
- 木製品** 1881・1882は白木の箸で、1882は27.9cmを測る長い箸である。
- 瓦** 1883は棟込瓦で、内面に布目の痕跡が確認できる。

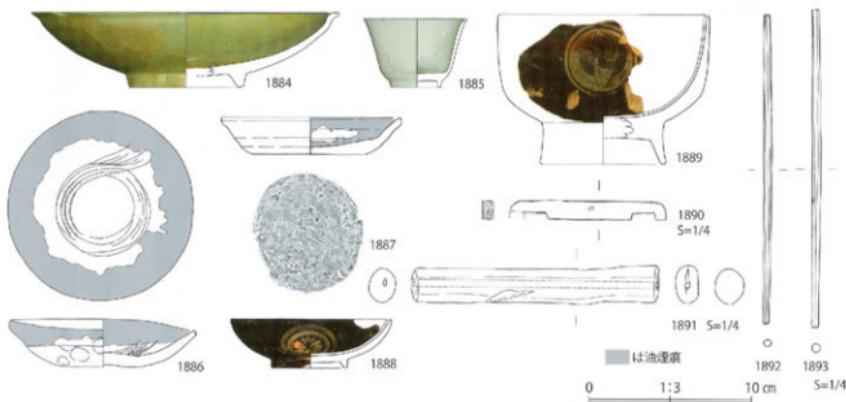
SK47：廐棄土坑（第320図）

- SK47** SK47は廐棄土坑群1内で最も西側に位置する円形土坑である。直径1.6～1.8m、深さ0.65mを測る小形の土坑である。
- 遺物は陶磁器・土師器・漆器・木製品が出土しており、概ね九胸Ⅲ～Ⅳ期（1650～1780年代）の時期を示すものと思われる。

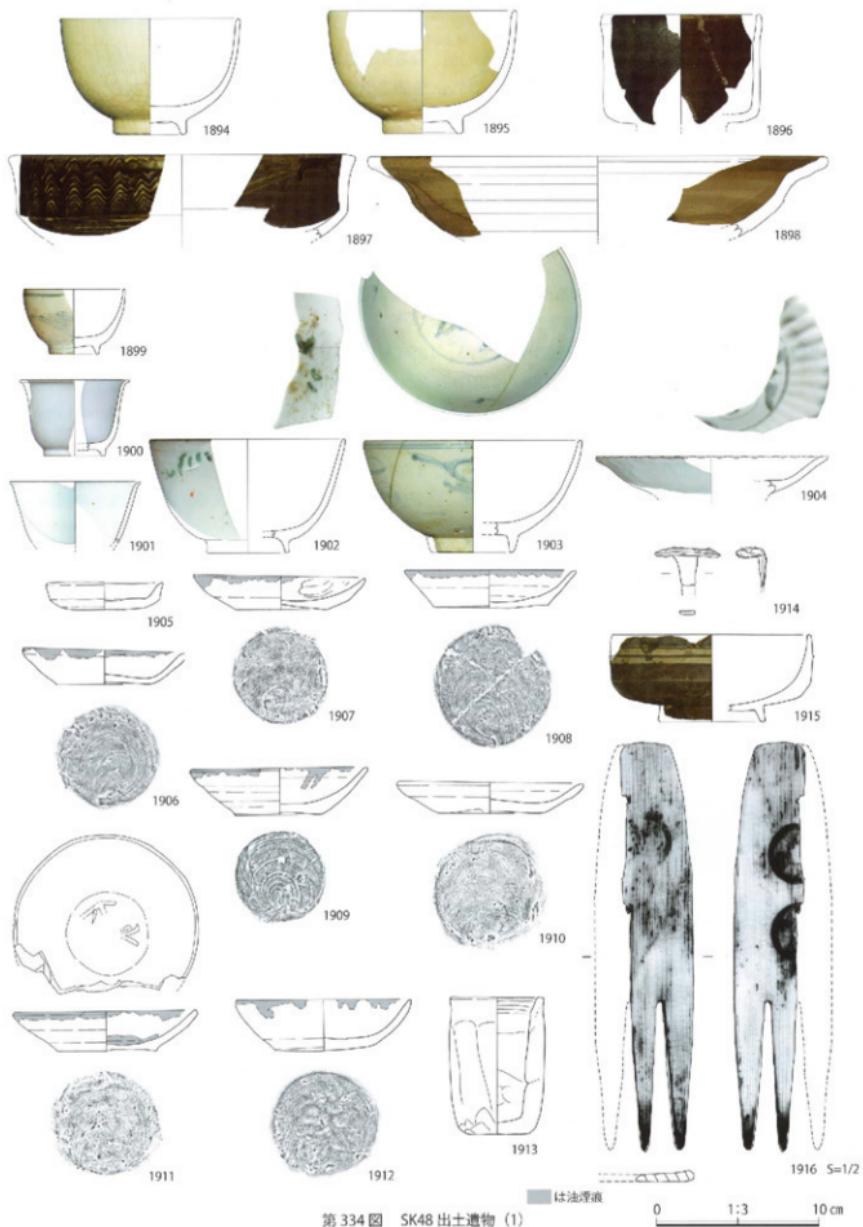
SK47 出土遺物（第333図）

- 国産陶器** 1884は肥前陶器の折線形中皿で、口径18.8cmを測る。口縁端部は短く外反する。
- 国産磁器** 1885は肥前磁器で、白磁の端反形小杯である。
- 土師器皿** 1886は手づくね成形、1887はロクロ成形による土師器皿である。1887の底部は回転糸切りで調整されている。いずれも油煙痕が認められ、灯明皿として使われていたと考える。
- 漆器** 1888・1889は漆椀である。1888は器高3.0cmを測る椀で、外面に黄色二重丸に五弁花文が3個描かれている。蓋の可能性も考えられる。1889は高台の高さ2.6cm、器高9.2cmを測る椀で、外面には黄色丸に鶴文が3個描かれている。いずれも外面は黒色、内面は赤色

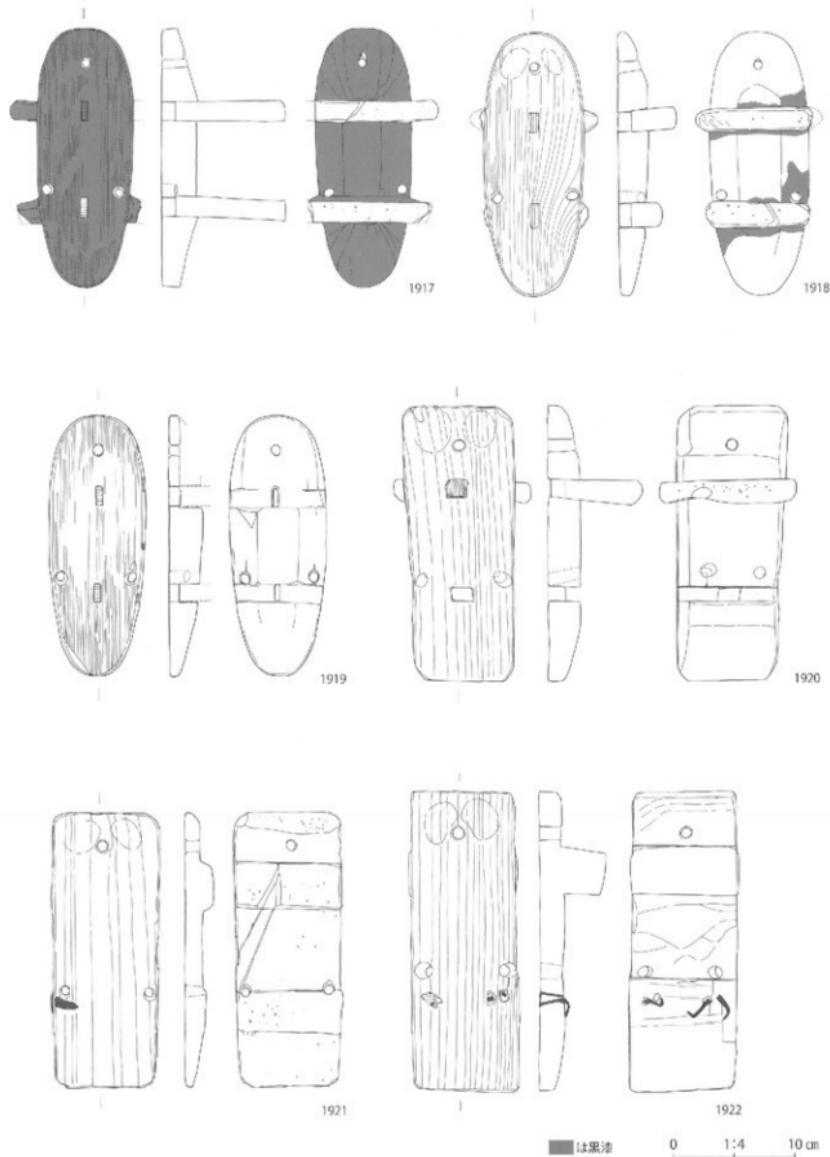
- の漆が塗られている。
- 木製品** 1890は不明品、1891は何かの柄となる部分である。1892・1893は白木の箸で、いずれも長さ26cm前後、直径0.6～0.7cmを測るやや太い箸である。
- SK48：廐棄土坑（第320図）**
- SK48** SK48は廐棄土坑群1内の最東端に位置し、SK44の南東側に掘られた方形に近い形状を呈する土坑である。SK48の東側は調査範囲を越えるため、すべてを掘り切るには至っていない。南北長2.5m、東西幅1.8m、深さ0.80mを測る土坑で、やや小さい土坑ながらも遺物は多量に出上した。
- 遺物の年代は九陶Ⅲ期が占めている様相である。
- SK48 出土遺物（第334～336図）**
- 国産陶器** 1894～1898は肥前陶器である。1894・1895は口径11.0cm前後の呂器形中碗、1896は半筒形中碗である。1897は口径21.3cmを測る中鉢で、口縁部が外反しながら垂直に立ち上がる。外面には波打つ刷毛目文が描かれる。1898は折縁形の大皿で、口径28.4cmを測る。内面は大振りの刷毛目文が描かれる。
- 国産磁器** 1899～1904は肥前磁器である。1899は丸形小壺で、外面に「遠山」が描かれる。1900・1901は白磁の端反形小碗、1902は丸形中碗で、色絵が入る。また、黒色の横隠線が引かれている。1903は浅半球形の大碗で、見込みに荒礫文が描かれる。1904は型押成形による菊花形の五寸皿である。
- 土師器皿** 1905は口径7.2cm、底径3.1cm、器高1.7cmを測る小形の土師器皿で、手づくね成形による変形形のものである。器高が低く、口縁部も短く外反しない。1906～1912はロクロ成形による土師器皿で、底部は回転糸切りで調整されている。1906～1912は全て口縁部に油煙痕が見られ、灯明皿として使われていたと思われる。
- 焼塩壺** 1913は焼塩壺の身である。筒形を呈し、口縁端部はわずかに外傾する。
- 金属製品** 1914は鉄製の釘で、残存長2.3cm、カサ部分は4.0cmを測るものである。
- 漆器** 1915は平椀で、扁平な形状を呈する。全面に黒色の漆が塗られており、口縁端部のみに赤



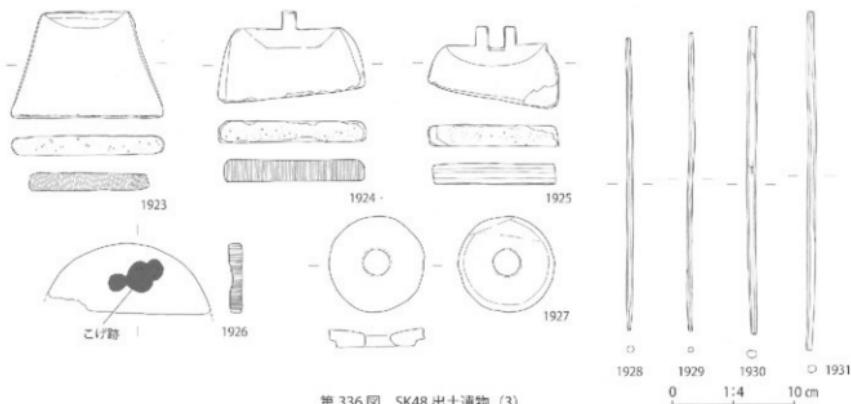
第333図 SK47出土遺物



第334図 SK48出土遺物(1)



第335図 SK48出土遺物(2)



第336図 SK48出土遺物(3)

漆が塗られている。また、口縁部から1.3cm下方の位置に明確な稜線が巡り、その上下に黄色線が1本ずつ引かれている。

木製品 1916は下方部が三又に分かれる加工が成されている板で、最大長16.7cm、残存幅3.0cm、厚み0.4cmを測る。復元最大幅は4.0cmを推定する。三又に分かれる部分は櫛状に切り込みがあり、ほぼ均等間隔を保ってつくられている。両面に墨書き文字は見られなかつたが、貨幣（おそらく寛永通宝）の焼印が2ヶ所ずつ焼き付けられている。

1917～1922は下駄である。1917～1919は丸型の差込下駄で、いずれも最大長21cm前後を測る小さいものであり、黒漆が塗られている。1917は器高10.0cmを測るもので、歯の損傷があまり見られない完形に近いものである。1920は角型の差込下駄である。1921・1922は角型の連歯下駄で、1922の後歯には補修した痕跡が見られる。1923～1925は差込下駄の歯で、1923はホゾがなく大きな擦り減りが見られない。1924はホゾ1本、1925は2本で、歯部分はいずれも斜めに擦り減っている。

1926は皿物の底板で、焼き焦げ、火起こしの痕跡が見られる。1927は直径8.0cmを測る不明品で、中央に直径2.2cmの穴が開いている。1928～1931は白木の箸で、長さは24.0～27.7cmの間に測る長い箸である。

SK50～55：廃棄土坑群2（第320・337図）

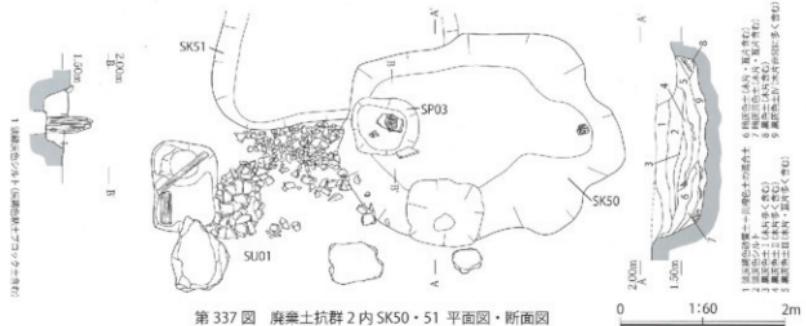
SK50～55 SK50～55は調査区中央に近い西寄りの部分に見られる廃棄土坑群である。帯状区画東端にある廃棄土坑群1から西側に約10m離れた位置に、廃棄土坑が集中して掘られていることから、廃棄土坑群2と呼称する。

廃棄土坑群2は屋敷境石積溝SD01に程近い所にSK50・51、そこから約2m西側に離れた位置にSK52～54、さらに西側でSK55を検出した。なお、土坑の詳細については後述する。

SK50・51：廃棄土坑・SU01：瓦敷遺構（第337図）

SK50・51 SK50は東西長3.5m、南北幅2.7m、深さ0.65mを測るいびつな楕円形土坑である。先に掘られたSK51（東西長3.0m、南北残存幅1.3m、深さ0.6m）を切って掘り込んでいるのを確認し、2つの土坑が重なる部分の西側には瓦敷SU01を検出した。

SU01 SU01は3～15cmの大瓦片が1.0m四方のいびつな範囲内に敷き詰められていた。おそ



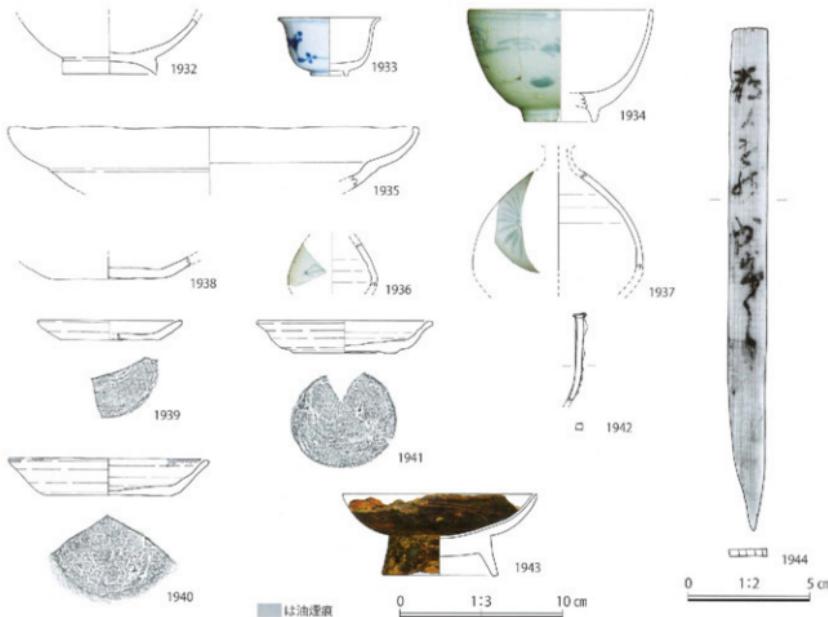
第337図 废棄土堆群 2内 SK50・51 平面図・断面図



SK50 (東から)

SP03 (南西から)

SU01 (南東から)



第338図 SK50 出土遺物 (1)

らく SK50・51 を掘り込む際に壊されたものと思われ、掘り込みの際まで瓦が残存しているのを確認している。また、SK50 の内面には瓦片が數点落ちていたことからも、SK50・51 と SU01 との新旧関係が見出せると思われる。SK50 内の西側には SK50 を埋めた後に柱を立てるための穴 SP03 が掘り込まれており、柱の下には礎盤石として 30cm 大の赤大海崎石が入れられていた。

SK50・51 から出土した遺物は陶磁器・土師器皿・漆器・荷札木簡・木製品・瓦片など様々である。遺物の年代は九鞠Ⅲ～IV期（1650～1780 年代）のものが主であると思われる。

SK50 出土遺物（第 338～340 図）

国産陶器 1932 は肥前陶器の中碗で、高台には砂が付着している。高台内は明確な稜線が入っておらず、断面が三角形状を呈する。

貿易磁器 1933 は中国磁器・精製で、景德鎮窯系の腰張形小杯である。口縁部は強く外反し、高台内は無釉である。

国産磁器 1934～1937 は肥前磁器である。1934 は丸形中碗で、高台内は無釉である。1935 は口径 25.2cm を測る白磁の中皿で、口縁部は外傾しながら内湾し、端部はさらに内湾する。また、口銘が施され、断面には漆擦ぎによる補修の痕跡も見られる優品である。1936・1937 は花瓶で、1936 は胸部最大径 5.4cm、1937 は 10.4cm を測る。いずれも胴部が張り出し丸味を持つ形状である。

土師器皿 1938 は手づくね成形、1939～1941 はロクロ成形による土師器皿である。後者の底部は回転糸切りで調整されている。1940・1941 の口縁端部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使われていたものと考える。

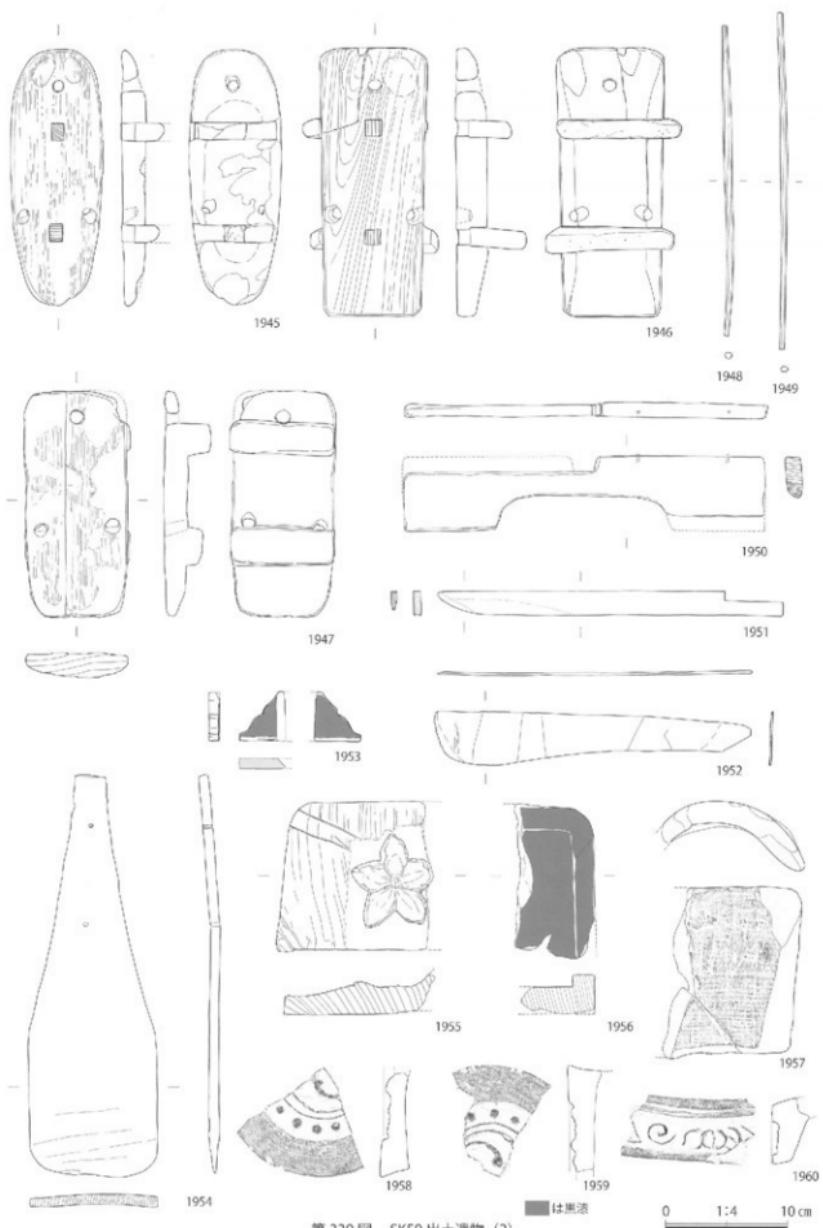
金属製品 1942 は鉄製の釘で、残存長 5.4cm、重量 2.50g を測る。先端部を欠損している。

漆器 1943 は漆椀で、高台部分が高く 2.4cm を測るもので、「ハ」字状に開く。高台と器部分の深さがほぼ同じである。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られ、外面上には赤色で松が描かれている。

荷札木簡 1944 は最大長 20.6cm、最大幅 1.6cm、厚み 0.3cm を測る荷札木簡である。上方部には紐を付けるための抉りが片側のみわずかに入り、下方部は先細る。墨書文字は片面に見られ、「鶴ノけのつけし」と解読できた。この一文が何を表しているのかは現時点では不明であるが、「鶴」に関連する荷札であろうと思われる。

木製品 1945～1947 は下駄である。1945 は丸型の差込下駄で、長さ 20.9cm を測る小さいものである。1946 は角型の差込下駄、1947 は角型の連歛下駄である。1948・1949 は白木の箸で、1949 は 27.7cm を測る長いものである。1950 は長さ 29.5cm を測るもので、折敷の脚部ではないかと思われる。1951 は刀身の模倣品と思われ、最大長 28.1cm、幅 2.0cm を測る。1952 は刃部が擦り減っている片刃のヘラである。1953 は三角形状を呈する小形木製品で、飾り彫りが施される丁寧なつくりだが、その用途は不明である。1954 は最大長 32.9cm、刃部 10.5cm を測る大形の両刃ヘラである。1955 は長さ 12.3cm、残存幅 12.9cm、厚み 2.7cm を測る木製品で、中央に桔梗の花を象り彫ってある。また、隅にはホゾ溝が斜めに切られている。1956 は不明木製品であるが、黒漆が塗られている。1961 は桶の蓋板で、22.8 × 28.6cm の楕円形である。表面には目釘の痕跡が 8 ケ所確認され、その並びに沿って変色している。1962 は桶の底板で、直径約 28.4cm、厚み 1.7cm を測る。1963～1973 はすべて桶の側板である。1963・1964 は上部を L 字状に丸く加工してある。

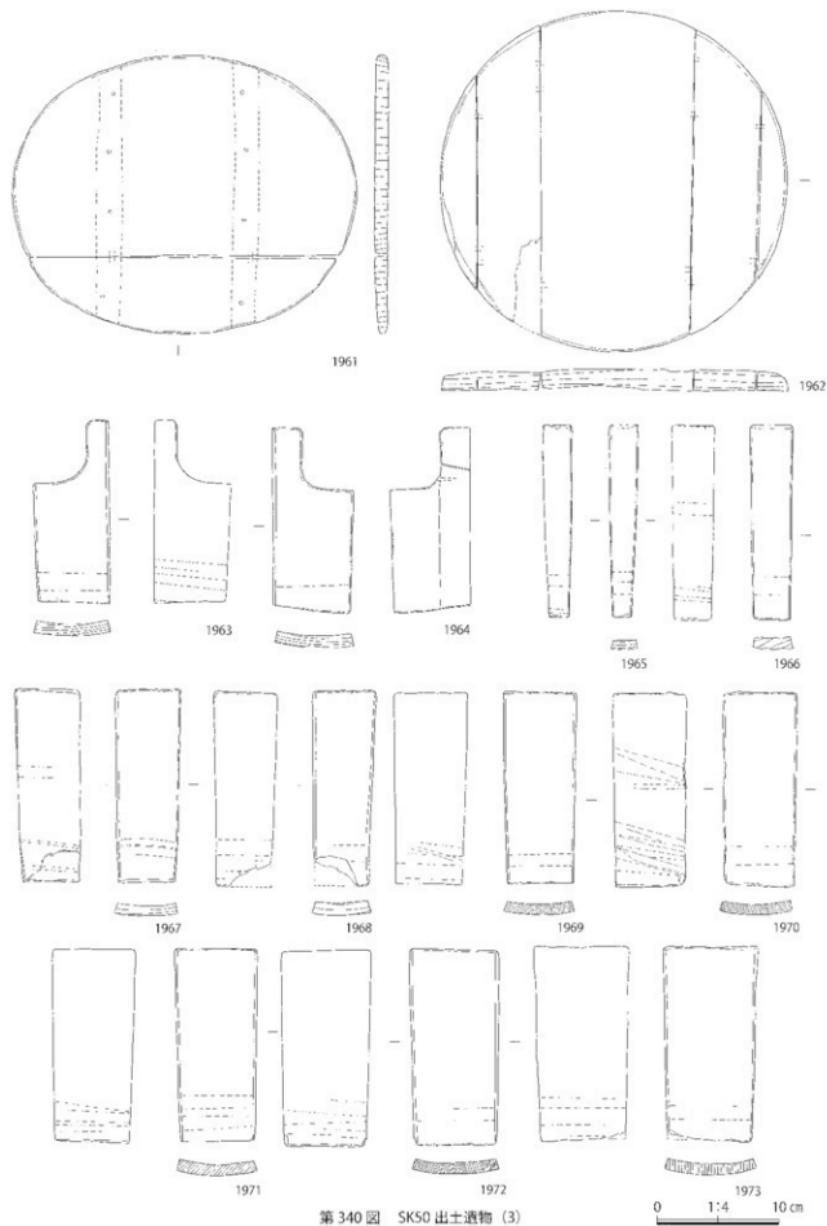
瓦 1957 は棟込瓦で、長さ 13.6cm、残存幅 10.5cm を測り、コビキ B である。1958・1959



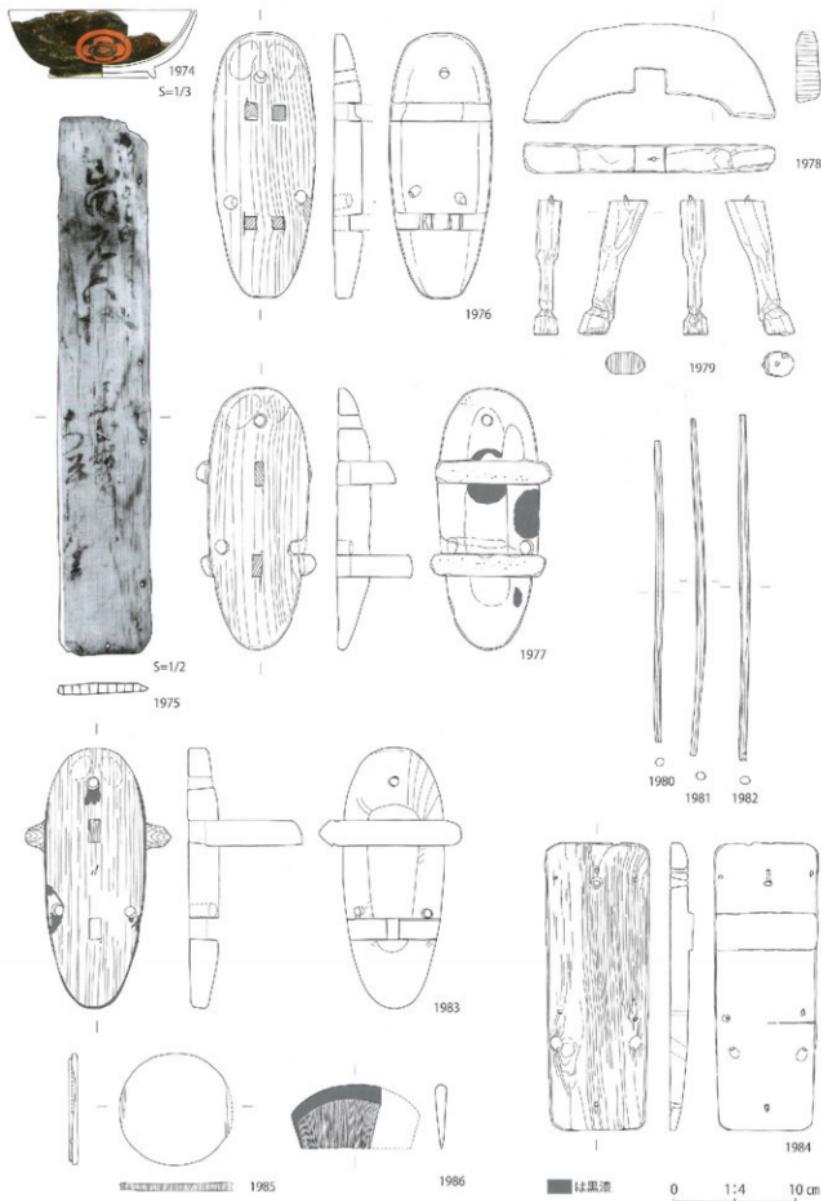
第339図 SK50出土遺物(2)

■は黒漆

0 1:4 10 cm

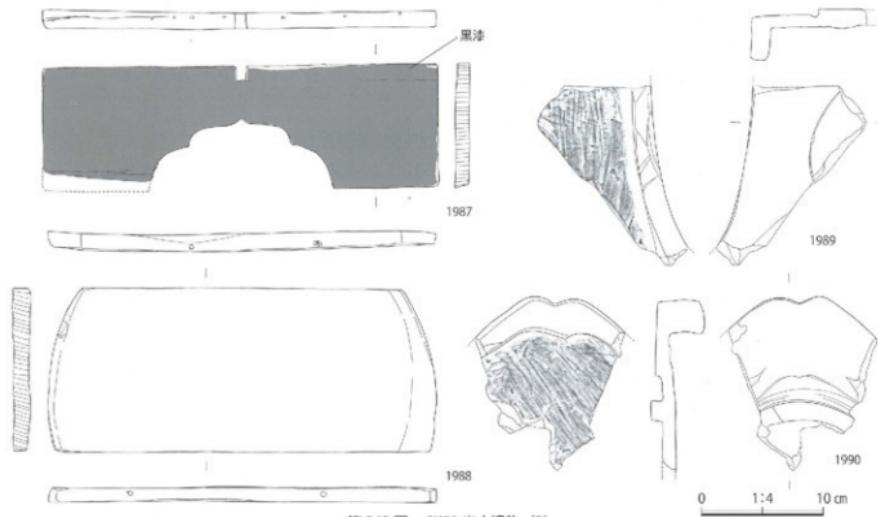


第340図 SK50出土遺物(3)

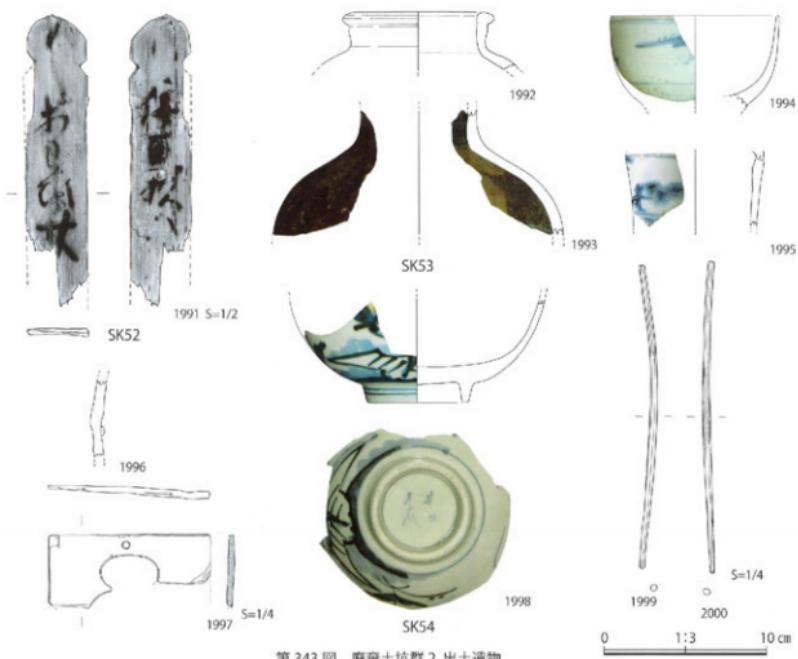


第341図 SK51出土遺物(1)

- は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が廻る。いずれも巴文の周りに圍線が見られる。1960は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。
- SK51 出土遺物（第341・342図）**
- 漆器** 1974は漆椀で、器高が4.1cmと低く扁平な形状を呈する。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られており、外面には赤色の丸の中に木瓜が描かれる。
- 墨書き木製品** 1975は長さ22.0cm、残存幅4.9cm、厚み0.4cmを測る長方形の板で、その片面に墨書き文字が書かれている。上方に「坂 上町 山田元真様」とあり、下方に「歳 町内 口」とある。いずれも2列で書かれている。下方の文字は途中で途切れていることから、板は左側へ続くものと思われる。
- 木製品** 1976・1977・1983・1984は下駄である。1976・1977・1983は丸型の差込下駄で、1984は角型の連歛下駄である。1978は灯明の台となる木製品の一部ではないかと思われる。1979は馬の置物の片脚部分である。脚の器高は11.0cmを測り、胴体部分との接合のための口釘が残っている。蹄の底部にも口釘があり、台座に接地させるためのものと思われる。脚の胴部に渡るまで丁寧な面取りを施し、実物に近い造形が成されている。1980～1982は長さ24.8～28.4cmを測る白木の箸である。1985は山物の底板か蓋板で、直径9.2cm、厚み0.7cmを測る。1986は櫛で、黒漆の皮膜が確認できた。1987は折敷か箱物の脚部、1988は桶か樽の底板と思われるもので、全面に柿渋が塗られている。
- 瓦** 1989・1990は鬼瓦の一部であるが、詳細は判別できていない。
- SK52：廃棄土坑（第320図）**
- SK52** 廃棄土坑群2内の中央部分に位置する楕円形土坑で、東西長1.5m、南北幅0.9m、深さ0.6mを測る。遺物は墨書き文字が書かれた荷札木簡が出土している。
- SK52 出土遺物（第343図）**
- 荷札木簡** 1991は残存長11.8cm、幅2.5cm、厚み0.3cmを測る荷札木簡である。上方部は丸く加工され、紐を付けるための抉りが入る。下方部は欠損しているため不明である。墨書き文字は両面に見られ、解読できたのは左面のみであった。「おわひせ」もしくは「あわひ大」とも読み、後者ならば、大きな飽を指すとも考えられる。
- SK53：廃棄土坑（第320図）**
- SK53** SK51の西側に隣接し、南北長3.8m、東西幅2.2m、深さ1.0mを測るやや人形の楕円形土坑である。遺物は肥前陶磁器が出土しており、その時期はおよそⅢ期（1650～90年代）であろうと思われる。
- SK53 出土遺物（第343図）**
- 国産陶器** 1992・1993は肥前陶器である。1992は垂直に立ち上がる壺の口頸部で、口縁端部は肥厚する。上野・高取系の可能性が考えられる。1993は頸部径7.1cm、胴部最大径18.2cmを測る瓶である。
- 国産磁器** 1994・1995は肥前磁器で、1994は丸形中碗、1995は半筒形の中碗である。
- SK54：廃棄土坑（第320図）**
- SK54** SK52の東側に隣接する楕円形土坑である。北東・南西を長軸とし、長辺3.0m、短辺2.1m、深さ0.9mを測る。土坑の南側はSE02（第249図）の掘り方によって壊され



第342図 SK51出土遺物(2)



第343図 腹窓土坑群2出土遺物

ている。遺物は志野、肥前磁器などが出土しており、時期は九陶IV期（1690～1780年代）を示している。

SK54 出土遺物（第343図）

国産陶器

1996は志野の碗で、胴部の破片である。

国産磁器

1998は肥前磁器の大碗で、見込みに五弁花文が崩れたものが描かれる。

木製品

1997は用途不明の木製品である。長さ13.2cmを測る中央には鼈甲形の削り抜きと直径0.7cmの穿孔が見られる。1999・2000は白木の箸で、いずれも25cm前後の長いものである。

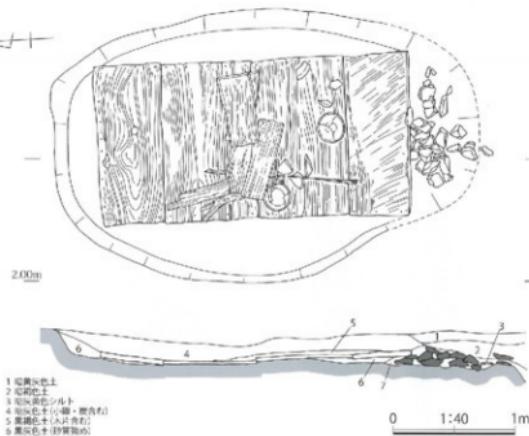
SK56：土坑（第344図）

SK56

SK56はSE02（第249図）の東隣に位置し、南北方向を軸とした楕円形の土坑である。掘り方は南北長3.5m、東西幅2.24m、深さは0.2mを測る。

土坑内には大形板が4枚重ならないように敷いてあり、その上の中央部分には木片・土師器皿・古錢が散らばっていた。さらに、板の下部、南側の一部分には、部分的に小石が敷かれていた。

土坑内に敷かれていた4枚の板は、北側と南側にある2枚は幅0.5m、厚み4cmを測るもので、中に挟まれている2枚は幅0.75～0.8m、厚み2cmを測る。外側と内側で幅が異なっているが、長さはいずれも同一で、1.2mを測る。また、4枚合わせた状態の外側を囲むように、ほぼ均一の間隔で目釘の痕跡が確認できた。目釘が打ち込まれていた痕跡はあるが、板の下に目釘で固定するような木製品は見られなかったことから、4枚並べて敷かれる以前、これらは別の用途のために組み合わされていたのではないかと推測する。その時の目釘の痕跡を残した



第344図 SK56 平面図・断面図



SK56（南西から）

まま転用されたものではないだろうか。

板の下、南側の一部分に小石が敷かれていたことに関しては理由は判然としないが、板を敷く前に石が置かれた状況と思われる。何らかの意図を持ったものだろう。

SK56の性格は現時点では不明な点が多く、また類例も乏しい。考えられるのは墓か地鎮関連の遺構ではないかと思われる。

SD08：石積溝

SD08

SD08は調査区西寄り、屋敷境石積溝SD01に直角にぶつかる場所に位置する石積溝である。石材は全て島石を使用しており、20～60cm大の石で構成されている。南北長5.05m、溝の幅0.3m、深さ約0.5mを測り、北側はSD01と直角にぶつかり、南側は廃棄土坑SK59の掘り込みによって消滅している。SD01付近の石積は乱れており、石が消失している部分が見られる。これはSD01をつくる際にSD08が破壊された痕跡と思われる。SD01が新しく、SD08が古い溝であることが分かる。

石積溝SD07（第321図）で前述したように、SD07とSD08は互いの延長線上でぶつかる可能性が考えられる。SD07はSD08と直角にぶつかった後、さらに西へ伸びていたことも考えられるが、推測の域を出ない。仮にSD07とSD08が合流する形でつくられていたとしたら、必然的にSD01とも繋がることとなり、南屋敷の排水施設として機能していたものと考えられる。SD08が暗渠であったか開渠であったかは判明していないが、排水施設であるとともに、区画を分ける意味合いを持つものであったことも考えられる。

遺物は瓦片が出土している。

SD08 出土遺物（第345図）

瓦

2001は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

2002は右棧瓦の可能性が考えられるものである。

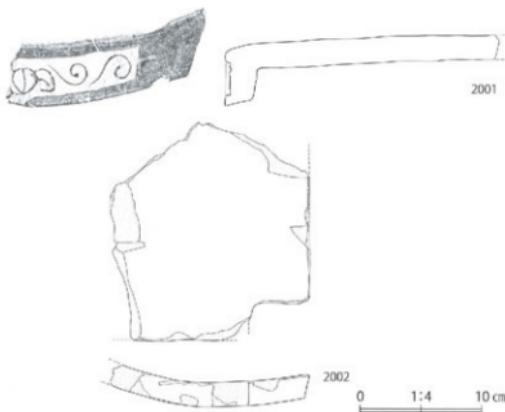
SK57：土坑

SK57

SK57は石積溝SD08の南東側に位置するいびつな楕円形土坑である。南北長2.6m、東西



SD08(南から)



第345図 SD08 出土遺物

残存幅0.7m、深さ0.7mを測り、土坑内には木製の厚い板が並んでいるのを確認した。板の下と横にはさらに板があることがわかり、横の板は縦に立てられている状況であった。下の板は上の板と同様な形態で敷かれていた。

SK57の内部には板状木製品が頃雜に入っているのではなく、各パーツが組み合わされた浅い箱状の木製品が安置されていた。木製品は南北長1.4m、東西幅0.3m、深さは約0.15mを測る。



SK57（北西から）

SK57内にはこの木製品しか入っていなかった。木製品は土坑に投げ込まれ破壊を受けたようないぶれはなく、むしろ丁重に置かれ埋められたものだと判断した。他の廃棄土坑などから出土する木製品とは明らかに異なる様相であった。ただ、遺物の損傷が激しく、実測を行えなかったことを付記しておく。

SK58

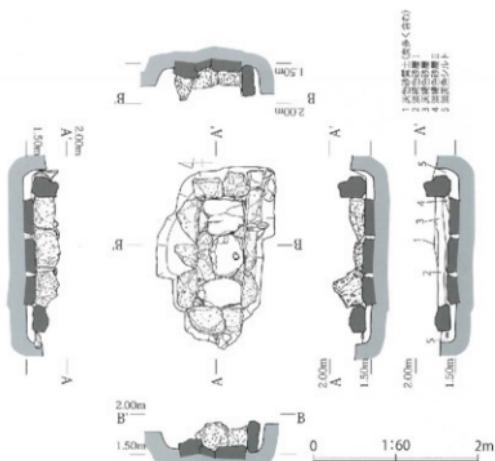
SK58は調査区最西端に位置し、東西方向を長辺とした石積方形土坑である。使用されている石材は底面に敷かれている50cm以上の大形石3個が赤大海崎石、それ以外の石はすべて島石で構成されている。いずれの石も30~50cm大の大きなものを使用しており、現存で1段積みである。側面の石は内側で面を合わせて立ててあり、内法は東西長1.32m、南北幅0.6mを測る。北側長辺の石が不崩いであることから、後世に石が抜かれた可能性が考えられる。

石積方形土坑は多数検出しているが、その中でSK58は他とは異なる様相を呈している。まず、石積施設を構成している石が全体的に大きい石を使用している。これに関しては石積が抜かれた可能性が考えられるので、現存するのは最下段の石で、本来はこれらの上に小さな石が数段積まれていたことも考えられる。

次に、石積内部の底面に50cm以上の大型石を設置しているのは他に類を見ない形態である。また、底



SK58（西から）



第346図 SK58 平面図・断面図

面には大海崎石、側面には鳥石を使用しており、意図的に石の種類を変えていると思われる。これらの要素は、SK58が他の石積方形土坑とは異なる用途のためにつくられたことを示唆するを考えている。しかし、その用途の特定に至る決定的な確証は得られていない。

遺物は肥前陶磁器が出土しており、時期は17世紀代を示す。

SK58 出土遺物（第347図）

国産陶器

2003は産地不明の陶器小壺で、茶入れの可能性が考えられる。口径4.2cm、胴部最大径7.8cm、器高7.8cmを測り、全体的に肥厚し丸みを帯びる。

国産磁器

2004は肥前磁器の端反形小杯で、高台に砂が付着している。

SU02：瓦敷

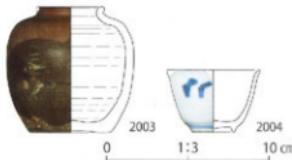
SU02

SU02は石積溝SD08の東隣に位置する瓦片の集積遺構で、屋敷境石積溝SD01に近い北側に1ヶ所と、そこから約2m南に1ヶ所見られる。

SU02の形態は、細かく割れた5~15cm大の瓦片が、いびつな約1m四方の範囲に密集して敷き詰めてられている。その検出状況から、瓦が自然に割れて留まつたものではなく、意図的に割れた瓦片を敷いたものと思われる。瓦片は平瓦が多いが、中には残存率の良い丸瓦2005（第348図）なども含まれていた。

SU02は検出した範囲が完存状態であると限らず、これらを含めた広範囲の瓦敷きの一部である、という可能性も十分考えられる。

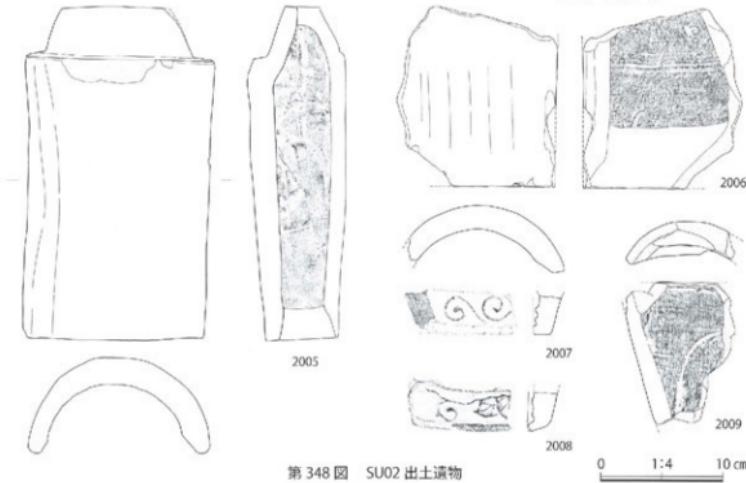
検出したのは瓦のみで、丸瓦、軒平瓦、棟込瓦



第347図 SK58出土遺物



SU02 (東から)



第349図 SU02出土遺物

など様々な種類が見られた。

SU02 出土遺物（第348図）

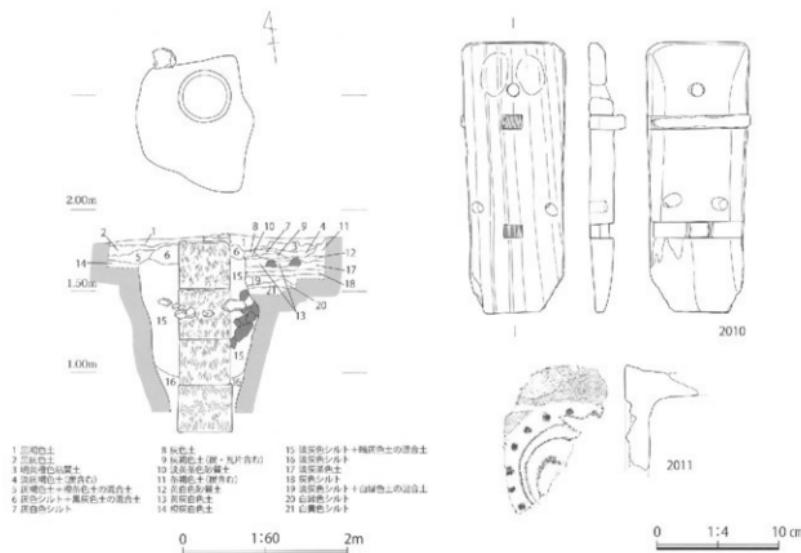
瓦 2005・2006は丸瓦で、2005は長さ27.2cm、幅14.8cm、厚み2.3cmを測る完形である。2006はコビキBである。2009は棟込瓦で、コビキBである。2007・2008は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

SE03：井戸（第349図）

SE03は廃棄土坑群1（第320・324図）一帯の西側に位置する井戸である。直径0.64m、深さ0.55mの来待石製井筒が4つ積み上げられており、最上部の井筒の標高は1.8m、4個目の最下部の標高は0.63mを測る。井筒2個目の途中に、10~30cmの大南海崎石が輪積みにされていたと思われる並びに見つかっていることから、元来は人海崎石の輪積み井戸であったと思われる。その後、おそらく改修するために来待石製の井筒を設置したと考えられる。掘り方は方形に近い、びつなもので、南北長1.32m、東西幅1.45mを測る。

土層断面から、最深部の4個目まで掘り方が確認できている。また、井筒の埋土は黄色シルト1層が詰め込まれた状態であったことから、第3構造造成の際に廃絶されたと考えられる。

南屋敷地ではSE03を含めた3つの井戸を検出した。いずれも来待石製の井筒を利用し、SE01とSE03はその下に大海崎石による輪積みの井戸が存在した。井戸を廃絶する際には、「息抜き」のために細い竹を井戸の中心に差し込む儀式が行われることが多いが、南屋敷のSE01~03からはいずれもその痕跡が認められなかった。



第349図 SE03 平面図・断面図

第350図 SE03 出土遺物

SE03 出土遺物（第350図）

木製品

2010は最大長22.2cm、最大幅7.9cmを測る角型の差込下駄である。後方の角は斜めに落とされている形状である。前方鼻緒部分には指の痕跡が残る。

瓦

2011は軒丸瓦で、中央に左三巴文、その周囲を珠文が残存で8個廻る。巴文の周囲には圈線が見られる。

その他の遺構（第320図）

調査区最西端の一角では石積方形土坑SK58（第346図）の他に、素掘の土坑をいくつか検出した。そのうち、遺物が出土した土坑SK59・60について簡単に触れる。

SK59・60

SK59は屋敷境石積溝SD01から約2m南側に位置するいびつな楕円形土坑である。東西長2.6m、南北幅1.8m、深さ0.4mを測る。SK60はSK59から南西方向に約1.5m離れた位置にある土坑で、東西長1.6m、南北幅1.8m、深さ0.6mを測るいびつな土坑である。

SK59・60から出土した遺物はいずれも肥前磁器であり、年代は17世紀末～18世紀初頭にあたると思われる。

SK59

SK59 出土遺物（第351図）

国産磁器

2012は肥前磁器の猪口で、型紙白絵によって紅葉を表現したものである。

金属製品

2013は銅製の釘で、頭部に輪が付いている飾り釘である。最大長4.3cm、最大幅1.8cm、重量2.76gを測る。

SK60

SK60 出土遺物（第351図）

国産陶器

2014は瀬戸・美濃の腰張形中碗である。口径10.4cm、器高6.7cmを測る。

国産磁器

2015は肥前磁器の浅半球形中碗で、高台には砂が付着している。

焼塙壺

2016は焼塙壺の蓋である。逆凹字形を呈し、内面には布目の痕跡が残る。

第3-1 遺構面 遺構外出土遺物（第352・353図）

国産陶器

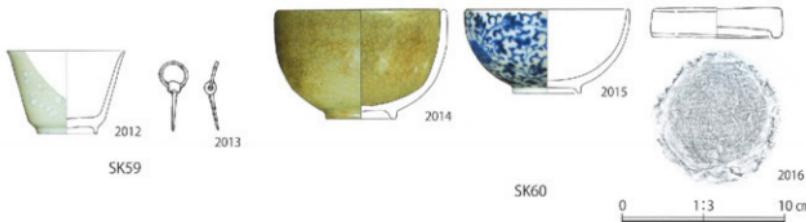
2017～2019・2021・2022は肥前陶器である。2017は高台が内傾気味の中碗で、全体的に器壁が厚い。2018・2019は腰張形の中碗で、2018は内面に絵付けが見られる。2021は底径11.4cmを測る大皿で、内面に刷毛目文が描かれる。2022は胴部最大径34.5cmを測る大甕で、外面には縄状突帯を2条貼り付け、内面は格子目叩き痕が見られる。

国産磁器

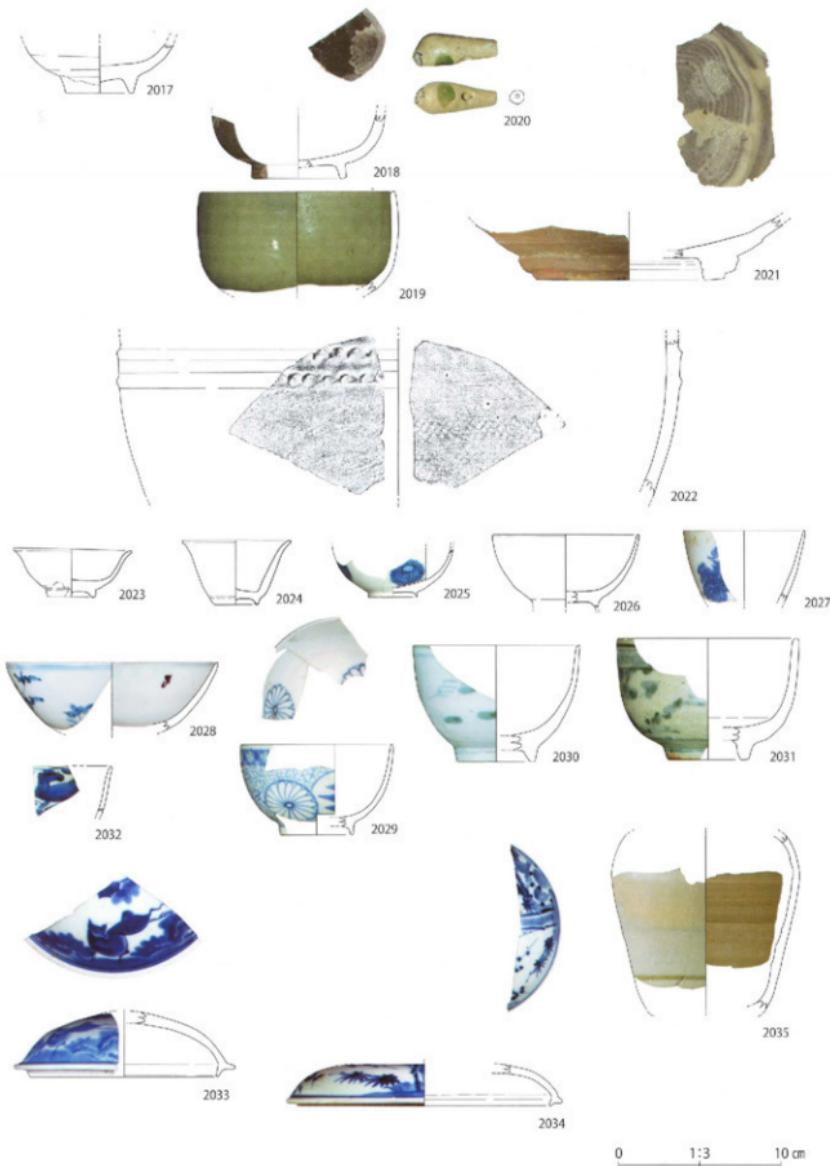
2020は瀬戸・美濃・京焼系陶器の鳩笛で、最大長5.0cm、最大幅2.0cmの小形のものである。

国産磁器

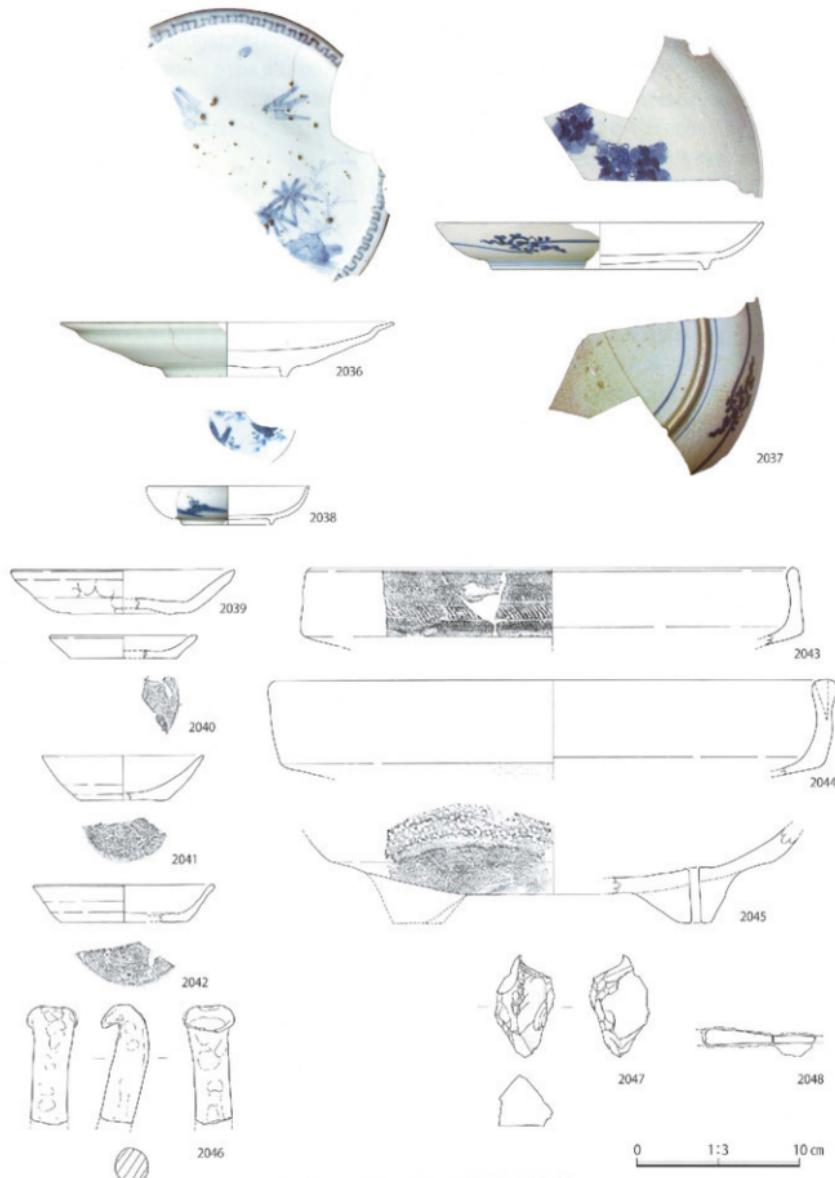
2023～2038は肥前磁器である。2023は端反形小杯で、器高が2.9cmと低く、扁平な形状を呈する。高台内が無釉であり、古い年代を示す。2024も端反形小杯で、直線的に開く形状を呈する。2025は浅半球形の小碗、2027は中碗で、外面にコンニャク印判が見られる。2029は丸形の中碗で、外面には菊花文と氷裂文が描かれる。2031は陶胎染付の中碗で



第351図 SK59・60出土遺物



第352図 第3-1造構面 造構外出土遺物(1)



第353 図 第3-1遺構面 遺構外出土遺物(2)

	ある。2028は口径13.0cmを測る人碗である。2033・2034は蓋物の蓋、2035は胸部最大径11.6cmを測る瓶か壺である。2036～2038は皿で、2036は初期伊万里・折縁形の中皿で、高台に砂付着、内面には灰降りの痕跡が見られる。2037は丸形底広の中皿で、断面に漆雜ぎによる補修の痕跡が見られる。2038は丸形底広の小皿である。
土師器皿	2039は手づくね成形、2040～2042はロクロ成形による土師器皿である。後者の底部は回転糸切りで調整されている。
土器	2043・2044は土器で、焼成である。2043は口径30.2cmを測り、内傾気味に立ち上がる。内面には煤が付着しており、使用の痕跡が見られる。2044の口縁端部は肥厚して立ち上がり、端部上面には逆円錐状の穿孔がある。2046は五徳の一部で、残存長7.2cm、直径2.0cmを測る。端部を折り曲げて成形している。
瓦質土器	2045は瓦質土器の十鉢か火鉢である。脚部に直径0.6cmの穿孔が開けられており、底部内面まで貫通している。この穴を通して外面から内面に空気が通じるためのものであろう。
石製品	2047は火打ち石で、材質は玉髓である。最大長6.3cm、最大幅3.7cm、厚み5.2cm、重量64.31gを測る。
金属製品	2048は銅製の煙管で、吸口部分である。

第6節 第3-2遺構面

第3-2遺構面 第3-2遺構面は第3-1遺構面の直下にあたる遺構面で、帯状の東西に縦長い区画を呈する。この概要

この区画では以下の様々な種類の遺構を検出している。標高は1.56～1.75mの位置にある。

第3-2遺構面では屋敷境石積溝SD01（第354図）をほぼ完全な形で検出した。調査区中央ではSB08・09に伴う雨落ち溝SD10（第366図）、杭列SA05（第367図）、2つでセットと思われる石積方形土坑SK62・63（第359・360図）、トイレ遺構の可能性が高い土坑SK67（第369図）、円形礎敷遺構SX08（第354図）を検出した。調査区東端では土師器集積遺構SU03、素掘溝SD09（第354図）、石積方形土坑SK61（第358図）、廐棄土坑SK64～66（第354図）を検出した。

SD01に近接する東側では建物跡SB12（第354図）、その戸内に礎敷遺構SX07を検出した。

対する西側では礎石の並びが明らかな建物跡SB11（第373図）を検出し、SB11の屋内と思われる位置から礎敷遺構SX02、石積溝SD12、長槽円形の土坑SK70、地面に細竹を方形状に差し込んだ木舞状遺構SX03～06を検出した。

SB12とSB11の間からは木枠施設SK68（第371図）を、雨落ち溝SD10の延長線上西側からは大形廐棄土坑SK71・72（第378図）を検出した。

第3-2遺構面の年代は遺構出土遺物、遺構外出土遺物の年代観から、17世紀前半～中頃と想定している。



第354図 第3-2遺構面全体図

SD01：屋敷境石積溝（第354図）

SD01は屋敷境石積溝（第354図）。第3-2遺構面のSD01は石が抜けることなくほぼすべて埋まる状態であり、完存に近い形で検出することが可能であった。

SD01は調査区西端から東端まで検出している。石材は主に10～50cmの大人の海崎石を使用しており、2段で隙間なく積まれている。溝の幅は西側では0.4m、中央部分はやや広く

なって0.6m、東側では再び細くなり約0.4mを測る。溝の底面レベルは西側が高く、東側が低いことから、水は西から東へ流れていると思われる。

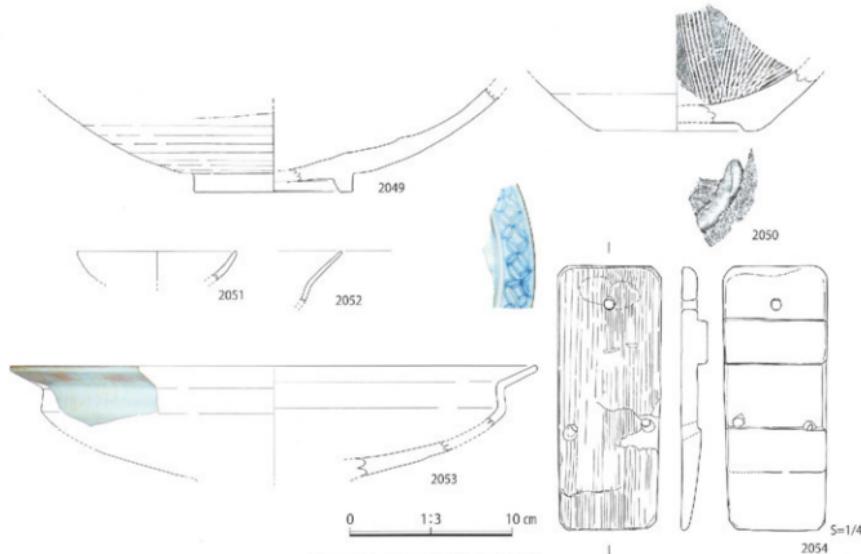
第3-1 遺構面のSD01は西側から約18m地点で石積が屈折していた。第3-2 遺構面ではこの屈折点が西側から約14m地点に移動する。石積の屈折点の移動は、南側に建つ建物に伴って改変されたものと考えている。屈折する地点の南側延長線上には、約半間（1.0m）間隔の礎石が5個並んでいる（第373図）。この礎石列を南北軸として建物跡を復元すると、西側に礎石が東西・南北軸に添って並ぶ。加えて建物跡の北端ラインは、SD01内の石を礎石として使用していることが判明した。これらは東西6間×南北2間半の建物跡SB11を構成する要素である。また、SB11の真向かいに当たる東側でも建物跡SB12が存在すると考えられる。

SD01の石積は建物跡と一体化しており、建物の様相が変わることによってSD01もつくり変えられていくものと思われる。

SD01の南側石積の裏込土中からは、陶磁器類、下駄などの遺物が出土しており、時期はおよそ17世紀前半～中頃と想定している。

SD01 南側裏込 出土遺物（第355図）

- 国産陶器**
2049は上野・高取系陶器の大皿である。底径は9.7cmとやや小さく、皿部分にかけて大きく広がる。外面に細かい稜線が均等に入る。
- 2050は産地不明の陶器で、擂鉢の底部である。
- 貿易磁器**
2051・2052は中国磁器である。2051は精製で、漳州窯系の丸形小皿である。2052はおそらく景德鎮窯系の皿か鉢である。
- 国産磁器**
2053は肥前磁器・初期伊万里の大皿で、口径32.4cmを測る。これは疊敷遺構SX08から出土した2139と接合が可能な同一個体である。



第355図 SD01 南側裏込 出土遺物

木製品 2054は角型の連齒下駄で、長さ21.5cm、幅8.5cmを測る。前方鼻緒部分に指の痕跡が見られる。

SU03：土師器溜まり

SU03は調査区最東端に位置し、直径約2mの範囲で土師器皿の破片がばら撒かれている状態で検出した。土師器皿はいずれも破片であり、密集度はそこまで高くない。また、すべてが手づくね成形によるものであった。

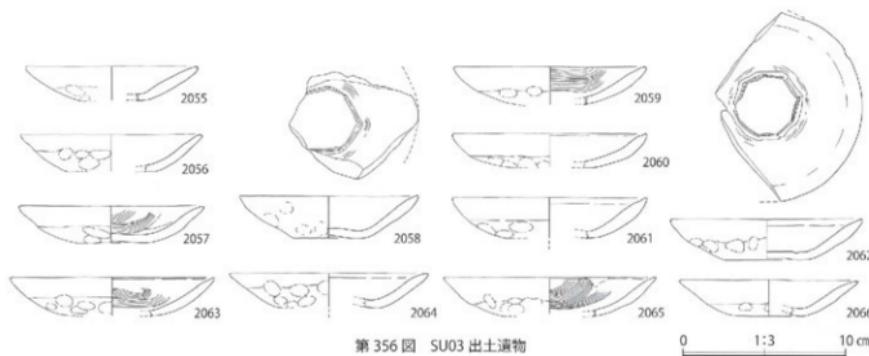
土師器皿のみの破片（故意に割った可能性も考えられる）を一定範囲に散在させるのは、偶然に起きたことではなく、意図的にこの場所に集中させたことがうかがえ、祭祀的な意味合いを持つ遺構であると考えられる。

SU03 出土遺物（第356図）

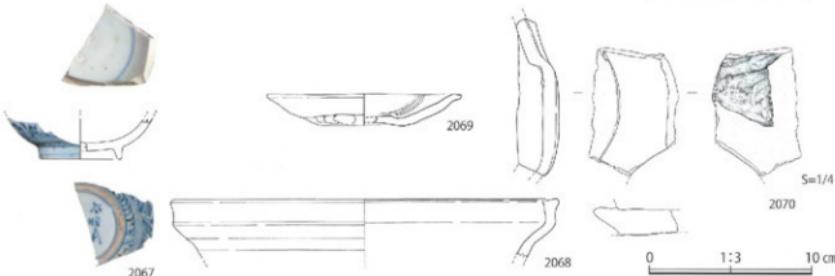
土師器皿 2055～2066は手づくね成形による土師器皿である。口径は10.6～13.0cmの間に集約され、ほぼ同形態を呈する。このうち2058・2062は、内面のナデ上げが円弧状ではなく角張っており、2058は八角形、2062は九角形状に施されている。

SD09：素掘り溝（第354図）

SD09は調査区東端に位置する素掘り溝で、北西—南東を軸にして掘られている。溝の形状は直線的であり、長さ残存10.5m、幅0.4～0.8m、深さ0.15mを測る。溝の底面には右



第356図 SU03出土遺物



第357図 SD09出土遺物

が約 1.0 m 間隔（半間か）で置かれており、ばらつきはあるが並んでいる。

SD09 の周囲には礎石と思われる石は見られないことから、SD09 は建物跡ではなく、単独の塀のようなものではないかと推測する。屋敷境石積溝 SD01・建物跡 SB08～10 らとは軸が全く異なっており、空間配置をどのように扱ってきたかを探る要素になり得ると考えている。ただ、周囲の他の遺構との関連性は不透明であり、異種的な遺構である。

SD09 からは肥前陶器・土師器皿・瓦片などが出土している。

SD09 出土遺物（第 357 図）

国産陶器

2068 は肥前陶器の擂鉢で、片口が付属する珍しいものである。

国産磁器

2067 は肥前磁器の丸形中碗で、高台内に「太明成化年製」の銘が入る。

土師器皿

2069 は手づくね成形による土師器皿の中皿である。

瓦

2070 は鬼瓦の一部分であるが、どのような形態であったかは判別できていない。

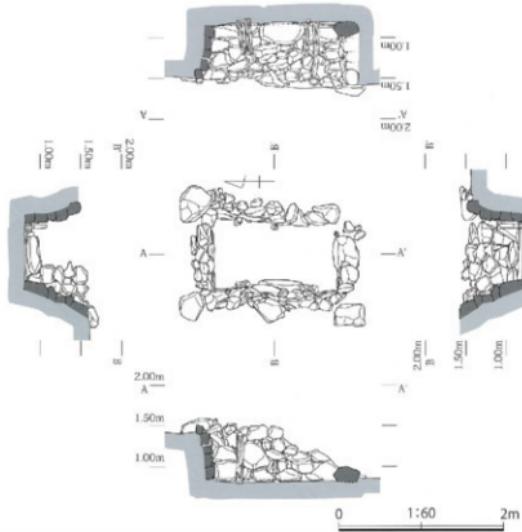
SK61：石積方形土坑（第 358 図）

SK61

SK61 は屋敷境石積溝 SD01 の南側に位置する石積方形土坑である。内法は南北長 1.5 m、東西幅 0.8 m を割り、5 段の石積みによる深さは 0.75 m である。5 段積みが残存するのは北側短辺と西側長辺で、南側と東側は南東方向の隅にかけて崩れていた。石材はすべて大海崎石を利用しており、最下段には 45～55cm 大の大きな石を使っている。それより上段は 10～30cm 大の比較的小さな石を使い積み上げている。

SK61 の長辺内側には長さ 0.2～0.7 m、直徑 7～10cm の木杭が打ち込まれており、西側に 4 本、東側に 3 本が確認できた。これは石積みが内側に崩れないようにするための処置であると思われる。

石積みの四隅には礎石のような石が配置されている。この石は北東隅に 1 個、北西隅に 1 個、



第 358 図 SK61 平面図・断面図



SK61（南から）



SK61（東から）

真西に1個、北西隅に1個、計4個がSK61の角・法量に合わせて置かれている。この礎石の並びから、SK61には同サイズの屋根があり、屋内施設であった可能性が推察される。

SK62：石積方形土坑（第359図）

SK62

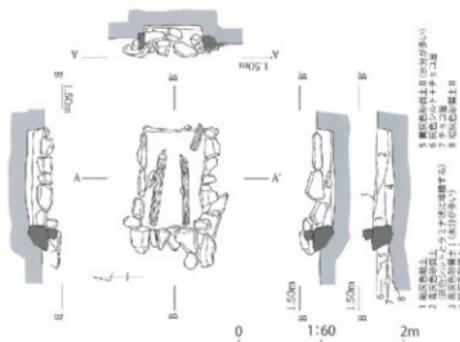
SK62とSK63は0.3mの間隔を取って、隣接した位置につくられた石積方形土坑である。このうち、北側に位置するのがSK62である。SK62は東西方向を長辺とし、東側を除く3辺に「コ」字状に石が積まれている。使われている石材はすべて20~40cm大の赤大青海崎石であり、内法は南北0.65m、東西1.25m、深さ0.29mを測る。

石積は西側短辺はやや雑な2段、北・南側は1段で積まれていた。本来は2段、もしくはそれ以上積まれていたと思われるが、北側と南側の石は取り外されたものと推測する。東側からは石が積まれた痕跡は検出しなかったが、細竹を突き刺したわずかな跡を確認した。

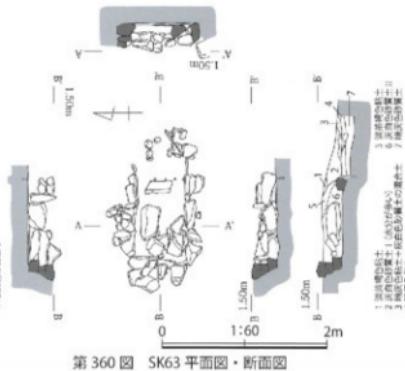
SK62検出時、内部に丸太材が2本、長辺に合わせて横たわっていた。北側の丸太材は最大長0.95m、直径0.10mで、片方の端部にホゾが見られた。南側の丸太材は最大長0.96m、直径0.09mを測る。これらは廃棄された状態なのか、もしくは意図的に設置されたものかは判別しかねるが、SK62に関連する構造体の一部であった可能性が考えられる。

SK62内からは肥前磁器が1点出土しており、時期は九陶Ⅲ期を示す。

SK62 出土遺物（第361図）



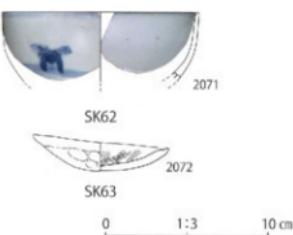
第359図 SK62 平面図・断面図



第360図 SK63 平面図・断面図



SK62・63（西から）



第361図 SK62・63出土遺物

国産磁器 2071 は肥前磁器の丸形か浅半球形の中碗で、口径 12.2cm を測る。

SK63 : 石積方形土坑（第 360 図）

SK63 SK62 の南側に位置し、SK62 と同形態の石積方形土坑である。SK62 同様に東西方向を長辺として、東側以外の 3 辺に石が積まれている。使用石材はすべて赤大海崎石で、7 ~ 45cm 大の大きさである。内法は南北 0.60m、東西 1.00m、深さ 0.25 m を測り、SK62 よりも若干小さいつくりになっている。

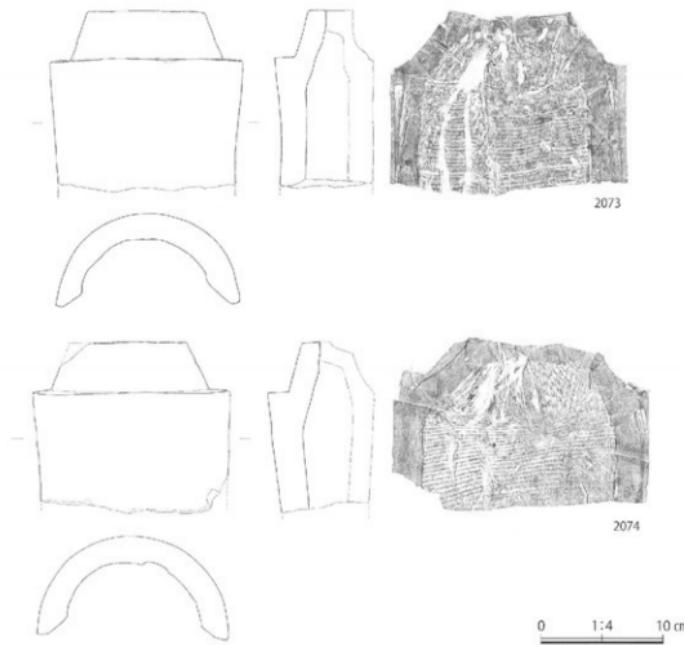
3 辺はいずれも 2 段目の石が部分的に残存する状態であったが、全体的には SK62 よりも不揃いで、石が抜かれた痕跡が目立つ。外された石は SK63 の内部に乱雑に落ちたような格好で検出した。東側に石積みは見られなかったが、細い竹を編んで、そこに粘土を貼り付けた木舞状の遺構を検出した。これは SK62 でもわずかに検出しており、同様の施設があったと思われる。

SK62・63 は接する場所に位置しているが、切り合い関係はなく 2 つを 1 セットとして利用する施設だった可能性が考えられる。

遺物は内部に落ちた石材に混じって土師器皿や瓦などが出土している。

SK63 出土遺物（第 361・362 図）

土師器皿 2072 は手づくね成形による土師器皿で、口径 6.4cm、器高 1.4 ~ 2.3cm を測る小皿である。
瓦 2073・2074 は丸瓦で、どちらもコビキ B である。



第 362 図 SK63 出土遺物

SK64～66：廃棄土坑群3（第354図）

廃棄土坑群3 SK64～66は調査区東端、第3-1遺構面で多数の廃棄土坑を検出した一角（SK43～49：廃棄土坑群1・第307図）で、第3-2遺構面においても検出した廃棄土坑群である。なお、十坑の詳細は後述する。

廃棄土坑群3の土坑は廃棄土坑群1のものとは積極的に重ならない。SK65・66は上面の土坑に切られる部分があるが、土坑山体は敢て重ならないように掘られていると考えられる。第3-2遺構面を整地する時に、廃棄土坑群1の各土坑の範囲を何らかの方法で示しておいて、整地後でもどこに十坑があったかを判断し重ならないように新たな十坑を掘り込んだのではないかと推測する。

SK64：廃棄土坑（第354図）

SK64 SK64は調査区東端、素掘溝SD09の南側に位置する土坑である。調査区域の端であったため土坑すべてを掘り切るには至っていない。SK64はいびつな円形を呈し、直徑約1.5m、深さ0.8mを測る。

遺物は陶器・木製品の他に荷札木筒が多数出土しており、以下で4点詳細を述べる。

SK64 出土遺物（第363図）

国産陶器 2075は須佐庭沖の擂鉢で、口径21.9cm、器高10.4cmを測る。内外面にそれぞれ胎土目痕が見られる。

木製品 2076・2077は下駄で、2076は角型の差込下駄である。2077は角型の連歛下駄である。いずれも前方鼻緒部分に指の痕跡が見られる。2078は山物の底板か蓋板で、綴り皮が1枚残存していた。2079は最大長4.0cm、最大径1.3cm、最小径0.8cmを測る小形の糸巻き状製品である。全面に柿渋が塗られている。2080は櫛で、柿渋が塗られている。

荷札木筒 2081～2085は墨書文字が見られる荷札木筒である。2081は長さ32.4cm、最大幅3.4cm、厚み0.5cmを測る。上方部に抉りは見られず、下方部は先端を尖らせる。墨書文字は片面にあり、「阿之助」と書かれている。男性の名であると思われるが、それ以外の情報は得られなかった。

2082は長さ33.4cm、最大幅3.6cm、厚み0.6cmを測る。これも2081と同様で上方部に抉りは見られず、下方部は先端を尖らせる。墨書文字は片面にあり、「のりつね」と平仮名で書かれている。これも男性の名であると思われる。

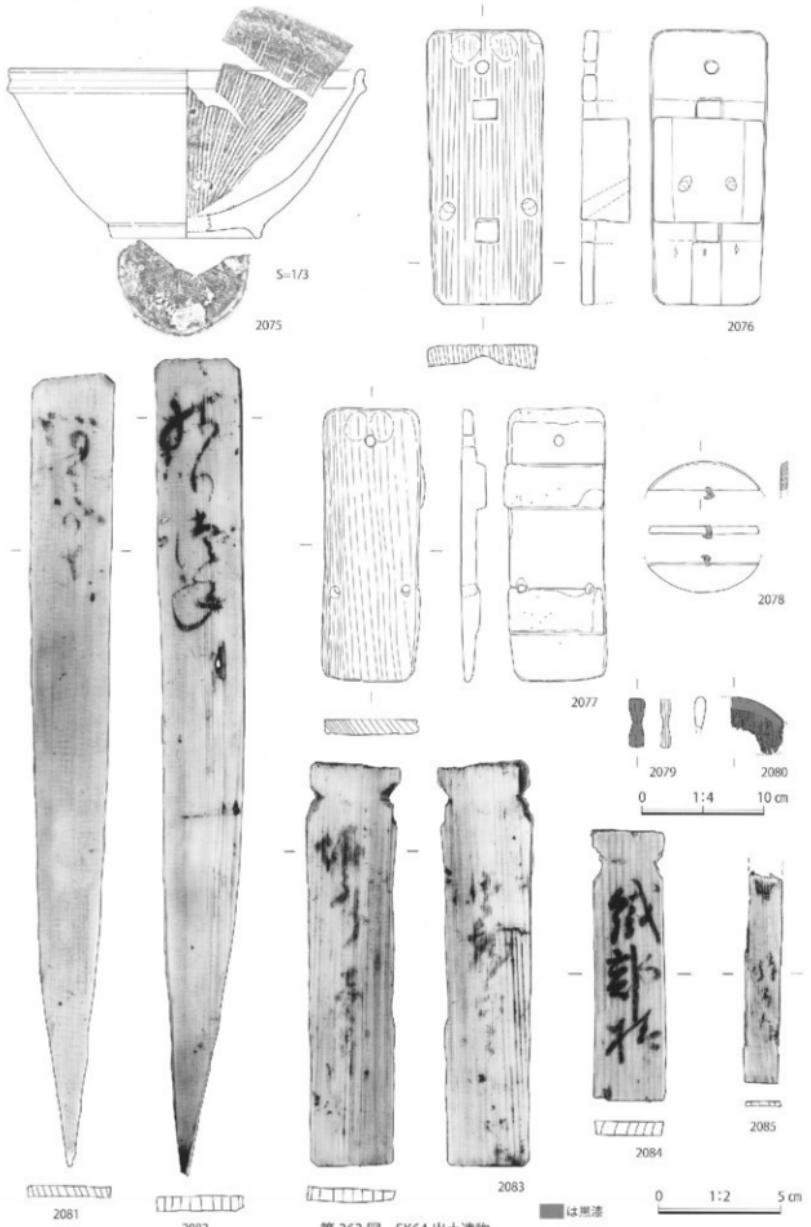
2083は長さ16.6cm、幅3.8cm、厚み0.6cmを測る。上方には抉りが入り、下方は削らずに長方形を呈する。墨書文字は両面に書かれていたが解読できたのは片面だけで、「掘水 老本」と読むことができた。

2084は長さ11.1cm、幅3.0cm、厚み0.6cmを測る。上方には抉りが入り、下方は削らずに長方形を呈する。墨書文字は片面のみに見られ、「鐵部様」と書かれていた。

2085は、残存長8.7cm、幅1.5cm、厚み0.2cmを測る。抉りらしき痕跡はわずかに見られ、下方は欠損している。墨書文字は片面のみ確認でき、「特□口」と書かれていた。

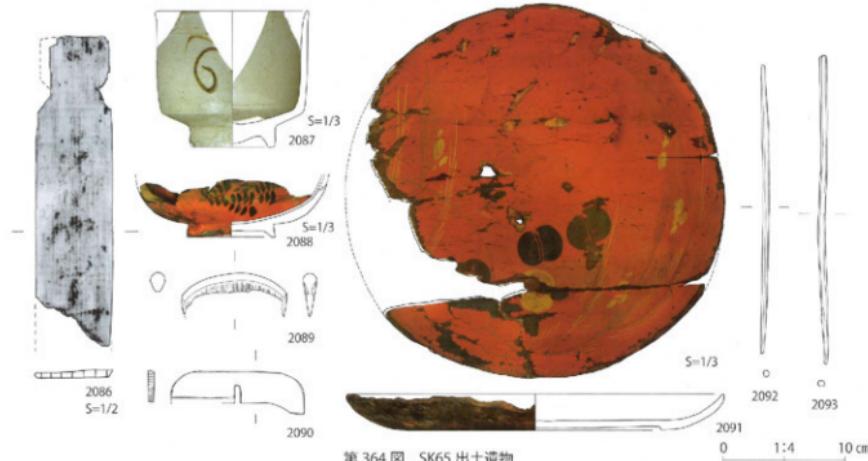
SK65：廃棄土坑（第354図）

SK65 SK65は廃棄土坑群2の中央部分に位置する土坑である。東西に長い楕円形を呈し、東西3.4m、南北1.5m、深さ0.3mを測る。東側は第3-1遺構面のSK44によって切られているため、本来の範囲は定かではない。

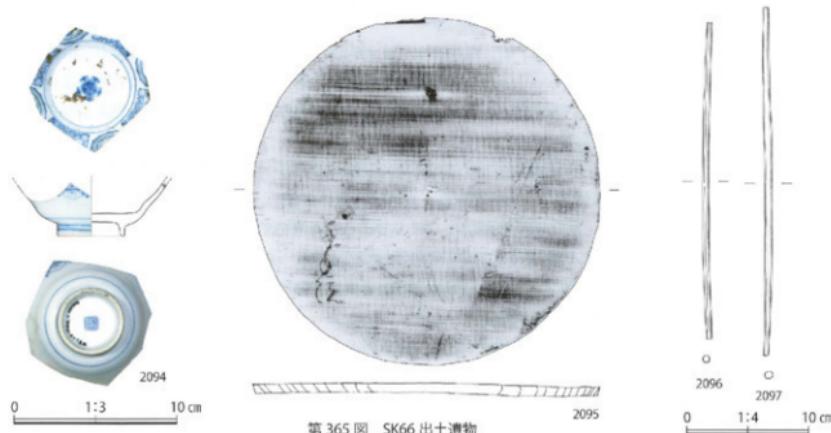


第363図 SK64出土遺物

は風流



第364図 SK65出土遺物



第365図 SK66出土遺物

SK65からは陶器・漆器・木製品・荷札木筒が出土している。

SK65出土遺物(第364図)

荷札木筒 2086は残存長12.7cm、幅3.2cm、厚み0.3cmを測る荷札木筒である。上方部は紐を付けるための抉りがやや大きく入り、下方部は欠損している。墨書文字は片面に見られるが、解説は不可能であった。

国産陶器 2087は肥前陶器の半筒形中碗である。高台には砂が付着している。

漆器 2088は漆椀で、全面を赤色の漆で塗っている。外面には黒色で草文を描いている。2091は直径23.2cm、底径15.0cm、器高2.2cmを測る漆器皿で、外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。内面には黄色でススキを描き、黒色でも何かを描いているが判別できていない。

木製品 2089は櫛で、刃の部分を欠損している。2090は不明品、2092・2093は白木の箸で、長

さは 23.6 ~ 25.2cm、直径 0.5cm を測る。

SK66：廃棄土坑（第 354 図）

SK66

SK66 は雨落ち溝 SD10（第 366 図）の西側延長線上に位置する土坑である。SK66 の上層に SD10 がつくられているため、土坑の範囲を明確にすることはできなかった。東側を SK43 によって切られており、全貌は不明である。

遺物は肥前磁器・木製品が出土している。

SK66 出土遺物（第 365 図）

国産磁器

2094 は肥前磁器の色絵中碗で、見込みには五弁花文、高台内には「時」の鉢が入る。

墨書き木製品

2095 は直径 14.2cm、厚み 0.5cm を測る桶か樽の底板で、片面に墨書き文字が書かれている。文字は左下に「千手院」と書かれている。千手院とは松江城から北東方向の位置に鎮座する「高野山真言宗 尊照山 千手院」^[13] のことを示すと思われ、本遺跡とも比較的近い位置にある寺である。千手院からの届け物を入れるために使われた桶であった可能性が考えられる。

木製品

2096・2097 は白木の箸で、2096 は 25.7cm、2097 は 28.5cm を測る長いものである。

SD10：雨落ち溝（第 366 図）

SD10

SD10 は第 3 遺構面の辻物跡 SB08 ~ 10（第 301 図）に伴う雨落ち溝であると考えている。溝の長さは東西長 15.7m、南北幅 1.5 ~ 2.5m、深さ約 0.10m を測る。溝の内部には 10 ~ 30cm 大の石と、5 ~ 10cm 大の小礫が頻繁に入り込む状況であった。これらの石は比較的溝の北側に集中しているように見える。また、単に石が入っているように見えるが、規則性があるとも考えられる。

SD10 は第 3-1 遺構面で検出した SD07（第 321 図）がつくられていた位置から約 2m 北側にずれた位置につくられており、東西軸は変わらない。この軸は SB08・09 に伴うものであり、SD07・10 が時期を遡えてつくり変えられた溝であると言えよう。SD10 がつくられた時期に相当する建物の建て替えの痕跡は検出できなかった。しかし建て替えの際、建物の基礎から再度つくり直すことはかなりの労力と必要性がなければ行わないとも考えられる。

SD10 出土遺物（第 368 図）

国産陶器

2098 ~ 2103 は肥前陶器である。2098 は丸形小窓で、底盤は回転糸切りで調整されている。外側に胎土目痕が見られる。2099 は呉器形の中碗、2100 は京焼系の中碗で呉須絵が描かれている。2101 は小皿で、内面には胎土目痕、高台には砂目痕が見られる。李朝を真似てやや軟質に作られている。2102 は壺か甌の胴部片で、内面に同心円叩き痕が見られる。2103 は口径 30.0cm を測る水甌で、口縁端部は 2.7cm の平坦面を持つ。

貿易磁器

2104 は中国磁器・精製の中碗である。口径は 12.0cm を測るものである。

国産磁器

2105・2106 は肥前磁器の中碗である。いずれも丸形か浅半球形と思われる。

土師器皿

2107 ~ 2112 は土師器皿である。2107 は手づくね成形、2110 ~ 2112 は口径 18.0 ~ 18.2cm を測る大皿である。2108・2109 はロクロ成形によるもので、底部は回転糸切りで調整されている。2107 の口縁部には油煙痕が見られることから、灯明皿として使用されていると考える。

土器

2113 は土器で、口径 20.2cm、底径 16.0cm、器高 2.5cm を測るやや小形の焙烙である。

瓦

2114・2119・2120 は丸瓦で、2119 はコビキ A、2114・2120 はコビキ B である。

2115・2116 は軒丸瓦で、中央に左二巴文、その周囲に珠文が廻る。2115 は珠文 16 個、

2116は巴文の周りに圈線が廻るものである。

2117・2118は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。

SA05: 杭列 (第 367 図)

SA05

SA05はSD10直下から検出した杭列である。SD10検出時、小石に紛れて杭の頭が何本か見えており、それらは等間隔で約1.0 mおき(半間か)に並んでいた。SD10と軸を変えずに東西方向に直線的に並び、最終的には西側に1本、中央に3本、東側に1本の計5本を検出した。

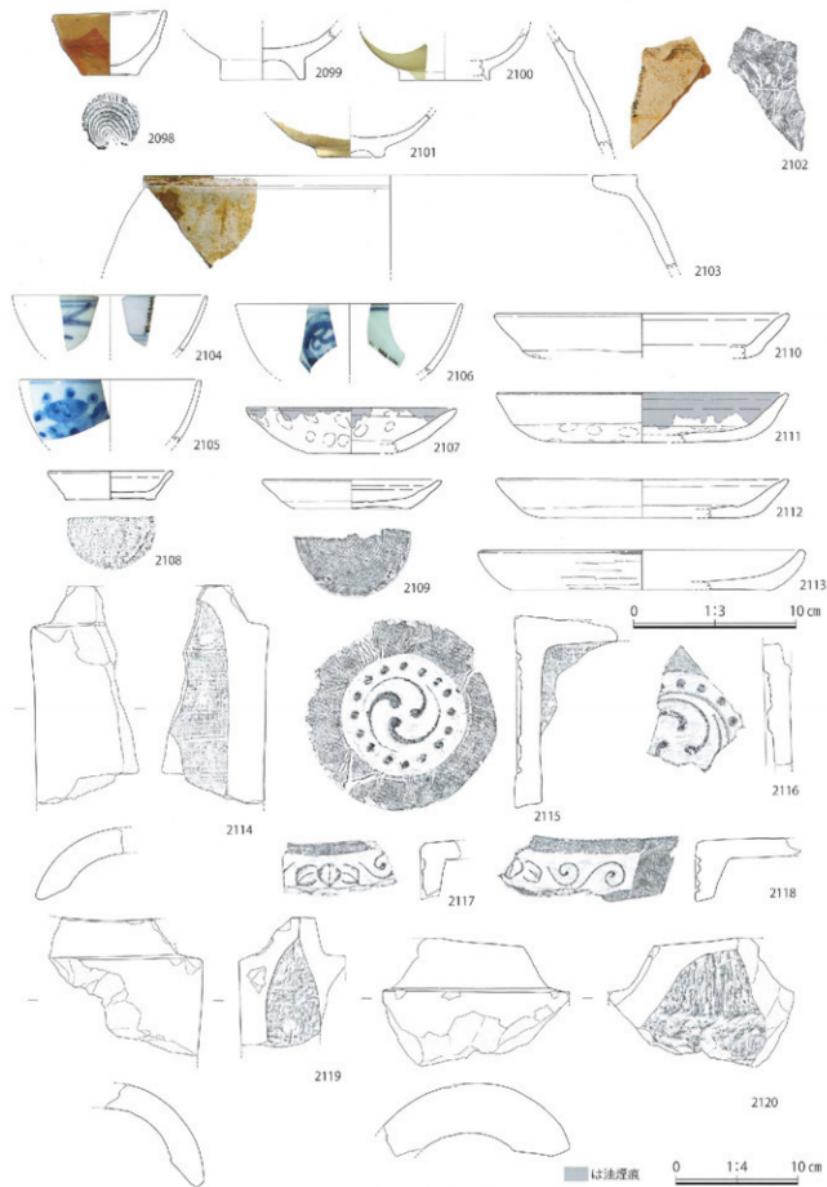
杭は長さ0.7～1.1m、直径0.17～0.19mを測り、先端の加工は尖るもの、平らなものなど様々である。いずれも直径0.7～1.0mの掘り方内の中心に埋められており、ほぼ垂直に立っている状態で検出した。杭が倒れないようにしつかり掘り固めた様子がうかがえ、この土地の脆弱な地盤の影響下にあったとも思われる。

SD07(第3-1 遺構面)、
SD10(第3-2 遺構面)と、ほぼ同じ位置につくられた溝の直下での検出という位置関係から、SA05も建物跡に伴う柵か塀のような遮蔽物の一端ではないかと推測



第366図 SD10平面図・断面図

第367図 SA05平面図・断面図



第368図 SD10出土遺物

する。SA05はSD10よりも古いものであると言えるが、明確な時期差はわからない。

SK67：トイレ（第369図）

SK67

SK67は雨落ち溝SD10の南側に隣接しており、西寄りの位置にある円形土坑である。形状は正円形に近く、底面は水平を保っている。上端径0.92～1.00m、下端径0.81～0.88m、深さ0.50mを測る。埋土は3層に分層でき、第1層には40cm大の木の板が3枚入っていた。第1・2層はいずれも粘性の強い土質を示し、第3層は黄色シルト層と黒色粘質土が混じる土層が入り込んでいた。SK67は廐（トイレ）の可能性が高い遺構と考えているが、埋土の土壤分析による確認は行えていない。

遺物は第3層から中国磁器・木製品が出土している。

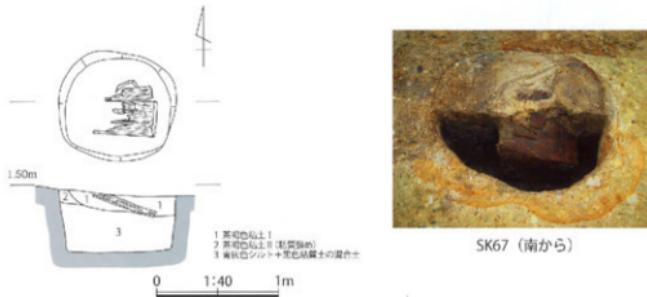
SK67 出土遺物（第370図）

貿易磁器

2121は中国磁器・精製の皿と思われるもので、焼かれた窯などは確定していない。

木製品

2122は最大長13.0cm、直径2.0cmを測る木製品で、上方部は人の顔、下方部は男性シンボルを模してつくられたものである。祭祀などに使用されたものか。2123は円柱状の栓で、長さ4.6cm、最大径3.0cm、最小径1.8cmを測る。上方から2cmの部分にわずかな段が付けられている。2124は角型の削り下駄で、長さ20.3cm、幅9.9cmを測る。

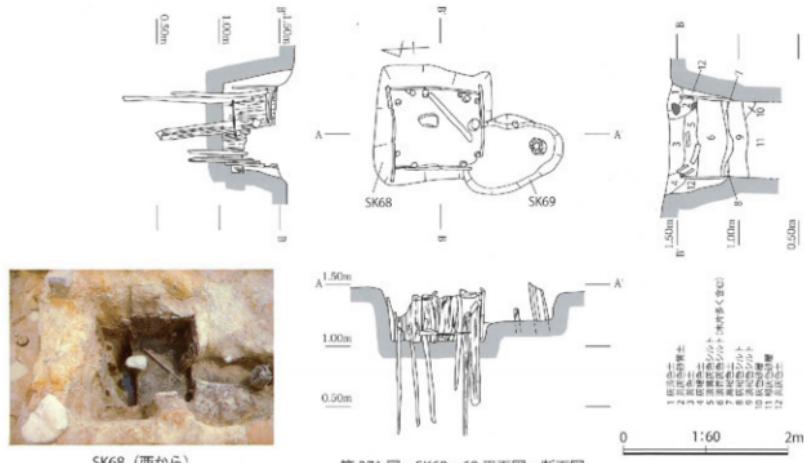


第369図 SK67 平面図・断面図



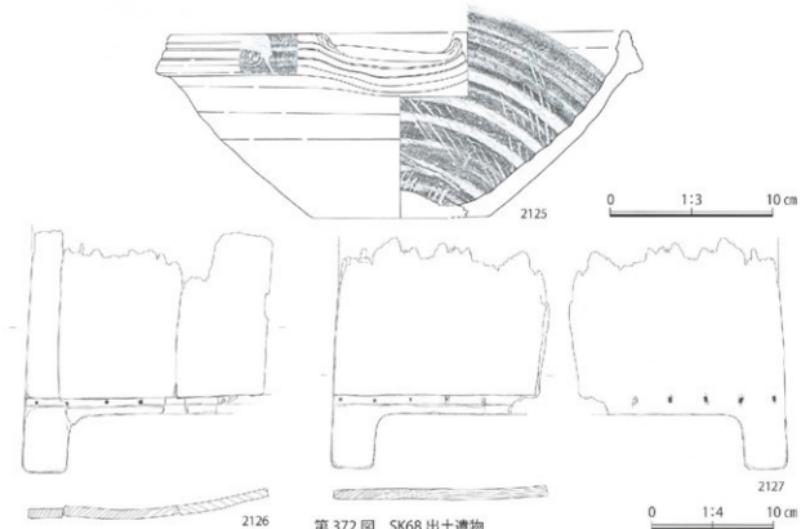
SK68・69：木枠施設（第371図）

SK68・69 SK68・69は屋敷境石積溝SD01のほぼ中央にあたる南側に隣接する2つの土坑である。SK68はやや歪んだ正方形を呈し、南北長1.4m、東西幅1.45m、深さ0.9mを測る。SK69は長辺1.3m、短辺0.7～0.9m、深さ0.35mを測るいびつな梢円形を呈する。SK69の掘り方の南西部分を一部切ってSK68が掘られており、SK69内部南端には直径0.18mの杭が



SK68(西から)

第371図 SK68・69 平面図・断面図



第372図 SK68出土遺物

打ち込まれていた。

SK68の内部には木枠と木杭で構成された方形の木枠施設がつくられていた。方形の四方は東西南北方向に合わせて設置されている。厚さ0.8cmの木の板が垂直に打ち込まれており、一側面につき3~4枚が使われている。木の板が合わさる隅部分には板と板を組ませる加工は成されておらず、直角にぶつかる方の板が数cm長めに設定されている。

また、板の一部分にタガの痕跡が見られることから、この板は桶か樽の側板を転用したものと思われる。

板の内法は南北1.05m、東西0.95mを測り、板を内側から支えるように長さ0.75~1.60m、直径0.05mの杭が北面に2本、東面に4本、南面に2本、西面に2本の計10本が打ち込まれ、南側にはこれらより太い直径0.14m、長さ1.3mの杭が打ち込まれていた。

SK68の底面に木材などは設置されていないことから、床面は明確なものではなかったと言えるが、第7層（黒褐色上）が床面としての役割を果たしていると考えている。第7層は厚さ約5cmを測る土層で、中央部分が窪む形で水平堆積している。その上には木片等を多量に包含した第6層（淡青灰色シルト）が35cmに渡り堆積している。更にその上にも第5層（淡黄灰色シルト）が水平に乗り、木枠の埋土となっている。

SK68の性格については様々な可能性が考えられる。板と杭を組み合せた方形溜め枠のような構造を成しており、明確な床面は存在しない。地中1.3mまで深く打ち込まれた杭の長さを考えると、簡易的な施設ではなく、この場所に設置することに意義があったと捉えることができる。

遺物は備前産の溜鉢の破片が1片出土しているのみである。

SK68 山上遺物（第372図）

国産陶器

2125は備前陶器の溜鉢である。口径28.2cm、底径11.0cm、器高11.4cmを測り、口縁部分には幅10cm前後の片口が見られる。2125は第4道構面検出の素掘溝SD01から出土した2206（第369図）と接合が可能であり、同一個体である。

木製品

2126・2127は木枠の一部に使用された木製品で、桶か樽の側板の転用品と考えられる。逆「L」字状を呈し、夕方の痕跡が顕著に見られる。

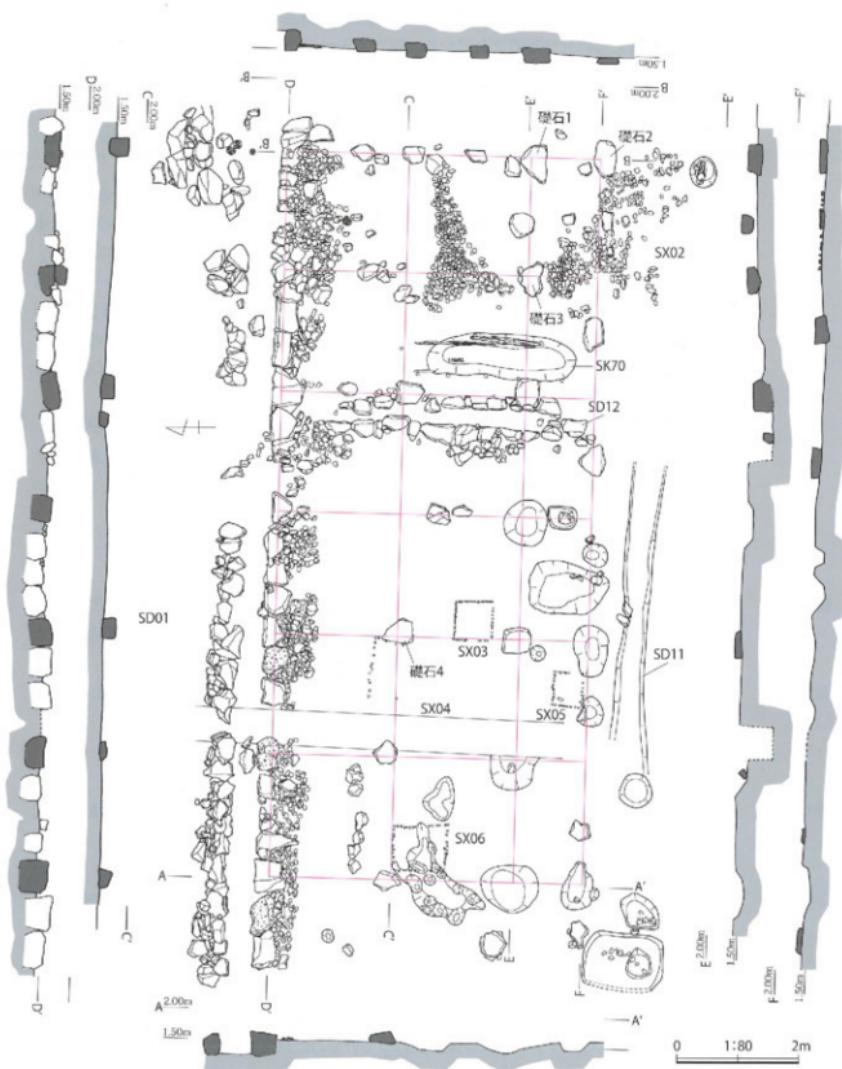
SB11：建物跡（第373図）

SB11

SB11は調査区西端の一角にあり、屋敷境石積溝SD01の南側に隣接する建物跡である。東西方向を長軸とし、いわゆる長屋風の建物が存在していたと考えている。

東西6間（1間2.0m）×南北2間半（1間2.0m）の範囲を持つ建物跡であり、建物の外縁ラインは東側はB-B'、西側はA-A'、南側はF-F'、北側はD-D'であり、A-A'より西側は建物が続いていると思われる。このうちD-D'は、SD01の中に礎石となる石が組み込まれている。よって、SD01の南側石積の真上に、建物の壁が建つ状態となる。また、E-E'・F-F'上には、礎石の間に十坑が見られる。これは礎石を抜き取った痕跡と考えられる。

SB11の東側・北側・南側は、建物の外縁ラインと考えてよい。東側B-B'より東には礎石は一切見られず、このラインを境に空間が変わっているのが見て取れる。北側D-D'は前述通り屋敷境石積溝SD01の真上であり、ここで屋敷地が終わっている。南側F-F'の南隣には東西長約5.2m、南北幅0.5m、深さ0.14mの素掘溝SD11を検出した。SD11はSB11の雨落ち溝とも捉えられる。これらに対し西側は、調査範囲の限界のためこれ以上の検出は不可能であった。よって、SB11は東西方向に長く（間数は不明）、南北方向2間半で構成される「長屋」



第373図 SB11平面図・断面図

であったと推測している。

SB11では、第3遺構面建物跡SB08（第301図）でも検出した「墨書き」が見られる礎石が4個あるのを確認した。礎石1～4はいずれもSB11を構成する主要礎石であり、礎石1には「夕七」、礎石2には「三」、礎石3には「カ七」、礎石4には「◎」と書かれていた。「夕七」「カ七」は縦書きで書かれており、漢字の「夕」「力」などの片仮名の「タ」「カ」などの判断はできていない。SB11が建てられた時代は17世紀代であり、この時代に片仮名で墨書きを行う例がないとも言われている。漢字であるならばその意味を考えなければならず、現状では「夕」と「力」にどのような意味が込められて書かれたのかは分かっていない。

SB11を構成する礎石、及び礎石を抜き取った土坑からは、以下の遺物が出土している。

SB11内 級石1～4 出土遺物（第374図）

礎石1 級石1 2128は志野の陶器で、菊皿である。口径10.5cm、底径6.6cmを測り、全体的に肥厚したつくりになっている。

2129は肥前陶器・絵唐津で、折縁形の中皿である。口縁端部内面には円弧状の文様が描かれる。

礎石2 級石2 2130は肥前陶器の稜済形小皿で、内面には胎上目痕が見られる。

礎石3 級石3 2131は肥前陶器の壺で、胴部最大径13.3cm、底径9.2cmを測る。内面には同心円状叩き痕が見られ、底部には砂目痕が見られる。

貿易磁器 2132是中国磁器・精製で、漳州窯系の大碗である。外面には漳州窯特有の文様が描かれている。また、断面は漆縫ぎによる補修の痕跡が見られ、優品であったことが思われる。

礎石4 級石4 2133は銅製の煙管で、吸口部分である。長さ6.5cm、小口径1.0cm、口付径0.4cm、重量6.12gを測る。

SB11に付属する遺構

SD12: 石積溝（第373図）

SD12はSB11の中央東寄りの位置する石積溝である。南北長5.0m、溝幅0.3m、深さ約0.2mを測り、F-F'以南は消滅している。石材はすべて大海崎石を使用しており、1段積みである。SD12の北側は屋敷境石積溝SD01に直角にぶつかっており、SD12の石積はSD01に切られる形で破壊されていた。



第374図 級石1～4出土遺物

SD01とSD12が同時期に排水溝として機能していたとは考え難く、SD12がつくられた後にSD01をつくった様相がうかがえる。SD12はSD01・SB11を建築するのと時を同じくして廃絶されたものではないかと推測する。

SK70：土坑（第373図）

SK70 SK70はSD12の東隣に位置し、SD12と同じ軸で掘られている長楕円形土坑である。南北長2.5m、東西幅0.7m、深さ約0.12mを測り、土坑の西側長辺には0.5m間隔で杭が打ち込まれていた。東側には長さ2.0mの細い板が設置されている。この板の内側には板を支えるように杭が打ち込まれていた。

SD12・SK70は遺構の種類・形態は異なるが、南北方向の軸を意図的に合わせているようにも思われる。これらが位置する場所は、第3-1遺構面では石積溝SD08、第4遺構面では素掘溝SD11（第392図）が位置する。いずれも南北方向を軸にした溝が、形状と東西位置を少しづつ変えながらつくられることは興味深い一致である。

SX02：礫敷遺構（第373図）

SX02 SX02はSD12・SK70の東隣に位置し、東西1間（1間2.0m）×南北1間半（1間2.0m）の範囲に5cm大の小礫を敷き詰めた遺構である。SX02の範囲はかなりいびつな形状を呈している。小礫が最も密集しているのは北側で、南側はばらつきがあり乱れている。

SX02はSB11の範囲内に収まる部分が多いことから、SB11に関連する遺構と考えられる。建物の内部構造を検討する上での要素になり得るが、詳細は分かっていない。

小礫に混じって肥前磁器・土師器皿の破片が数点出土しており、時期は九陶Ⅲ期を示すものと思われる。

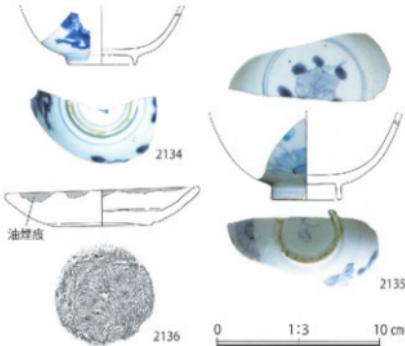
SX02 出土遺物（第375図）

国産磁器
土師器皿 2134・2135は肥前磁器の中碗で、2135は高台内に「太明」の銘が入る。

2136はロクロ成形による土師器皿で、口径12.0cm、底径6.0cmを測る。底部は回転糸切りで調整されている。口縁部に油煙痕と煤が付着していることから、灯明皿として使用したものと考える。



SX02（北西から）



第375図 SX02出土遺物

SX03～06：木舞状遺構（第373図）

SX03～06 SD12以西には地面に細竹を垂直に差し込んで方形枠を形成する木舞状遺構SX03～06が点在している。

SX03～06はSB11の下部にあたる位置で検出し、いずれも礎石には重ならないつくりになっている。地中に竹が埋め込まれたような形状で検出し、本来どのよな姿をしていたかは不明である。

SX03は0.6m四方、SX04は1.0m四方、SX05は0.45m四方、SX06はややいびつな0.9m四方を測るもので、いずれも正方形に近い形状を呈する。四方は東西南北の軸に合うよう規定されている。この4ヶ所がつくられた位置関係に規則性を見出すことは現時点ではできていない。

また、民俗例から考えると、細い竹を地面に突き刺して囲いとしその内で鶏を飼った、という一例もある。



SB12：建物跡（第354図）

SX03 SB12は建物跡SB11（第373図）と対になる形で位置すると思われる建物跡である。

SB11は調査区西側に建ち、屋敷境石積溝SD01内の石を礎石としている。これと同様に考えると、SD01の屈折点以東の石積内には1間ごと（約2.0m）に大形の石が組み込まれているのがわかる。

また、SB11内東端で検出した礎敷遺構SX02と対面になるように、SB12内西端にも礎敷遺構SX07を検出した。SX07の詳細については後述する。

SX07の範囲を推定するための要素はSD01内の礎石とSX07のみで、面的に広がる礎石や土坑などは概略により検出できなかったが、SD01内の礎石は少なくとも東西7間（1間2.0m）あると思われる。南北方向はSX07の範囲と周囲の土坑などから判断して、3間半（1間2.0m）



SX07（西から）



第376図 SX07出土遺物

の範囲が想定され、SB11 よりも南北に 1 間分広い建物であった可能性を考えている。

SX07：礫敷遺構（第 354 図）

SX07

SX07 は SB12 内の西端で検出した礫敷遺構である。5cm 大の小礫が 3.5×3.5 m の範囲に密集して敷き詰められていた。礫は SB12 の推定外縁ラインの西側・南側に揃うような形状を呈している。

小礫に混じって瓦片が出土している。

SX07 出土遺物（第 376 図）

瓦

2137 は丸瓦で、残存長 20.7cm、残存幅 10.1cm、厚み 2.5cm を測る。コピキ B である。

SX08：礫敷遺構（第 331 図）

SX08

SX08 は建物跡 SB08・09 の北西隅、素掘溝 SD06 の下層で検出した礫敷遺構である。SX08 は円形状を呈し、直径約 2.5 m の範囲に 5cm 大の小礫が密集して敷き詰められていた。

SX08 と同様な形態である礫敷遺構 SX07・02 は建物跡の範囲内から検出していることから、屋内につくられた施設である可能性が考えられる。SX08 は SB08・09 と雨落ち溝 SD10 に近接してつくられている様相を呈しているが、建物とどのように関連するか、またはどのような性格の遺構かは定かではない。

遺物は小礫に混じって備前陶器・肥前磁器の破片が出土している。

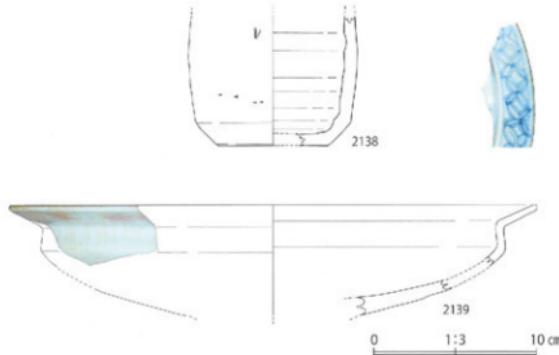
SX08 出土遺物（第 377 図）

国産陶器

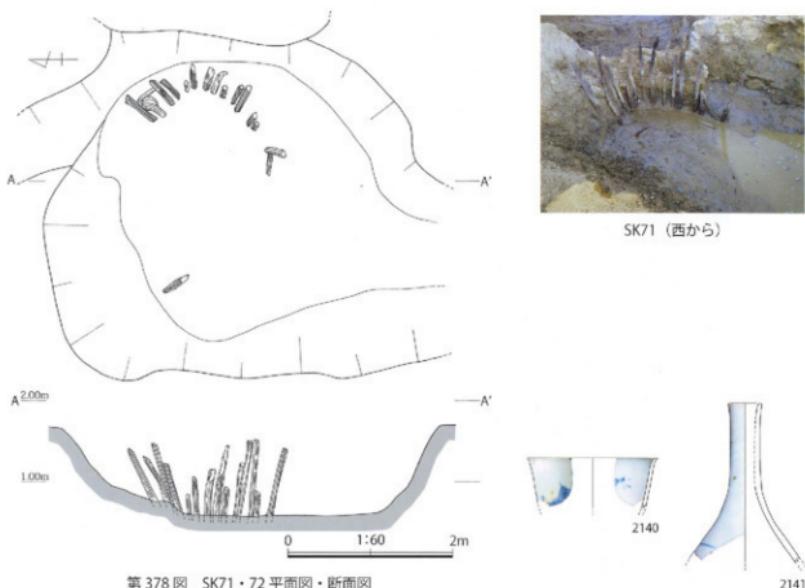
2138 は備前陶器の建水で、底部部分のみの残存である。底径 6.6cm、胴部最大径 10.5cm を測り、高台のない平底を呈する。

国産磁器

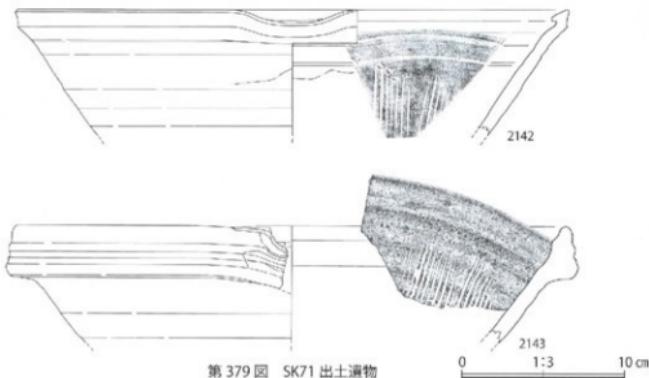
2139 は肥前磁器の青緑形大皿で、口径 32.4cm を測る。1787（第 3-1 遺構面・廐棄土坑 SK43 出土）とよく似た大皿である。また、2139 は屋敷境石積溝 SD01 から出土した 2053（第 355 図）と接合が可能であり、同一個体である。



第 377 図 SX08 出土遺物



第378図 SK71・72 平面図・断面図

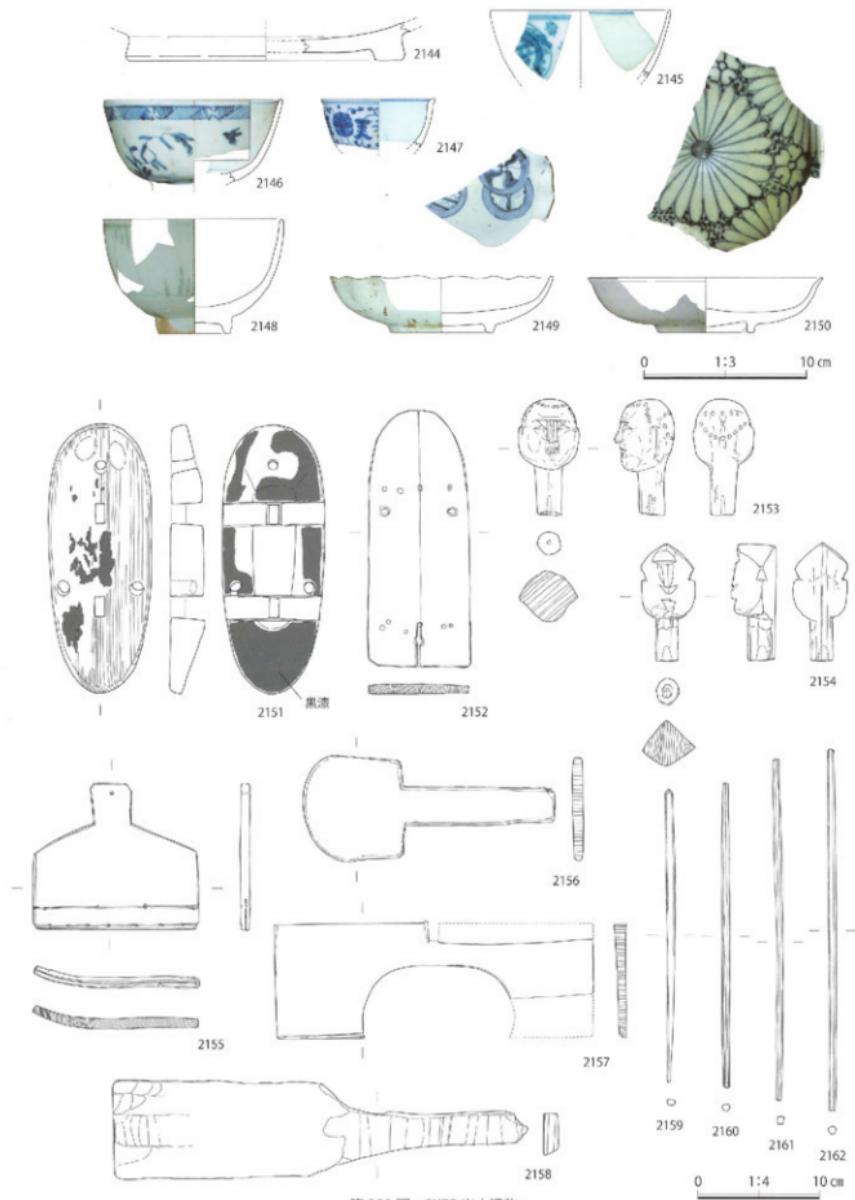


第379図 SK71 出土遺物

SK71・72：廃棄土坑（第378図）

SK71・72は調査区中央から西寄りに位置する大形廃棄土坑である。SK71・72は石積溝SD08の南側延長線上、雨落ち溝SD10の西側延長線上にあたる。SK72の後にSK71が掘り込まれている重なりが見られる。

SK72は直径約5m、深さ約1.0mを測る大形の円形土坑で、SK71はSK72の底面やや北東の位置に、直径約2m、深さ0.9mを測る円形土坑である。SK71の内部には土坑の直径に合わせて18本の杭が打ち込まれていた。杭は長さ0.35～0.95m、太さ0.07mを測るもので、



第380図 SK72出土遺物

東側に円弧状に打ち込まれ、その上方部は放射状に広がっていた。この杭は廃棄するゴミが散らばらないようにという意図で打ち込まれたものと思われる。

SK71・72が位置する場所は、第3-1 遺構面で廃棄土坑群2が掘られた場所（第320図）である。廃棄土坑群2は、SK71・72の位置を踏襲して掘り込まれたものと考えてよい。

遺物は多量に出土しており、特にSK72の方が多い傾向にあった。遺物の年代はおよそ九国II-2～III期間を示すと思われる。

SK71 出土遺物（第379図）

国産陶器 2142・2143は陶器で擂鉢である。2142は肥前、2143は備前産で、いずれも口径34.0cmを測り、片口を持つ。

国産磁器 2140・2141は肥前磁器である。2140は端反形の小碗で、中国磁器の可能性も考えられる。2141はらっきょう形の小瓶で、頸部は5.0cm以上を測る。

SK72 出土遺物（第380図）

国産陶器 2144は肥前陶器の大皿か鉢で、高台部分の残存である。底径16.7cmを測る大形で、接地面は1.6cmを測る。

貿易磁器 2145は中国磁器・精製の中碗である。口径11.0cmを測り、同様の文様が肥前磁器にも見られる碗である。

国産磁器 2146～2150は肥前磁器である。2146は丸形中椀、2147は端反形小碗で、外間に蘭文が描かれる。2148は丸形中碗で、高台内が無釉のものである。2149は丸形の五寸皿で、口銷を施し、内面に円形文を描く。2150は端反形五寸皿で、内面の中心に直径8.5cmの菊花文を大きく描き、その周囲に間隔なくサイズを変えた菊花文を描いている。

木製品 2151は丸型の差込下駄で、表面に黒漆、裏に下地が塗られている。2152は用途不明品で、一見下駄のようにも見えるが下駄ではない。2153・2154

は人形の頭で、2153は顔の部分を精巧に彫り出しており、頭部には髪の毛を刺す穴が開けられていた。また、白色の顔料もやや残存していた。2154は2153と比べると、模式的な顔となっており、故意にデフォルメして彫ったという印象を受ける。2153は目・鼻・口など、より本物の人間に近づけるようにつくられているのにに対し、2154はバーツを荒く削つただけである。2154の首部分には0.9cmほどの穴が開けられていることから、指人形として使用した可能性も考えられる。2155は刷毛で、毛を挟むための加工と、柄の部分に穿



第381図 SK73～76 出土遺物

孔が見られる。2156は両刃のヘラで、刃部分は幅7.5cmを測り丸い形状を呈し、柄部分は長さ10.2cmを測る。しゃもじに近い製品であると思われる。2157は折敷の脚部かと思われる。2158は羽子板に近い形状を呈しているが、面に二次加工の痕跡が見られ、ヘラとして使用されたものではないかと推測する。2159～2162は白木の箸である。いずれも真っ直ぐ伸び、長さ24.1～29.4cm、厚み0.4～0.6cmの間におさまる。

SK73～76：その他の遺構（第354図）

SK73～76 SK73～76は第2遺構面においてSK13（第271図）、第3-1遺構面において廐棄土坑群2（第302図）が掘られた場所に位置する土坑である。SK73～76の南西側には大形廐棄土坑SK71・72（第378図）も掘られている。SK73～76はこの近辺が廐棄土坑を掘る場所として認識される以前に掘られた土坑群であると思われる。

その他の遺構 出土遺物（第381図）

- | | |
|------|--|
| SK73 | SK73 2163は志野の陶器で小杯である。長石釉が掛かっており、古手の様相を示す。
2164は肥前磁器の半球形中碗で、高台には砂目痕が見られる。 |
| SK74 | SK74 2165は漆椀で、高台が2.7cmを測る。外面は黒色、内面は赤色の漆が塗られている。外面には黄色の二重丸に赤色で鶴文が3個描かれている。 |
| SK75 | SK75 2166は真鍮製の煙管で、雁首部分である。残存長9.6cm、火皿径1.5cm、重量5.40gを測る。 |
| SK76 | SK76 2167は肥前磁器の浅半球形中碗で、高台内に「太明」の銘が入る。 |

第3-2遺構面 遺構外出土遺物（第382・383図）

国産陶器 2168～2178は肥前陶器である。2168は腰折形の中碗で、口縁部は大きく外反する。2169～2171は端反形の中碗、2172・2173・2175は絵唐津の小皿で、いずれも内面に胎土目痕が見られる。このうち、2175は方形の変形皿で、四方が伸びるように成形されている。2174は口縁帯下注口の片口で、白土を塗っている可能性が考えられる。2176は中盤の胴部で、最大径14.0cmを測る。内面には同心円状叩き痕が見られる。2177は口径5.5cm、器高5.9cmを測る小皿で、茶入れとも考えられる。外内面には粘土が付着・剥離した痕跡が残っており、凹凸や歪みが目立つ。2178は絵唐津の折湾形大皿で、内面には胎土目痕が見られる。

2179・2180は搔鉢で、2179は产地不明、2180は九州産の可能性が考えられる。

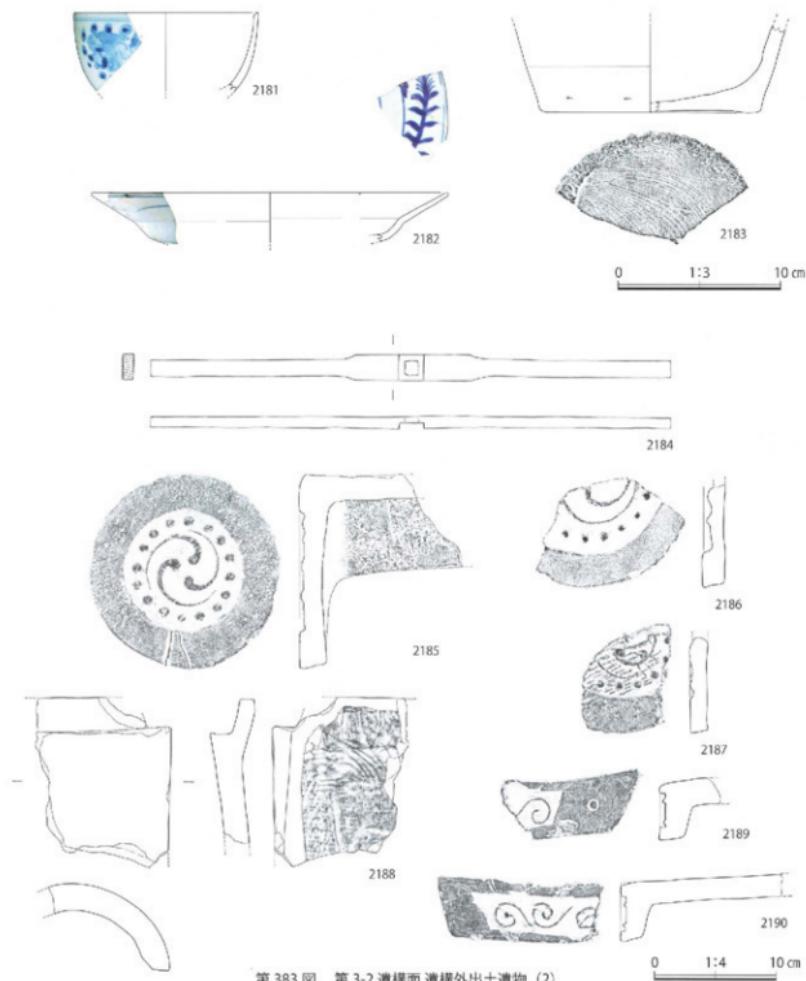
国産磁器 2181は肥前磁器の丸形中碗である。
貿易磁器 2182は中国磁器・精製で、景德鎮窯系の折線形中皿である。
土器 2183は土器で、壺か甕の底部片である。底径13.6cmを測り、底部から直線的に上がる胴部である。底部は回転糸切りで調整されている。

木製品 2184は長さ42.7cm、最大幅2.1cmを測る不明木製品で、中央部分に四角形の穿孔が開いており、その左右は対照的なつくりになっている。

瓦 2185～2187は軒丸瓦で、いずれも中央に左二巴文、その周囲を珠文が廻る。珠文は、完形の2185で16個廻っている。2187は巴文と珠文の面に斜線が入っているが、これは瓦を作る際の型が劣化している証拠である。このように斜線が入るのは、使い古した型であることを物語り、引いては瓦製作時の状況、環境が劣悪なものであったとも考えることができる。2180は丸瓦で、コビキBである。2189・2190は軒平瓦で、文様は三葉系の唐草文である。また、2189には文様の外側に直径1.0cmの丸いスタンプが押印されている。



第382圖 第3-2遺構面遺構外出土遺物(1)



第383図 第3-2造構面 造構外出土遺物 (2)

第7節 小結

南屋敷の調査におけるまとめとして、各造構面の造構配列、主に建物跡の変遷に重きを置いて述べる。また、出土遺物から見る年代の把握を行っていきたい。ここでは、年代が古い第3造構面から述べる。

第3造構面 第3造構面は本文で述べた通り、調査区の南側に広がる建物跡SB08・09が建てられていた期間に、北側の細長い帯状区画(第3-1造構面・第3-2造構面)が2面に渡って造成された造構面である。上層面からの掘り込みや攪乱が見られるが造構の残存状況は良い。

SD01は第3-2造構面時にはほぼ完全な形状で検出した屋敷地を仕切る石積溝である。SD01は溝としてだけではなく、石積の上に建物を建てる前提につくられた施設である。SD01の南側石積列の中に1間2.0m間隔で並ぶ石が見られ、西側に建物跡SB11、東側にSB12が建っていたことが想定できる。SB11・12はSD01とともにつくられ、建物と排水施設が1セットとなるものであった。SD01は第2造構面に至るまで、つくり変えながら同じ位置に存続する。

SB11・12の内部では深敷造構SX02・07を検出した。これらの性格は判明していないが、建物の内部構造を考える上で重要な発見となった。また、東端には北西—南東方向を軸とする素掘溝SD09が見られ、底面に半間(1.0m)間隔で並ぶ礎石が置かれている。SD09は建物跡とは異なる軸であった。第3-2造構面時には、南東側にSB08・09、南西側にSB10、そしてSD01に沿った東側にSB11、それと対面になるようにSB12が建っていたことが想定できる。SB08・09は母屋、SB11・12はその細長い形状から長屋風の建物であろうと思われる。いずれもほぼ同時期に存在していたと考えられる。

SB08とSB09はSB09が約半間分南に移動している状態で検出した。これは建て替えを示す痕跡である可能性が高い。また、SB08・09の範囲内には焼土が広がる部分があり、火災による建て替えであったことも考えられる。SB08・09の北側に隣接している石積溝SD07と素掘溝SD10はいずれも建物跡に付随する雨落ち溝と考え、これらのつくり替えは建物の建て替えを示唆し、以北の帯状区画にも少なからず影響を与えたと思われる。SB08・09の西側に見られる素掘溝SD06も雨落ち溝である可能性が考えられる。

第2造構面 第2造構面では礎石や抜き取り痕を多数検出し、その並びがいや煩雑になる傾向が見られた。これらがどのように建物を構成するかは、1間約2.0mを測る礎石間の距離で検討し、SB03～05の復元案を想定した。いずれも第3造構面時の建物跡ほどの規模は持たず、全体像は明確に示せなかった。SB03～05はSB08・09とほぼ同一軸で建てられていた。

SB03～05の西側には建物跡SB06が見られた。SB06の位置は第3造構面においてSB10を検出した部分と重なる。SB10は東西残存2間(1間1.90m)、南北の間数は明確に割り出せない礎石の並びになっているが、G-G'を構成する主要礎石は1間1.90m間隔で並んでおり、これらを基準とすると、SB10は残存で6間の南北幅を持つ建物であったと想定できる。このG-G'とSB06のB-B'はほぼ同一地点で重なっており、G-G'の礎石(大海崎石)が置かれた直上にB-B'の礎石(島石)が置かれていた。B-B'の礎石は1間1.95m間隔で明瞭に並んでおり、1つ1つに拳人の栗石(大海崎石)が敷かれるものであった。第2造構面造成時、第3造構面の礎石の直上に礎石が置かれることは意図的なものであり、建物の軸のみならず柱を建てる位置さえも踏襲した部分があることがうかがえる。

第1造構面 第1造構面では、東側に建物跡SB01・02を重なった状態で検出した。このうちSB02は

第2造構面からの南北軸を引き継いでいるが、SB01はわずかに軸がずれていた。SB01の南北軸は、それまで踏襲してきた東へ4度傾く軸が、ここでわずかにずれたことを示すものと思われる。

石積方形土坑 第3造構面の建物跡の周囲には石積方形土坑が多数配置されている。第3-2造構面ではSD09西側にSK61が、南側にはSK62・63がつくられている。SK61は5段の石積みで構築されたもの、SK62・63は0.3mの間隔を取って隣接するもので、後者は2つで1セットとして利用されていた施設と思われる。第3-1造構面では調査区西端でSK58を検出した。SK58は側面に鳥石、底面に大海崎石を利用した施設である。第3造構面では調査区南端にSK40を検出している。SK40は建物跡SB08・09のすぐ南側に位置することから、建物と関連性がある施設とも考えられる。南屋敷では、上記の5個の他に第4造構面でも4個の石積方形土坑を検出しており、年代は異なるが計9個つくられていた。

廃棄土坑 また、第3造構面～第2造構面までの間では計18個の廃棄土坑を検出している。大きさは様々であるが、いずれの土坑も埋土は炭が混じった黒色を呈し、その中には多量の遺物が捨てられていた。碗や皿・瓶・搖鉢（陶磁器・漆器）、箸・折敷（木製品）などの食器類、焰燈・土鍋（土器）、筭（木製品）などの調理器具の他、動物・魚の骨などの食物残滓が多量に見られ、食生活に伴う廃棄物が多く捨てられたことを示している。その他、香炉・火入れ（陶磁器）、灯明皿として使われた油燈痕が残る土師器皿、下駄・刷毛・桶（木製品）、煙管・釘（金属製品）、火打ち石、墨書きが残る荷札木簡、瓦の破片など、生活全般に関わる製品が廃棄されていた。

廃棄土坑は必然的に家屋が建っていない場所に掘られることになり、その状況は調査成果に表れている。また、家屋の玄関側（表）にゴミを捨てる習慣は通常考えられず、勝手口や台所の近くなどの裏側に捨てると思われる。南屋敷において廃棄土坑が掘られた場所は、大きく分けて東側と西側に集中している。東側は第3-1造構面においてSK43～49が重ならないように掘られた廃棄土坑群1が主となり、西側は第3-2造構面ではSK71・72、第3-1造構面ではSK71・72とほぼ同一位置にSK50～55が密着して掘られた廃棄土坑群2、第2造構面ではさらに同じ位置に人形廃棄土坑SK13が調査されている。廃棄土坑が同じ場所に掘られ続けることは、建物の場所が動いていないことを示すとともに、ゴミ捨て場としての位置を踏襲する認識があったと思われる。

祈祷具 第1造構面においては本文中で詳しく述べた長方形祈祷具（SK06）・八角形祈祷具（SK07）が出土した。これらは過去に類を見ない遺物であり、幕末期の民間信仰・祈祷法などを知る上で貴重な発見であった。

南屋敷の年代観 各造構面の年代観は、第3造構面が松平期である17世紀前半～18世紀前半を示し、そのうち第3-2造構面が17世紀前半～中頃、第3-1造構面が17世紀中頃～18世紀前半であると判断している。第2造構面は18世紀前半～後半、そして第1造構面は18世紀後半～明治初頭であると想定している。

本章で扱った第1造構面～第3-2造構面の下には、次章第6章で取り上げる第4造構面が存在する。第4造構面は室尾期・京極期に建てられた建物跡がほとんどつかずの状態で残存しており、江戸時代初期の松江城下町の様相を色濃く提示している。

註

- (1) 井戸を廃す際に行われる宗教的儀式であり、中世以降、現代まで続くものである。井戸の中央に竹筒を立てて埋めることによって、水神の息を途切れさせないようにするという儀式である。
- (2) 長方形祈禱貝・内蓋表面の墨書き文字については、島根県教育委員会 文化財課 松尾允晶氏にご教示して頂いた。
- (3) 「橘 明商」が「松浦東鷦」の息子であるという一連の流れについては、島根大学 法文學部 小林准士准教授にご教示して頂いた。
- (4) 「土金祭」などの祈禱法に関しては、水野正好氏にご教示して頂いた。また、鉄の球を鍛えて地中に埋める祈禱法については、宮永雄太郎『神道秘密集伝』八橋書店 1989年、村田あが『『死家故実』に見る建築儀礼』『跡見学園女子大学短期大学部紀要』36 2000年に記述が見られる。
- (5) 陰陽五行思想については、吉野裕子『吉野裕子全集2』人文書院 2007年を参考にした。
- (6) 陰陽五行思想・風水学・家相学について統括的に捉え、かつ松浦東鷦が興した「松浦流」について研究を行われている村田あが氏にご教示して頂き、その文献を参考にした。村田あが『江戸時代中・後期の住まいについての研究(第5回)－『家相図解』その2－』『東京家政学院大学紀要』31 1991年
- (7) 島石とは堅硬多孔質玄武岩の通称である。松江市大根島、もしくは嫁島で産出される火山噴火の折の噴石であり、表面は気泡のような孔が全面に見られる石材である。
- (8) 大海崎石とは安山岩の通称である。松江市大海崎町で産出されるものを使用しており、多くは赤色を帯びる比較的柔らかく加工しやすい石材である。
- (9) 瓦製作時に木製型の劣化による粗い線が入ることについては、米子市歴史館 学芸員 伊藤創氏にご教示して頂いた。
- (10) 「樂山」とは松江市西尾町で現在も操業されている「樂山焼」のことである。
- (11) 施棄土坑の性格については、江戸遺跡研究会『圖說 江戸考古学研究辞典』2001年を参考にした。
- (12) 施棄土坑に捨てられている食物残滓の種類の傾向については、総合地球環境学研究所 右丸恵利子研究員にご教示して頂いた。
- (13) 「高野山真言宗 尊照山 千手院」は、塙尾吉晴が松江に入国した折、築城時に本丸の鬼門(北東方向)にあたる位置に、広瀬から移された鬼門封じの寺である。

参考文献

- 竹内 漢『圖說江戸4 江戸庶民の衣食住』学習研究社 2003年
 宮田 登『宮田 登 日本を語る4 俗信の世界』吉川弘文館 2006年
 横川敦子『古いの原点「易經」』青弓社 2008年
 東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会『東京都新宿区 内藤町遺跡』1992年
 沙留地区遺跡調査会『沙留遺跡・沙留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書一』1996年
 財團法人 首都圈不燃建築公社 株式会社四門『東京都新宿区 若葉三丁目遺跡』2008年
 財團法人 大阪府文化財センター『大阪市 大坂城址Ⅲ』2006年
 兵庫県赤穂市教育委員会『発掘された赤穂城下町』2005年
 財團法人 北九州市芸術文化振興財團 埋蔵文化財調査室『黒崎城跡1』2005年

表 14 国町 279番地外(南廻版)陶磁器・土器遺物観察表

遺物番号	遺物名	種別	型様	器形	法量(cm)			生産地	丸附 縫合	備考
					口径	底径	器高			
1254	SP01	陶器	板状	板状小鉢	1.6	-	-	近前系	-	19世紀代。
1257	SK02	陶器	中碗	平底	3.9	-	-	不明	-	高台内に東側に。近代。
1258	SK03	陶器	中碗	筒形	6.8	-	-	近前系	-	古く傳来。
1259	SJ01	陶器	人頭	-	29.0	17.1	35.8	不明	-	-
1260	SJ01	陶器	中碗	-	19.2	12.8	-	不明	-	-
1264	SK02	陶器	中碗	腰彎形	11.4	-	-	肥前	-	全面に鈍鳥色釉。
1265	SH02	土器	無縫合	逆四字形	6.2	-	1.4	外径7.6	在地系	-
1266	SK01	陶器	板状	板状小鉢	7.6	4.6	1.4	圓周	-	シンハイ窯の可能性あり。
1269	SK04	陶器	中碗	平底	3.0	-	-	在地系	-	-
1270	SK04	陶器	板状	-	25.3	-	-	-	-	-
1272	SK05	陶器	大穴	-	38.9	29.2	46.0	在地系	-	西面に石灰物質付着、腰部外側にスタンプ。
1273	SK05	陶器	中碗	-	4.2	-	-	肥前系	-	中、前半の腰板が、窓台内に運舟寺跡。
1274	SK06	陶器	小碗	腰反形	9.6	4.0	5.1	輪削	V	1820~50年代。
1275	SK05	陶器	中碗	腰反形	9.4	-	-	肥前	-	1820~60年代。
1276	SK05	陶器	小碗	-	-	-	肥前	-	19世紀代。	
1277	SK05	土器	盆(中)	在地系	6.2	-	-	-	-	白色系、底部は凹凸、斜切。
1287	第1施構面 造構外	陶器	小鉢	筒形	5.2	3.1	6.1	布志名	-	板状地、口縁部間に神色地形分離。
1288	第1施構面 造構外	陶器	中碗	-	11.7	-	-	布志名	-	板状地。
1289	第1施構面 造構外	陶器	人頭	-	23.3	11.6	12.3	布志名	-	板子が付く、外、皿底深にスリット。
1290	第1施構面 造構外	陶器	人頭	-	20.0	9.0	8.7	布志名	-	-
1291	第1施構面 造構外	陶器	盤切	玉跳形	12.0	6.8	5.1	不明	-	-
1292	第1施構面 造構外	陶器	盤切	玉跳形	27.5	-	-	不明	-	-
1293	第1施構面 造構外	陶器	新横口	輪挖形	4.0	2.0	2.1	肥前系	-	輪・輪蓋系の可能性あり。
1294	第1施構面 造構外	陶器	小杯	浅浮形	1.8	-	-	肥前	IV	-
1295	第1施構面 造構外	陶器	小杯	輪窓	1.6	2.9	3.3	肥前	V	白壁。
1296	第1施構面 造構外	陶器	小杯	輪窓	2.4	-	-	肥前	-	-
1297	第1施構面 造構外	陶器	小杯	輪窓	11.2	3.6	5.5	肥前	V	白芯。
1298	第1施構面 造構外	陶器	-	-	8.2	-	-	肥前	IV~V	-
1299	第1施構面 造構外	陶器	口横	半筒形	9.0	-	-	肥前	V	赤絵、18世紀代。
1300	第1施構面 造構外	陶器	合子	-	9.0	-	-	吳郎頭9.8	肥前	V
1301	第1施構面 造構外	陶器	中碗	端反形	10.0	3.2	7.5	つみ輪3.3	肥前	赤絵、1820~60年代。
1302	第1施構面 造構外	陶器	大瓶	丸彫形	6.3	-	-	肥前	V	浮き地。
1303	第1施構面 造構外	陶器	小瓶	丸底凸仄	10.2	6.4	2.6	肥前	V	-
1304	第1施構面 造構外	陶器	上瓶	把手	10.2	6.1	2.6	肥前	-	赤絵、上部部分の残存か。
1305	第1施構面 造構外	陶器	人形	-	-	-	肥前	-	赤絵、底部は凹凸切。	
1306	第1施構面 造構外	土器	盤(小)	在地系	6.3	3.0	1.5	-	-	赤絵、底部は凹凸切。
1307	第1施構面 造構外	土器	盤(小)	在地系	9.0	3.8	2.1	-	-	赤絵地輪窓。縁部火入び(輪窓)、19世紀初頃(原)に似似。
1317	SK05(?) 磚石1	陶器	香炉	-	-	-	輪削延3.6	不明	-	-
1318	SK04(?) 磚石2	陶器	小瓶	浅浮形	7.9	3.1	3.8	肥前	IV	-
1319	SK04(?) 磚石2	陶器	小瓶	腰彎形	9.0	5.1	3.2	肥前	-	赤絵、金入。
1320	SK04(?) 磚石2	陶器	人頭	-	5.9	4.6	-	肥前	-	赤絵、頭部部分の残存か。
1321	SK04(?) 磚石3	陶器	水指	-	-	-	輪削延17.3	肥前	IV	赤絵。
1322	SK05(?) 磚石4	陶器	小瓶	-	5.2	1.2	5.1	肥前	IV	白壁。斜行隙。
1323	SK08	陶器	中碗	輪窓形	-	4.3	-	灰燒系	V	-
1326	SK05	陶器	中碗	-	-	-	輪削延11.8	肥前	-	人形彌利か。
1327	SK05	陶器	大瓶	-	-	-	輪削延15.4	肥前	IV	割。
1328	SK08	陶器	-	-	-	-	-	小明	-	赤絵でモチーフ、ねじれを含む。状態を模したもの。
1329	SK08	陶器	腰斧	-	30.5	10.7	13.3	腰削	-	赤絵外側にカギ穴。
1330	SK08	陶器	小片	彫刻	6.2	3.6	3.4	肥前	IV	赤絵。
1331	SK08	陶器	小瓶	丸彫	7.6	3.2	4.3	肥前系	IV	赤絵見。
1332	SK03	陶器	小瓶	丸彫	8.0	2.9	4.8	肥前	IV	-
1333	SK08	陶器	中碗	丸彫	10.1	3.8	5.6	肥前系	IV	肥後見。
1334	SK08	陶器	中碗	腰彎形	-	5.2	-	肥前	IV	輪窓付。
1335	SK08	陶器	大瓶	丸彫	14.0	-	-	肥前	IV	(原) 腹縫合板。
1336	SK03	陶器	大瓶	丸彫	16.0	-	-	肥前	IV	-
1337	SK08	陶器	中瓶	浅浮形	20.1	9.2	7.4	肥前	IV	赤絵外側に腰窓1枚、輪縫ぎ。
1338	SK08	陶器	小片	彫刻	10.7	-	-	肥前	IV	青文。
1339	SK08	陶器	小片	彫刻	10.5	5.5	7.7	肥前	IV	青文。
1340	SK08	陶器	腰斧	-	15.3	16.4	5.9	肥前	IV	腰縫切付。
1341	SK08	陶器	香炉	-	-	-	肥前	-	青絵、蛇/日向型、高台、輪窓。	
1342	SK08	陶器	腰斧	丸彫	12.8	4.4	4.0	肥前	IV	腰込込みに輪窓/輪縫。
1343	SK08	陶器	弘法器	乳頭鋸高台	7.5	4.2	5.4	肥前	IV	青文。
1344	SK08	陶器	油滴	乳頭鋸高台	5.6	-	-	肥前	IV	青絵(ものみ)。
1345	SK08	陶器	上瓶	腰彎形	6.6	3.2	8.0	受鉢8.9	肥前	-
1346	SK08	陶器	上瓶	腰彎形	-	-	-	受鉢8.7	在地系	-
1347	SK08	陶器	中瓶	腰彎形	9.0	4.2	1.9	-	-	白絵系。
1348	SK08	陶器	中瓶	腰彎形	9.1	3.5	4.1	-	-	赤絵系。底部は凹凸切り、油煙痕あり。
1349	SK08	陶器	中瓶	腰彎形	9.0	4.6	1.6	-	-	白絵系。底部は凹凸切り、油煙痕あり。
1350	SK08	陶器	中瓶	腰彎形	9.1	5.1	2.0	-	-	赤絵系。底部は凹凸切り、油煙痕あり。
1351	SK08	陶器	中瓶	丸彫	13.4	3.8	-	-	-	白絵系。底部は凹凸切。
1352	SK08	陶器	上瓶	彫刻	28.0	-	-	-	-	白絵地輪窓上部に凹凸状の脊。外邊にスリット付。
1353	SK08	陶器	上瓶	彫刻	30.0	-	-	-	-	表面にスリット付。
1354	SK08	陶器	上瓶	彫刻	31.0	-	-	-	-	-
1355	SK08	瓦器	-	-	-	-	-	-	-	-
1360	SK09	陶器	中碗	腰彎形	11.6	4.5	7.5	肥前	IV	刷毛目彫り。
1361	SK09	陶器	腰斧	-	31.7	-	-	-	-	ツリ目墨付12本。
1362	SK09	陶器	中碗	腰彎形	10.1	4.1	5.2	肥前	IV	-
1363	SK09	陶器	小瓶	彫刻	8.1	2.1	3.3	肥前	-	-
1364	SK09	陶器	腰斧	-	6.0	4.3	4.3	肥前	IV	出方彌。
1365	SK09	陶器	中瓶	腰彎形	34.7	-	-	在地系	-	山峰地輪上に斜め等孔。
1366	SK10	陶器	中瓶	丸彫	13.4	8.1	3.3	肥前系	IV	波紋見。ぐるわんかす。

遺物類別表

遺物番号	遺物名	種別	器形	器形	法寸(㎝)				年・地	九段 時代	備考
					口径	底径	高さ	その他			
1367	SK11	罐	小瓶	洗手用瓶	6.3	-	-	-	肥前	IV	赤絵、18世紀。
1368	SK11	罐	仏教造	青磁高麗式	-	4.0	-	-	肥前	IV	-
1369	SK11	罐	茶器	茶器	16.9	-	-	-	肥前	-	白絵、漆黒足裏。
1370	SK12	罐	中瓶	店舗形	9.6	5.6	6.1	-	肥前	V	朱墨文。
1371	SK12	罐	六角瓶	紫花形	16.7	-	-	-	肥前	IV	コロボウ。
1372	SK13	罐	五方	白磁蓋受け	5.5	3.3	2.6	受持込6.2	肥前	IV	-
1373	SK13	罐	中瓶	五方	-	3.4	-	-	肥前	IV	朱・青文。
1374	SK13	罐	四付	-	3.0	-	-	-	肥前	-	鉢輪掛分け。
1375	SK13	罐	小瓶	丸形	9.3	3.6	4.9	-	肥前	IV	-
1376	SK13	罐	中瓶	六所	12.3	4.1	5.0	-	肥前	IV	-
1377	SK13	罐	一側	豪華形	10.0	-	-	-	肥前	-	豪華形。
1378	SK13	罐	大瓶	伊豫形	28.5	8.0	7.8	-	肥前	III	上海・高級品の可能性あり。
1379	SK13	罐	大瓶	木形	11.7	-	-	-	肥前	III	三島手。
1380	SK13	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	肥前	-	-
1381	SK13	罐	中瓶	丸形	12.1	-	-	-	肥前	-	国宝、17世紀代。
1382	SK13	罐	四付	丸形	21.8	-	-	-	肥前	-	-
1383	SK13	罐	四付	丸形	8.6	4.2	受持込13.8	在地系	-	-	-
1384	SK13	罐	四付	丸形	5.8	-	受持込3.0	-	肥前	-	17世紀後半。
1385	SK13	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	肥前	-	-
1386	SK13	罐	大瓶	體張形	48.6	-	-	-	肥前	-	-
1387	SK13	罐	大瓶	桜木形	15.5	10.2	10.5	-	肥前	-	口縁部・腹部外縁にφ1.2cmのボタン状突起。
1388	SK13	罐	大瓶	桜木形	30.0	16.7	17.0	-	肥前	-	供養にφ0.4cmのオル。瓶底に曳出焼付。
1389	SK13	罐	大瓶	桜木形	29.0	-	-	-	肥前	-	-
1390	SK13	罐	大瓶	桜木形	30.4	-	-	-	肥前	-	スリット単位10本。
1391	SK13	罐	大瓶	桜木形	33.6	-	-	-	肥前	-	スリット単位6本。
1392	SK13	罐	大瓶	桜木形	28.6	-	-	-	肥前	-	-
1393	SK13	罐	大瓶	桜木形	13.0	-	-	-	肥前	-	底外部にカンゾ模。
1394	SK13	罐	大瓶	角形	4.8	1.8	1.5	-	肥前	IV	-
1394	SK13	罐	小瓶	瓣形	6.1	2.8	4.1	-	肥前	II 2	白絵、外西に擬薄。
1395	SK13	罐	小瓶	瓣形	9.1	3.3	4.3	-	肥前	II 2	萬古黒釉、外西に「唐」文。
1396	SK13	罐	小瓶	丸形	8.2	3.0	4.4	-	肥前	IV	-
1397	SK13	罐	小瓶	體張形	-	-	-	-	肥前	IV	-
1398	SK13	罐	中瓶	茂半蝶形	10.3	-	-	-	肥前	IV	水製文・葵文。
1399	SK13	罐	中瓶	茂半蝶形	10.6	5.1	5.6	-	肥前	IV	菊花文、萬古内に「種」款。
1400	SK13	罐	中瓶	丸形	11.8	-	-	-	肥前	-	-
1401	SK13	罐	中瓶	丸形	13.6	-	-	-	肥前	-	濃州窯。
1402	SK13	罐	中瓶	瓣形	-	-	-	-	肥前	H-2	高台に筋目痕。
1403	SK13	罐	中瓶	瓣形	9.6	5.0	7.0	-	肥前	H-2	高台に筋目痕。
1404	SK13	罐	牛形	牛形	7.6	-	-	-	肥前	H-2	高台に筋目痕。
1405	SK13	罐	牛形	牛形	-	4.2×6.0	3.8×3.5	-	肥前	IV	-
1406	SK13	罐	正口瓶	正口瓶	-	-	-	-	肥前	IV	手書き五瓣花文。高台内に「福」款。
1407	SK13	罐	正口瓶	九形正口瓶	13.0	8.6	4.0	-	肥前	IV	青磁、口刷り。
1408	SK13	罐	正口瓶	九形正口瓶	14.7	9.0	4.1	-	肥前	IV	蛇口/口内高台、高台内に「福」款。
1409	SK13	罐	小瓶	丸形	7.4	-	-	-	肥前	IV	-
1410	SK13	罐	中瓶	半瓣形	8.1	3.8	6.8	-	肥前	IV~V	外輪唐、口縁部内面に四方捺文。
1411	SK13	罐	中瓶	半瓣形	-	7.4	-	-	肥前	IV	蛇口/回型高台。
1412	SK13	罐	中瓶	合掌形	-	-	秀6.0	-	肥前	-	φ1.6~2.0cmの穿孔。
1413	SK13	土器	風(中)	京窓系	12.0	-	2.5	-	-	-	-
1414	SK13	土器	圓(中)	京都系	12.7	6.3	3.0~2.4	-	-	-	-
1415	SK13	土器	圓(小)	京都系	9.6	3.0	2.1	-	-	-	-
1416	SK13	土器	圓(大)	京都系	16.0	11.5	2.6	-	-	-	-
1417	SK13	七輪器	直(小)	在地系	8.9	6.1	1.6	-	-	-	-
1418	SK13	七輪器	直(中)	在地系	9.4	4.7	2.7	-	-	-	-
1419	SK13	七輪器	直(大)	在地系	10.2	6.0	2.1	-	-	-	-
1420	SK13	七輪器	直(中)	在地系	11.1	7.5	2.4~2.5	-	-	-	-
1421	SK13	七輪器	直(中)	在地系	11.2	7.2	2.3	-	-	-	-
1422	SK13	七輪器	直(大)	在地系	11.8	7.4	2.3	-	-	-	-
1423	SK13	土器	大瓶	丸形	20.7	23.5	9.3	-	在地系	-	-
1424	SK13	土器	大瓶	丸形	-	23.8	-	-	在地系	-	-
1425	SD05	罐	中瓶	瓣形	11.8	3.9	6.8	-	肥前	IV	外輪唐、瓣形。
1426	SD05	罐	瓣	瓣	29.4	-	-	-	肥前	IV	白絵、瓣形。
1427	SD05	罐	五瓣(中)	九形近底	13.2	8.2	2.8	-	肥前	IV	白絵、瓣形。
1428	SD05	罐	小形	瓣	18.2×6.0	9.4×7.8	-	-	肥前	IV	白絵、瓣形。
1429	SD05	罐	水滴	瓣	-	-	-	-	肥前	III	瓣部部分の模様。
1430	SD05	罐	小瓶	瓣形	7.8	-	-	-	肥前	IV	白絵、瓣形の模様。
1431	SK15	罐	丸の巻	瓣形	11.0	4.6	3.3	つまみ脚4.4	肥前	-	追跡(丸の巻)。
1432	SK15	罐	瓣	瓣	-	25.9	-	-	-	-	-
1433	SK15	罐	瓣	瓣	-	7.0	5.8	14.0	肥前	IV	高台付、底部へ高台無。
1434	SK15	罐	瓣	瓣	14.0	4.2	3.8	-	肥前	III	-
1435	SK14	罐	中瓶	丸形	14.8	-	-	-	在地系	-	底部風を計指した複雑模様。
1436	SK14	罐	中瓶	丸形	20.2	9.2	11.2	-	肥前	IV	足込みに加賀十日紋。
1437	SK19	罐	中瓶	半瓣形	7.4	3.0	3.5	-	肥前	V	高台に砂目底。
1438	SK19	罐	中瓶	半瓣形	10.1	-	-	-	肥前	-	-
1439	SK19	罐	五瓣	丸形近底	9.0	-	-	-	肥前	IV	丸形(五瓣)。
1440	SK20	罐	中瓶	丸形	-	4.4	-	-	在地系	III~IV	高台付、底部へ高台無。
1441	SK20	罐	中瓶	丸形	-	9.4	-	-	肥前	-	-
1442	SK20	罐	中瓶	丸形	-	4.6	-	-	肥前	-	-
1443	SK20	罐	丸の巻(中)	在地系	7.0	3.3	4.4~4.6	-	在地系	-	-
1444	SK20	罐	丸の巻(小)	在地系	12.1	5.8	2.6	-	在地系	-	-
1445	SK22	罐	瓣	瓣	11.0	4.8	6.1	-	在地系	-	(底脚)は鉢輪系切り、スリット付。
1446	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	白色系、追跡(瓣)。
1447	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	白色系、追跡(瓣)。
1448	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	白色系、追跡(瓣)。
1449	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	白色系、追跡(瓣)。
1450	SK15	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	-
1451	SK15	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	-
1452	SK14	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	-
1453	SK18	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1454	SK19	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1455	SK19	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1456	SK19	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1457	SK19	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1458	SK19	罐	五瓣	丸形近底	-	-	-	-	在地系	-	-
1459	SK20	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1460	SK20	罐	中瓶	丸形	-	-	-	-	在地系	-	-
1461	SK20	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	-
1462	SK20	罐	丸の巻(小)	在地系	7.0	3.3	4.4~4.6	-	在地系	-	-
1463	SK20	罐	丸の巻(中)	在地系	12.1	5.8	2.6	-	在地系	-	-
1464	SK22	罐	瓣	瓣	11.0	4.8	6.1	-	在地系	-	外縁に筋文。
1465	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	青文。
1466	SK22	罐	瓣	瓣	-	-	-	-	在地系	-	青文。
1467	SK24	罐	小瓶	菊文形	10.3	5.7	2.3	-	肥前	IV	五瓣花文。高台内に「福」款。
1468	SK24	罐	小瓶	方形	-	7.1	-	-	肥前	IV	高台内に「富貴長命」款。
1469	SK25	土器	圓(中)	京都系	11.4	4.5	2.7	-	-	白色系。	-

第5章 残町279番地外調査(南北)の概要

測量番号	測量名	種別	鉛直	器形	法面(cm)					九脚 鉛直 牛	省号
					谷口	送端	落差	その他	牛岸度		
1477	SK25	上部路	直(中)	京都都系	11.4	4.1	2.7	-	-	白色彩。	
1478	SK25	上部路	直(中)	京都都系	11.4	4.8	2.9	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1479	SK25	上部路	直(中)	京都都系	11.0	6.0	-	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1480	SK25	上部路	直(中)	京都都系	11.4	4.6	2.6	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1481	SK25	土支脚	直(中)	京都都系	12.0	5.2	2.6	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1482	SK25	上部路	直(中)	京都都系	11.6	4.8	2.3	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1483	第2道幅面 渡場外	樹樹	中高	後九形	23.3	-	-	-	-	白色系。	
1484	第2道幅面 渡場外	樹樹	中低	透丸形	19.8	9.4	6.2	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1485	第2道幅面 渡場外	樹樹	小底	-	-	3.1	-	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1486	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	-	-	-	-	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1487	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	19.8	9.4	6.2	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1488	第2道幅面 渡場外	樹樹	小底	-	-	3.1	-	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1489	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	28.0	-	-	片岸壁 0.0	衝削	-	17世紀後半～中頃。
1490	第2道幅面 渡場外	樹樹	小底	透丸形	5.1	2.4	2.8	-	-	白色系。ツアによる西斜なし。	
1491	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	丸形	10.6	-	-	-	-	白色系。	
1492	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	丸形	11.9	4.8	5.8	-	-	白色系。	
1493	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	12.5	6.7	6.1	-	-	白色系。	
1494	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	4.7	5.4	12.8	-	-	白色系。	
1495	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	9.2	-	-	3.0 ± 5.0	切削	IV	第3、「無類」(水文)と高台に因る成化・乾。
1496	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	2.5 ± 8.5	0.8 ± 8.8	1.8	± 2.0 ± 9.0	切削	IV	外門柱。
1497	第2道幅面 渡場外	樹樹	中底	透丸形	21.1	13.2	2.7	-	-	白色系。	
1498	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	白色系	9.6	3.6	2.5	-	-	白色系。透盤は回転条より、曲面。	
1499	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	在原系	9.9	3.5	2.5	-	-	白色系。透盤は回転条より、曲面。	
1500	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	在原系	9.4	5.6	2.3	-	-	白色系。透盤は回転条より、曲面。	
1501	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	在原系	10.2	7.0	1.9	-	-	白色系。底盤は回転条より、曲面。	
1502	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	在原系	11.0	6.7	2.2	-	-	白色系。底盤は回転条より、曲面。	
1503	第2道幅面 渡場外	土支脚	直(中)	在原系	6.8	-	-	外筋 8.5	切削	IV	内門柱と底盤。
1504	第2道幅面 渡場外	瓦質	-	-	20.0	11.0	2.5	-	-	外置にスス村村。	
1505	第2道幅面 渡場外	土器	透丸	-	-	-	-	-	-	外置にスス村村。	
1524	第2道幅面 山側	閑器	小底	輪反形	9.0	3.5	5.1	-	-	在地系	高台内に反射状カント溝。口前あり。
1525	第2道幅面 山側	閑器	中底	形形	9.4	3.1	1.9	-	-	在地系	白色系。透盤は回転条より、曲面。
1526	第2道幅面 山側	閑器	中底	半輪形	8.8	3.7	5.5	-	-	在地系	白色系。透盤は回転条より、曲面。
1527	第2道幅面 山側	閑器	中底	瓦半球形	11.6	-	-	-	-	在地系	18世紀後半。
1528	第2道幅面 山側	閑器	中底	腰折形	11.8	-	-	-	-	在地系	花火。
1529	第2道幅面 山側	閑器	中底	半球形	0.6	-	-	-	-	在地系	高台内にスタンプ(○)。
1530	第2道幅面 山側	閑器	中底	形形	10.2	4.6	7.1	-	-	在地系	不明。
1531	第2道幅面 山側	閑器	中底	透彫形	12.6	5.2	8.2	-	-	在地系	外面にスタンプ(△)。
1532	第2道幅面 山側	閑器	中底	萬葉物語	2.2 ± 7.7	0.3 ± 7.7	2.6	-	-	在地系	外置にスス村村。
1533	第2道幅面 山側	閑器	中底	透彫形	2.3	0.9	1.2	-	-	在地系	外置にスス村村。
1534	第2道幅面 山側	閑器	小底	透彎形	5.2	3.6	4.9	-	-	在地系	白絵。
1535	第2道幅面 山側	閑器	小底	透彎形	6.5	7.0	4.2	-	-	在地系	白絵。雲氣(くもけい)。
1536	第2道幅面 山側	閑器	小底	透彎形	8.1	3.8	5.1	-	-	在地系	白絵。外置に透彎形なし。
1537	第2道幅面 山側	閑器	小底	透彎形	8.6	3.7	4.9	-	-	在地系	白絵。
1538	第2道幅面 山側	閑器	中底	丸形	9.9	1.9	6.5	-	-	在地系	11世紀。透彎形。
1539	第2道幅面 山側	閑器	大底	丸形	12.6	4.9	8.0	-	-	在地系	自作の陶器突起。
1540	第2道幅面 土壁	閑器	透丸	-	-	-	-	-	-	在地系	青絵。朱口に透彎形付有。新ノ目皿型突起。
1541	第2道幅面 土壁	閑器	透丸	透彎形	10.5	6.3	6.7	-	-	在地系	白絵。透彎形。
1542	第2道幅面 土壁	閑器	透丸	透彎形	8.2	3.7	2.3	-	-	在地系	白絵。透彎形。
1543	第2道幅面 土壁	閑器	透丸	透彎形	27.6	-	-	網掛形 7.2	網掛形 2.8	IV	11世紀。透彎形。
1544	第2道幅面 土壁	閑器	透丸	透彎形	8.6	8.0	15.6	-	-	在地系	網掛付有。蓋付有。
1545	第2道幅面 土壁	閑器	人形	透彎形	6.5	3.5	1.7	-	-	在地系	白絵。
1546	第2道幅面 土壁	閑器	人形	透彎形	5.5	5.9	5.9	-	-	在地系	白絵。透彎形。
1547	第2道幅面 土壁	閑器	人形	透彎形	3.9	5.2	5.2	-	-	在地系	白絵。透彎形。
1548	第2道幅面 土壁	閑器	人形	透彎形	1.8 ± 2.6	-	-	-	-	在地系	白絵。底盤をもったもの。
1549	第2道幅面 土壁	土支脚	直(中)	在京都系	11.7	5.0	2.8	-	-	在地系	白絵。ナマ上げの字状。腰邊なし。油焼済。
1550	第2道幅面 土壁	土支脚	直(中)	在京都系	8.8	4.5	2.4 ± 2.4	-	-	在地系	白絵。2枚蓋。底盤は回転条より、油焼済。
1551	第2道幅面 土壁	土支脚	直(中)	在京都系	5.0	4.1	1.8	-	-	在地系	白絵。底盤は回転条より、油焼済。
1552	第2道幅面 土壁	土支脚	直(中)	在京都系	7.3	5.3	1.7	-	-	在地系	白絵。底盤は回転条より、油焼済。
1553	第2道幅面 土壁	土支脚	直(中)	在京都系	8.5	4.8	1.7	-	-	在地系	白絵。底盤は回転条より、スス付有。
1554	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	9.0	1.5	17.1	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、別個体の粘土付有。
1555	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	9.8	4.8	2.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1556	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	9.4	5.2	1.8	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1557	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	9.3	5.4	2.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1558	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	7.8	4.4	1.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1559	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	10.2	3.6	2.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1560	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	11.0	7.4	2.2	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1561	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	10.6	7.0	2.2	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1562	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	5.1	1.0	1.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1563	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	6.3	1.7	1.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1564	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	6.5	1.9	1.0	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1565	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	6.8	2.1	0.7	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1566	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	5.4	-	-	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1567	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	5.0	-	-	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1568	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	5.8	8.7	2.2	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1569	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	5.8	-	-	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1570	第2道幅面 山側	土支脚	直(中)	在京都系	3.0	-	-	-	-	在地系	白色系。底盤は回転条より、油焼済。
1571	第2道幅面 山側	土支脚	火もしら	-	8.9	-	-	新筋壁 9.5	在地系	-	上方に長方形窓。字状。跡に外縁に無い工具で削りたる自然の穴があり、装飾か。
1599	SB03内 磯石1	中底	-	-	12.2	-	-	-	-	中国	-
1600	SK28	中底	輪齿形	10.9	4.3	7.4	-	-	IV	輪齿。連州窑。	
1601	SK29	中底	輪齿形	10.8	4.3	5.0	-	-	IV	輪齿。内面に刻離痕。	
1605	SK31	中底	萬葉物語	今さき6.5	6.5	6.5	-	-	IV	内面に刻離痕。	
1608	SK35	中底	輪齿形	7.4	2.8	5.2	-	-	IV	輪齿。透彎文。1610～30年代代。	
1609	SK37	中底	輪齿形	5.0	-	-	-	-	IV	輪齿。高台に透彎文。座礁痕。	
1610	SP02	中底	透彎形	4.7 × 4.0	-	-	-	-	-	IV	白色系。字の葉を象ったもの。

登録番号	遺物名	種別	書体	墨跡	状態(回)				生産地	内装 分析	備考
					口徑	外径	高さ	その他			
1611	SK34	口宣筒	大字面	直筆	9.6	-	無記痕15.3	-	在老系	内面にスス付着。	
1613	SK36	籠鉢	中楷	肥筆形	19.4	-	-	-	肥前	黒墨文。	
1614	SK36	籠鉢	水滴	直筆	3.7×4.4	-	-	-	肥前	-	12世紀中頃。
1615	SK36	土師鉢	豆(中)	京都系	10.6	4.0	2.1	-	-	-	(?)高さ。寺毫口露部付近彫ナシのタイプ。油絞り。
1616	SK36	土師鉢	豆(4)	京都市	12.0	8.0	3.0	-	-	-	寺毫名。寺毫口露部付近彫ナシのタイプ。油絞り。
1617	SK36	土師鉢	豆(中)	京都系	12.0	5.0	2.6	-	-	-	寺毫系。テグトボク「」字式か。上房による藝術。油絞り。
1618	SK36	土深桶	豆(小)	京都市	8.8	5.0	1.7	-	-	-	白墨名。底名は凹軸朱切り。
1619	SK38	籠鉢	中楷	肥筆形	11.0	-	-	-	肥前系	-	在老の可能性あり。17に記載済。
1620	SK38	籠鉢	中楷	肥筆形	12.0	-	-	-	中国	-	複製。清賀の流れを後むいのが。
1621	SK41	籠鉢	中楷	肥筆形	4.3	-	-	-	京畿系	IV	
1625	SK41	籠鉢	中楷	肥筆形	10.5	4.2	6.9	-	肥前	II	
1626	SK41	籠鉢	中楷	肥筆形	27.8	-	-	-	肥前	III	不明
1627	SK41	籠鉢	中楷	肥筆形	36.8	-	-	-	肥前	-	極成不良。
1628	SK41	籠鉢	中楷	肥筆形	11.4	-	-	-	肥前	-	死仏
1629	SK41	籠鉢	中楷	丸形	10.7	5.0	7.3	-	肥前	III	白墨。
1630	SK41	籠鉢	中楷	丸形	10.0	-	-	-	肥前	III	外向款。
1631	SK41	籠鉢	中楷	丸形	14.2	8.6	2.8	-	肥前	III	白墨に移行重。
1632	SK41	籠鉢	中楷	丸形	21.8	-	-	-	肥前	-	
1633	SK41	籠鉢	中楷	丸形	23.5	11.0	-	-	肥前	V	
1634	SK41	籠鉢	中楷	丸形	33.0	-	-	-	半田	-	複製。
1639	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	直筆	-	-	3.4	-	肥前	-	表台面焼。胎土自始。
1640	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	肥筆形	12.6	-	-	-	肥前	II	外向款。
1641	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	肥筆形	11.4	4.4	6.6	-	肥前	III	白墨に移行重。
1642	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	丸形	12.5	4.4	2.9	-	肥前	II	見込みに移行自始。
1643	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	13.0	3.1	3.2-3.5	-	肥前	II	見込みに胎土自始。
1644	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	33.0	-	-	-	肥前	-	
1645	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	28.8	-	-	-	肥前	-	
1646	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	30.0	16.6	17.8	-	肥前	-	スリ月皿堂12本。
1647	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	24.0	12.0	9.0	-	肥前	-	1600~20世紀。
1648	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	34.0	17.0	18.0	-	肥前	-	スリ月皿堂10本。片口5付。
1649	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	横書き	36.6	20.7	16.4	-	肥前系	-	スリ月皿堂11本。備前の頃吸込み。
1650	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	丸形	6.4	-	-	-	中国	-	複製。素描風底。
1651	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	丸形	6.8	2.4	4.1	-	半田	-	複製。支那漢風。
1652	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	丸形	6.1	-	-	-	半田	-	複製。
1653	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	丸形	2.0	-	-	-	中国	-	複製。支那漢風。
1654	第3籠鉢 通情外	籠鉢	大楷	丸形	-	-	4.4	-	中国	-	複製。
1655	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	浅平球形	10.2	-	-	-	中国	-	複製。浅平窓底。
1656	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	浅平球形	10.0	-	-	-	中国	-	複製。浅平窓底。
1657	第3籠鉢 通情外	籠鉢	大楷	浅平球形	16.5	-	-	-	中国	-	複製。浅平窓底。色々。
1658	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	圓錐形	7.5	-	-	-	龍井	II	簡文。
1659	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	圓錐形	6.5	3.2	4.6	-	肥前	II	萬合内窓底。
1660	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	圓錐形	9.4	-	-	-	肥前	-	山辺卫門(4分母)の可能性あり。
1661	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	圓錐形	9.4	-	-	-	肥前	II	II-2 黒墨。
1662	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	圓錐形	10.8	-	-	-	肥前	II	II-2 黒墨。
1663	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	-	-	5.0	-	肥前	-	なじて墨跡。
1664	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	4.0	-	-	-	肥前	-	II-2 黒墨。
1665	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	11.0	4.0	7.2	-	肥前	II	墨文。
1666	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	13.6	5.1	6.2	-	肥前	II	墨文。
1667	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	長錐形	3.9-6.2	2.6	-	-	肥前	-	口一狀。中央に約1.0cmの凹口。
1668	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	丸形	3.6	-	-	-	肥前	-	
1669	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	小楷	-	-	-	-	肥前	-	
1670	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.1	4.1	2.6	-	-	-	赤色墨。ナデ上げややくすく手状。困難なし。
1671	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.8	4.7	2.5-2.7	-	-	-	赤色墨。ナデ上げによる凹縁底。
1672	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	12.1	4.9	2.8-3.0	-	-	-	「色墨。ナデ上げやくすく手状。ナデによる凹縁底。重複焼。
1673	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	9.2	1.3	2.1	-	-	-	赤色墨。ナデ上げやくすく手状。困難なし。
1674	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	12.4	6.9	2.4-2.6	-	-	-	白色系。外側に鉛削り少しある側面。内壁に一部スス付着。
1675	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.8	4.6	2.7	-	-	-	白色系。外側に鉛削り少しありタイプ。油絞り。
1676	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.6	5.2	2.4-2.6	-	-	-	白色系。外側に鉛削り少しありタイプ。油絞り。
1677	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	10.7	7.0	1.8-2.2	-	在塙系	-	白色系。底部は厚らぬ新切。
1678	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	5.8	-	-	-	在塙系	-	白色系。底部は厚らぬ新切。
1679	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	31.0	-	-	-	在塙系	-	外側にスス付着。
1702	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	無足・丸形	9.3	-	-	-	肥前	-	
1703	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	浅平球形	10.1	3.0	4.9	-	肥前	IV	「色墨。ナデ上げやくすく手状。ナデによる凹縁底。重複焼。
1704	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	無足・丸形	4.7	-	-	-	肥前	-	「色墨。ナデ上げやくすく手状。困難なし。
1705	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	大楷形	10.6	5.0	8.3	-	肥前	II	白色系。外壁に鉛削り少しある側面。内壁に一部スス付着。
1706	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	-	-	-	-	肥前	-	板凳形輪底。
1707	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	5.0-5.4	5.1-5.4-5.6	-	-	-	肥前系	-	灰施。底部は豆型新切。江戸初期。
1709	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	12.4	-	-	-	肥前	-	足立式スリズ。
1710	第3籠鉢 通情外	籠鉢	大字	-	32.5	-	-	-	在塙系	-	内面に厚らぬ新切。
1711	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	肥筆形	6.6	2.5	4.1	-	中国	-	複製。白墨底。底墨色。
1712	第3籠鉢 通情外	籠鉢	小楷	平形	7.0	2.2	4.0	-	中国	-	複製。白墨底。底墨色。
1713	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	無足	5.3	-	-	-	肥前	IV	複製。白墨底。底墨色。
1714	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	浅平球形	4.4	-	-	-	在塙系	-	複製。白墨底。見込みに有り。高台内に大型化。
1715	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	无足	4.7	-	-	-	中国	-	
1716	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.6	4.5	7.2	-	肥前	II-2	複合台面。
1717	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	10.0	4.8	6.4	-	肥前	II-2	複合台面。
1718	第3籠鉢 通情外	籠鉢	中楷	直筆	11.0	4.4	6.2	-	肥前	II-2	複合台面。

第5章 殿町 279 番地外調査（南屋敷）の概要

調査番号	遺跡名	種類	跡形	面積(㎡)				生産地	瓦陶 織年	備考
				4段	3段	2段	その他			
1719	第3層西面廻廊上	瓦器	中窓	浅平腹形	9.9			肥前	IV	シノニマヤク件。焼造ぎ組。
1720	第3層東面廻廊上	瓦器	中窓	浅平形	11.0			肥前	IV	
1721	第3層東面廻廊下	瓦器	中窓	平筋形	8.3	5.2	1.3	肥前	III	高台に焼付付。
1722	第3層東面廻廊下	瓦器	小窓	腰鼓形	12.4	4.8	5.2	肥前	III	高台内「19號」。
1723	第3層東面廻廊下	瓦器	小窓	腰鼓形	7.6	4.8	—	肥前	III	青磁灰釉。素面灰。
1724	第3層東面廻廊下	瓦器	多孔	—	14.2	6.4	8.3	肥前	—	素面。
1725	第3層東面廻廊上	瓦器	中窓	浅平腹形	11.1	4.6	5.5	肥前	IV	瓦件如新輪瓦付。
1726	第3層東面廻廊上	瓦器	中窓	浅平腹形	11.1	4.6	5.5	肥前	IV	高台内「太白成化牛乳器」。
1727	第3層東面廻廊下	瓦器	小窓	九角筒足	12.4	7.2	2.9	肥前	IV	焼物。青州高麗。束口付に蓋有。
1728	第3層東面廻廊下	瓦器	小窓	腰鼓形	9.6	5.0	2.3	肥前	V	手面に施氏文。
1729	第3層東面廻廊下	瓦器	五寸貫	腰鼓形	14.6	5.5	3.6	肥前	II-2	愛花文。
1730	第3層東面廻廊下	瓦器	大窓	大形	—	12.4		肥前	—	青磁。底に直線状窓。
1731	第3層東面廻廊上	瓦器	大窓	腰鼓形	26.6			肥前	IV	白磁。笠打窓。底座丸。
1732	第3層東面廻廊下	瓦器	中窓	浅平腹形	11.0	8.2	2.3	台地系	—	瓦器内にスヌ付。
1733	第3層東面廻廊下	瓦器	中窓	腰鼓形	6.0	—	2.0	各段7.5	生産地	—
1734	第3層東面廻廊上	瓦器	中窓	腰鼓形	5.6	—	5.7	各段6.3	肥前系	—
1756	SD07	瓦器	小窓	腰鼓形	6.7	2.0	7.0	肥前	IV	青磁。
1759	SD07	瓦器	中窓	—	10.0			肥前	—	青磁。
1763	SK43	瓦器	小窓	腰鼓形	5.2	2.5	3.6	肥前	—	燒付。墨書き法。
1764	SK42	瓦器	斜口	腰鼓形	7.1	3.4	4.6	肥前	II-2	高台黑漆。印字。
1765	SK42	瓦器	上沿	腰鼓形	—	—		肥前	—	高台に墨書き。
1766	SK42	瓦器	斜口	人形	—	7.4		肥前	—	色絵。調子。辺部に墨書き。
1769	SK43	瓦器	中窓	丸形	—	4.3		肥前	IV	高台に墨書き。
1770	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	4.8		肥前	—	—
1771	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	11.1	4.8	7.2	肥前	IV	青磁手造り。
1772	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	9.2	4.5	6.9	肥前	IV	青磁手造り。
1773	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	13.7	4.0	3.6	肥前	IV	青磁手造り。
1774	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	8.7		肥前	—	え込みに焼付。
1775	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	30.0			肥前	—	ズリ単面10枚。
1776	SK43	瓦器	小窓	丸形	8.5	3.2	4.6	肥前	IV	高台に「太白成化」款。
1777	SK43	瓦器	小窓	腰鼓形	8.8	3.2	6.1	肥前	IV	色絵。
1778	SK43	瓦器	中窓	丸形	11.0	4.5	6.0	肥前	IV	青磁手造り。
1779	SK43	瓦器	大窓	腰鼓形	12.1	4.4	5.7	肥前	IV	青磁手造り。
1780	SK43	瓦器	小窓	丸形腰鼓	9.2	4.0	5.1	肥前	IV	青磁手造り。
1781	SK43	瓦器	小窓	丸形腰鼓	7.5	—		肥前	IV	菊文。本墨書き。
1782	SK43	瓦器	小窓	腰鼓形	10.0			肥前	IV	—
1783	SK43	瓦器	小窓	腰鼓形	10.7	6.7	7.0	肥前	IV	青磁。底ノ目録高台。
1784	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	7.4		肥前系	IV	青磁。底ノ目録高台。
1785	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	6.0	7.1	21.0	肥前	IV	青磁。底ノ目録高台。
1786	SK43	瓦器	五寸貫	九角束口	13.1	5.4	3.1	肥前	II-2	初野原刀生。愛花文。必合に各付。
1787	SK43	瓦器	大窓	腰鼓形	36.0	9.5	10.0	肥前	II-2	初野原刀生。愛花文。高台に各付。
1788	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	10.9	5.8	2.6	肥前	IV	青磁。底ノ目録高台。
1789	SK43	瓦器	中窓	丸形腰鼓	—	3.1		肥前	IV	白磁。底ノ目録高台。
1790	SK43	瓦器	中窓	丸形腰鼓	7.5	—		肥前	IV	—
1791	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.4		肥前	IV	青磁手造り。
1792	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1793	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1794	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1795	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1796	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1797	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1798	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1799	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1800	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1801	SK43	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1802	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1803	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1804	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1805	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1806	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1807	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1808	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1809	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1810	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1811	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1812	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1813	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1814	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1815	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1816	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1817	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1818	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1819	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1820	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1821	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1822	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1823	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1824	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1825	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1826	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1827	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1828	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1829	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1830	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	—	3.7		肥前	IV	青磁手造り。
1831	SK44	瓦器	中窓	丸形	8.0			肥前	IV	青磁手造り。
1832	SK44	瓦器	中窓	丸形	—	4.7		肥前	IV	青磁手造り。
1833	SK44	瓦器	中窓	丸形	—	7.0		肥前	IV	青磁手造り。
1834	SK44	瓦器	中窓	丸形	—	10.0		肥前	IV	青磁手造り。
1835	SK44	瓦器	小窓	丸形	9.5			肥前	IV	青磁手造り。
1836	SK44	瓦器	小窓	腰鼓形	12.0	4.6	6.5	肥前	IV	青磁手造り。
1837	SK44	瓦器	小窓	腰鼓形	11.2	7.6	9.3	肥前	IV	青磁手造り。
1838	SK44	瓦器	小窓	丸形	14.2	6.8	7.8	肥前	IV	青磁手造り。
1839	SK44	瓦器	小窓	丸形	—	—		肥前	IV	青磁手造り。
1840	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	10.3	6.1	—2.5	肥前	IV	青磁手造り。
1841	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	10.9	5.8	2.4	肥前	IV	青磁手造り。
1842	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	12.0	6.0	—2.0	肥前	IV	青磁手造り。
1843	SK44	瓦器	中窓	腰鼓形	10.8	6.0	—2.1	肥前	IV	青磁手造り。
1844	SK45	瓦器	中窓	腰鼓形	11.8			肥前	IV	青磁手造り。
1859	SK45	瓦器	中窓	腰鼓形	11.2	4.5	5.9	肥前	IV	青磁手造り。
1860	SK45	瓦器	中窓	腰鼓形	11.2	4.5	5.9	肥前	IV	青磁手造り。
1861	SK45	瓦器	中窓	腰鼓形	—	5.4	4.1	肥前	IV	青磁手造り。
1862	SK45	瓦器	中窓	丸形	13.9	6.4	3.5	肥前	IV	青磁手造り。
1863	SK45	瓦器	小窓	人形	9.7	5.5		肥前	IV	青磁手造り。
1865	SK45	瓦器	中窓	腰鼓形	10.4	6.0	2.2	肥前	IV	青磁手造り。
1871	SK46	瓦器	中窓	腰鼓形	—	5.6		肥前	IV	青磁手造り。
1875	SK46	瓦器	小窓	丸形	11.0			肥前	IV	青磁手造り。
1876	SK46	瓦器	小窓	丸形	—	2.4		肥前	IV	青磁手造り。
1877	SK46	瓦器	中窓	半斗形	10.0	4.8	6.3	肥前	IV	青磁手造り。
1878	SK46	瓦器	中窓	腰鼓形	10.3	5.6	2.4	肥前	IV	青磁手造り。
1879	SK46	瓦器	中窓	腰鼓形	11.1	5.1	3.6	肥前	IV	青磁手造り。
1884	SK46	瓦器	中窓	腰鼓形	18.5	7.0	1.6	肥前	IV	青磁手造り。

内山番号	遺構名	種別	器種	断形	古墳(㎝)	その他の	生産地	九輪 鉢型	備考
1885	SK47	罐詰	小口	深腹形	6.4	3.0	4.3	肥前	IV
1896	SK47	土器詰	圓(中)	京懸系	11.5	4.2	2.3	-	白色系、ナガ上げ丸く字状。工具による擦痕後ナメトフ化。曲邊底。
1887	SK47	土器詰	直(中)	佐世系	11.1	6.9	2.3	-	白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1894	SK48	陶器	中柄	束腰形	10.9	4.2	7.2	肥前	III
1895	SK48	陶器	中柄	束腰形	11.4	4.6	7.6	肥前	III
1896	SK48	陶器	中柄	束腰形	9.8	-	-	肥前	III
1897	SK48	陶器	中柄	丸形	21.3	-	-	肥前	III
1898	SK48	陶器	大口	扩張形	28.4	-	-	肥前	III
1899	SK48	陶器	小口	丸形	6.2	3.0	4.1	肥前	III
1900	SK48	陶器	小口	丸形	6.8	3.6	4.7	肥前	III
1901	SK48	陶器	小口	端底形	9.0	-	-	肥前	III
1902	SK48	陶器	中柄	丸形	12.0	4.9	7.0	肥前	III
1903	SK48	陶器	大口	浅平腹形	13.4	4.7	6.9	肥前	III
1904	SK48	陶器	小口	束腰形	11.3	-	-	肥前	II 2
1905	SK48	土器詰	工(小)	京都系	7.2	3.1	1.7	-	白色系、ナガ上げ丸。
1906	SK48	土器詰	工(中)	佐世系	10.0	5.9	3.2	-	白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1907	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	10.6	5.7	3.2	-	(白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1908	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	10.6	7.0	2.3	-	(白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1909	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	10.9	5.4	2.9	-	白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1910	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	11.4	6.5	3.0	-	白色系、内部は凹も多見り。外面部にはスリット有。底部は回転丸切り。曲邊底。
1911	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	11.3	6.1	2.5	-	白色系、底部は回転丸切り。曲邊底。
1912	SK48	土器詰	直(中)	佐世系	10.6	6.2	3.2	-	白色系、底部は回転丸切り。直邊中央に指捺干乳。曲邊底。
1913	SK48	土器詰	圓(中)	圓形	5.6	3.8	3.8	在地系	-
1922	SK50	罐詰	中柄	圓形	6.8	-	-	肥前	III
1933	SK50	罐詰	小口	腰鼓形	6.4	2.3	3.6	中柄	III
1934	SK50	罐詰	中柄	丸形	11.3	4.4	7.0	肥前	II 2
1935	SK50	罐詰	直(中)	丸形	25.2	-	-	肥前	III
1936	SK50	罐詰	直(中)	丸形	-	54.2径10.4	肥前	IV	肥前
1937	SK50	罐詰	直(中)	丸形	-	54.2径10.4	肥前	IV	肥前
1938	SK50	罐詰	直(中)	丸形	6.8	-	-	-	白色系。
1939	SK50	罐詰	直(小)	往來系	9.0	6.2	1.2	-	白色系、底部は試掘痕切り。
1940	SK50	罐詰	直(中)	往來系	12.4	7.8	2.3	-	白色系、底部は試掘痕切り。曲邊底。
1941	SK50	罐詰	直(中)	往來系	11.0	6.4	2.0	-	白色系、底部は試掘痕切り。曲邊底。
1992	SK53	陶器	直(中)	丸形	9.3	-	-	上野・金原系の可能性あり。	-
1993	SK53	陶器	直(中)	丸形	6.8	-	-	白色系。	-
1994	SN53	陶器	中柄	丸形	10.4	-	-	肥前	II 2
1995	SN53	陶器	中柄	半平形	-	-	-	肥前	-
1996	SK54	陶器	直(中)	丸形	-	-	-	肥前	-
1998	SK54	陶器	大口	丸形	6.2	-	-	肥前	-
2003	SK58	陶器	小口	茶入れか	4.2	6.0	7.8	不列	-
2004	SK58	陶器	小口	蝶文か	5.8	2.6	3.9	不列	-
2012	SK59	陶器	直(中)	蝶文か	7.3	3.6	6.1	肥前	-
2014	SK60	陶器	直(中)	腰鼓形	10.4	4.3	6.7	肥前	-
2015	SK60	陶器	直(中)	腰鼓形	10.0	4.1	5.2	肥前	-
2016	SK60	陶器	直(中)	腰鼓形	7.0	8.2	1.9	在地系	-
2017	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	腰鼓形か	4.7	-	-	肥前	II
2018	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	腰鼓形	5.6	-	-	肥前	IV
2019	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	腰鼓形	12.0	-	-	肥前	IV
2020	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	腰鼓形	2.0×5.0	-	-	京阪系	-
2021	第3-1 連横向 連縫外	陶器	大口	腰鼓形	11.4	-	-	肥前	II
2022	第3-1 連横向 連縫外	陶器	大口	腰鼓形	-	96.0径34.3	肥前	-	外側に鈎状突起2条。外側に横一筋即ち印鉢。17世紀西下。
2023	第3-1 連横向 連縫外	陶器	小口	腰鼓形	7.3	2.9	3.0	肥前	II
2024	第3-1 連横向 連縫外	陶器	小口	腰鼓形	6.7	2.7	5.0	肥前	IV
2025	第3-1 連横向 連縫外	陶器	小口	腰鼓形	-	3.0	-	肥前	IV
2026	第3-1 連横向 連縫外	陶器	小口	丸形	9.0	-	-	肥前	-
2027	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	丸形	7.5	-	-	肥前	IV
2028	第3-1 連横向 連縫外	陶器	大口	腰鼓形か	13.0	-	-	肥前	IV
2029	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	丸形	9.4	4.4	5.6	肥前	IV
2030	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	丸形	10.2	4.6	7.2	肥前	II - 2
2031	第3-1 連横向 連縫外	陶器	中柄	丸形	11.2	4.5	7.5	肥前	IV
2032	第3-1 連横向 連縫外	陶器	小口	丸形	3.1×2.5	-	源0.3	中国	横縫、累縫状況。
2033	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	9.0×8.5	9.0×8.5	肥前	IV	-
2034	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	2.0×15.0	15.0×15.0	肥前	IV	-
2035	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	-	厚削0.6×11.6	肥前	II - 2	-
2036	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	20.5	7.4	3.4	肥前	II - 2
2037	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	20.1	13.2	2.9	肥前	IV
2038	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	10.0	5.4	2.4	肥前	IV
2039	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	13.6	6.2	2.7	-	白色系、ナガによる前斜面壓縮。
2040	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	9.1	6.6	1.4	-	白色系、底部は試掘痕切り。
2041	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	10.0	5.4	2.6	-	白色系、底部は試掘痕切り。
2042	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	11.2	7.8	2.3	在地系	-
2043	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	30.2	-	-	在地系	-
2044	第3-1 連横向 連縫外	陶器	上口	焰形	34.2	-	-	在地系	-
2045	第3-1 連横向 連縫外	陶器	直(中)	丸形	-	-	-	在地系	-
2046	第3-1 連横向 連縫外	陶器	上口	五瓣	7.2×2.8	-	-	在地系	-
2047	SD01前側貫入	陶器	大口	丸形	9.7	-	-	中国	-
2048	SD01前側貫入	陶器	小口	丸形	10.4	-	-	中国	-
2051	SD01前側貫入	陶器	小口	丸形	9.6	-	-	中国	-
2052	SD01前側貫入	陶器	人頭	丸形	32.4	-	-	中国	-
2053	SD01前側貫入	陶器	人頭	丸形	32.4	-	-	中国	-
2055	SL03	土器詰	人頭	丸(小)	10.6	-	-	白色系	-

第5章 緑町 279番地外調査(南北)の概要

登録番号	植物名	種別	器形	尺度(cm)				生産地	九月 年	参考
				自径	式径	高さ	その他			
2056	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.2	—	—	—	—	—	—
2057	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.4	4.2	2.3	—	—	—	ナメトニア山脈。
2058	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.0	4.2	2.6	—	—	—	無縫口。
2059	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.8	—	—	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2060	SU03	土師器 直(中)	京都系	12.0	—	—	—	—	—	—
2061	SU03	土師器 直(中)	京都系	12.0	—	—	—	—	—	白色系、棒状のもので表面に平行な溝。
2062	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.8	5.2	2.6	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2063	SU03	土師器 直(中)	京都系	12.6	—	—	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2064	SU03	土師器 直(中)	京都系	12.2	—	—	—	—	—	—
2065	SU03	土師器 直(中)	京都系	13.0	—	—	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2066	SU03	土師器 直(中)	京都系	11.0	4.0	2.5	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2067	SU09	陶器 陶瓶	直筒	—	—	4.9	—	肥前	肥前	高台内に土塁・変化輪・輪。
2068	SU09	陶器 陶瓶	直筒	—	—	24.0	—	肥前	肥前	片口がくび。
2069	SU09	陶器 陶瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	肥前	白色系、ナメトニア山脈。
2071	SH-S2	磁器 一輪	瓦子焼	—	—	12.2	—	肥前	肥前	—
2072	SH-S3	土師器 直(小)	素焼き	6.4	1.9	4.0	—	肥前	肥前	白色系、ナメトニア山脈。
2073	SH-S4	陶器 陶瓶	直筒	21.9	9.0	10.4	—	肥前	肥前	瓦子焼、17世紀後半。
2087	SK65	陶器 陶瓶	直筒	9.5	6.0	9.5	—	肥前	肥前	瓦子焼。
2094	SK66	陶器 中瓶	直筒	—	—	4.0	—	肥前	肥前	—
2098	SD10	陶器 小瓶	直筒	7.0	3.1	2.7~4.0	—	肥前	I~2	瓦子焼、17世紀後半。
2099	SD10	陶器 中瓶	直筒	—	—	5.1	—	肥前	III	瓦子焼、17世紀後半。
2100	SD10	陶器 中瓶	直筒	—	—	5.5	—	肥前	IV	瓦子焼、京焼。
2101	SD10	陶器 小瓶	丸形容	—	—	3.6	—	肥前	II~2	朝朝貢使貢品。
2102	SD10	陶器	直筒	—	—	—	—	肥前	肥前	内面に開口凹凸。
2103	SD10	陶器	水差型	—	—	30.0	5.5	肥前	肥前	内長の蓋を複数つかう。
2104	SD10	陶器	中瓶	—	—	17.0	—	中国	中国	—
2105	SD10	陶器 中国	中瓶	11.1	—	—	—	肥前	肥前	—
2106	SD10	陶器 中国	球形	14.0	—	—	—	肥前	肥前	—
2107	SD10	土師器 直(中)	京都系	13.0	3.1	2.8	—	—	—	白色系、外腹に線状付近に模様を施す。ナメによらず底下らん。
2108	SD10	土師器 直(中)	京都系	7.7	5.6	1.8	—	—	—	白色系、底付に模様。
2109	SD10	土師器 直(中)	京都系	11.0	7.0	1.8	—	—	—	白色系、底付に山形系。
2110	SD10	土師器 直(大)	京都系	18.2	—	—	—	—	—	白色系、瓦子焼成形後、底辺にナメで塗づくね裏に見えている。ナメによる剥離若干。
2111	SD10	土師器 直(大)	京都系	18.0	13.0	3.1	—	—	—	白色系、外腹に線状付近に模様を施す。ナメによらず底下らん。
2112	SD10	土師器 直(大)	京都系	18.0	14.0	2.4	—	—	—	白色系、底付に模様。
2113	SD10	土師器 七筋 透	直筒	7.0	6.0	2.3	—	—	—	白色系、ナメトニア山脈。
2121	SK67	陶器 小豆か	—	—	—	—	—	—	—	—
2125	SK68	陶器 捕鉢	—	—	23.2	11.0	11.4	偏前	偏前	片口がくび、日本御陶所より。2006年第4度収集(SD01)と組合せ。
2128	SH114 茶碗(中)	陶器 茶碗	直筒	10.5	6.6	3.2	—	肥前	II~3	内折れ。
2129	SH114 茶碗(中)	陶器 茶碗	折線形	15.1	—	—	—	肥前	II~3	瓦壺。
2130	SH114 茶碗(中)	陶器 茶碗	横線形	13.3	4.2	4.1	—	肥前	II~3	瓦壺。
2131	SH114 茶碗(中)	陶器 大碗	直筒	—	—	9.2	—	肥前	II~3	内面に心円窓。
2132	SH114 茶碗(中)	陶器 大碗	直筒	13.0	—	—	—	肥前	II~3	内面に心円窓。
2134	SN07	陶器 中瓶	折線形	—	—	4.2	—	肥前	II~3	瓦壺。
2135	SN02	陶器 中瓶	直筒	—	—	4.2	—	肥前	II~3	瓦壺。
2136	SN02	陶器 中瓶	直筒	—	—	4.2	—	肥前	II~3	瓦壺。
2138	SN08	陶器 观音	直筒	12.0	6.0	21.2~4	—	肥前	II~3	瓦壺。
2139	SN08	陶器 大鉢	折線形	32.4	—	—	—	肥前	II~3	瓦壺。
2140	SK71	陶器 小瓶	直筒	8.0	—	3.1	—	肥前	II~3	片口がくび。
2141	SK71	陶器 小瓶	直筒	—	—	2.1	—	肥前	II~3	片口がくび。
2142	SK71	陶器 小瓶	直筒	—	—	34.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2143	SK71	陶器 小瓶	直筒	—	—	31.0	13.3	肥前	II~3	片口がくび。
2144	SK72	陶器 大鉢	直筒	—	—	16.7	—	肥前	II~3	片口がくび。
2145	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2146	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2147	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2148	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2149	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2150	SK72	陶器 一輪	直筒	—	—	11.0	—	肥前	II~3	片口がくび。
2153	SK73	陶器 小瓶	直筒	—	—	2.8	—	肥前	II~3	片口がくび。
2164	SK73	陶器 中瓶	直筒	10.6	5.0	5.9	—	肥前	II~3	片口がくび。
2167	SK73	陶器 中瓶	直筒	11.7	4.6	5.3	—	肥前	II~3	片口がくび。
2168	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2169	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2170	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2171	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2172	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2173	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2174	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2175	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2176	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2177	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2178	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2179	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2180	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2181	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2182	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2183	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2184	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2185	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2186	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2187	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2188	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2189	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2190	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2191	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2192	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2193	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2194	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2195	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2196	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2197	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2198	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2199	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2200	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2201	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2202	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2203	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2204	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2205	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2206	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2207	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2208	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2209	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2210	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2211	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2212	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2213	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2214	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2215	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2216	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2217	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2218	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2219	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2220	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2221	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2222	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2223	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2224	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2225	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2226	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2227	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2228	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2229	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2230	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2231	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2232	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2233	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2234	SH-2 食器	陶器 中瓶	直筒	—	—	—	—	肥前	II~3	片口がくび。
2235										

表 15 殿町 279 番地外(南屋敷) 金属製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	古董		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
1256	SK801	切妻頭(口)	真鍮	長6.8/小1.0/厚0.1付口0.5	8.15	口付部分を六角形に加工。
1261	SK801	板金	鉄	6.6×25×6.35	398.00	
1262	SK801	大穴板	鉄	長11.6/幅8.0/推定厚13.0/付0.25	4.66	
1282	SK808	鉛*	鉛	φ0.2	385.00	下部に横溝が掘り込まれたものが付属。
1310	元1番構造部構外	火被(火吹)	真鍮	長10.4/幅5.4/厚0.4	11.37	
1311	第1番構造部構外	柄杓	銅	10.0×0.9/厚0.07/身幅8.0/厚0.05	32.94	
1312	第1番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.2mm	2.98	寛永通宝(1年=古銭(1636~59))
1313	第1番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.5mm	4.49	寛永通宝(2年=文鏡)(1638~63)
1314	第1番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.4mm	3.67	寛永通宝(2年=文鏡)(1638~63)
1315	第1番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.5mm	2.61	寛永通宝(3年)
1323	SH606 内 廉石	火被(火吹)	真鍮	長12.0/幅8.0/推定厚16.0/付0.2	2.83	
1324	SD606 内 構石	真鍮	真鍮	長7.5/幅0.7/厚0.05	7.99	
1356	SK808	工具刀	銅	身16.3/刃7.0/厚0.7	29.27	
1475	SK74	鉛*	鉛	厚1.0mm	1.93	寛永通宝(2年=文鏡)
1494	SK77	鉛*	鉛	長5.5/幅0.5/厚0.25	0.42	
1511	第2番構造部構外	火被(火吹)	真鍮	長4.7/火吹0.1/厚0.4	4.33	
1512	第2番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.1mm	2.77	寛永通宝(1年=古銭(1636~59))
1513	第2番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.3mm	3.65	寛永通宝(2年=文鏡)(1638~63)
1514	第2番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.0mm	2.06	寛永通宝(3年=古銭(1697~1747, 1767~81))
1574	御腰袋(腰帶上)	十手か	銅鏡	長1.5/幅0.9/厚0.2	21.81	
1575	御腰袋(腰帶上)	腰袋(腰口)	銅鏡	長4.0/幅0.9/厚0.1	5.26	
1576	御腰袋(腰帶上)	腰袋(腰口)	銅鏡	長3.1/幅0.9/口付0.45	5.48	
1577	御腰袋(腰帶上)	腰袋(腰口)	銅鏡	長6.0/火吹0.7/幅0.1		
1577	第2番構造部構外	*切妻頭(腰子)	真鍮	長1.1/腰子7.4/底座0.7 φ0.8	8.18	腰子付。
1578	第2番構造部構外	火吹	銅	長25.0/幅1.1付0.26/0.0 付0.05	34.54	
1579	第2番構造部構外	火吹	銅鏡	長1.0/幅0.2付0.05/0.05	39.32	
1580	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.5mm	4.76	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1581	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.3mm	2.93	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1582	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.2mm	2.50	寛永通宝(1期=文鏡)(1668~83)
1583	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.3mm	3.16	寛永通宝(3期=古銭(1697~1747, 1767~81))
1584	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚0.9/幅0.9/厚0.2	2.27	寛永通宝(3期=古銭(1697~1747, 1767~81))
1585	第2番構造部構外	古鏡	銅鏡	厚1.3mm	4.32	寛永通宝(4文鏡(1768~))(財布無, 1186)
1586	SH608 内 育毛	火吹(腰口)	銅	長6.7/幅1.1付0.1付0.3	7.41	
1600	SK29	鉛*	鉛	長1.1/幅0.7/厚0.3	1.37	
1601	SK30	火吹	銅	身1.2mm	2.68	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1621	SK40	火吹	銅	身0.9/幅0.6/厚0.1/幅0.6/厚0.5	7.87	
1689	第3番構造部構外	腰袋(腰口)	銅	長6.7/幅0.5/厚0.1付0.35	3.64	
1684	第3番構造部構外	腰袋(腰口)	銅	長6.8/幅0.5/厚0.1付0.4	5.73	
1682	第3番構造部構外	鉛*	鉛	身0.1/幅0.6/厚0.5	31.29	
1736	第3番構造部構外	火吹	銅	長1.2/幅0.9/厚0.2	111.33	表面に網メットを施している。
1737	第3番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.3mm	2.39	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1738	第3番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.3mm	2.11	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1739	第3番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.0mm	2.19	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1740	第3番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.2mm	1.72	寛永通宝(1期=古銭(1636~59))
1741	第3番構造部構外	火吹	銅鏡	厚1.3mm	2.95	供武道場(明1368~)(中型)
1769	SD07 遺資(腰口)	火吹	銅	長6.5/幅1.6	3.75	
1791	SK43	腰袋(腰口)	銅	長5.9/幅0.2	6.69	
1844	SK44	鉛*	鉛	身0.5/幅0.6/厚0.05	31.09	
1845	SK44	不<口>	鉛	身0.5/幅0.7/厚0.06	4.20	
1846	SK44	腰袋(腰口)	鉛	身0.6	5.47	
1888		火被(火吹)	火被	身16.5/幅0.4	10.95	
1914	SK45	鉛*	鉛	身0.3/幅0.7/厚0.2	5.58	
1942	SK50	鉛*	鉛	身0.4/幅0.9/厚0.45	2.30	
2013	SK59	火被(火吹)	火被	身0.6/幅0.7	2.76	
2014	第1番構造部構外	腰袋(腰口)	銅	身0.6/厚1.0	11.02	
2133	SK11# 廉石	腰袋(腰口)	銅	長5.5/幅0.1付0.4	6.13	
2166	SK75	腰袋(腰口)	銅	身9.6/火丸0.5	8.40	

表 16 殿町 279 番地外(南屋敷) 石製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	古董		備考
				大きさ(cm)	重量(g)	
1553	SD01内 廉石	舟掛の帆形	鐵	幅2.75/厚0.1付0.5	2.98	「舟掛」の帆形部分に縫い入る。
1588	第1番構造部構外	蓋	銅	直径0.7/厚0.1	2.82	
1589	第1番構造部構外	船形	銅	長1.0/幅0.5	0.82	「舟掛」の蓋の蓋。
1590	第1番構造部構外	船形	銅	長1.0/幅0.5	0.82	「舟掛」の蓋の蓋。
1483	SK26	火吹	銅	13.3×54.1/厚0.8	62.31	火吹、中央部分の背印の跡。
1596	第1番構造部構外	火吹	銅	幅12.0/厚0.7/長1.1	79.07	火吹部分、二重部分の縫い目が複数。
1597	第1番構造部構外	火吹	銅	長8.5/幅6.2/厚3.0	761.24	
1598	第1番構造部構外	蓋	銅	身0.5/口0.45	3.19	黑色。
1599	第1番構造部構外	蓋	銅	身0.5/口0.5	3.42	黑色。
1610	第1番構造部構外	火吹	銅	身0.4/口0.8	6.70	白色。
1572	第2番構造部構外	透	銅	幅13.4/高さ1.4/厚2.3	355.50	
1735	第3番構造部構外	火吹石	火吹石	長5.3/幅5.3/厚2.2	72.26	
1767	SK42	火吹石	火吹石	身0.2/厚0.6		
1792	SK43	火吹石	火吹石	身0.7/幅2.5/厚1.2	20.39	
1793	SK43	透	透	身0.9/標高1.4/厚1.1	55.45	「一葉八片」の透。
1647	SK44	透	透	身0.4/幅3.5/厚0.45	10.06	「透」用か、透用底盤。
2047	第1番構造部構外	火吹石	火吹石	身0.3/厚3.7/幅3.5	64.31	

第5章 殿町 279 番地外調査(南屋敷)の概要

表 17 殿町 279 番地外(南屋敷)木簡遺物観察表

形態(?)・判別不能者を記述。○は解説不明の文字、△は改行を記す。

遺物番号	遺物名	焼み	法長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	備考
1688	第3遺物 受櫛外	・	25.6	1.5	0.3	板目	
1745	第3遺物 受櫛外	・上田四平入 △(元)三二七	14.0	1.0	0.4	板目	
1797	SK43	・二十(月)(日)め四〇 ・上田(△)一	17.7	3.1	0.3	板目	
1798	SK43	・△(旗立)丸一筋と御門	13.3	4.7	0.4	板目	
1799	SK43	・金〇	24.6	2.8	0.5	板目	
1850	SK44	・○○○○ 有紋被物	31.9	2.5	0.6	板目	
1916	SK46	・	16.7	3.0	0.4	板目	
1944	SK50	・鉢ノ口の付社	20.6	1.6	0.3	板目	
1975	SK51	・	22.0	4.9	0.4	板目	
1991	SK52	・△(ひり)七	11.8	2.5	0.3	板目	
2081	SK64	・阿之助	32.4	3.4	0.5	板目	
2082	SK64	・のりつに	33.4	3.6	0.6	板目	
2083	SK64	・辰水 宅本	16.6	3.8	0.6	板目	
2084	SK64	・越部保	11.1	3.0	0.6	板目	
2085	SK64	・軽〇〇	8.7	1.5	0.7	板目	
2086	SK65	・	12.7	3.2	0.3	板目	

表 18 殿町 279 番地外(南屋敷)木製品遺物観察表

遺物番号	遺物名	種類	部位	法長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	備考
1286	SK02	蓋	内蓋	21.0	—	0.5	白木	
1287	SK02	蓋	外蓋	29.6	—	0.6	白木	
1278	SK06	沂海貝	外蓋	21.0	43.5	3.0	厚2.0	かんし(弦長20.6/幅1.3/厚0.8cm)かんしは藤などの接着 糊で結合、裏面に墨書き「上(上)」
1279	SK06	沂海貝	外箱	22.8	44.0	23.0	厚1.6	かんし(弦長16.2/幅2.0/厚0.8cm)かんしは藤で接着 糊で固定。表面に墨書き、「貯(貯)金(金)」
1289	SK06	沂海貝	内蓋	21.0	37.1	3.2	厚2.4	かんし(弦長20.6/幅1.3/厚0.8cm)かんしは藤などの接着 糊で結合、裏面に墨書き「上(上)」
1281	SK06	沂海貝	内箱	20.2	37.2	14.4	厚2.2	表面に墨書き、「貯(貯)金(金)」
1283	SK06	管	管	31.5	6.8	厚0.5	—	表面に墨書き、「上(上)」
1284	SK06	竹	管	31.8	7.2	厚0.5	—	沂海貝内容器。底ホコリが吹き飛んでいた部分に墨書き 織りと書く上に印あり。
1285	SK07	八角形漆扁舟	蓋	15.5	15.5	1.0	厚0.5	沂海貝内容器。底ホコリが吹き飛んでいた部分に墨書き 織りと書く上に印あり。
1286	SK07	八角形漆扁舟	舟	15.8	15.8	6.9	底厚0.5 側厚0.4	かんし(底径9.0/幅0.1/厚0.5cm)かんしは藤で接着 糊で固定。表面に墨書き、「貯(貯)金(金)」
1357	SK08	蓋	内蓋	19.4	—	0.5	白木	底厚0.5
1358	SK08	蓋	外蓋	21.0	—	0.5	白木	底厚0.5
1425	SK13	漆刷	漆刷	10.4	—	—	—	内:赤・外:黒。外側に赤絵。柄内に赤絵模様。
1426	SK13	漆刷	底板	9.2	—	—	—	底板から剥離して四角形に切ったものを外側に墨書き、「 大式正反背壁(大式正反背壁)」朱書き「仲(仲)白(白)」
1427	SK13	漆刷	漆刷	23.4	1.3	2.3	厚0.5	漆刷
1478	SK13	手小口漆刷	漆刷	20.2	2.2	—	板目	底板と漆刷間に貫釘穴1。内蓋に墨書き。
1479	SK13	漆刷	漆刷	21.6	2.0	2.2	板目	底板と漆刷間に貫釘穴1。
1490	SK13	脚立(脚)	脚立(脚)	31.5	3.5	1.7	板目	底板と漆刷間に貫釘穴1。
1531	SK13	羽子板	羽子板	32.9	2.6	0.8	板目	底板と漆刷間に貫釘穴1。
1432	SK13	羽子板	羽子板	36.2	3.6	0.9	板目	底板と漆刷間に貫釘穴1。
1433	SK13	蓋	内蓋	20.5	—	0.5	白木	内蓋に墨書き、「上(上)」
1434	SK13	蓋	外蓋	24.8	—	0.5	白木	内蓋に墨書き、「上(上)」
1435	SK13	蓋	蓋	27.4	—	0.7	白木	内蓋に墨書き、「上(上)」
1436	SK13	蓋	蓋	30.0	—	0.6	白木	内蓋に墨書き、「上(上)」
1515	第2遺物外 造縫外	板材	板材	7.3	29.2	厚0.7	板目	内蓋に墨書き、「上(上)・下(下)・左(左)・右(右)」 板厚0.5cm。底板(底板)厚0.1cm。(31.5)。下面側の不規則。
1516	第2遺物外 造縫外	漆刷	漆刷	11.0	—	—	—	内:赤・外:白。外側に墨書き(朱書き)。
1517	第2遺物外 造縫外	柳叶木製子	柳叶木製子	20.0	—	0.1~0.3	—	内:赤・外:白。外側に墨書き(朱書き)。
1518	第2遺物外 造縫外	著	著	21.9	—	0.6	白木	内:赤・外:白。外側に墨書き(朱書き)。
1519	第2遺物外 造縫外	著	著	24.3	—	0.6	白木	内:赤・外:白。外側に墨書き(朱書き)。
1586	第2遺物外 頭板	頭板	頭板	5.6	15.3	0.9	板目	内蓋に墨書き、「上(上)」。内蓋に墨書き(朱書き)。
1587	第2遺物外 頭板	頭板	頭板	11.3	3.3	0.1~0.3	板目	内蓋に墨書き、「上(上)」。内蓋に墨書き(朱書き)。
1601	SK09 壁23	漆小箱	底板	Φ49.5	—	0.8	板目	内蓋に墨書き、「上(上)」。内蓋に墨書き(朱書き)。
1612	SK34	漆23	平側	12.0	—	—	—	内:赤・外:黒。財前に墨書き(朱書き)。

1622	SK40	著	26.8		6.0.5	白木、 白木、
1623	SK40	著	37.7		6.0.7	内外・芯、表面に波状文。
1635	SK41	波筋	小杯心小槽	8.0		大・芯/外・里、表面に赤ニ重丸山凹風。
1636	SK41	波筋		10.0		大・芯/外・里、表面に赤ニ重丸山凹風。
1637	SK41	不明		16.9	φ 1.8	指目
1638	SK41	下駄	底板	21.8 4.4	φ 0.2	指目
1652	第3唐草面 通横外	横	底板	73.4 20.0	φ 0.4	指目
1664	第3唐草面 通横外	横	底板	75.5 18.5	φ 0.3	指目
1689	第3波筋面 通横外	著		23.6	φ 0.6	白木、 白木、
1690	第3波筋面 通横外	著		28.6	φ 0.5	白木、 白木、
1697	第3波筋面 通横外	著		29.6	φ 0.5	白木、 白木、
1743	第3波筋面 壁	人形	頭部	10.4 4.0	φ 0.3	通に穴、瘤入形。
1791	SK43	波筋		10.0		内・芯/外・里、表面波筋丸山凹3つ。
1795	SK43	波筋		10.8		片側に波筋丸、(丸)○(丸)○、側面に目刺6、 波筋0.6cm。角の波筋丸に波筋丸、指の波筋丸あり。
1796	SK43	板材		37.9 7.1	φ 1.6	波筋丸表面に目刺9、目刺6、 波筋丸表面に目刺9、目刺6。
1800	SK43	下駄	脚尖及背下駄	19.7 8.9 2.6	φ 0.7	指目
1801	SK43	下駄	人型頭部下駄	21.5 8.1 2.6	φ 0.6	高さ5.0cm、表面に波筋丸、角の波筋丸に波筋丸。
1802	SK43	下駄	内型頭部下駄	20.7 7.9 6.2	φ 0.5	企念に波筋丸、角の4.0cmに(元前後2つ)、表面に 波筋丸、後、側の波筋丸に波筋丸、指の波筋丸あり。
1803	SK43	下駄	内型頭部下駄	21.5 8.0 7.0	厚2.6	脚尖及背下駄に目刺6、表面に0.2.5の空子と波筋丸、 波筋丸に目刺6。
1804	SK43	折歯		26.1 18.4	φ 0.7	指目
1805	SK43	傳	盤板	17.7 6.6	φ 1.2	指目
1806	SK43	柄杓	身側細長い板	φ 10.5	延目	柄部を斜り付けるバーフに穴、前面に目刺2、二列穴2。
1807	SK43	著		23.7	φ 0.5	白木、 白木、
1808	SK43	著		23.1	φ 0.3	白木、 白木、
1809	SK43	著		27.2	φ 0.3	白木、 白木、
1810	SK43	著		27.6	φ 0.1	白木、 白木、
1811	SK43	不明		14.2 6.3-10.7	厚1.0	前面、裏、左端部に目刺穴2(上、下)、右端部に 目刺2(左)、表面に波筋丸。
1812	SK43	鏡(刀刃)		26.5 4.5	像0.8	鏡部先端穴2個。
1813	SK43	鏡		26.1 2.8	厚0.1 0.6	先端:里。
1814	SK43	不明		22.6 2.4	厚1.1	鏡
1815	SK43	柄		16.7 3.6	厚2.8	鏡状の裏穴。
1816	SK43	不明		12.4 1.2	φ 0.6	鏡
1817	SK43	柄		18.7	φ 2.1	鏡紙に波筋丸。
1848	SK44	座		11.8*	5.1	内・芯/外・里、表面に波筋丸、背面に波筋丸。
1849	SK44	座		12.0 14.0		内・芯/外・里、表面に波筋丸。
1851	SK44	座	座敷	23.5 23.3	厚0.7	鏡部 全面、裏、背面する、周縁に目刺丸多数、表面に升巻き丸。
1852	SK44	座		11.2 2.9	φ 2.9	鏡部に波筋丸。
1853	SK44	坐体		16.5 5.1	厚1.9	鏡 1枚
1854	SK44	坐体		23.3 6.2	厚5.6	鏡部に波筋丸。
1855	SK44	著		21.7	φ 0.5	白木、 白木、
1866	SK45	座		11.5		内・芯/外・里、表面に黄ニ白丸に左回文(面部)。
1867	SK45	枕(枕柱)		4.3	φ 0.6-1.3	延目
1868	SK45	座		10.7	φ 0.9	鏡面に鏡穴2、自前1、向ひ2(3)。
1869	SK45	下駄	九型頭及下駄	21.8 8.0	φ 2.6	鏡・穴頭部1+2つ、鏡・鏡頭部あり。
1870	SK45	坐		24.5	φ 0.6	鏡・鏡頭部が缺く。
1871	SK45	坐		27.0	φ 0.8	白木、 白木、
1891	SK46	坐		24.4	φ 0.4	白木、 白木、
1892	SK46	坐		28.0	φ 0.7	白木、 白木、
1898	SK47	座面		9.8	3.0	大・芯/外・里、表面黄ニ白丸に左回文(面部)、 内・芯/外・里、表面に波筋丸。
1899	SK47	座面		12.9		内・芯/外・里、表面に波筋丸。
1900	SK47	不明	座敷	12.6 1.6	厚0.9	鏡部 全面、裏、背面する、周縁に目刺丸多数、表面に升巻き丸。
1991	SK47	納		30.2 3.1	厚2.4	鏡中央に目刺1。
1992	SK47	坐		24.4	φ 0.6	鏡部前面に穴あり。
1993	SK47	坐		26.1	φ 0.7	白木、 白木、
1995	SK48	坐	一匁	17.6	5.4	内・芯/外・里、口沿部1、脚部に波筋丸、外側に波筋丸、 内・芯/外・里、表面黄ニ白丸に左回文(面部)。
1994	SK48	下駄	九型頭及下駄	91.7 7.9 10.1	厚2.9	鏡・鏡頭部1+2つ、鏡・鏡頭部あり。
1998	SK48	下駄	九型頭及下駄	21.6 8.3 4.8	φ 2.5	鏡・鏡頭部に穴あり。
1999	SK48	下駄	九型頭及下駄	21.4	φ 2.7	鏡・鏡頭部に穴あり。
2000	SK48	下駄	内型頭及下駄	22.5 9.1 9.9	厚2.6	鏡高3.0cm、キリ穴頭部1+2つ、底面に波筋丸、表面の 波筋丸缺く。鏡部裏。
2021	SK48	下駄	内型頭及下駄	22.5 8.9 2.4	厚1.4	鏡・鏡頭部に穴あり。
2022	SK48	下駄	内型頭及下駄	24.5 8.6 5.5	φ 2.0	鏡・鏡頭部に穴あり。
2023	SK48	下駄	四	7.0 1.4	厚1.6	鏡・鏡頭部に穴あり。
2024	SK48	下駄	四	8.0-11.5	φ 1.9	鏡・鏡頭部に穴あり。
2025	SK48	下駄	四	8.0-10.7	φ 1.6	鏡・鏡頭部に穴あり。
2026	SK48	曲物	底板	13.1 3.7	厚1.1	鏡部裏缺く、鏡・底板張、火おこし孔。
2097	SK48	圓		φ 0.6	厚1.4	牛糞にφ 2.0の空孔。
1978	SK48	著		24.0	φ 0.5	白木、 白木、
1929	SK48	著		24.5	φ 0.4	白木、 白木、
1930	SK48	著		26.2	φ 0.6	白木、 白木、
1931	SK48	著		27.7	φ 0.6	白木、 白木、
1943	SK50	跡跡		12.0		内・芯/外・里、表面に左回文(顔)。
1945	SK50	下駄	九型頭及下駄	20.9 7.5 4.1	厚1.9	金平・持手か、鏡頭1.4cm、キリ穴後1+2つ、表面の鏡 頭部裏缺く。
1946	SK50	下駄	内型頭及下駄	22.0 8.8 3.7	厚2.5	鏡・鏡頭部に穴あり。
1947	SK50	下駄	内型頭及下駄	18.5 8.4 4.3	厚2.0	鏡頭3.2cm、キリ穴頭部1+2つ、底面に波筋丸、角の波 筋丸缺く。
1948	SK50	著		25.6	φ 0.5	鏡頭2.8cm、掌の握り波筋丸、指の波筋丸あり。
1949	SK50	著		27.7	φ 0.5	白木、 白木、

第5章 震度 279 番地外調査（南屋敷）の概要

1950	SK50	折板か 瓦の構成品	野板	29.5	6.2	厚1.3	極目	側面に凹凸。 刀刃に加して木口が彫刻なもの。
1951	SK50	折板か 瓦の構成品	野板	28.1	2.0	厚0.6	極目	刀刃が彫刻される。
1952	SK50	折板か 瓦の構成品	野板	26.0	4.4	厚0.2	極目	刀刃が彫刻される。
1953	SK50	不明		4.0	3.8	厚0.9	極目	全面に、何かのルーツ、倒山などに模様がある。
1954	SK50	折板か 瓦の構成品	野板	32.9	10.5	厚0.8	極目	鉄筋で、瓦張部が高くなる。
1955	SK50	折板か 瓦の構成品	野板	12.3	12.9	厚2.7	極目	中央に人物文が彫られ、頭に髪が付いてる。
1956	SK50	不規		12.6	6.6	厚0.2	極目	全面に、頭、側面に斜削痕。
1957	SK50	極	蓋板	±10.2	2.2	厚1.1	極目	表面に斜削痕、側面に。
1958	SK50	極	底板	±28.4		厚1.7	板目	側面に斜削痕。
1959	SK50	極	側板	15.1	5.6-1.5	厚1.0	板目	下部表面にタガ痕。
1960	SK50	極	側板	15.1	6.3-2.5	厚1.0	板目	下部裏面に板の跡跡。
1961	SK50	極	側板	15.7	2.4-1.6	厚0.8	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面に板の痕跡。
1966	SK50	極	側板	15.9	3.5-3.1	厚1.0	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面に板の痕跡。上端部に 砂付着。上部表面にタガ痕。
1967	SK50	極	側板	15.8	3.4-4.7	厚0.9	板目	下部裏面にタガ痕。表面にタガ痕。
1968	SK50	極	側板	16.1	3.5-4.5	厚1.0	板目	下部裏面にタガ痕。表面に板の痕跡。
1969	SK50	極	側板	15.8	6.0-5.1	厚0.9	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面にタガ痕。表面に板の 痕跡。
1970	SK50	極	側板	15.9	6.0-5.7	厚0.9	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面にタガ痕。表面にタガ 痕。
1971	SK50	極	側板	15.5	6.8-6.1	厚1.0	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面にタガ痕。表面に板の 痕跡。
1972	SK50	極	側板	16.1	7.4-6.8	厚0.9	板目	下端部を丸く仕上げる。下部裏面にタガ痕。表面に板の 痕跡。下端部に砂付着。
1973	SK50	極	側板	16.0	7.8-6.9	厚0.8	板目	下端部を丸く仕上げる。下端部に砂付着。上部表面に タガ痕。表面に板の痕跡。
1974	SK51	漆器		11.5		4.1		内・外・里、表面に漆の跡跡。表面に木垢。
1976	SK31	下駄	丸底面込下駄	21.6	8.3	厚2.3		木垢・油垢など付着。下端部に木垢。
1977	SK31	下駄	丸底面込下駄	21.3	8.2	6.0	厚2.4	内・外・里、表面に漆の跡跡。表面に木垢。
1978	SK51	灯明の台か 籠		20.6	5.5		厚2.0	内・外・里、中央に直径約1cmの穴。内・外・里に木垢。
1979	SK51	籠	籠の脚			11.0	±1.3.1	内・外・里、表面に漆の跡跡。内・外・里に木垢。
1980	SK51	著		24.7		0.6		白木。
1981	SK51	著		27.8		0.6		白木。
1982	SK51	著		29.5		0.6		白木。
1983	SK51	下駄	又革込下駄	21.1	8.2	7.8	厚1.0	金面・漆跡か。高さ7.0cm。木穴の前後1-2つ。高底面に 砂付着。案の模様の新条。指の跡跡。
1984	SK51	下駄	角底面込下駄	23.5	8.1	1.8	厚1.4	高底面4cm。油ぬれ孔1-2つ。高の跡跡。
1985	SK51	高物	底板か蓋板	±9.2		厚0.7	板目	板目に凹凸感。表面に目打跡。
1986	SK51	脚		7.4	5.5	厚0.9		全面・高、底の左端部。
1987	SK51	折室の箱物	脚部か 蓋板	32.3	10.2	厚1.2	板目	全面・研磨。特殊品。中央に木ノ穴。上部裏面に目打跡。
1988	SK51	細小物	底板	31.7	13.4	厚1.5	板目	断面に目打跡2-3つ。底の表裏。
1997	SK54	不明		13.2	6.0	厚0.6	板目	内・外・里に粗面形の砂付着。6.0mmの孔。長邊側面に目打跡。
1999	SK54	家		24.9		0.6		白木。
2000	SK54	著		25.5		0.5		白木。
2010	SE03	下駄	又革込下駄	22.2	7.9	3.8	厚2.1	内・外・里、表面に漆の跡跡。底無り。
2054	SD01南面塗装	下駄	角底面込下駄	21.5	8.5	2.1	厚1.3	内・外・里、表面に漆の跡跡。底無り。
2076	SK64	下駄	角底面込下駄	22.4	9.0	厚4.0	板目	木ノ穴1個。底の左端部。
2077	SK64	下駄	角底面込下駄	22.3	7.5	2.1	厚1.0	内・外・里に粗面形の砂付着。6.0mmの孔。長邊側面に目打跡。
2075	SK64	骨物	底板か蓋板	9.1	2.4	厚0.6	板目	表裏に粗面形の砂付着。底の左端部に目打跡。
2079	SK64	不明		4.0	1.3	厚0.8	板目	全面・表裏。
2080	SK64	脚		4.2	3.8	厚1.0		全面・脚部。
2084	SK65	漆器		11.5				内・外・里に漆の跡跡。
2089	SK65	網			8.6	厚1.2		刃の部分欠損。
2090	SK65	不明		19.9	3.5	厚0.5	板目	内・外・里、表面に漆の跡跡。
2091	SK65	原物	骨か	23.2				内・外・里、内面裏ススキ。
2092	SK65	著		23.5		±0.5		白木。
2093	SK65	著		35.2		±0.5		白木。
2095	SK66	脚	蓋板か	±14.7		厚0.5	板目	背面にモミあり。千手院。
2096	SK66	著		25.8		±0.6		白木。
2097	SK66	家		13.0	2.0	±0.2		内・外・里に漆の跡跡。
2122	SK67	新作体	漆器性シザル	13.0		±0.2		内・外・里、表面に漆の跡跡。
2123	SK67	新作体	竹口柱	4.6		±1.0-2.0	板目	内・外・里、表面に漆の跡跡。
2124	SK67	下駄	骨型側面	20.3	9.9	3.5	厚1.9	内・外・里、表面に漆の跡跡。底無り。
2126	SK68	脚	側板	29.6	29.5	±1.3	板目	底の部分に目打跡3つ。底面に粗面形の砂付着。工具痕。
2127	SK68	脚	側板	29.6	29.2	N1.3	板目	底の部分に目打跡3つ。底面に粗面形の砂付着。工具痕。
2131	SK72	下駄	又革込下駄	22.0	8.4	厚3.0	板目	若木源義・下駄。6.0mmの孔。底の痕跡あり。
2132	SK72	下駄		21.1	8.5	厚0.3	板目	内・外・里に粗面形の砂付着。1-2穴。
2133	SK72	人形	頭	9.5	5.0	厚4.9	板目	内・外・里に粗面形の砂付着。1-2穴。
2134	SK72	人形	頭	9.6	4.4	厚3.6	板目	内・外・里に粗面形の砂付着。
2139	SK72	刷毛	漆器・漆手桶	11.9	13.6	厚0.9	板目	漆器手桶の漆の跡跡。
2156	SK72	漆器	漆器	20.6	8.7	厚0.9	板目	漆器の漆の跡跡。
2157	SK72	漆器	漆器	26.27	9.4	厚1.1	板目	漆器の漆の跡跡。
2158	SK72	刷毛	漆器	33.91	7.4-8.2	厚1.2	板目	漆器の漆の跡跡。
2159	SK72	著		24.1		±0.1		白木。
2160	SK72	著		24.8		±0.6		白木。
2161	SK72	著		28.0		±0.6		白木。
2162	SK72	著		29.6		±0.6		白木。

表 19 頓町 279 番地外 (南屋敷) 瓦觀察表

測定番号	遺物名	種類	形状 (cm)	色調	備考
1286	SK01	瓦豆(丸)	長13.5/幅9.4/厚1.7	外内)暗灰・黃灰色	スタンプあり。
1263	SK01	瓦豆(丸)	長9.0/幅10.5/厚1.5	外内)暗灰色	青瓦の一部分。
1271	SK04	瓦豆(丸)	長28.0/幅12.5/厚1.7	外深灰・灰黑色/内黄褐色	スタンプあり。
1216	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	長18.0/幅12.0/厚1.2	外内)灰褐色	瓦豆(丸), 中央に点に木底印記。
1359	SK05	瓦豆(丸)	長20.7/幅11.7/厚1.5	外内)灰色	スタンプあり。
1437	SK13	瓦豆(丸)	外径16.8/内径11.2/丸厚2.2	外)灰・深灰色/内)灰色	コピキB, 通体二巴文, 大部。残存珠文4, 巴文・珠文間に點記。
1438	SK13	瓦豆(丸)	外径16.8/内径11.2/丸厚1.7	外内)灰褐色	通体二巴文, 左右, 残存珠文4, 本日直あり。
1439	SK13	瓦豆(丸)	外径16.8/内径11.6/丸厚2.3	外内)深灰色	通体二巴文, 左右, 残存珠文6。
1449	SK13	瓦豆(丸)	外径16.0/幅14.6/丸厚1.8	外内)深灰色	通体二巴文, 左右, 残存珠文3。
1441	SK13	瓦豆(丸)	外)丸厚2.5	外)灰褐色	唐灰。
1453	SK16	瓦豆(丸)	長12.0/幅8.7/厚1.7	外)灰・深灰色/内)灰色	コピキB, 内面に白模様。
1454	SK17	瓦豆(丸)	長8.8/幅6.9/厚1.8	外内)灰色	小片の左丸不平, 特瓦・小片丸も不明。
1464	SK21	瓦豆(丸)	長11.5/幅6.0/厚1.1	外)灰褐色	瓦豆(丸)の一部分。
1467	SK22	瓦豆(丸)	上)丸径8.3/下)丸径8.5/高さ4.9/平)瓦厚2.1	外)灰褐色	青瓦。
1468	SK22	瓦豆(丸)	上)丸径8.2/下)丸径8.5/高さ4.9/平)瓦厚1.8	外)灰褐色	古墨文, 3-7年。
1469	SK22	瓦豆(丸)	長21.2/幅12.2/丸厚2.4	外内)灰褐色/内)青黄色/灰内	瓦豆(丸), 瓦豆(丸), 瓦豆(丸), 瓦豆(丸)
1470	SK22	瓦豆(丸)	長19.4/幅17.0/厚1.8	外内)灰褐色	スタンプあり。
1471	SK22	瓦豆(丸)	長34.4/幅15.5/厚1.9	外)灰褐色	スタンプあり。
1472	SK23	瓦豆(丸)	長20.0/幅15.9/厚2.0	外内)灰褐色/内)灰褐色	スタンプあり, 健作。
1495	SK27	瓦豆(丸)	外)丸厚2.0	外内)純白色	外内)純白色
1529	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	長18.0/幅17.0/厚1.6	外内)灰色	コピキA。
1531	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	長12.0/幅9.0/厚1.8	外内)灰褐色	外内)灰褐色, 瓦豆(丸), 瓦豆(丸), 瓦豆(丸)。
1532	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外径15.0/幅10.2/丸厚2.1	外内)灰褐色	外内)灰褐色, 瓦豆(丸), 瓦豆(丸), 瓦豆(丸)。
1533	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径16.0/幅6.5/厚1.5	外内)灰褐色	外内)灰褐色, 瓦豆(丸), 瓦豆(丸)。
1588	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外径15.0/幅13.6/丸厚1.7	外内)深灰色	通体二口又, 左右, 残存珠文3。
1589	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.5/内径12.2/丸厚1.5	外内)深灰色, 内)灰褐色	通体二口又, 左右, 残存珠文3。
1590	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径11.5/内径12.3/丸厚1.5	外内)深灰色, 内)灰褐色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1591	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.0/内径11.5	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1592	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.0/内径11.5	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1593	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.0/内径11.5	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1594	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.0/内径11.5/厚1.8	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1595	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径15.0/幅10.0/厚1.7	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1596	第3遺構面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径15.0/幅10.0/厚2.0	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 残存珠文4。
1602	SD09H 瓦豆(丸)	瓦豆(丸)	外)丸径12.0/幅10.0/厚1.4	外内)深灰色	外内)深灰色
1606	SK3	瓦豆(丸)	上)丸径12.8/下)丸径10.8/高さ4.3/平)瓦厚1.5	外内)深灰色	青景文。
1607	SK3	瓦豆(丸)	外)丸径16.0/丸厚1.5	外)灰褐色/内)灰色	通体二口又, 左右, 残存珠文10。
1689	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.5/幅12.8/厚2.9	外内)深灰色	青景文。
1690	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.9/幅10.2/厚2.1	外内)深灰色	青景文。
1691	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径12.5/幅11.3/厚1.9	外内)深灰色	青景文。
1692	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅12.2/厚1.8	外内)深灰色	青景文。
1693	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径14.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1694	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1695	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1696	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1697	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1698	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1699	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1700	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1701	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1744	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1695	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1696	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1697	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1698	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1699	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1700	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1701	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1744	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1745	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1746	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1747	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1748	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1749	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1750	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1751	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1752	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1753	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1754	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1755	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1756	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1757	第3構造面 陶器外	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.6	外内)深灰色	青景文。
1761	SD07	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	コニカル。
1762	SD07	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	コニカル。
1818	SK43	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	コニカル。
1819	SK43	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 文様, 文様文。
1856	SK44	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.5	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 文様, 文様文。
1857	SK44	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.5	外内)深灰色	通体三口又, 左右, 文様, 文様文。
1872	SK45	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.6	外内)深灰色	コニカル。
1883	SK46	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.9	外内)深灰色	コニカル。
1957	SK50	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.7	外内)深灰色	コニカル。
1958	SK50	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.7	外内)深灰色	コニカル。
1959	SK50	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.7	外内)深灰色	コニカル。
1960	SK50	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚1.7	外内)深灰色	コニカル。
1989	SK51	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	コニカル。
1990	SK51	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	コニカル。
2001	SD08	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	青景文, 文様は三葉系。
2002	SD08	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.0	外内)深灰色	切込みが平瓦にあれば平瓦になる。
2008	SL02	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.3	外内)深灰色	青景文。
2006	SL02	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.3	外内)深灰色	コニカル。
2007	SL02	瓦豆(丸)	外)丸径13.0/幅13.8/厚2.3	外内)深灰色	青景文, 文様は三葉系。

第5章 殿町 279 番地外調査（南屋敷）の概要

2008	SL92	軒平瓦	下鉛幅8.0/半瓦厚1.9	外内)灰色	唐草文、文様は二葉系。
2009	SL42	縁だら瓦	長11.7/幅8.7/厚2.0	外内)暗灰色	コビナリ、布丁底。
2014	SR03	研丸瓦	外径15.2/内径14.6/丸瓦厚2.0	外内)灰・黄褐色	唐草一葉文、左巻、右巻、唐草底文。口文・斜太間に葉筋。
2070	SD09	丸瓦	幅16.5/横7.1/厚2.4	外内)暗灰色	—
2073	SR63	丸瓦	長14.9/幅15.8/厚2.3	外内)灰	コビナリ。
2074	SR63	丸瓦	長14.7/幅16.0/厚2.2	外内)灰	コビナリ。
2114	SD10	丸瓦	長17.8/幅8.4/厚2.1	外内)暗灰・灰・純柄曲 外内)灰	唐草二葉文、左巻、東文16。
2145	SD10	軒丸瓦	外径15.6/内径9.8/丸瓦厚1.9	外内)灰	唐草一葉文、左巻、右巻、中間で、口文・斜太間に葉筋。
2116	SD10	軒丸瓦	内径11.4/丸瓦厚2.3	外内)灰	唐草文、文様は二葉系。
2117	SD10	軒平瓦	下鉛幅17.9/丸当高4.2/半瓦厚1.6	外内)暗灰色	唐草文、文様は二葉系。
2118	SD10	軒平瓦	下鉛幅11.9/下鉛幅4.2-11.3/半当高4.8/半瓦厚1.5	外内)灰・暗灰色	唐草文、文様は二葉系。
2119	SD10	丸瓦	長10.5/幅12.6/厚2.2	外内)灰・暗灰色	コビナリ、布目底。
2120	SD10	丸瓦	長10.1/幅15.2/厚4.1	外内)暗灰色	コビナリ、布目底。
2137	SK07	丸瓦	長20.7/幅10.1/厚2.6	外内)暗灰・灰	コビナリ。
2185	第2-2墨渦外	軒丸瓦	外径15.8/内径9.8/丸瓦厚2.0	外内)灰	唐草二葉文、左巻、東文16。
2186	第2-2墨渦外	軒丸瓦	外径16.4/内径10.8/丸瓦厚1.9	外内)灰	唐草三葉文、左巻、右巻底文6。
2187	第2-2墨渦外	軒丸瓦	外径14.0/内径8.4/丸瓦厚1.4	外灰白色・内)淡灰色	唐草一葉文、左巻、右巻底文6、太目底あり。
2188	第2-2墨渦外	丸瓦	長12.8/幅11.1/厚2.2	外内)暗灰色	コビナリ、布目底。
2189	第2-2墨渦外	軒平瓦	上鉛幅10.7/下鉛幅6.5/半当高4.3/半瓦厚2.1	外内)灰	唐草文、丸いスクランプ押印。
2190	23-2墨渦外	軒平瓦	上鉛幅12.9/下鉛幅10.4/半当高4.8/半瓦厚1.8	外内)暗灰・灰	唐草文、文様は二葉系。

第6章 南屋敷第4遺構面

第1節 調査の経緯と経過

補足調査

本発掘調査が終了し、島根県教育委員会と遺跡の取り扱い協議を実施したところ「礎石の下部構造の補足調査」「北屋敷の池改修についての補足調査(P192 第4章 SG02)」「北屋敷炭屑の補足調査(P457 第7章第1節)」「北屋敷用途不明土坑の補足調査(P164 第4章 SG03)」の指示があった。

第4面の発見

これを受け平成20年9月9日から礎石の下部構造の補足調査を実施していたところ、最終遺構面と考えられていた第3遺構面の下から新たに礎石1個が検出された。このため、第3遺構面の下に4枚目の遺構面があるのか確認するためのトレンチ調査を松江市教育委員会が直営で実施することとなった。設定にあたっては、あらかじめ地面上にピンポールを突き立て、抵抗のあった部分にトレンチを設定し、翌9月10日から掘削作業に取り掛かった。調査の結果、設定した4本のトレンチ全てから礎石や石敷きなどの遺構を検出し、海拔1.30m前後の高さに4枚目の遺構面が存在することが確定的となった。

ピンポールによる礎石確認の有効性が確認できたことから、9月11日からは調査区全体に50cmメッシュを設定し、ピンポールを50cmの深さまで突き刺して礎石の有無を確認した。この結果、屋敷境を挟んだ南屋敷では整然と並ぶ礎石列を確認することができたが、北屋敷では礎石を確認することはできなかった。トレンチによる確認調査でも北屋敷からは礎石や柱穴等の遺構は確認できなかったため、南屋敷の1,027m²についてのみ追加での本発掘調査を実施することとなった。本章ではこの南屋敷における追加調査結果についての概要を述べる。

追加調査

南屋敷地の第4遺構面の追加調査については松江市教育委員会が直営で実施し、北側屋敷での補足調査については、引き続き財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課が担当した。追加調査は範囲確認調査の結果を基に調査区を決定し、グリッドを設定することから始めた。基準杭B1(X=-57890 : Y=80500)の上にトランシットを立て、B2杭(X=-57890 : Y=80490)を観んで直線を設け、これと直交するように10×10mの方眼を組み、南東の交点をグリッド名とした。包含層の遺物の取り上げはこのグリッドごとに行っている。次に、土層観察用の畦を設定し10月1日から掘削作業を開始した。隨時遺構の精査、写真撮影を実施し、11月22日に全体写真の撮影、11月27日に地形測量図を作成し、総ての調査を終了した。

なお、追加調査の段階で撤去した第3遺構面の礎石、工事で影響を受けるため現地での保存ができなかった第4遺構面の礎石については番付けをして持ち帰り、市有地の『八色谷市有地』で保管している。



第3面の礎石の下から最初に検出された礎石



ピンポールでの礎石の確認調査風景